

桜井谷窯跡群2-17窯跡

—府立少路高等学校建設工事に伴う調査報告—

1982年12月

少路窯跡遺跡調査団



2-17窯 検出状況

桜井谷窯跡群 2-17窯跡

— 府立少路高等学校建設工事に伴う調査報告 —

1982年12月

少路窯跡遺跡調査団

序 文

豊中市の北東部は、千里山丘陵の名で呼ばれる丘陵地帯であり、すでに萬葉集に詠われる鳥熊山を頂点にして、ならかな陵線がかさなる景勝の地である。

この地域が、かって長い年月にわたって、人びとを魅了してやまなかつた美しい景観のもとに、より古い時代の人びとの生活の様子を物語る、多くの痕跡を今にとどめていることは、大いに興味深いことである。

西歴5世紀の頃、初めて朝鮮半島からわが国に伝えられた新しい土器生産技術は、登り窯とろくろの使用を特徴にして、品質の高い生活土器を大量に生産することができる画期的な技術手法であった。この新手法による土器の生産は、まず、大阪府下泉北丘陵地帯で始められ、やや遅れて6世紀頃には、豊中の旧桜井谷地区を中心とする千里山丘陵に伝えられることとなつた。そしてその後、およそ150年間にわたってこの地は、登り窯から立ちのぼる煙の絶えることのない大工業地帯として栄えたところである。

イギリスのウィリアム・ゴーランドの摂津桜井谷古墳の研究によって、この地が海外に紹介されたのは明治20年代のことであった。しかしながら、昨今の土地開発の勢いが、ここ千里山丘陵に及び、かって名勝を誇り、古代遺跡を宿したロマンの地は、今や昔日のものとなりつつある。

今回の調査は、大阪府立高校建設地内に窯跡が所在していたことから、工事着手を目前にして、豊中市土地開発公社から委託を受け、急ぎ発掘調査を行なつたものである。調査を終えた今、緑の野山はその姿をとどめないが、桜井谷窯跡群を構成する少路窯跡遺跡の歴史的・文化的価値をもつ貴重な資料を得ることができたのは、誠に意義あるものであった。

おわりに、本調査の実施にあたり、ことのほかお世話になった豊中市土地開発公社をはじめ関係各位、発掘調査を快よくお許しいただいた土地所有者の方々がた、また発掘調査に終始努力していただいた調査員各位、並びに学生諸君多數のご努力に対し、心からの謝意を表して刊行のことばとする。

少路窯跡遺跡発掘調査団

団長 鳥越憲三郎

例　　言

1. 本書は府立少路高等学校建設工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査は鳥越憲三郎が豊中市教育委員会より依頼を受け少路窯跡調査団を組織し、豊中市土地開発公社と委託契約を結んで、昭和56年12月7日から翌年1月31日まで実施した。
3. 整理作業は昭和57年2月から同年12月まで豊中市郷土資料室において行なった。
4. 本書の執筆は窯の構造を橋本正幸、出土遺物を厚美正子、その他を柳本照男が分担して行ない、また文責を文末に明記した。
なお三辻利一氏（奈良教育大学）には、今回の出土遺物および他の桜井谷窯跡群の出土遺物の胎土分析をお願いし、結果報告を寄稿していただきたい。記して感謝したい。
5. 本書の作成について、遺構・遺物の整図は各担当者が進行させたが、遺物実測は田上雅則、山元建、沖英治、森久美子の協力を得、遺物の整図は服部聰志、木下亘の協力を得た。写真撮影は園田克也が担当し、編集は柳本照男が行ない、上田桂子、大佐古真佐江の協力を得、団長鳥越憲三郎、調査委員田代克己の指導をいただいた。
6. 発掘調査にあたっては、補助員として、小嶋久夫、阪本正幸、橋本郁也、佐藤義明、松島仁（大阪経済法科大学）、田上雅則、山元建、前沢郁浩（関西大学）、竹谷俊彦、高川義明、岡崎茂和、園田克也、横田茂、足立友成、沖英治、新田哲也の協力を得た。記して感謝したい。

本文目次

| | |
|-------------------------|-----|
| 第Ⅰ章 調査の契機 | 1 |
| 第Ⅱ章 位置と環境 | 3 |
| 第Ⅲ章 調査の経過 | |
| 1 目的と方法 | 4 |
| 2 調査日誌抄 | 4 |
| 第Ⅳ章 調査結果 | |
| 1 窯の構造 | 6 |
| 2 出土遺物 | 12 |
| (1) 窯体内出土遺物 | 12 |
| (2) 排水溝・前庭部出土遺物 | 17 |
| (3) 灰原内出土遺物 | 21 |
| (4) ヘラ記号をもつ遺物について | 41 |
| 第Ⅴ章 まとめ | 72 |
| 付載 1 摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年 | 74 |
| 付載 2 桜井谷窯跡群出土須恵器の胎土分析 | 104 |

挿 図 目 次

| | |
|--------------------------------------|----|
| 第1図 現地説明会風景 | 1 |
| 第2図 桜井谷窯跡群分布図 | 2 |
| 第3図 調査前地形測量図 | 5 |
| 第4図 窯体平面・断面実測図 | 7 |
| 第5図 2次窯灰原地形測量図 | 8 |
| 第6図 窯体立面図 | 9 |
| 第7図 灰原縦・横断面図 | 10 |
| 第8図 1次窯灰原地形測量図 | 11 |
| 第9図 窯体内焚口出土遺物実測図 | 13 |
| 第10図 窯体内燃焼部出土遺物実測図 | 14 |
| 第11図 窯体内焼成部出土遺物 | 16 |
| 第12図 排水溝(1~9)・窯体内2次の堆積(10~59)出土遺物実測図 | 18 |
| 第13図 前庭部出土遺物実測図 | 20 |
| 第14図 提瓶口縁部形態略図 | 23 |
| 第15図 装飾人形・動物実測図 | 24 |
| 第16図 灰原出土遺物1実測図 | 25 |
| 第17図 灰原出土遺物2実測図 | 26 |
| 第18図 灰原出土遺物3実測図 | 27 |
| 第19図 灰原出土遺物4実測図 | 28 |
| 第20図 灰原出土遺物5実測図 | 29 |
| 第21図 灰原出土遺物6実測図 | 30 |
| 第22図 灰原出土遺物7実測図 | 31 |
| 第23図 灰原出土遺物8実測図 | 32 |
| 第24図 灰原出土遺物9実測図 | 33 |
| 第25図 灰原出土遺物10実測図 | 34 |
| 第26図 灰原出土遺物11実測図 | 35 |
| 第27図 灰原出土遺物12実測図 | 36 |
| 第28図 灰原出土遺物13実測図 | 37 |
| 第29図 灰原出土遺物14実測図 | 38 |
| 第30図 灰原出土遺物15実測図 | 39 |
| 第31図 灰原出土遺物16実測図 | 40 |

| | |
|---------------|----|
| 第32図 ヘラ記号拓影 1 | 42 |
| 第33図 ヘラ記号拓影 2 | 43 |

表 目 次

| | |
|-----------------|-------|
| 第1表 灰原内出土器種別総数表 | 21 |
| 第2表 ヘラ記号種別表 | 41 |
| 第3表 出土遺物観察表 | 45~71 |

図 版 目 次

図版 1 TN 2-17

(1) 調査地遠景

(2) 灰原斜面

2 TN 2-17

(1) 灰原遺物出土状態

(2) 灰原遺物出土状態

3 TN 2-17

(1) 灰原断面

(2) 灰原断面

4 TN 2-17

(1) 窯跡検出状況

(2) 最終時期窯跡

5 TN 2-17

(1) 最終時期遺物残存状態

(2) 前庭部断面

6 TN 2-17

(1) 焼成部断面(ヨコ)

(2) 焼成部断面(タテ)

7 TN 2-17

(1) 焼成部断面(ヨコ)

(2) 燃焼部窯体断面

図版 8 TN 2-17

- (1) 1次窯跡全景
- (2) 1次窯跡（断ち割り後）

図版 9 TN 2-17 窯体内出土遺物

図版10 TN 2-17 窯体内出土遺物

図版11 TN 2-17 灰原内出土遺物

図版12 TN 2-17 灰原内出土遺物

図版13 TN 2-17 灰原内出土遺物

図版14 TN 2-17 灰原内出土遺物

図版15 TN 2-17 灰原内出土遺物

図版16 TN 2-17 灰原内出土遺物

図版17 TN 2-17 灰原内出土遺物

図版18 TN 2-17 灰原内出土遺物

図版19 TN 2-17 灰原内出土遺物

図版20 TN 2-17 灰原内出土遺物

図版21 TN 2-17 灰原内出土遺物

図版22 TN 2-17 灰原内出土遺物

図版23 TN 2-17 灰原内出土遺物

第Ⅰ章 調査の契機

今回の調査は府立高校建設工事に伴って実施したものである。この地域一帯は古墳時代後半の須恵器生産地帯として著名な地域であるが、このたびTN 2-17（通称坊主山窓跡）として周知されている窓跡が府立高校建設予定地内に含まれるため事前協議を重ねた結果、当窓の東側を南北に走る都市計画道路、また造成工事等の関係も含め、保存処置はむずかしいと判断された。しかし、良好に窓跡が残存している場合は校舎の設計変更を行ない、保存を計るとの結論を得たので、とりあえず窓跡の範囲、残存状況等を調べるために実施したものである。

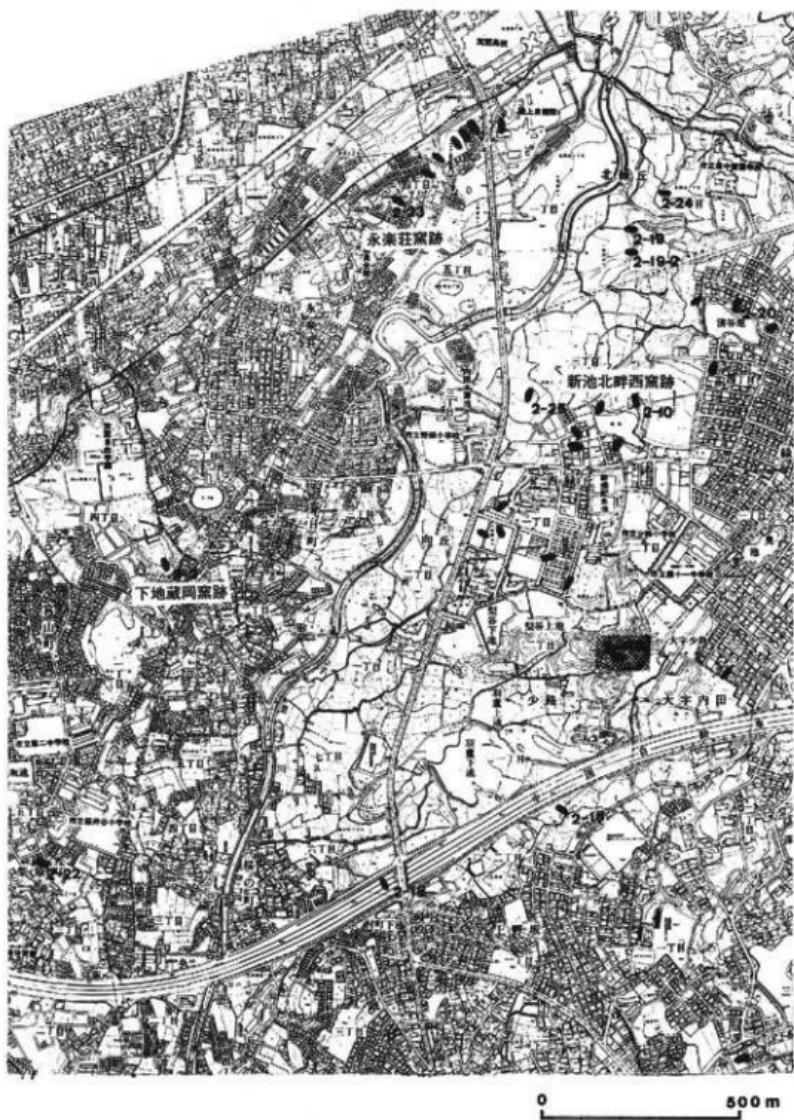
なお、調査は豊中市土地開発公社より委託を受けて、当調査団が昭和56年12月7日から昭和57年1月31日まで実施したものである。調査団の構成は下記の如くである。

調査団の構成

| | | |
|------|-------|--|
| 団長 | 鳥越憲三郎 | 文学博士・大阪教育大学名誉教授・大阪府文化財保護審議会委員・豊中市文化財保護委員会委員長 |
| 調査委員 | 田代克己 | 帝塚山短期大学教授 |
| タ | 山村 熊 | 豊中市教育委員会社会教育部長 |
| 調査員 | 柳本照男 | 豊中市教育委員会社会教育課員 |
| タ | 橋本正幸 | 豊中市教育委員会社会教育課嘱託 |
| タ | 木下 貞 | 国学院大学博士課程 |
| タ | 厚美正子 | 豊中市教育委員会社会教育課嘱託 |
| 事務局 | 富田 喬 | 豊中市教育委員会社会教育部次長 |



第1図 現地説明会風景



第2図 桜井谷窯跡群分布図

第Ⅱ章 位置と環境

TN 2-17窯跡は豊中市少路2丁目、通称坊主山（標高約80m前後）に立地する。この地域は千里丘陵の西側にあたり、万葉集にもすでにその名が見い出される島熊山を頂点として、なだらかな稜線が幾重にも交錯する風光明媚な景勝の地である。このような丘陵と谷地形によつて形成された当地域は猪名川の支流・千里川の上流にあたり、特に桜井谷と呼ばれ、縄文時代以降散在的に遺跡が存在する地域である。

縄文時代の遺跡としては後期前半の中津式土器を中心として出土する野畠遺跡が千里川の左岸標高約50mの河岸段丘上に立地し、南方の上野町付近には石器散布地の上野遺跡などが所在する。弥生時代においては千里川の右岸標高約45mに中期の野畠春日町遺跡が所在する。市内の弥生時代遺跡の中で最も奥まった所に位置している。古墳時代の集落は猪名川の左岸に前半期が、豊中台地の縁辺部に後半期の遺跡が散在的に確認されている。古墳に目を転じると、窯跡の西方約2kmに待兼山古墳が旧山陽道を望むように箕面市側に面して築造され、千里川の右岸、平野部に移行する刀根山丘陵の先端に御神山古墳が位置する。その他、西摂平野を望む台地の縁辺部に新免上佃古墳・大石塚・小石塚古墳と続き、中期の桜塚古墳群を形成する。後期古墳は南方約2kmに新免宮山古墳群が所在するが、特に桜井谷古窯跡群と密接に関係する太鼓塚古墳群・春日宮山古墳群が北東約1km、千里川の対岸標高約60mに位置する。このうち太鼓塚古墳群は主に須恵質の陶棺を内部主体とする点に特徴があり、須恵器生産者集団の奥津城としてとらえられる。

ただ残念なことに調査された古墳は太鼓塚古墳群中数基にすぎず、あとはいつしか破壊されてしまったとのことである。ちなみに伝承によると、両古墳群あわせて30基以上存在していたといわれる。窯跡もこの桜井谷を中心に百基近く存在していたようであるが、確認されているのは28基、そのうち残存するのは10基たらずの状態である。また工房址も集落も未確認である。この桜井谷古窯跡群中の新しい時期の窯は瓦も焼いており、7世紀中葉創建とされる金寺山廃寺（新免廃寺）に使用されている。このように、この地域は奈良時代に至るまで土器生産地帯であることが窺われ、以後衰退していく地域である。この生産者集団を統率していた氏族として桜井宿禰が想定されている。

(柳本)

第Ⅲ章 調査の経過

1 目的と方法

窯跡は丘陵の頂部に部分的に焼土を露出させ、北斜面と西斜面に窯壁および多くの須恵器片が散乱しており、かなり崩壊が進んでいることを想定させた。したがって窯の残存状態、複数想定、方向、灰原の状態などを考慮しながら地形に沿って5m方眼網を設け、基準杭を設定した。地区呼称は南北をアルファベット、東西をアラビア数字により、それらを組み合わせてA-1、B-2,…などとし、地区名称は北東杭を基準にした。

2 調査日誌抄

昭和56年

- 12月7日 本日より調査に入る。地形測量
10日 表土剥ぎ
11日 窯体検出、北側部分の側壁崩壊している。西から東方向に築造している。西側肩形に灰原がひろがる。
14日 北側斜面に焼土、窯壁流出している。焚口付近檜円形の落ち込み検出。
16日 焚口炭灰層精査、燃焼部埋土除去、南壁残存状態良好。
17日 焚口断面図作成、A-F-8~11灰原削去中、灰層の下部に酸化層ある。
18日 燃焼部精査、灰原第2層より多量の遺物出土。
20日 第2次窯の平面実測、最新使用の焼成部床面出土の遺物実測。
23日 窯体写真撮影のため清掃、灰原を削除。
24日 窯体の写真撮影。
25日 平面実測のために通り方設定。
26日 第2次窯の最新使用面、平面実測、地形の測量開始。
28日 窯体平面の実測完了、灰原削除中、前庭部精査、仕事納め。

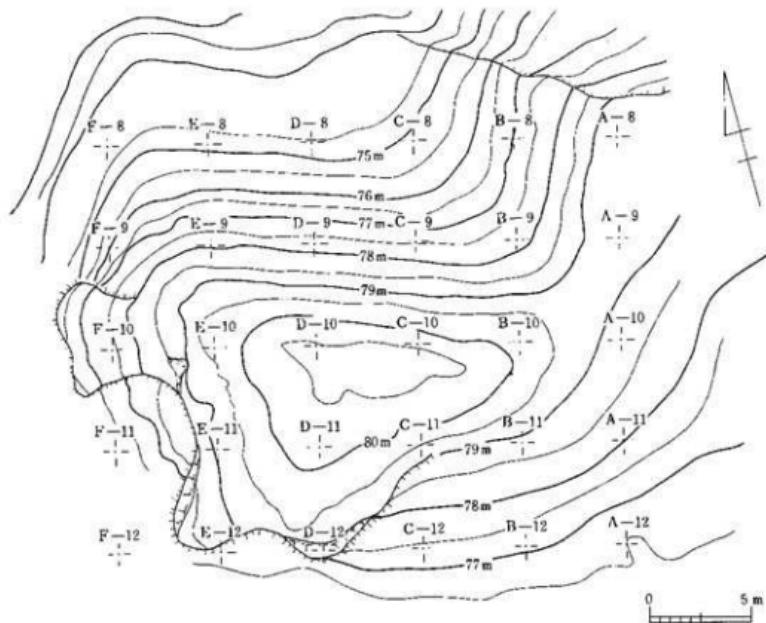
昭和57年

- 1月4日 初出、灰原削除中。
6日 D-E-9~11地山面検出中、焚口の南北断面図を作成。
8日 燃焼部、焚口の灰層を削除。
10日 焼成部床面の削除を始める。
12日 焼成部精査中。
14日 第1次窯の灰原検出中、焼成部北断面の実測。

1月17日 第1窓まで完掘、灰原面の検出完了。
 18日 第1窓体清掃、写真撮影。
 19日 平面実測。
 20日 窓体断ち割りを行なう。
 22日 最終的な地形測量を行なう。
 24日 断ち割り完了。地形測量完了。
 25日 窓体断ち割り断面図実測。
 26日 補足作業、外業調査完了。
 31日 現地説明会。
 2月4日 現地引越。

以後整理作業、報告書作成作業に入る。

(柳本)



第3図 調査前地形測量図

第IV章 調査結果

1 窯の構造

坊主山窯跡（TN 2-17）は、尾根部末端の西斜面に立地している。窯体は東西方向に位置しており、上位大阪層群を基盤とする洪積層を掘り込んだ半地下式構造の窯窓である。

窯体の遺存状態は極めて悪く、軟弱な丘陵斜面に構築されて、窯体の大部分は流失、および開墾により北側斜面に窯壁が散乱していた。窯体は主軸ラインにより南側下半部の焚口から燃焼部・焼成部へ移行する変換点にかけて残存していた。窯体の主軸方位は、N-73°E、主軸ラインでの現存長 6.2m、床面現存幅 2.2m、床面傾斜角20°前後、焚口床面標高77.4mを測る。

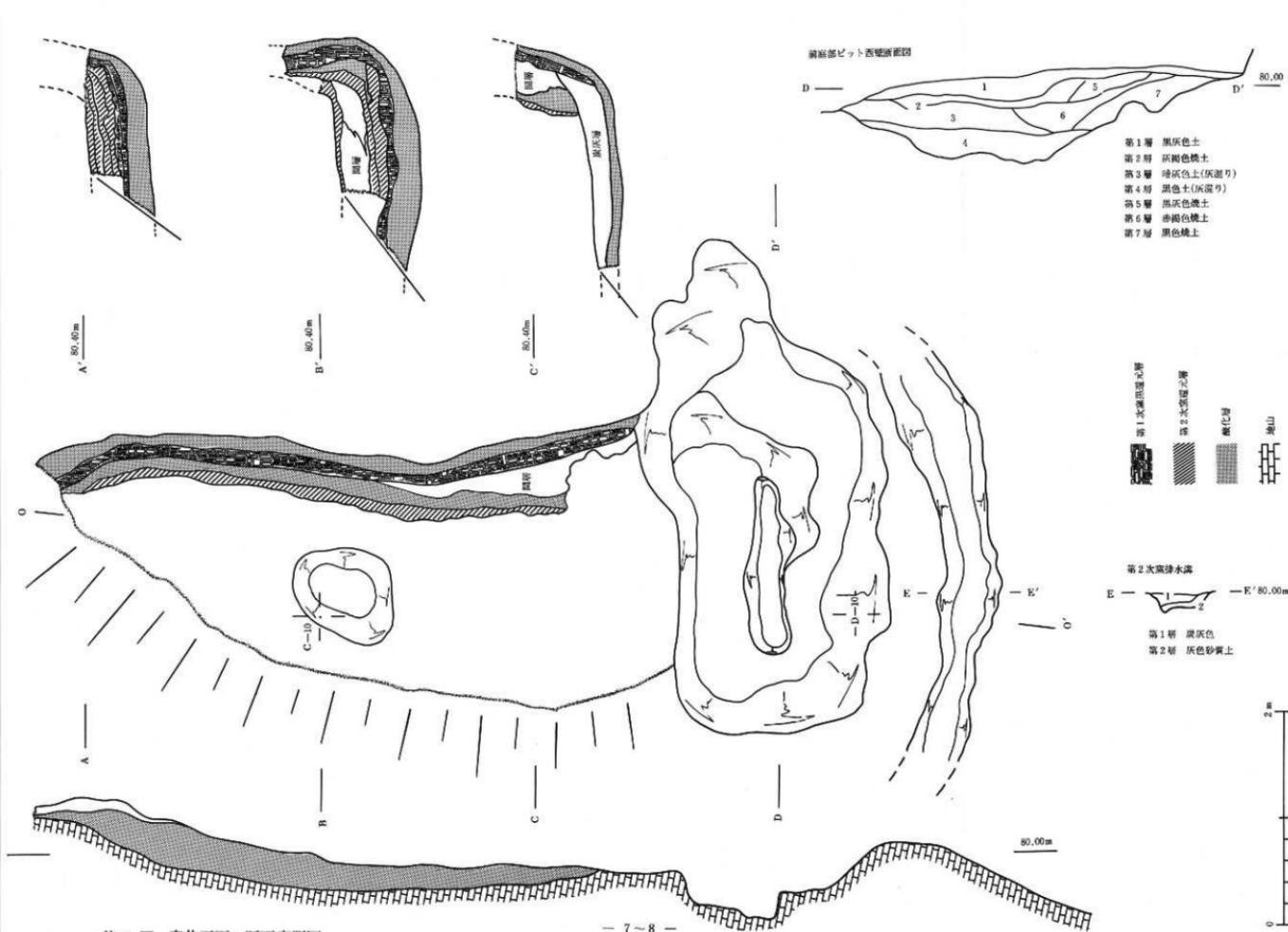
焚口・燃焼部

焚口から燃焼部にかけて南側壁は残存しており、北側壁は崩壊している。第1・2次窯の焚口壁は赤褐色に焼固する。第1次窯の焚口は、やや南側に傾斜し「ハ」字形に開口する。残存壁高 0.8m、焚口復原幅 3.0mを測る。C-C'ラインの燃焼部の側壁は、第1・2次窯の還元焼固したスサを混じえる粘土を2枚貼付けた還元壁である。還元壁間にには、酸化層（0.2m）、間層（0.3m）が重複する。第1次窯の残存壁高（0.8m）、貼壁1枚（0.1m）床面は還元焼固した地山面で、焚口から燃焼部にかけて水平な床面を呈する。燃焼部の中央で床面は赤褐色に焼固化し、焼成部の変換点付近の床面に、小規模なピット（直径 0.9m、深さ 0.1mを測る浅いピット）を検出した。

第2次窯期は残存高 0.6mを測り、貼壁1枚で床面は第1次窯の堆積層からなる軟質性の炭灰層（0.2m）で構成されたベースである。ベース上面には、窯体崩壊土による焼成土・還元ブロック、須恵器などが混在する2次的な崩壊土が残存壁上面まで堆積していた。

焼成部

焼成部の残存状態は悪く、若干残存するのみであった。残存長 2.0m、最大幅 1.6m、床面の第1・2次窯傾斜角4~10°を測る。B-B'ラインでは、燃焼部から焼成部変換点付近で、第1次窯縦業期の残存壁・床（0.1m）にかけて1枚で構成され還元焼固する。第2次窯縦業期段階には、2~3枚の還元焼固した貼壁・床が認められる。A-A'ラインの南側還元壁はほとんど流失し、床面と側壁の接点に薄い酸化層を若干挟んでいる。第1・2次窯期のベースは、還元焼固した粘土と微細砂を5枚程度床に貼り付けている。第1次窯縦業期段階のベース面で、II-3・4型式段階の須恵器を包含していた。第2次窯期のベース面では、II-4~6型式段階の須恵器生産を行なっており、II-6型式段階において廃窯したと考えられる。

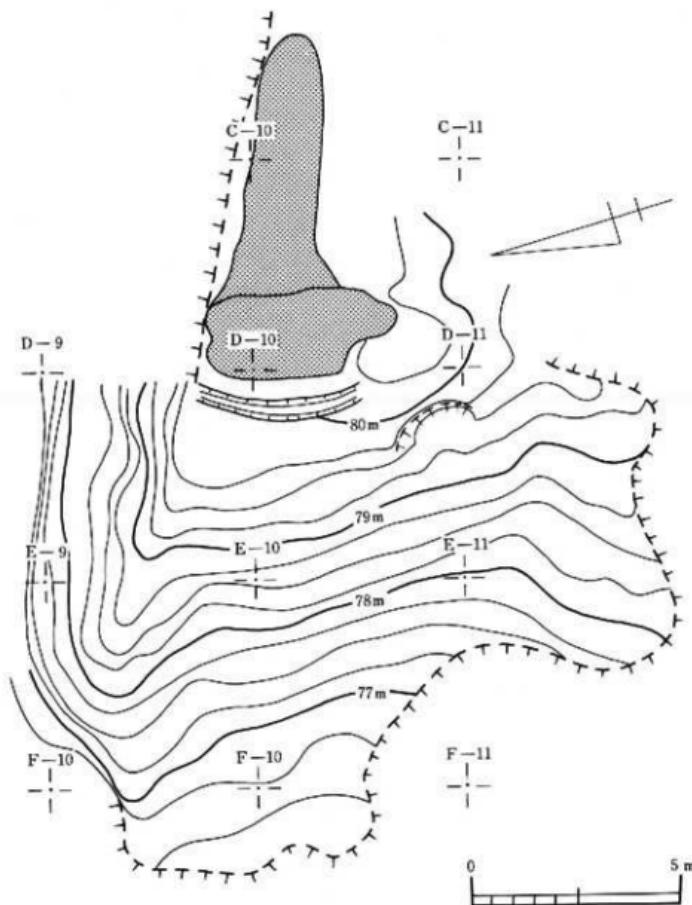


第4図 煤体平面・断面実測図

前庭部

窓体主軸ラインで残存状態の良い前庭部、楕円形ピット（長さ 2.0m、幅 4.6m、深さ 0.3m）を検出した。

第1次窓業期の前庭部は、地山上層斜面に1m前後の客土を盛り上げてテラス面を形成している。第2次窓業期段階の前庭部は、第1次窓期の2次の堆積土によって緩やかなテラス面で区画されている。前庭部ピットは焚口の両端から地山を掘り込んでいる。ピットの南肩には、1本の細杭が斜め方向に打ち込まれていた形跡を残すが、性格については明確ではない。埋土



第5図 2次窓灰原地形測量図

は、ブロック状に堆積する焼土、炭灰層からなる埋土である。

溝状遺構

前庭部（テラス）の第1次窯業期の堆積層上面を切り込んだ第2次窯業期段階の溝状遺構²を検出した。溝幅 0.5m、深さ 0.1m を測る。埋土は黒色砂質灰層からなる。溝の両端は遺存状態が悪く、溝の性格については明確ではない。焚口後方に設定された排水溝的な施設の可能性が強いと考えられる。

灰原

黒色砂質灰土層（灰原）は、主軸ラインより焚口から西側面にかけて扇形を呈しながら、第1・2次窯業期の灰原は分布していたと考えられる。西部地域のE～F—9～11地区は擾乱、自然流失によって灰原全城の分布範囲は明確ではなかったが、主軸ライン付近が比較的に厚く堆積する傾向であった。

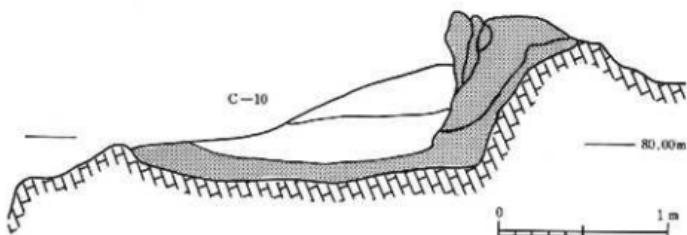
第7図のセクションに図示したが、第4層までに大別される。表土層、第2層、黒色砂質炭灰土層（0.9m）は、主軸ライン付近に1m前後の燃焼土、剥落した還元壁が混在するブロック層からなる第2次窯業期段階の堆積層である。出土する大部分の須恵器は、II—4～6型式段階の須恵器であるが若干、第1次窯期の須恵器も混在している。第3層、赤褐色砂質焼土層（0.5m）、黄褐色砂質土層（0.5m）、暗灰色砂質灰層（0.2m）の互層で構成された第1次窯業期段階の堆積層である。

第1次窯業期段階の前庭部の傾斜面に堆積する須恵器は、II—3～4型式段階の須恵器を含む。したがって第1・2次窯業期段階の堆積層内では時期的な型式差が認められた。しかしながら、傾斜面に堆積した須恵器なので自然の流出や人為的に遊離している可能性も強い。第4層、黄褐色砂質土層からなる。

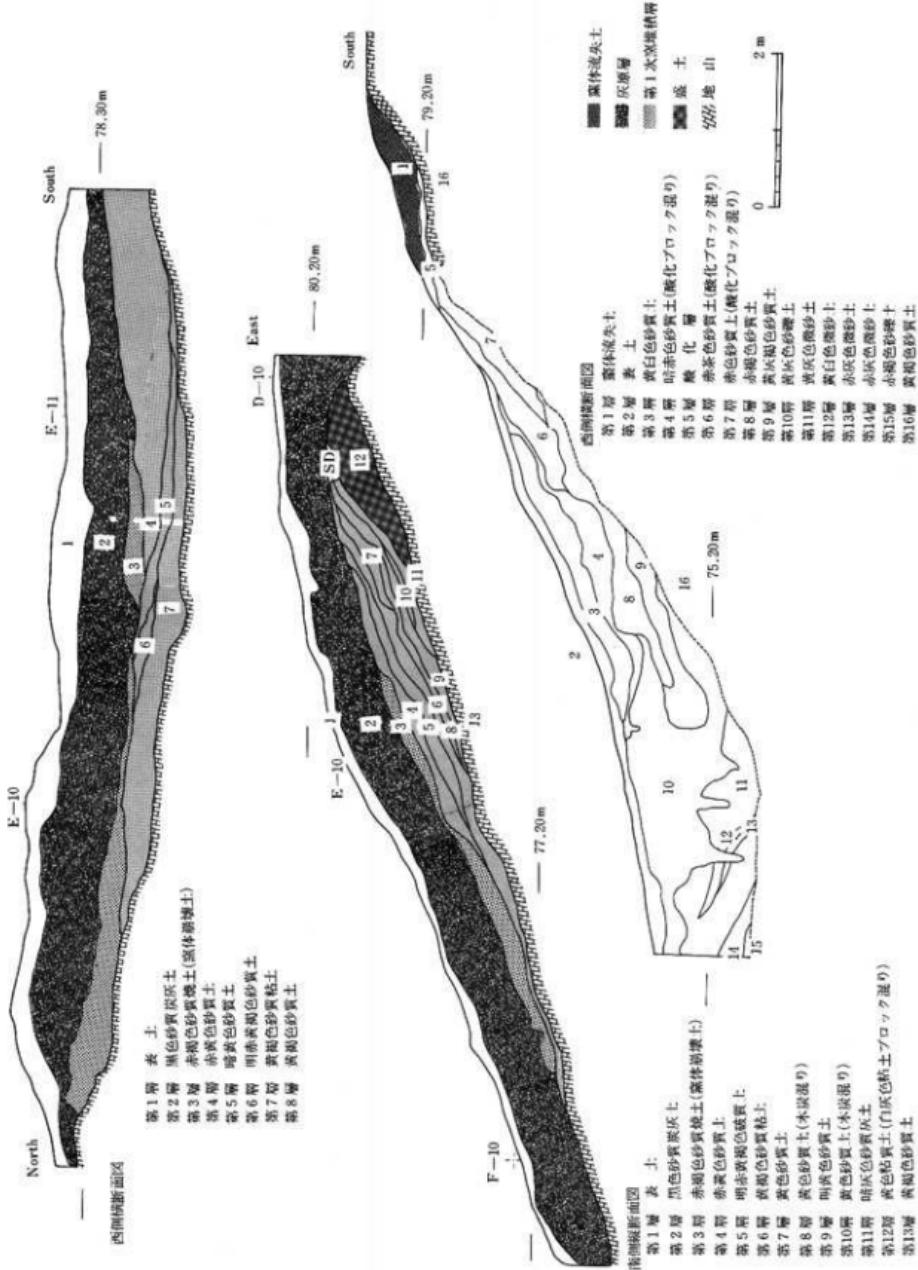
（橋本）

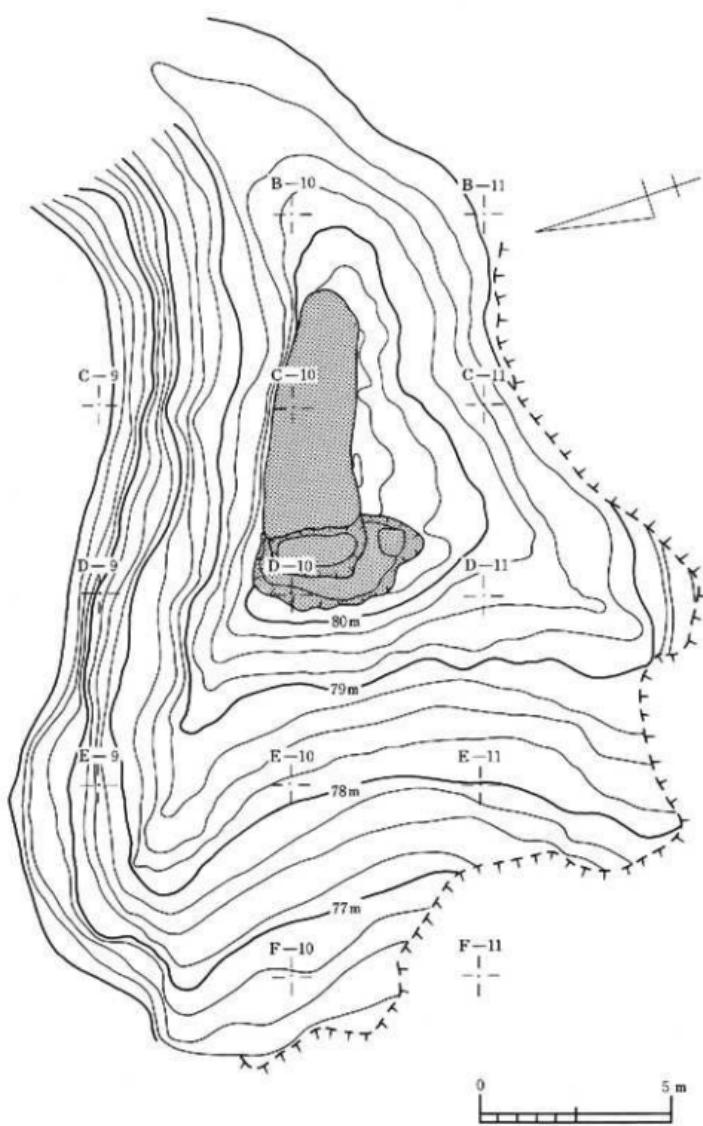
註1 中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯 1978

註2 前庭部後方に排水的な施設を伴う溝は、和泉陶邑古窯跡群、揖津千里古窯跡群などで多数の排水溝が検出されている。



第6図 窯体立面図





第8図 1次窯灰原地形測量図

2 出土遺物

出土遺物は、窯体内床面（各層）および埋土と排水造構埋土、また前庭部、灰原から出土したもので、大量の須恵器と窯壁、土師器の細片 1 点である。須恵器の器種は杯蓋、杯身、高杯、匙、短頸壺、甕、提瓶、攜鉢などがあるが、杯が多く、次いで甕が圧倒的多数を占める。

以下、遺物は出土位置により、窯体内、排水造構、前庭部、灰原に分けて述べることにする。なお、個体数が多いので、個々の法量、特徴などは觀察表に記した。

(1) 窯体内出土遺物 (第9・10・11図、第12図10~59)

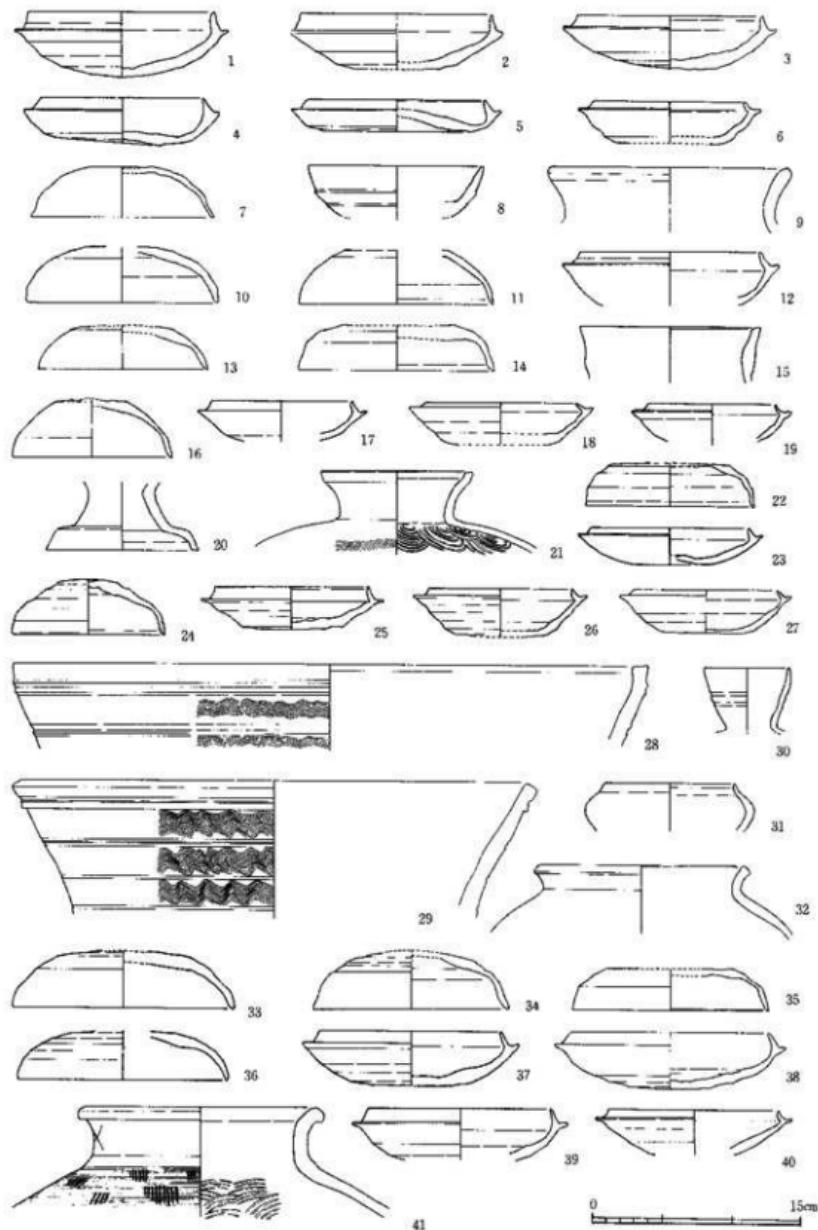
窯体内に関しては、焚口、燃焼部、焼成部、窯体内 2 次的堆積（主として燃焼部）に分け、各々下層のものから図示した。ただし、器種の判別できるものは、可能な限り図示したので、焼け歪んでいたり、破片のため計測値に若干の誤差が生じているものがある。

焚口（第9図） 1~9は炭灰層、10~12は中層、13~15は焼土、16~21は上層、22~23は黒茶色砂質土層、24~32は黒色灰層、33~41は 2 次的堆積層から出土している。

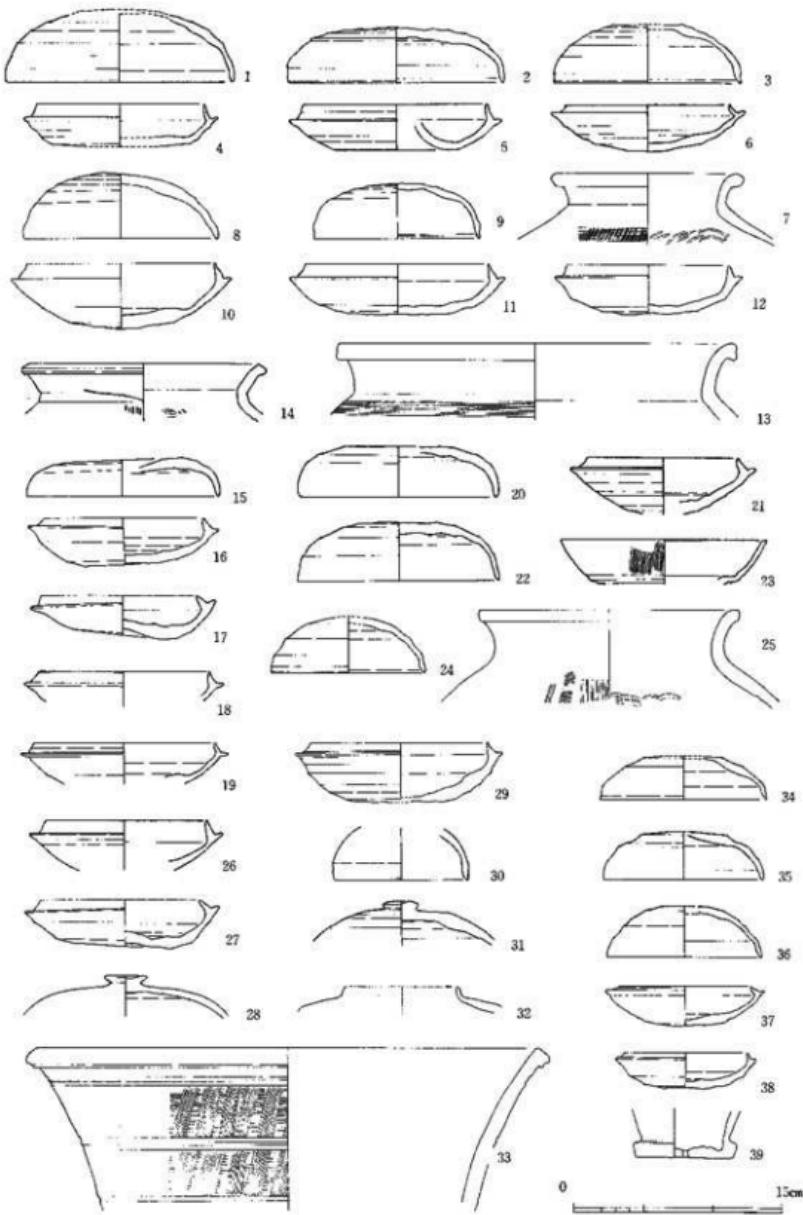
杯蓋は、出土層位によって多少の差が出ている。2 次的堆積層を除き、口径は13.5cm前後のものと、11~12cmの小型のものに大別され、おむね下層のものほどやや古い様相を示している。前者は器高が 3.6~4.0cm を測り、天井部にヘラケズリ調整、他面はナデにより仕上げが行なわれている。後者は器高が約 3cm と約 4cm に分かれ、器高の高いものは、天井部中央が高く盛り上がり未調整である。また24は、一旦成形後、天井部と口縁部外間にうすく粘土を貼付し、器形を整える方法をとっている。2 次的堆積層中のものは口径が14~16cmあり、焚口内では古い段階の様相を示している。杯身は口径が13~14cm程度で、たちあがりがわずかに内傾しながら上方にのびるものと、口径が10~11cm程度で、たちあがりが 0.8cm 以下で内傾する小型のものに大別される。高杯は 2 点で、総じて窯体内からの出土は少ない。8は無蓋高杯で浅い杯部外間に 2 条の凹線が巡る。20は脚部であるが、内傾したのち下外方に下り、裾部付近で外方へ開き屈曲して下方に下る。端部は接地する面を成す。甕は口径が15.4~17.6cmを測るものと、40cm前後の大型が出土している。前者は外反味の口縁に端部が肥厚する口縁部がつく。大型甕は上外方にのびる口縁部に凹線によって区分された文様帶に波状文を施し、口縁部は断面四角形で端部は平面をもって終わる。その他に、提瓶の口縁部と短頸壺、横瓶が各 1 点出土している。

燃焼部（第10図） 燃焼部は細かく分層されていたものを 6 層にまとめ、焚口と同様に下層に近いものから順次図示した。1~7は黒色灰層、8~13は酸化層、14~19は第1~第3床面、20~25は灰層、26~28は上層、29~39は覆土の第1層と第2層からの出土である。

杯蓋の口径は11~16.5cmの間であるが、14~15cmと11~12cmに偏っている。前者は天井部の



第9図 黒体内焚口出土遺物

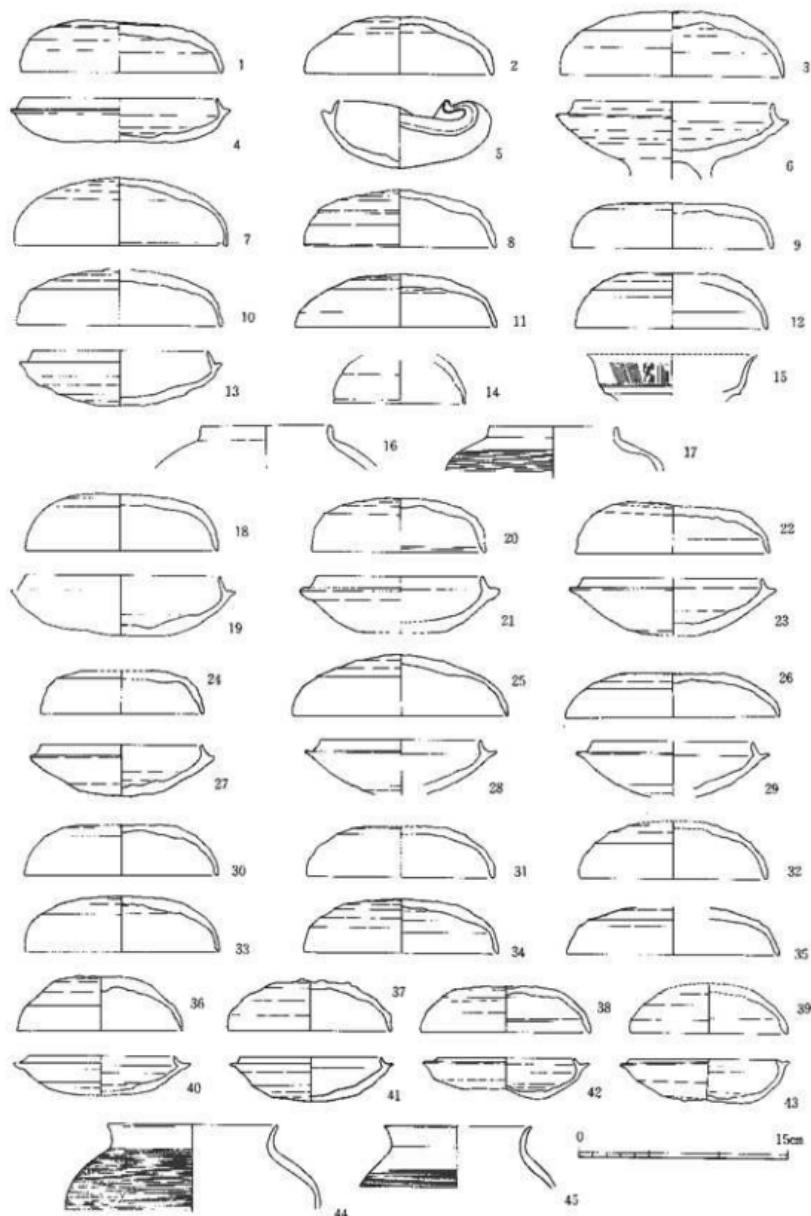


第10図 窯体内燃焼部出土遺物

平らなものと丸いものの2種類がある。口縁部は高さが2cm前後で内窓気味に下るものが多い。調整は天井部外面の約からほぼ全面に左まわりのヘラケズリを行ない、他は内外面ともに回転ナデ調整である。後者は口縁部高が1.2cm前後で、口縁部はわずかに外方に開き気味に下る。天井部は高く丸く盛り上がるものと、中央が盛り上がり平坦になるものがあるが、天井部にヘラケズリはみられない。その他の調整は前者と同様である。胎土は細砂粒を多く含む。杯身の口径は、下層から出土したものでは13.5cm程度が多く、中層では11~12cm、上層では9cm前後である。口径が比較的大きいものは1.2cm程度のやや内傾するたちあがりを有し、底部にはヘラケズリを左まわりに他面には回転ナデ調整を行なう。中層のものはたちあがりが下層のものに比べやや短くなり、1cm前後で内傾度が増す。口径の小さな杯身はたちあがりが強く内傾するものと、短いが上方にのびるものがある。底部は成形後未調整である。上層から出土した高杯蓋を2点図示した。2点とも天井部のみで口縁部が欠損しているため、口径および器高は不明である。天井部中央に扁平で中窓みのつまみがつく。中層で窓の口縁部が1点出土している。上外方にのびる口縁部外面に細かい縱方向の櫛目が施されている。短頸壺も口肩部までの破片が1点上層でみられる。0.7cm程度の短い口頭部と外方に張り出す肩部を有する。妻は口径が14cm弱の小型から36cmの大型まで比較的多くみられる。小型から中型の妻は口縁端部が外方に正線状、又は断面三角形に肥厚する。肩部外面には縱方向のタタキか、さらにタタキの上にカキ目を施し、内面は円弧タタキを行なう。上層で大型妻の口頭部が1点出土している。口縁端部は外方にやや肥厚し、凹線が巡る。口頭部は凹線帯の間に縱方向の櫛描き文様が入る。その他に、壺などの蓋と小型のねり鉢が1点ずつ出土している。蓋は復元口径が9.8cmの小型で、体部は口縁から丸く高く盛り上がる。ねり鉢はヘラケズリを行なった扁平な底部中央に穿孔しており、底径が7cm弱の小型品である。

焼成部（第111図） 第1次窯に伴う遺物を出土したのは焼成部のみで、側壁焼土層に若干の遺物が残っていた。その他は、全て第2次窯に伴う酸化層と焼土層、床面と間層である。1~6は第1次窯に伴う遺物、7~17は第2次窯・酸化層、18~23は床面、24~26は焼土層、27~45は床面各間層からの出土である。

第1次窯に伴う杯蓋を3点図示した。3点ともほぼ完形である。口径13.6~16.1cm、器高は3.7~4.6cmとやや幅があり、同一層内の出土でありながら器形に統一性はみられない。第2次窯の杯蓋は第1次窯に伴う遺物と重複する時期のものもあるが、大きく3タイプに分類できる。口径は11.4~15.5cmであるが、15cm以上の口径の大きいものは天井部が比較的高く盛り上がるものが多く、天井部外面のほぼ全面にヘラケズリ調整を行なっている。口縁部は下外方に下り、端部は丸い。口径が13.5~14.5cmのものは、器高が3.5~4cm程で、下外方に下る口縁部から天井部は鈍く屈曲してやや平坦気味になる。天井部外面の約~%にヘラケズリ調整を行ない、他面は回転ナデ調整と内面中央にはナデを行なう。口径が12.6cm以下の杯蓋は器高が3.1~3.9cmで、天井部が高く盛り上がるものと、やや低く平坦になるタイプがあり、口縁部は



第11圖 窯体内燒成部出土遺物

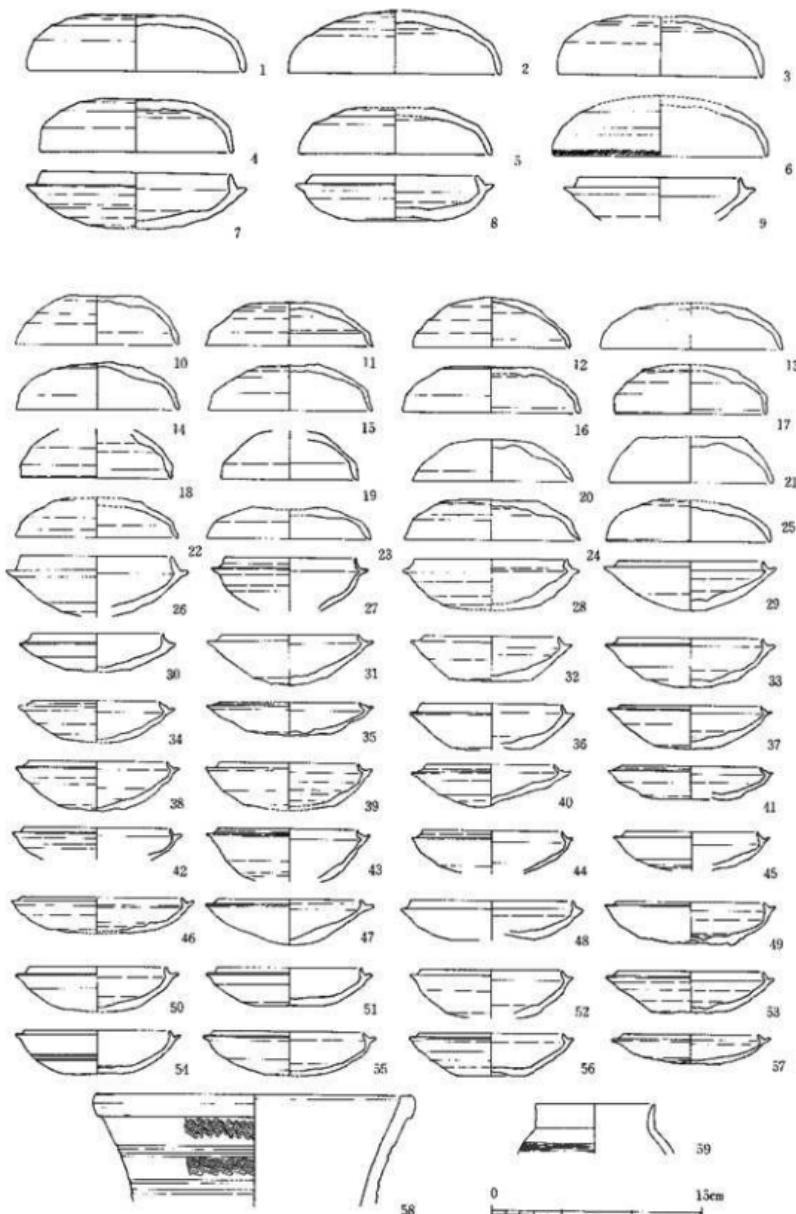
下外方に下る。天井部外面は雑なヘラケズリか未調整である。内面は回転ナデの後、中央部にナデ調整を行なう。第1次窯の杯身はほとんど破片か焼け歪みが著しく、良好な資料は第11図4の1点しかない。口径は14.2cmで、たちあがりは長さ1cm程度で内傾しながらのびる。受部はやや上向きに外方にのびる。底部は浅く平らである。第2次窯の杯身はたちあがりの長さが1cm程度で内傾気味に上方にのびるものと、たちあがりが0.8cm前後とやや短くなり、受部以下が底部まで下内方になだらかに下るもの、口径が極めて小さくなり、たちあがりが受部とほぼ同じ長さで内傾するタイプに分かれれる。

第2次窯の中で古い形態を示すものは第1次窯に伴うものと近似する。第1次窯では杯の他に脚柱部の一部が残る有蓋高杯の杯部が1点ある。杯部の形態は長くのびたたちあがりと、口径の大きさ、杯部内面の円弧スタンプなどから考えて、本窯では最古の形態を示すものと思われる。龜の破片が1点出土しており、口頭部に7本1条の細かい横書き文を施している。その他には壺類がある。短頸壺は直立する短い口頭部をもち、肩部は外下方に張り出す。床面開唇の壺はわずかに外反するやや短い口縁部と下外方に下る肩部をもつ。肩部にはカキ目を施している。

窯体内2次的堆積（第12図10～59） 主として焚口から燃焼部にかけて堆積したものである。ほとんど杯で本窯においては新段階の形態を示す。杯蓋の口径は9.8～12.8cmで、11.8cm前後に偏りがみられる。器高は3.3cm前後が多い。形態はU縁部が開き気味に下り、天井部は高く盛り上がるものが多く、他は低い天井部の中央が平坦になるものがある。内面は渦巻状に凹凸を繰り返している。天井部外面は未調整の場合が多く、中央部にうすく粘土を貼り付けたり、整形後粘土の小さな固まりを数ヶ所に貼付している例もある。杯身は口径が9.1～11.6cmまであり、10.0～10.4cmを測るものが半数近く占める。たちあがりは長さ1cm前後で内傾しながら上方にのびるもののが若干あり、他は長さ0.7cm前後で内傾したのち中程で角度をやや上向きにかえてのびるものと、長さ0.5cmで受部とほぼ同じ長さで内傾気味に上方にのびるもの、同程度の割合を占める。器高はたちあがりの比較的長いタイプが4cmを越えるほかは2.1～3.6cmを測る。受部は外方または上外方にのび、受部以下は下内方に下り、丸く浅い底部に続くタイプと、中央が平坦気味の底部に続くタイプがある。器壁は総じて薄く、底部は成形後、未調整のものがほとんどである。杯以外の器種は少なく、短頸壺と甕を図示した。甕は上外方に長くのびる口頭部をもち、口縁端部は外方に肥厚し、断面四角形を呈し、上面は平坦な面を成す。口頭部には波状文と四線文が入る。短頸壺は長さ約1.8cmの上方にたちあがる口頭部がつく。肩部はなだらかに丸味をもって下外方に下り、カキ目調整を施している。

（2）排水溝・前庭部出土遺物

排水溝（第12図1～9） 排水溝の覆土中より出土したものである。総じて量は少ないが、杯以外は細片のため図示できるものがない。



第12図排水溝(1~9)窯体内2次の堆積(10~59)

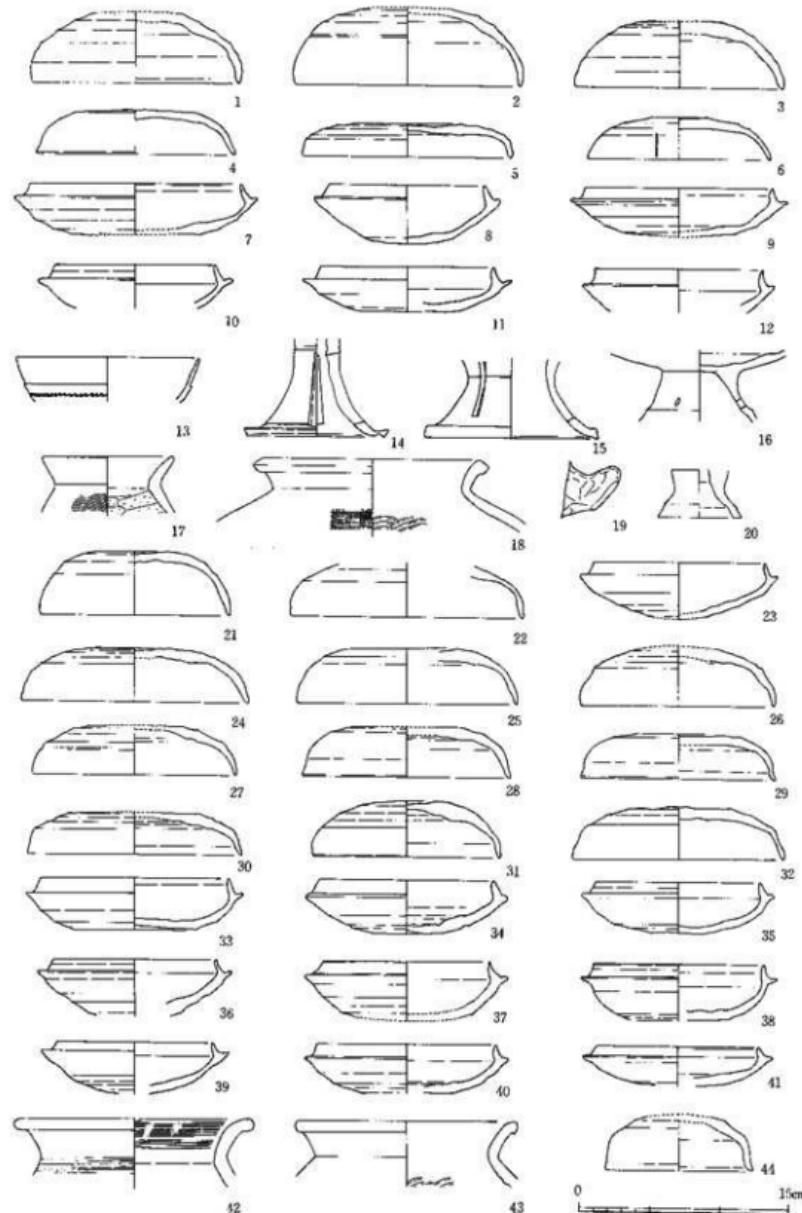
杯蓋は口径が約16cmあり、口径に比して器高が比較的低く、天井部中央がやや平坦になるもの、口径が15cm前後で、高く丸く盛り上がる大井部をもつもの、口径が約14cmで天井部はあまり高くないものがある。すべて口縁部は開き気味に下方に下る。天井部外面は左まわりヘラケズリを、他面は回転ナデ調整を行なう。第12図6のみ、口縁端部外面に櫛状のもので斜線を入れている。杯身は3点図示したが、他の2点に比して口径が大きく、たちあがりも1.1cmとやや長く内傾気味にのび底部も深いものと口径が小さくなり、たちあがりも長さ0.8cmとやや短くなる杯身がある。前者は底部外面のヘラケズリの範囲は広く、後者は狭い。

前庭部（第13図1～44） 前庭部の灰層中より多数の遺物が出土した。1～20は下層、21～23は中層、24～44は上層で、3層に一応区分し図示したが、層位の上下による明確な差はみあたらない。

杯蓋は本窓における新段階に属する資料ではなく、総じて口径が大きい。中でも大きいものは16cmを越えるが、15～16cmに集中しており、天井部は5cm前後で高く丸く盛り上がるものと、3cm前後の低く平坦なものがほぼ同じ割合である。天井部の盛り上がるタイプは口縁部が内傾気味に下る。大井部の低いものは開き気味に口縁部は下るが、両者とも大井部外面の%以上に左まわりヘラケズリを行ない、他は回転ナデ調整で内面中央にナデを行なっている。口径がやや小さいものは14cm前後に集中するが、これも天井部が高く丸いものと、平たくなるものがある。杯身は口径が11.3～15.4cmを測るが、ほとんど破片からの復元数値なので、口径によるタイプ分けはできない。たちあがりをみると長さ1.2cm程度で内傾気味に上方にのびて端部の丸いもの、たちあがりがやや短くなり内傾したのち上方にのびて端部の鋭いもの、たちあがりが1cm前後で内傾しながら上方にのびるものがある。いずれも底部外面にはヘラケズリ調整が行なわれている。

灰層の下層から高杯が数点出土している。無蓋高杯の杯部は体部から段をもって、口縁部はうすくなり上外方にのびる。外面には櫛描きの波状文を1条（3本）施している。高杯の脚部を3点図示（14～16）したが、14は長脚2段透しで細い脚柱部から下外方に下り、脚縁部は外方に開く。15は太い脚柱部で下外方に開く。長方形の透しが入る。16は杯部の底部から太い基部で、下外方に下り、円孔を有する。円孔下から段をもって下外方に下る。

甕は口径が16cm前後で、口縁部は外反し、口縁端部は外方に肥厚する。タタキとカキ目調整を単独または重ねて行なう。19は甕の把手であるが上向きに屈曲し、接合部からはずされている。20は甕などの脚台と思われる。44は復元口径10.5cmの甕で、下方に下る口縁は端部付近でわずかに開き、内傾する面を成す。天井部は高く盛り上がり、ヘラケズリ調整がみられる。17は本窓出土遺物中唯一の土師器である。復元口径は9.3cmを測る小型の甕で、「く」の字形に外反する口縁部をもち、肩部外面は右下がりの細かい刷毛目調整を、内面はヘラケズリを行なっている。赤橙色を呈する。



第13図 前庭部出土遺物

(3) 灰原内出土遺物 (第16図～第31図)

灰原からは大量の須恵器が出土している。本窯での出土遺物は整理箱約450箱であるが、そのうち約400箱が灰原からの出土である。器種と数量は下表のとおりであり、杯と壺が圧倒的多数を占めるが、高杯に次いで提瓶が多いのが本窯の特徴の一つといえる。また極くわずかではあるが、灰原から陶棺と装飾人形・動物、土鈴などの出土もみられる。

灰原は10数層に細かく分層されており、土器の数量も多いため、窯体内とは異なり、器種別に分けて完形に近いものを主に図示した。

杯は灰原出土遺物総数の60%近くを占め、実測可能なものも多々あるが、そのうち杯蓋は52点、杯身は47点図示した。

杯蓋（第16図・第17図1～8）で、本窯で古段階の形態を示すものは天井部と口縁部の境にわずかに稜らしきものか、ほとんど形だけの鈍い凹線を残す。口縁端部は内面に段を有するものもある。天井部は口径に比して低く、やや扁平な感を与える。外面のヘラケズリは、天井部の3割以上に左まわりに施されている。次段階の杯蓋は口径が総体的に小さくなっている。口縁部は内湾気味に下り、内面に段を有するものはなくなる。口縁部と天井部の稜は消失する。天井部はやや高く丸味を帯びて盛り上がる。外面のヘラケズリの範囲はやや狭まり、やや雑なものが目立つようになる。さらに次段階のものは、口径が次第に小型化しつつあるが、形的には前段階と大きな相違はみられない。天井部外面のヘラケズリはやや広い範囲に行なうものと、中央部のみに雑に荒く行なうものがある。本窯での最終段階の杯蓋は器形が著しく小型化する。口径は11cm前後を測る。器形の小型化に比例して器壁もうすくなり、口縁の端部はやや鋭くなる。天井部外面は未調整か、極めて雑なヘラケズリをするものが多い。

杯身（第17図9～43・第18図1～12）はたちあがりの長さが1.5cm程でわずかに内傾しながらのびるものと、内傾したのち中程で上方にのびるのが本窯での古段階に属する。ヘラケズリは底部外周の1/2～3/4に左まわりに行ない、他面は回転ナデと内面中央にナデ調整を施している。次段階では口径がやや小さくなり、たちあがりも短く内傾している。端部は丸く仕上げているものが多くなる。底部外面のヘラケズリの範囲は前段階と大差ないが、やや雑な感を受ける。

| 器種 | 杯蓋 | 杯身 | 杯 | 壺 | 有蓋高杯 | 無蓋高杯 | 高杯 | 高杯蓋 |
|----|--------|--------|--------|--------|------|------|-------|--------|
| 数量 | 19,133 | 13,661 | 22,637 | 34,573 | 142 | 287 | 2,324 | 205 |
| 器種 | 壺 | 短頸壺 | 蓋 | 器台 | 脚台 | ねり鉢 | 甌 | 塊 |
| 数量 | 538 | 278 | 59 | 43 | 42 | 27 | 7 | 6 |
| 器種 | 提瓶 | 平瓶 | 横瓶 | 瓶子 | 鉢 | 陶棺 | 不明 | 总数 |
| 数量 | 1,240 | 7 | 5 | 4 | 1 | 7 | 964 | 96,190 |

第1表 灰原内出土器種別総数

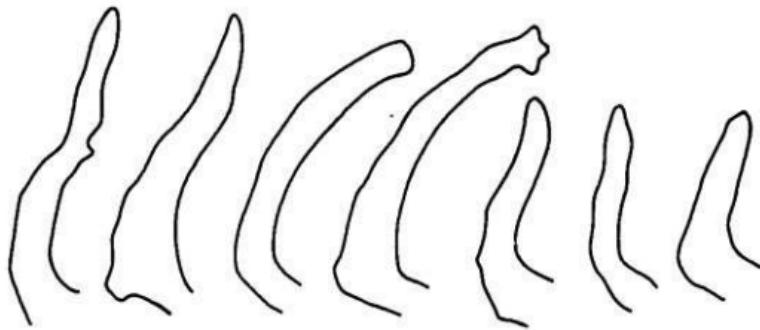
さらに次段階では口径が小型化し、たちあがりは短くなる。たちあがりの基部が太く先細り状にのびるもののが目立つ。底部は浅く扁平なものが多い。調整はヘラケズリの範囲も狭くなり、内外面のナデも複なものもある一方、幅広くヘラケズリを行ない、他の調整も丁寧なものもみられる。本窓での最終段階の杯身は口径が前段階よりさらに小型化し、10cm内外となる。たちあがりは内傾度を増し、受部と同程度の長さのものもある。底部外面は未調整のものが多い。

高杯（第18図13～34・第19図・第20図）は有蓋・無蓋ともある。前者は杯身をそのまま転用し、脚部を付けた形状をしている。有蓋高杯は杯部と脚部が、各々破片で出土しており、杯部から脚部にかけて全様のつかめるものは1例もないが、杯部の底部にわずかに残っている脚部から想像すると、基部の細い長脚になるものが多いと思われる。杯部の口径は12.9～14.7cmを測り、比較的長いたちあがりを有し底部にはヘラケズリを行ない、他面にも杯身と同じ調整を施した後、脚部を接合している。高杯の蓋は口径が14.7～16.8cmを測り、本窓での杯蓋の古段階の形態に類似している。口縁部と天井部の境に鈍い稜とも、凹線によって作られたとも考えられる様が巡る。天井部はやや扁平で、中央につまみがつく。無蓋高杯は杯蓋を転用した如きのものと、全く異なる杯部をもつ2者がある。前者は短く外反する脚部が伴い、長方形または円形の透しが入るものもある。後者の杯部は平坦な底部から稜線を境に上外方に屈曲する口縁部をもつ。外面には2条の凹線を巡らしたもの、さらに凹線間に刺突文などの文様帶を施しているものがある。脚部は基部の細い長脚がつく。

翫（第21図1～19）は口頭部が外反しながら長くのび、口縁部付近で段をもって外方に開いた後、再び上外方にのびる。口縁端部は内傾する面を成すもの、そのまま丸く仕上げられるものがある。口頭部には櫛または籠による文様が施されている。体部は球形またはやや脇の張る形を呈し、円孔は体部の中央よりやや上に七外方から内方へ斜めに穿孔されている。文様帶の入るものは円孔の上下に凹線とその間に刺突文が施されている。体部の下半はヘラケズリ調整されている。口径は小型のもので13cm弱、大きなものは17cm程あり、基部は細いもので約3cm、太いもので約4.5cmを測る。

壺（第21図28～33・第22図）は口頭部が約2cm以下の短頭の壺と、2.5～4cmあるものに大別される。前者は頭部が短く直立し、肩部はやや張りをもち、つまみを伴わない口径の小さな蓋がつくものと、頭部が外反気味にたちあがり、球形またはやや扁平な球形を呈し、蓋のつかないものに分けられる。いずれも底部は丸く仕上げられている。後者は口径が8.5～10.5cmあり、やや長い頭部は直立またはわずかに外反し、端部はおむね丸く仕上げられている。底部は丸く、脚台のつくものもある。その他に広口壺（第31図10）もある。口頭部のみであるが、大型で太い基部から内傾気味にたちあがった後、上外方に開く。口縁部は強く外反し、端部は下方に肥厚し、外面にカキ目調整をしている。

蓋（第21図20～27）は、8～12cmの小さな口径で、口縁部は下方に下り端部は内傾する段を有する。天井部はヘラケズリやカキ目を施しているが、手持ち静止ヘラケズリを行なっている



第14図 提瓶口縁部形態略図

ものが1点ある。

提瓶（第23図）は数量的には多く出土しているが、器形の全様をつかむことのできるものは少ない。大型のものは正面からみると球形またはやや縱に長い球形を呈し、側面からは背面中央が平坦な楕円形を呈する。体部には回転カキ目を施した後、口頭部を接合している。口頭部は直立した後、稜線を境に上方にのびるもの、わずかに外反しながらたちあがった後、丸味をもって上方にのびるもの、基部から外反しながらのびるもの、さらに口縁端部が上・下・外方に鋭くつまみ出されているものがある。肩部には正面の左右に口頭部の形態に関係なく、一応にカギ状の把手がつく。また環状の把手のみも出土している。小型のものは外反気味に上方にのび、端部は丸く仕上げられている。体部は正面からみると球形または楕円形を呈し、側面からは楕円形を呈し、回転カキ目あるいは回転ヘラケズリ調整をしている。肩部の把手はカギ状または環状把手がつく。以上のことから本窯においては、口頭部の形態、器形の大小による把手の形態の変化はみられない。

横瓶（第24図1～5）は俵形の体部に基部の太い口頭部がつく。体部外面は、タタキの上にカキ目を、内面は円弧タタキを施している。口頭部は直立または外反し、口縁部は外方に玉縁状に肥厚する。

ねり鉢（第24図6）は円板状の平らな底部で、中央に1孔を穿っている。外上方に広がる体部外面には回転ヘラケズリまたはカキ目を施している。

器台（第24図11～17）は復元口径が21.4～25.5cmとあまり大きくなり、外反もしくは内弯する口縁部を有する。口縁端部は外方に屈曲し肥厚するか、上方に肥厚し、凹線が巡る。外面にはタタキの上にカキ目調整をするものが多い。内面は円弧タタキが残る。脚部は長方形と三角形の透しの入る円筒形で、裾部付近で大きく外方に開くものと思われる。

甕（第24図19、第25図～第30図）は口径が約12cmの小型から約60cmの大型の甕まで大量に出土している。口径が26cm未満の小型から中型の甕は外反する2～5cm程度の短い口頭部がつく。口縁部は端部を外方に折り曲げて、玉縁状に肥厚する形のものが主流を占める。その他に、丸味をもった端部を上・下につまみ出したり、凹線を巡らすもの、外反する頭部をそのままのば

し丸く仕上げるものがある。また、長さ3cm前後で直立気味にたちあがり、上端は平面を成し竜風の口顎部を呈するものがある。口顎部はほとんど無文であるが、「+」「!」「|」「×」「\」などのヘラ記号がつけられているものがある。体部外面は平行タタキの後、カキ目調整をしているものが多い。内面は同心円もしくは円弧タタキがみられる。また1点だけであるが、肩部左右に上向きに屈曲する把手がつく中型の甕がある。大型甕は口顎部がゆるやかに長く外反し、口縁部は外方に屈曲し、さらに上・下方に肥厚させたもの、頭部から段をつけて上外方にのびる上端が面を成すものがある。口顎部の外面には1本または2本からなる回線帯を数条巡らし、回線帯間には、備または単による波状文や列点文などの文様帯が施されている。体部の内外面には平行および円弧タタキ調整を行なっている。

甕（第31図1～5）は上外方にのびる体部の中央からやや上に凹線が巡り、その凹線上に上向きに屈曲するカギ状把手がつく。底部は透しを入れた扁平な円板を貼付した後、内外面をヘラケズリ調整している。

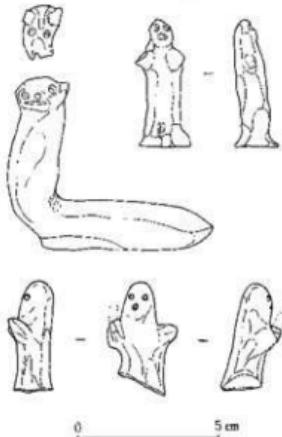
瓶子（第31図7～9）は体部の最大径が肩部付近にあり、外面は回転ヘラケズリもしくはカキ目調整をしている。口顎部は基部が細く上外方にのびる。

塊（第31図14・15・18～21）は、器高が高いものと、皿状または杯蓋を逆にしたような形をしたものがある。前者は体部に凹線が巡り、下方に屈曲する把手を貼付したものがある。後者は底部が平坦になり、体部には1～2本の凹線が巡る。口縁部は直立または外反気味にのびる。

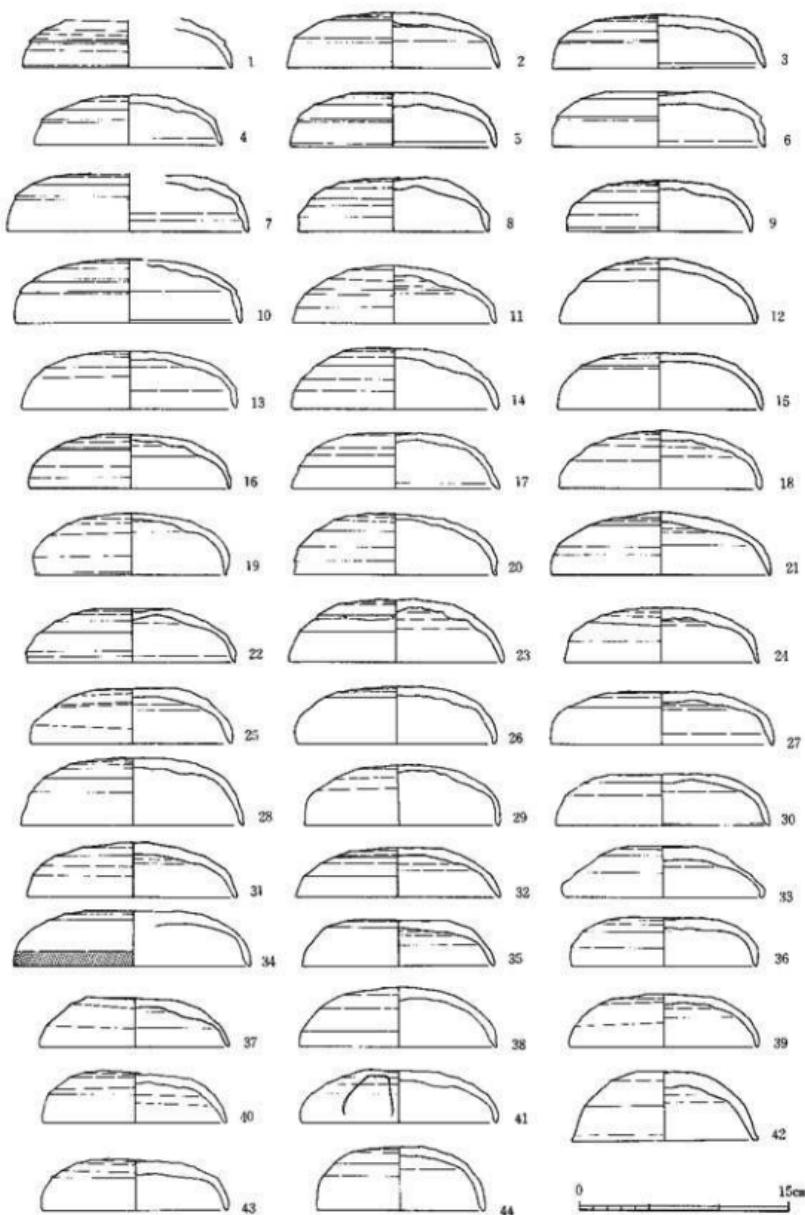
蓋（第31図22～28）は長頸瓶などに使用された小型のもので、かえりは口縁端より0.8cm前後下方にのびており、天井部は丸く仕上げているもの、天井部中央に扁平で中窪みのつまみがつくものがある。28は大型の蓋で高いつまみがつき、天井部内面に円弧タタキがみられる。

陶棺（第31図16・17）は身の側面の一船と思われる。縦横方向に凸帶を貼付している。

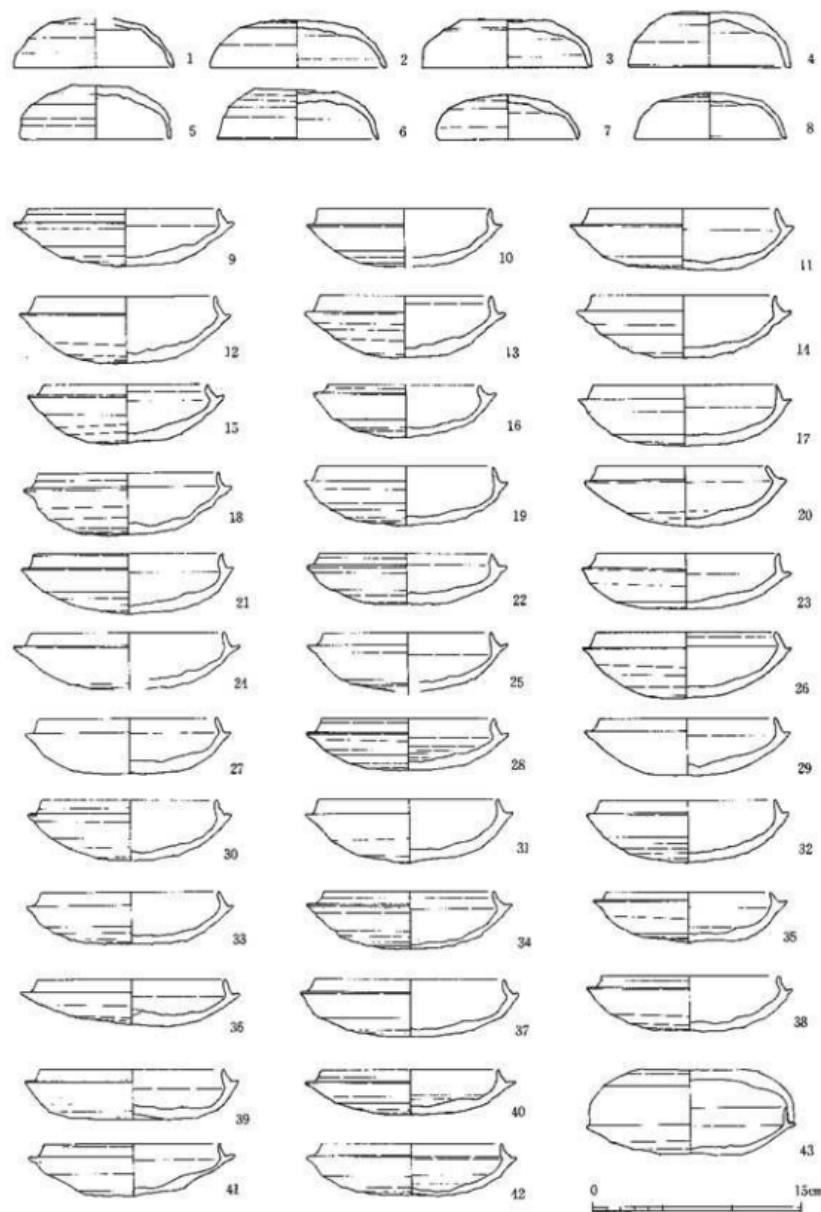
その他に鈴の破片が1点出土した。球形の体部の下方に小孔を穿ち、中央に切り込みを入れている。装飾人形は2点あり、1点は高さ4.5cmで上部の左右に短く三角形の腕がつく。頭部は小さく、刺突により目と口を表現している。下部は筒状で裾部は接合時の指おさえで外方に広がる。下端は平坦で、直立する。もう1点は高さが最長部で4cmあり、下端の接合部は斜めの平面を成す。頭部は体長の約1/3で目と口を刺突で表現している。腕は体部の左右中央に三角形に張り出しており、右手には何か持っている。動物は直径約1.7cmの粘土紐の中央付近を直角に折り曲げ長い首にし、さらに先を曲げて頭部にしている。頭部左右に小さい耳をつけ、目と鼻孔は刺突で、口は切り込みを入れ表現している。顔面部の先は欠損している。胴部の端は尖がり、足はなく、胴部を直接取り付けている。



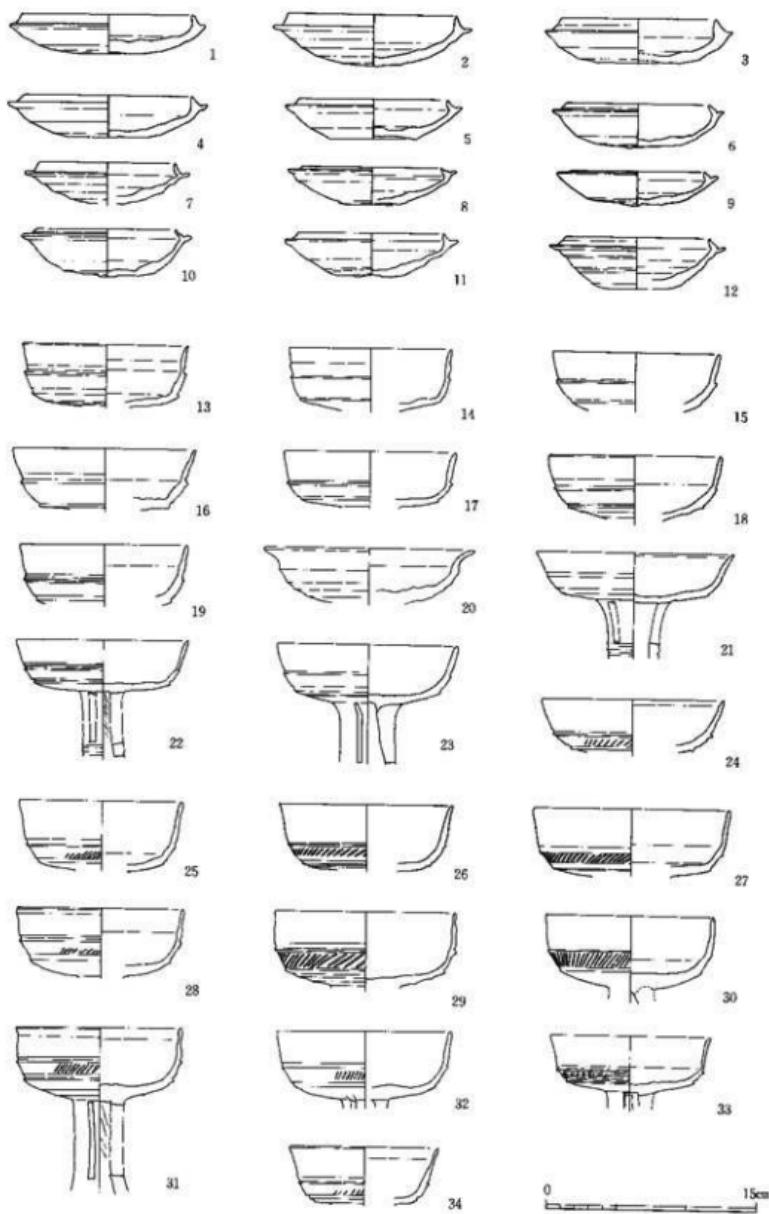
第15図 装飾人形・動物実測図



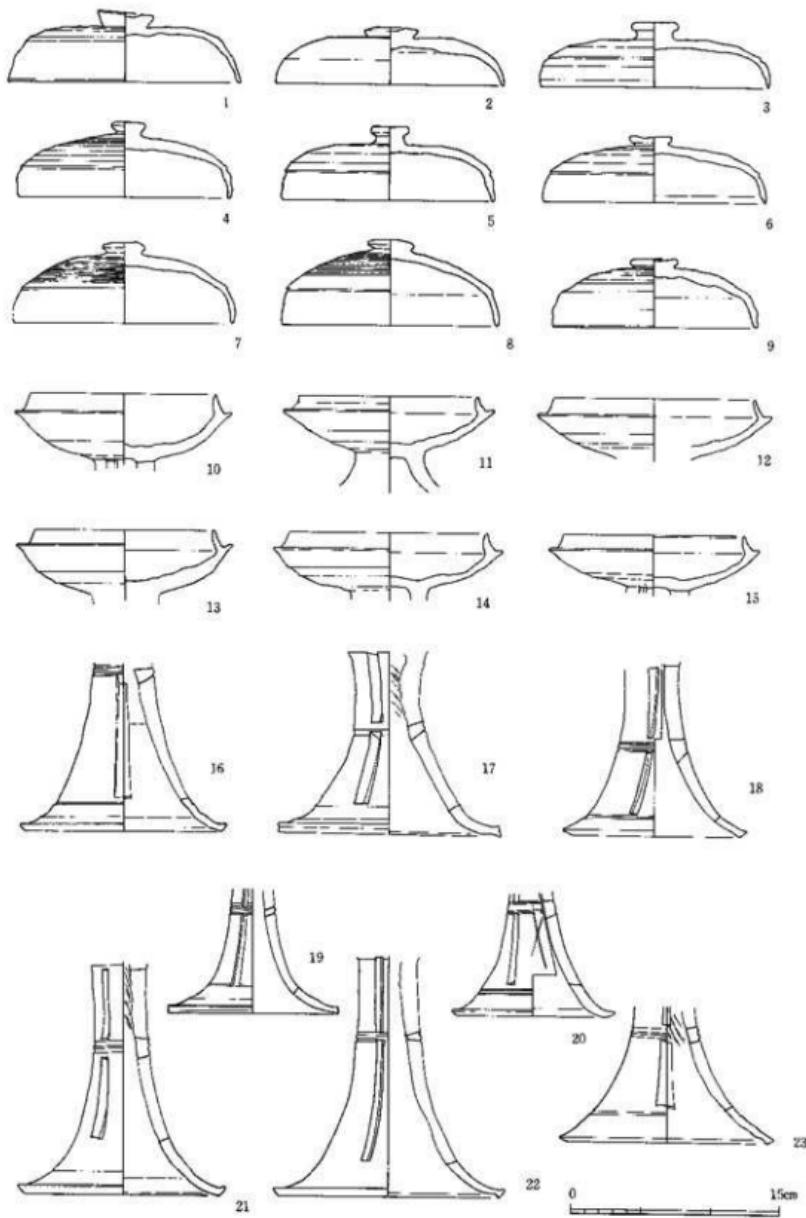
第16図 灰原出土遺物1



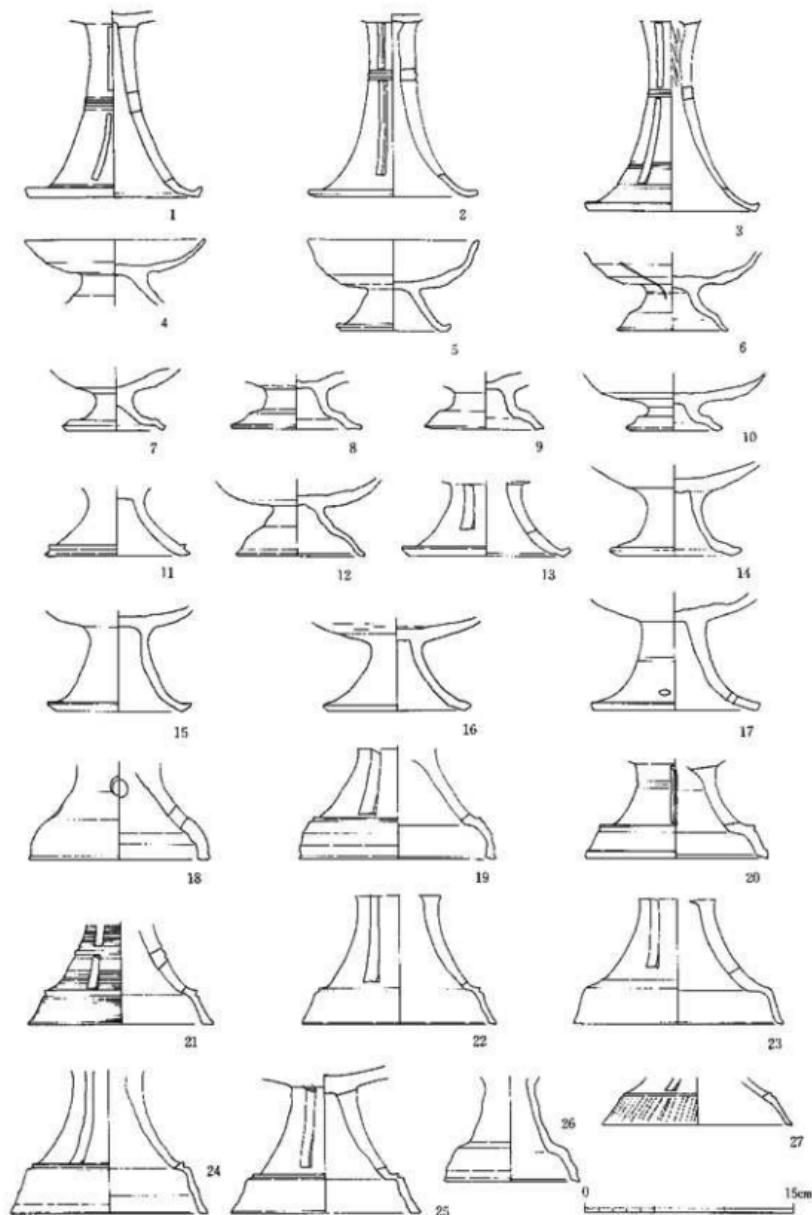
第17図 広原出土遺物2



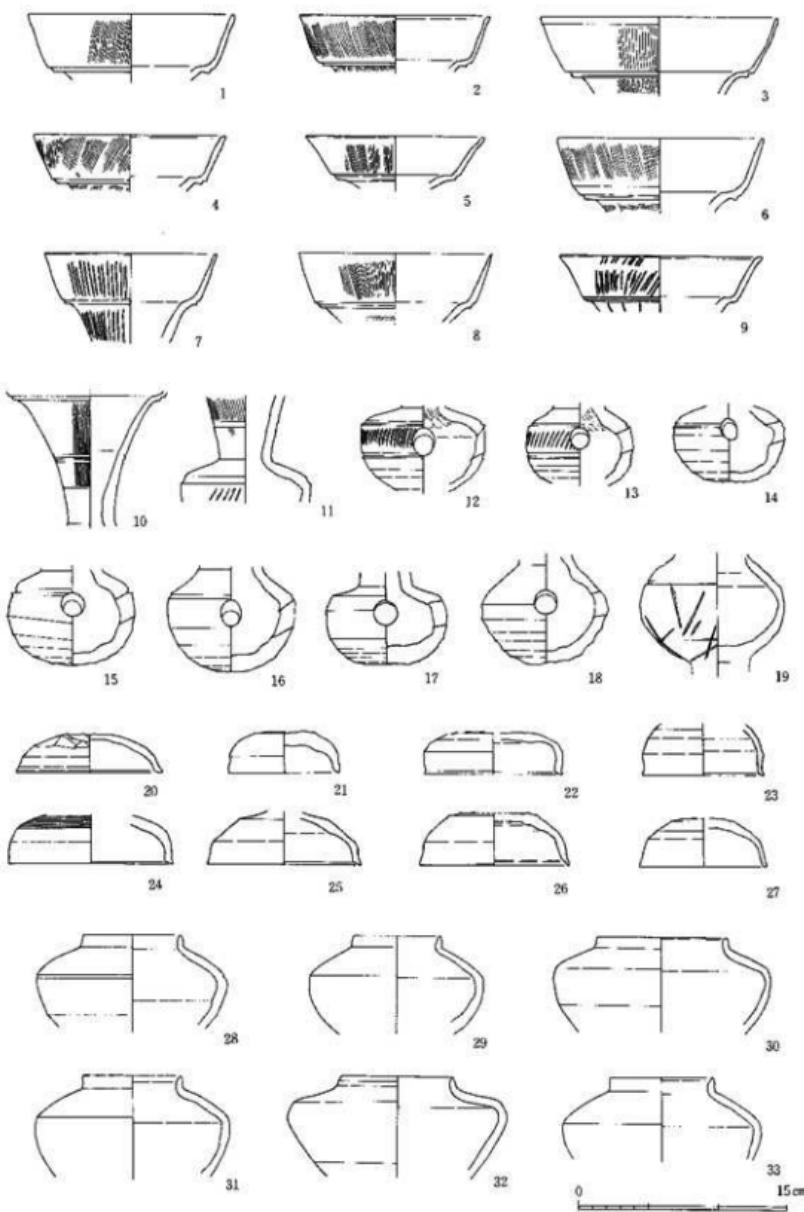
第18図 灰原出土遺物 3



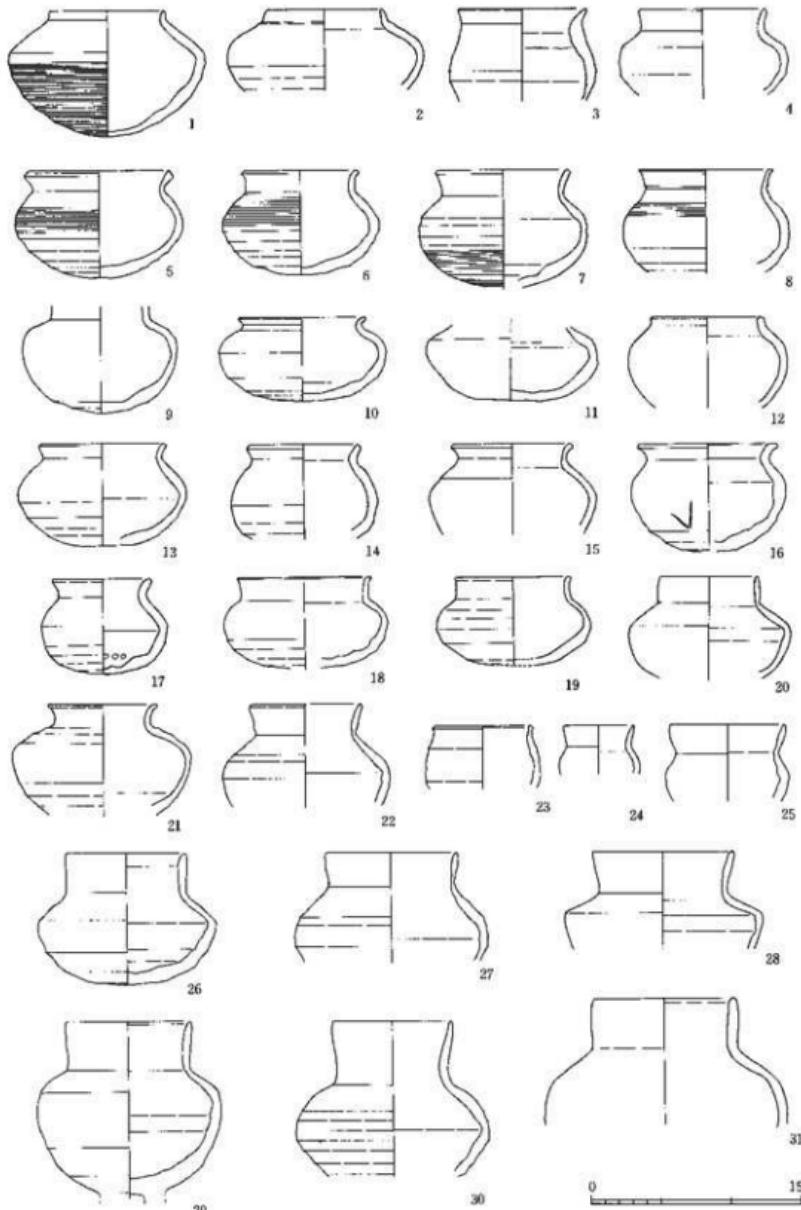
第19図 灰原出土遺物4



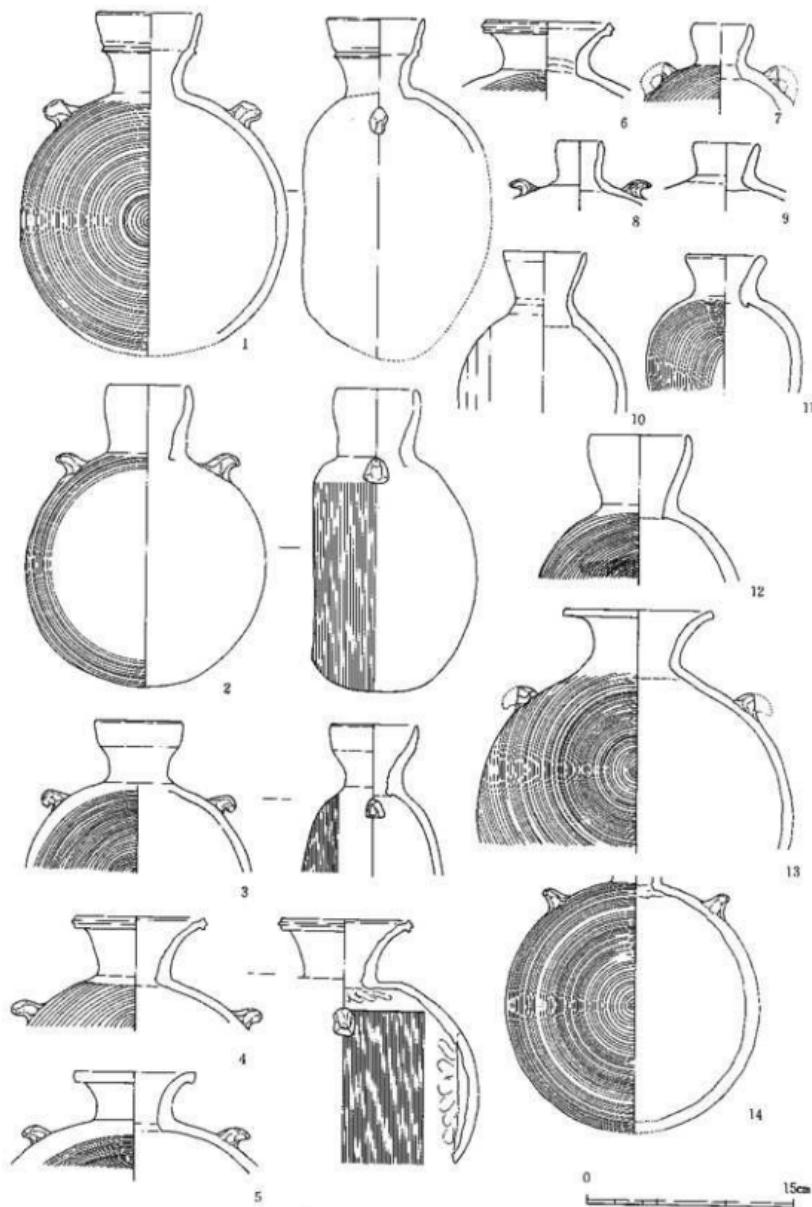
第20図 灰原出土遺物 5



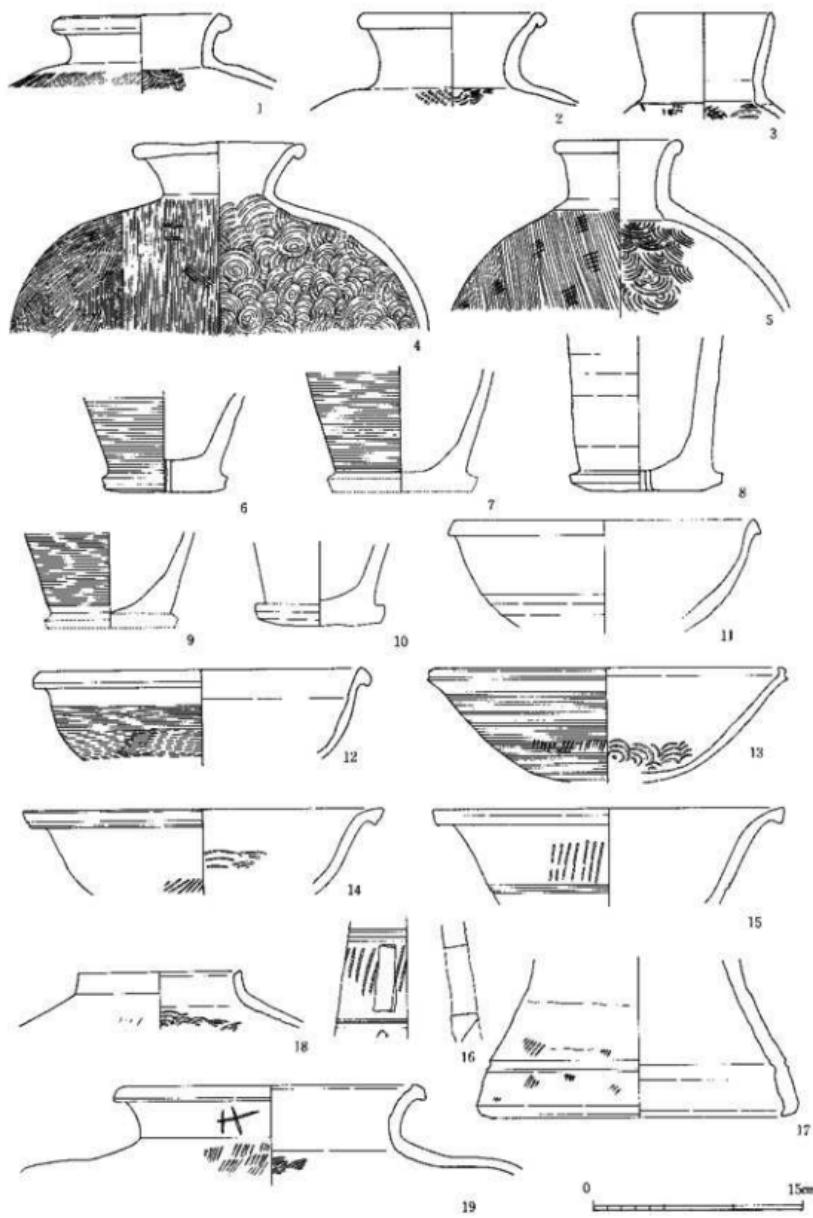
第21図 灰原出土遺物 6



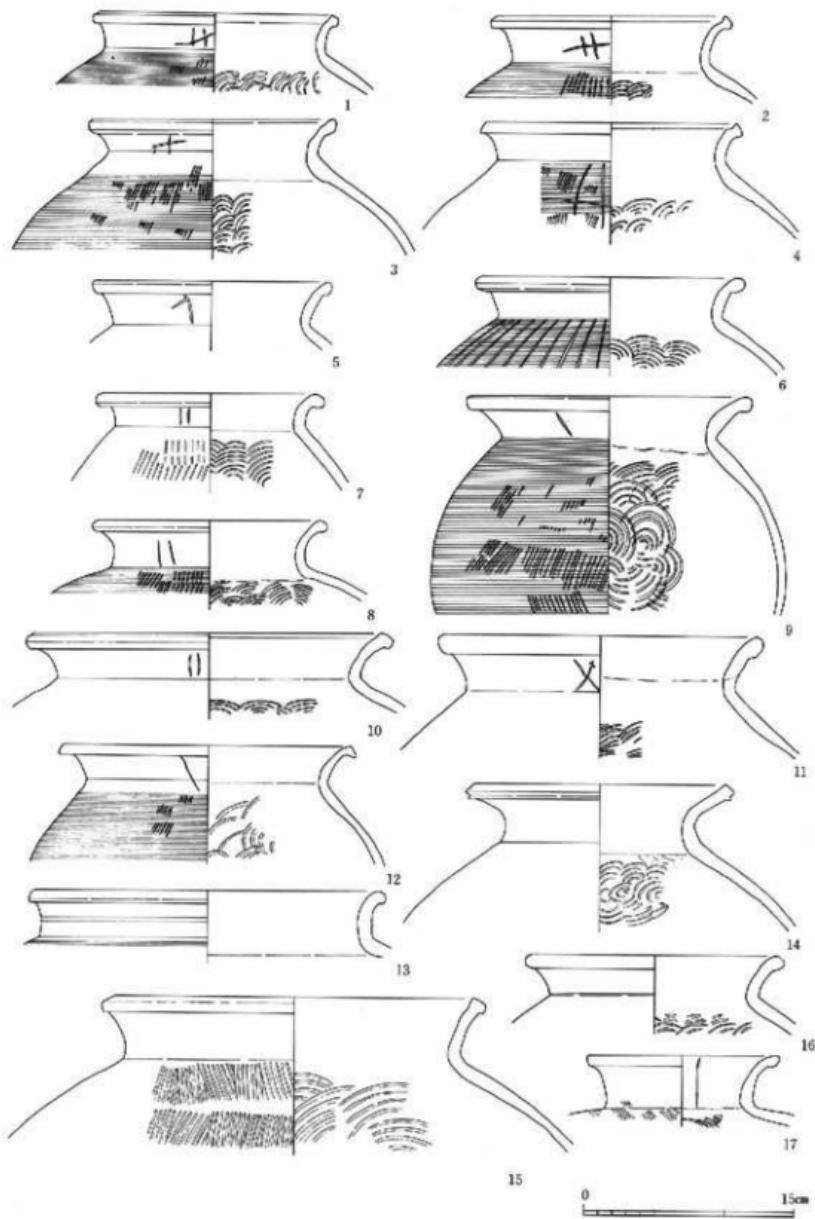
第22図 灰原出土遺物 7



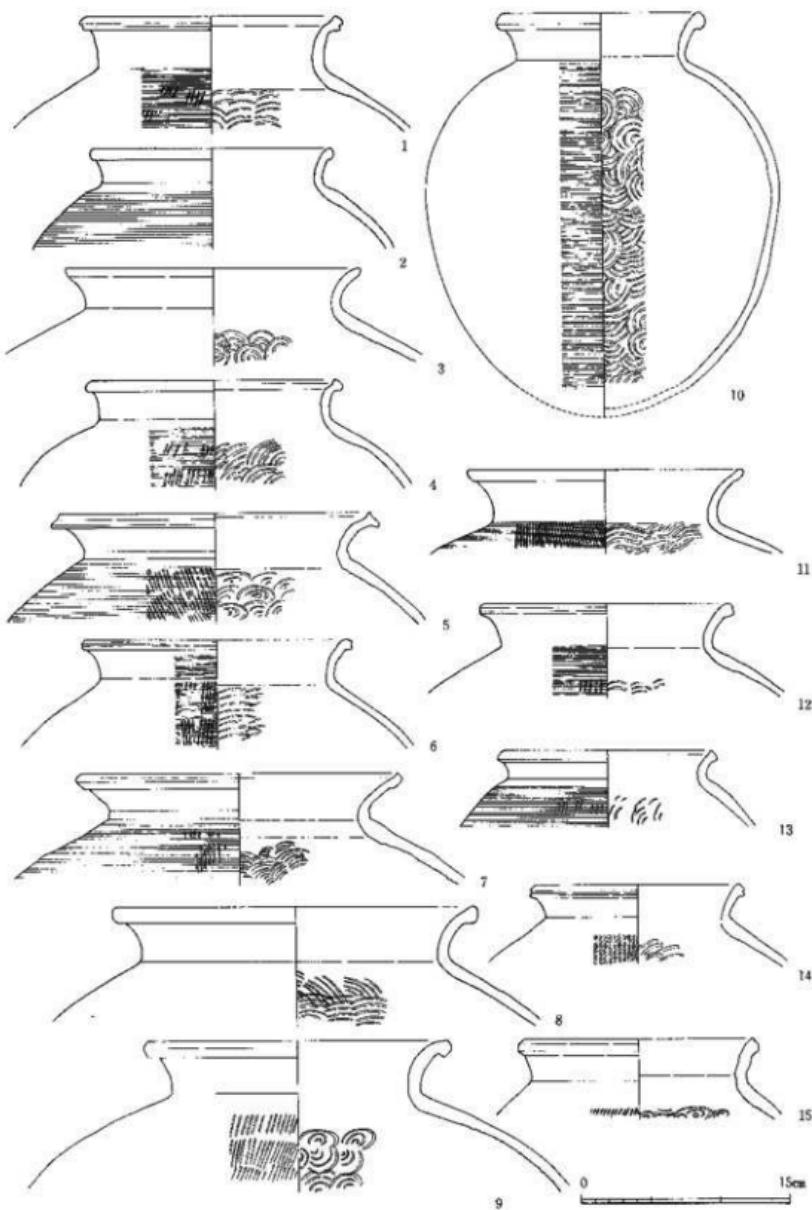
第23図 灰原出土遺物 8



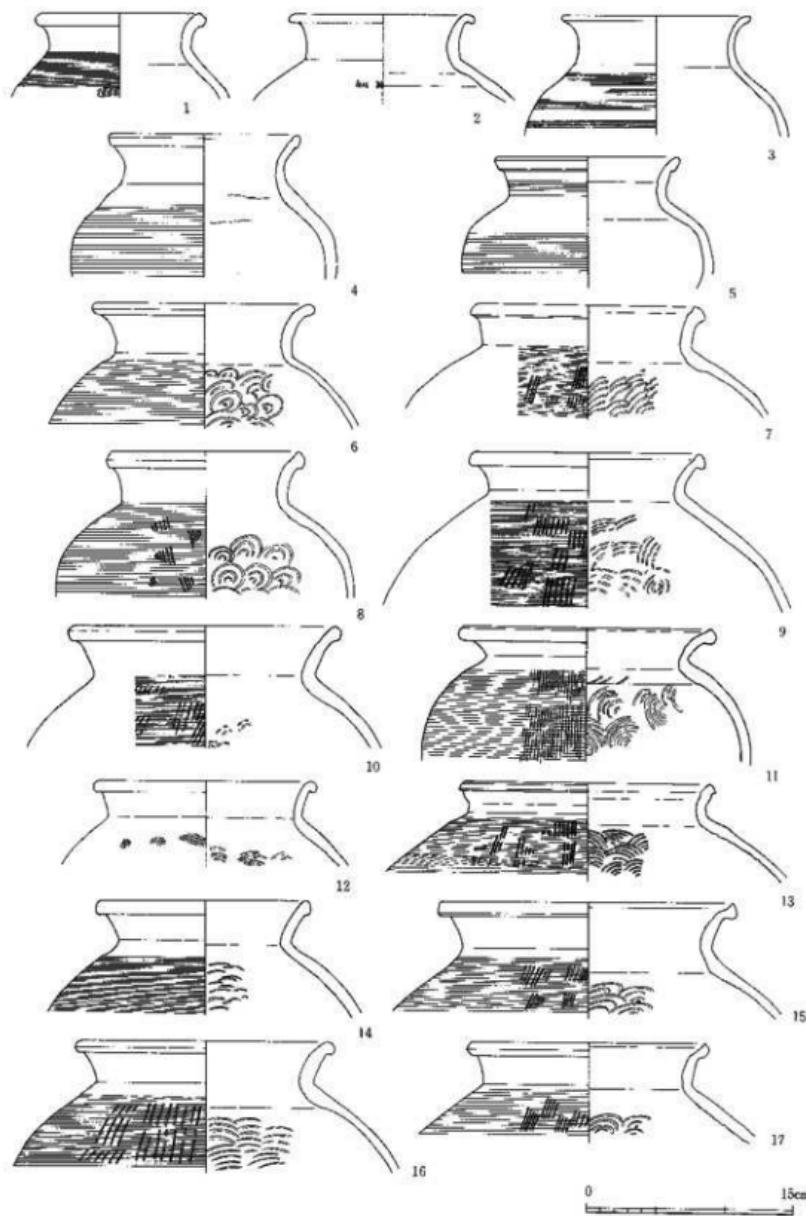
第24図 灰原出土遺物 9



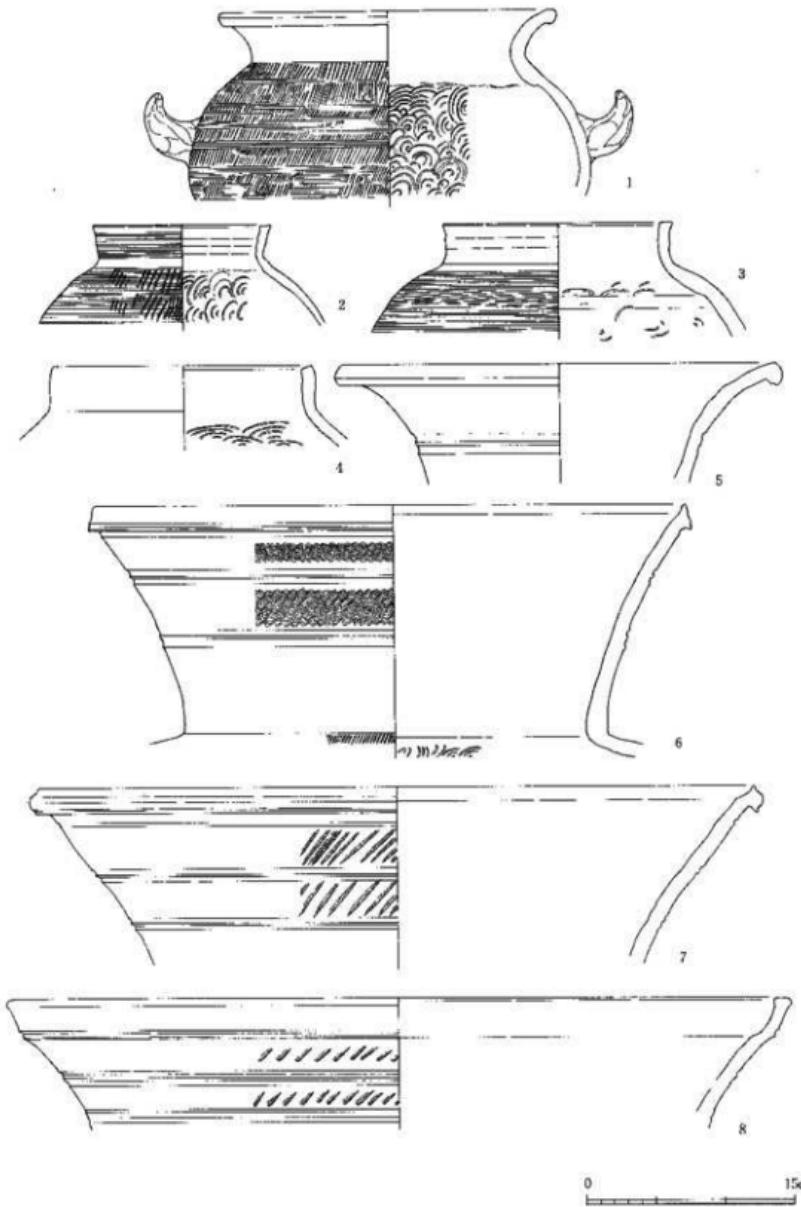
第25図 灰原出土遺物10



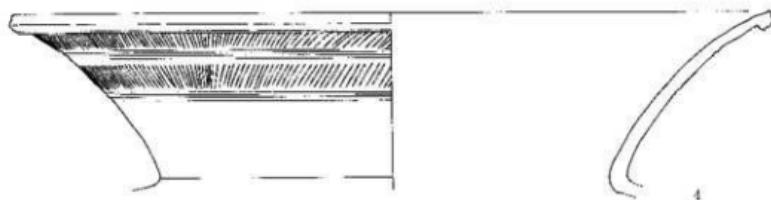
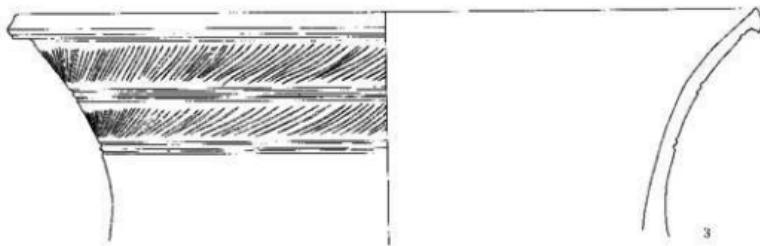
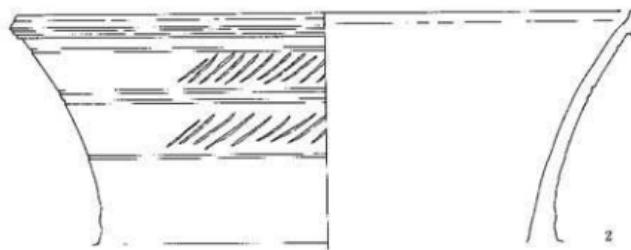
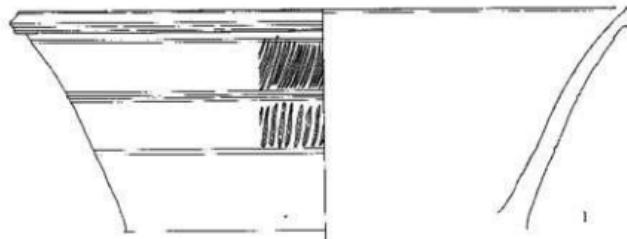
第26図 灰原出土遺物11



第27図 灰原出土遺物12

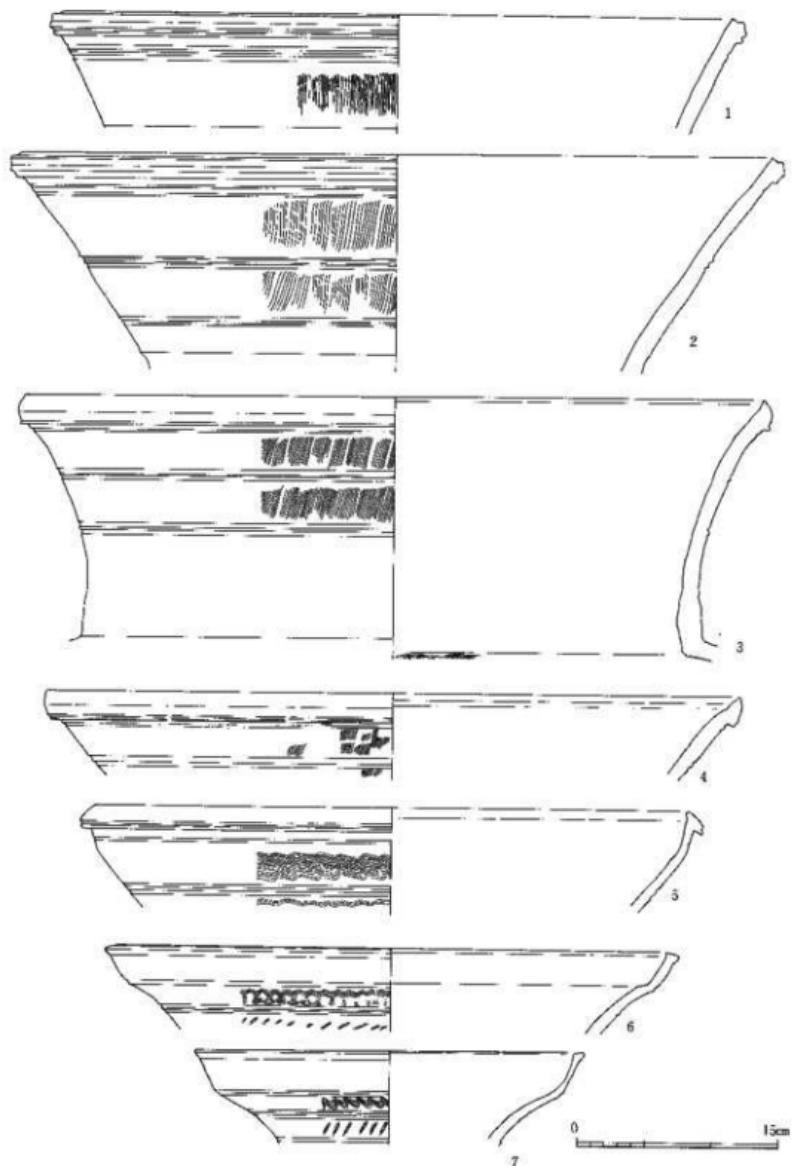


第28図 灰原出土遺物13

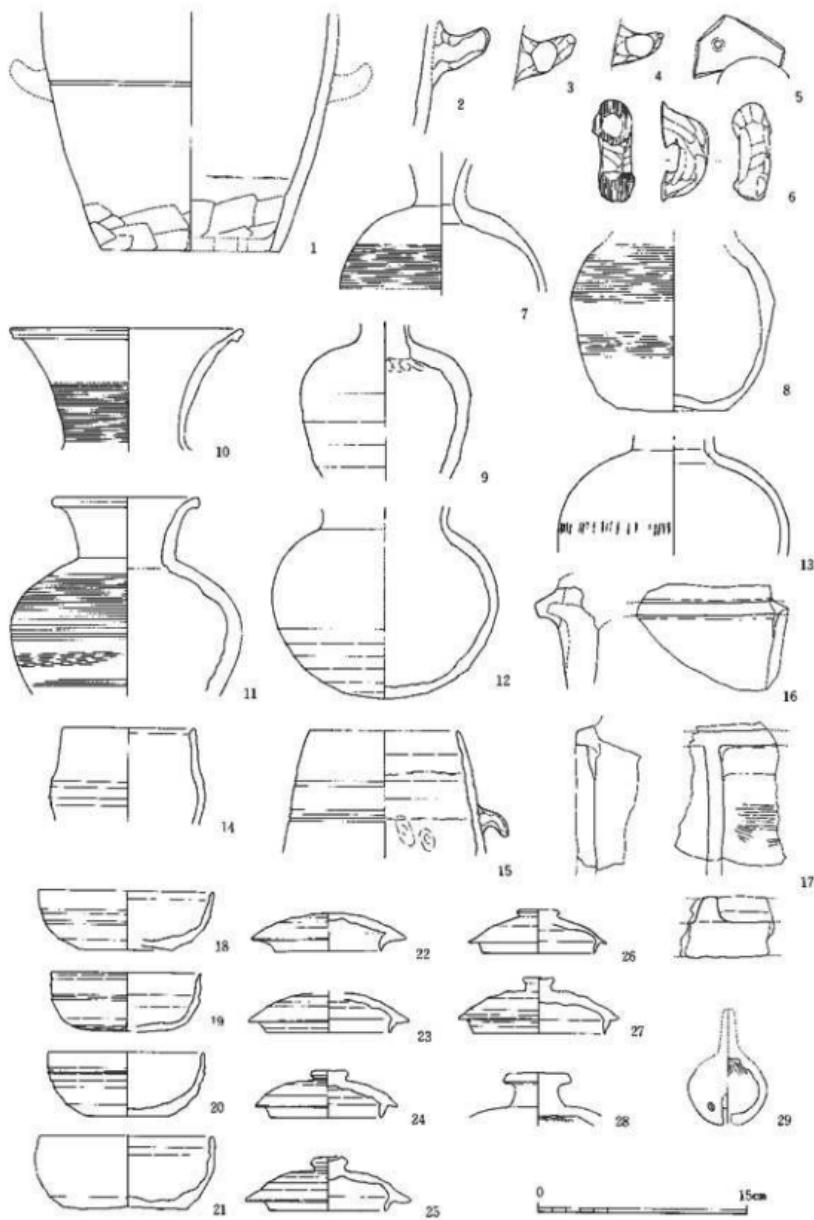


第29図 灰原出土遺物14

0 15cm



第30図 灰原出土遺物15



第31図 灰原出土遺物16

以上、本窯出土の須恵器を出土地点に分けて、特徴を略記した。最後に本窯の時期であるが、第1次窯は焼成部の遺物や灰原から出土している本窯での古段階の様相を示す遺物からみて、泉北陶邑の出土資料^{註1}の編年によれば、調整手法などに若干の相違はあるが、おおよそⅡ期—3・4段階の時期のものと考えられる。また第2次窯は第1次窯と重複する時期のものもあり、Ⅲ期—4段階から杯蓋の逆転直前のⅡ期—6段階にあたると思われる。

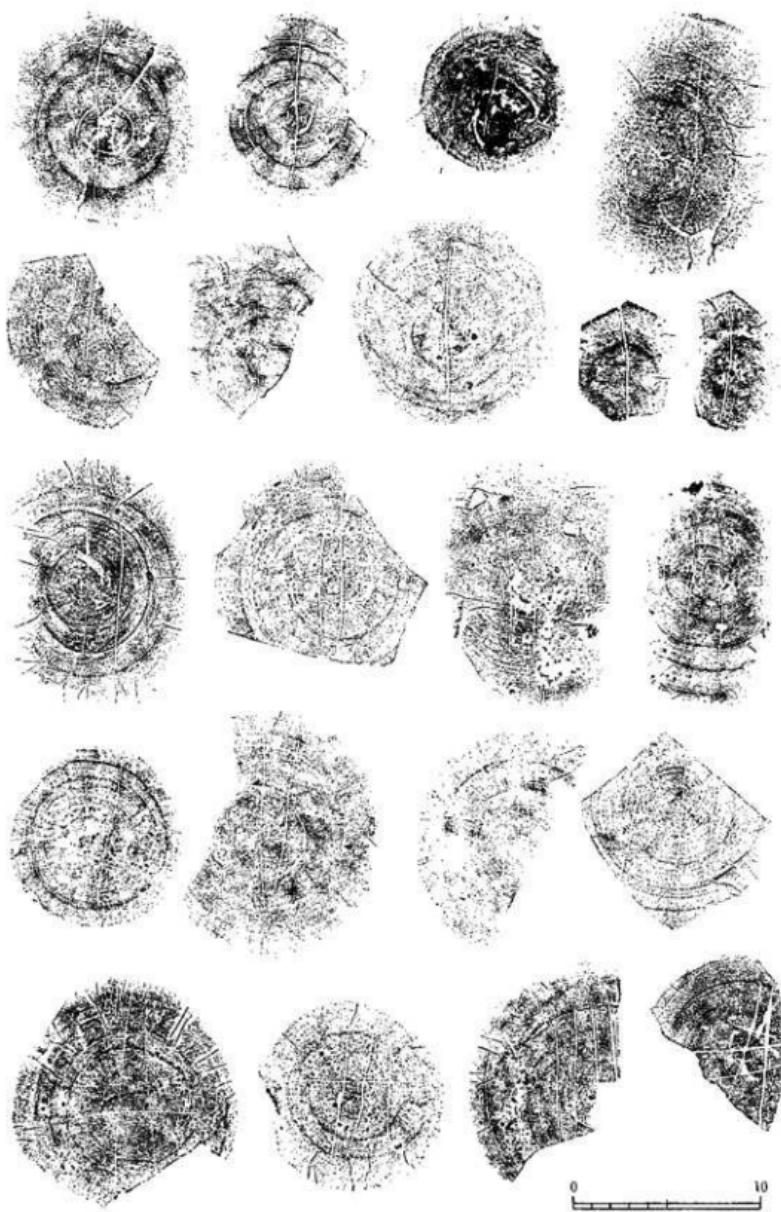
本窯の操業時期は、本窯の属する桜井谷窯跡群での最盛期にあたり、出土遺物は前述したように莫大な量にのぼり、その量とともに豊富な器種をもち、内容的に最も充実した資料を検出することのできた窯として位置づけられた。

(4) ヘラ記号をもつ遺物について

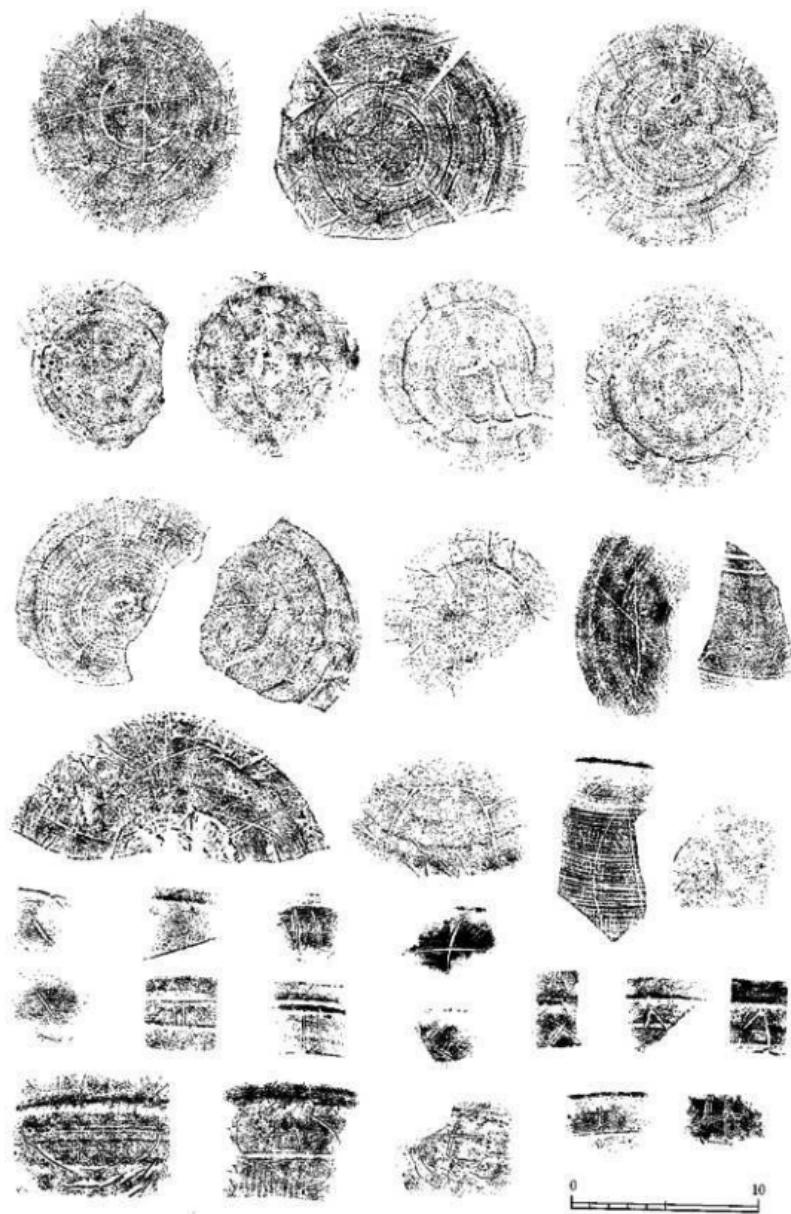
本窯においては、ヘラ記号を有するものが102点出土している。そのうち窯体内からの出土例は13点、前庭部および排水溝内は8点、灰原では81点を数えることができる。器種別では杯が非常に多く全体のおよそ70%を占めている。次いで甕が多く20%近くあり、その他に高杯・短頸壺・甕・瓶子などが若干みられる。杯は杯蓋が37点、杯身が22点、どちらとも判別のつかないものが11点ある。杯蓋では犬井部外面に、杯身では底部外面のほぼ中央にヘラ記号がつけられるが、例外的に中央からはずれていたり（第13図31）、口縁部の外面につけられている（第13図6）ものもある。杯蓋はすべての器種の中で最も多く、全体の37%を占めており、ヘラ記号の種類も最も多いが、その中でも「|」「+」「Ⅱ」の3例が多く、他の記号は各々1、

第2表 ヘラ記号種別表

| | 杯蓋 | 杯身 | 杯 | 高杯 | 甕 | 短頸壺 | 甕 | 瓶子 | 壺 | 計 |
|-----|----|----|----|----|---|-----|----|----|---|-----|
| I | 10 | 3 | 1 | 3 | | | | | 1 | 18 |
| II | 5 | 7 | 1 | | | | 4 | | | 17 |
| III | 1 | 1 | 1 | | | | | | | 3 |
| IV | 7 | 6 | 2 | | 1 | 1 | 1 | | | 18 |
| × | | | | 2 | | | 4 | | | 6 |
| A | 2 | | | | | | | | | 2 |
| U | | | | | | 1 | | | | 1 |
| \ | | | | | | | 2 | | | 2 |
| - | 1 | | 2 | | | | 6 | | | 9 |
| # | 2 | | | | | | | | | 2 |
| ## | | | 1 | | | | | | | 1 |
| + | 1 | | | | | | | | | 1 |
| X | 1 | | | | | | | | | 1 |
| 入 | | | | | | | 1 | | | 1 |
| □ | 1 | | | | | | | | | 1 |
| ### | 1 | | | | | | | | | 1 |
| 不規 | 5 | 5 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 18 |
| | 37 | 22 | 11 | 6 | 1 | 3 | 19 | 1 | 2 | 102 |



第32図 ヘラ記号拓影 1



第33図 ヘラ記号拓影2

2点みられるのみである。杯身は杯蓋に次いで多くみられるが、ヘラ記号の種類は限られており、部分的に残り全様がつかめないものを除けば、「|」「+」「|」「||」の4種類のみである。高杯は6点出土している。そのうち「|」は3点で、すべて無蓋高杯で杯部の内外面につけられている。「×」は2点で有蓋高杯の脚部にみられる。壺は杯に次いで多く19点出土している。ヘラ記号のつけられている壺の口径は約16~24cmで、それ以上に大きい口径のものにはヘラ記号はみあたらない。記号はほとんどが口頭部の外面に強く彫り込まれているが、肩部につけられヘラ描き文と区別のつけにくいものもある。記号の種類は杯蓋に次いで多いが、杯と異なるのは「|」や「+」がほとんどみられないのに反し、「+」が多いことである。そのほか壺などにもヘラ記号がみられるが、その例は少ない。

本窯のヘラ記号と同じ桜井谷窯跡群の他窯2-19・2-24窯での統計と比較してみると、各窯とも若干の時期差はあるが、各々共通点と相違点を見いだせる。

本窯での記号は、数例を除けばヘラによる直線を組み合わせたものである。これは2-24窯にもいえることであるが、2-19窯では直線に曲線を組み合わせた「○」が半数近くを占めるという統計がでている。記号の種類としては2-19窯、2-24窯とも各々6例ずつをあげているが、本窯では「+」と「×」を同一視するなど、似かよっているものを一括してもその数は10例を下らない。また各窯の種類別の比率をみると、各々不明分を差し引けば、2-19窯では「○」が45%、「|」が42%を占める。2-24窯では「|」が45%、「||」は33%を占める。本窯では「|」が24%、「||」は23%、「+」は「×」を合わせると30%になる。2-19窯、2-24窯では各窯とも前述2例が圧倒的に多く、他は「+」を含め非常に少なくなっているが、本窯においては、3例の合計が他窯の2例の合計に匹敵する。

各窯で共通してみられる記号「|」と「+」または「×」であるが、「|」の占める比率は前述のようにたいへん高いが、「+」または「×」に関しては、本窯では両者を一括すると最も多い記号であるが、他窯では各々3例ずつしか出ておらず、各々10%未満の数値を示す。2-24窯と本窯では「||」も高い比率を占めているが、2-19窯ではこの記号はなく、かわりに「○」が多い。その他のヘラ記号は2-19窯で出土しているものが、本窯においてもすべてみられる。以上のように、時期的に近い同窯跡群内の窯でも各々異なる数値を示すことがわかるが、上述の数値からはヘラ記号に関して提議されている、製造した工人または注文者側のサインetc.の解答は得られず、何を示すものなのかは残念ながら今のところ不明である。今後、古墳や住居址からの出土資料をもとに、ヘラ記号そのものも意味をも含め、明らかにできる機会を待ちたい。

(厚美)

註1 中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』大阪府文化財調査報告書第30輯 1978

註2 猪田義明「桜井谷窯跡群2-19窯跡・2-24窯跡」桜井谷窯跡群発掘調査団 1977

出土遺物観察表

焚口

| 測定 回数 | 番号 | 器種 | 法 量(cm) | 所 在 | 見 る | ヘ ル ム 号 |
|----------|----|----------|-----------------------|--|--------------------------------------|------------------|
| 9-1 | | 復元口径 | 13.5 | たちあがりは、内傾した後、中程から上方にのびる。 | | |
| | | 杯身 | 受部 径 15.3 残存 高 4.7 | 受部は上外方にのびる。底部は丸く、なだらかに下る。底部外面はヘラケズリ、内面は、 凹起ナギと中央はナガ調整を行なう。断土は細砂粒を多く含む。 | | |
| 2 | | 復元口径 | 13.8 | たちあがりは、内傾気味に上方にのび、端部付近で、外反気味に上方にのびる。 | | |
| | | 杯身 | 受部 径 15.3 残存 高 4.0 | 受部は、太く短かく外方に張り出す。体部は、下内方に下って底部に至る。 外面には、暗緑色の縦がかり、縫合は若干焼け出む。 | | |
| 3 | | 復元口径 | 13.2 | たちあがりは、やや短く内傾する。 | | |
| | | 杯身 | 受部 径 15.2 残存 高 3.9 | 受部は上外方にのびる。体部は、なだらかに下り、底部に至る。底部外面は粒がかり、 少々焼け出んでいる。内面は、凹起ナギと中央にナガ調整を行なう。 | | |
| 4 | | 復元口径 | 11.7 | たちあがりは、内傾しながらのび、縫合は先細りとなり、端部は短い。 | | |
| | | 杯身 | 受部 径 14.1 残存 高 3.4 | 受部は、短かく太く外方に張り出す。体部は、下内方に下り、底部は中間みである。 ヘラケズリの範囲は、やや狭く、その他の調整も無い。 | | |
| 5 | | 復元口径 | 12.7 | たちあがりは、内傾しながらのび、端部は、内折する続い面を成す。 | | |
| | | 杯身 | 受部 径 15.0 残存 高 2.3 | 受部は、外方に張り出す。体・底部は、焼け出している。 内外面に、暗緑色の縦がくかかる。 | | |
| 6 | | 復元口径 | 11.0 | たちあがりは、筋立を経た後、やや角度をゆるめて上内方にのびる。基部内面に沈窓が ある。 | | |
| | | 杯身 | 受部 径 13.1 残存 高 3.0 | 端部は丸い。受部は、外方にのびる。体部は、端部をもって下内方に下る。 胎土は、砂粒を若干含む。焼成は良好で黒炭色を呈する。 | | |
| 7 | | 復元口径 | 13.2 | 口縁部は、下外方へドリした後、外方へ開きを含め下る。天井部は、やや高く、天井部中央 部 高 3.6 | は、複数のナガ調整を行なう。縫合は全体にうすい。胎土は細砂粒を多く含む。 | |
| 8 | | 無蓋 高杯 | 復元口径 12.6 残存 高 3.7 | 口縁部は、下外方にのびる。体部は、下内方に下り、鉛の後線が、口縁直下とさらに下っ たところに溝る。胎土は、細砂粒を多く含む。 | | |
| 9 | | 復元口径 | 16.9 | 口縁部は、内傾気味ながらのび、縫合は外反しながら上方にのびる。端部は丸い。 | | |
| | | 杯身 | 残存 高 4.6 | 胎土は、微砂粒を含むのみで精良である。焼成不良で軟質、灰白色を呈する。 | | |
| 10 | | 復元口径 | 13.8 | 口縁部は、わずかに外方へ開きを含め下る。天井部は、やや高い。外面の約2/3に及ぶ 筋 高 4.0 | よりのヘラケズリを行なう。胎土は、細砂粒を多く含み、やや粗い。 | |
| 11 | | 復元口径 | 13.9 | 口縁部は、内寄気味に下外方に下る。端部は、うすく下外方へ斜く下る。天井部は丸い。 | | |
| | | 杯身 | 残存 高 3.9 | 天井部の2/5にヘラケズリ焼成、他の回転ナガ調整を行なう。 | | |
| 12 | | 復元口径 | 12.8 | たちあがりは、内傾した後、中程から上方にのびる。端部はやや短い。 | | |
| | | 杯身 | 受部 径 15.4 残存 高 3.8 | 受部は、上外方に丸く張り出す。体部は、下内方に下る。底部は欠損している。 胎土は、砂粒を多く含み粗い。焼成は堅緻である。 | | |
| 13 | | 復元口径 | 12.2 | 口縁部は、下外方へ下り、端部はうすく丸い。天井部は低く、縫合は弱い。 | | |
| | | 杯身 | 残存 高 3.0 | 外面は、回転ナガの後、不整方向のナガを雜然と行なう。内面は回転ナガ削除をする。 | | |
| 14 | | 復元口径 | 14.1 | 口縁部は、下外方へ下る。内面は端部附近で肥厚し、端部は内傾する面を有する。 | | |
| | | 杯身 | 筋 高 3.3 | 天井部は、低く、縫合は弱い。天井部の2/3に回転ヘラケズリを行なう。 | | |
| 15 | | 復元口径 | 12.8 | 口縁部は、基部より、ほぼ直立し、口縁部は、わずかに外傾して外方にのびる。端部は 残存 高 3.7 | 内傾気味の平面を成す。 | |
| | | 杯身 | 残存 高 4.1 | 胎土は砂粒を多く含む。焼成は不良で軟質。胎土は焼成して調整は不明である。 | | |
| 17 | | 復元口径 | 10.2 | たちあがりは、内傾しながらのびる。 | | |
| | | 杯身 | 受部 径 12.1 残存 高 2.8 | 受部は、外上方にのびる。体部は、下内方に下り、平坦な底部に至る。端部は、ヘラ切り 残存 高 3.0 | 未調整である。内面は回転ナガ・ナガ調整を行なう。 | |
| 18 | | 復元口径 | 10.9 | たちあがりの縫合はうすく、短く内傾しながらのびる。端部は短い。 | | |
| | | 杯身 | 受部 径 13.2 残存 高 3.0 | 受部は、外上方にのびる。体部は、下内方に下り、平坦な底部に至る。端部は、ヘラ切り 残存 高 2.7 | 未調整である。内面は回転ナガ・ナガ調整を行なう。 | |
| 19 | | 復元口径 | 9.2 | たちあがりの縫合はうすく、内傾した後、反りかえって上方にのびる。端部は短い。 | | |
| | | 杯身 | 受部 径 11.5 残存 高 2.7 | 受部は、外上方にのびる。体部は、内寄気味に下内方に下る。 胎土は、細砂粒を含む。焼成良好で堅緻。灰白色を呈する。 | | |

| 開函 回数 | 番号 | 器種 | 法 直 (cm) | 所 在 | 見 | ハ ラ 記 号 |
|----------|----|---------|--------------------|--|---|------------------|
| 9-20 | | 杯 壺 | 脚 高 11.0 | 脚柱部は、下外方に下り、脚部で外方に張り出した後、下外方に下る。壺部の接地部は、平面 | | |
| 10-3 | | | 脚 高 4.9 | を成す。脚土は、砂粒を適度に含む。器表付近は灰褐色で、表面中心は茶褐色を呈する。 | | |
| 21 | | 横瓶 | 復元口径 10.7 | 口部は、上外方にたちあがった後、外反してのび、口縁部は、屈曲して上方にのびる。 | | |
| | | | 残 存 高 5.9 | 壺部は、内傾する平面を成す。肩部は、大きく外方力に下る。外面上にカキ目、内面に円弧タタキがみられる。 | | |
| 22 | | 杯 壺 | 復元口径 12.1 | 口縁部は、下方に下り、壺部はわずかに外方に聞く。大舟部は、内寄しながら、平緩な中央 | | |
| | | | 器 高 3.1 | 舟部に至る。天井部外面中央は、へら切り未調整、内面は、強くナゲ調整をしている。 | | |
| 23 | | 杯身 | 復元口径 11.3 | うちあがりは、先細りで、内傾しながらのびる。 | | |
| | | | 受 部 径 2.7 | 受部の内壁はうすく、外上方に張り頸り出す。底部は、内寄しながら下内方へ下り。中央 | | |
| | | | 器 高 3.0 | 舟部は、底に達する。外面上には、へら切り未調整、内面は、強くナゲ調整をしている。 | | |
| 24 | | 杯壺 | 口 径 11.0 | 一口、外唇気味にうすく作られた口縁部に、粘土帯を附付して、やや厚くしている。天井部 | | |
| | | | 脚 高 6.0 | 中央は、高く、一旦成形後粘土帯と貼って指おきを行なっている。 | | |
| 25 | | 杯身 | 復元口径 11.1 | うちあがりは、内傾しながら下内方へのび、接合部には施旗が認る。 | | |
| | | | 受 部 径 13.1 | 受部は、外方へ張り出す。体部は、凹内を有して下内方に下り、底部に系る。底部はやや | | |
| | | | 器 高 3.0 | 平たく、へら切り後、未調整である。 | | |
| 26 | | 杯身 | 口 径 10.5 | うちあがりは、内傾した後、先細りとなり上方に軽くのびる。 | | |
| | | | 受 部 径 4.0 | 受部は、外上方にのびる。体部は、下内方に深く下り、平坦な底部は雑然とナゲされている。 | | |
| | | | 脚 高 4.0 | 施旗はやや甘く、乳白色を呈する。 | | |
| 27 | | 杯身 | 復元口径 10.3 | うちあがりは、内傾しながら想ぐるのび、壺部は高い。 | | |
| | | | 受 部 径 12.3 | 受部は上外方に張り出す。体部は下内方に深く下る。底部は成形後うすく粘土を附付 | | |
| | | | 器 高 3.1 | し、平坦に整形している。内外面に、潔浄の砂跡が附着している。 | | |
| 28 | | 壺 | 復元口径 15.3 | 口縁部は上外方にのび、口縁部は、一条の回輪を焼に上方にたちあがる。口縁部上端は中 | | |
| 10-7 | | | 央 存 高 6.1 | 央が深く、底面を成す。口縁部下に1条の回輪を焼んで横状文(10本)を2段施す。 | | |
| 29 | | 壺 | 復元口径 36.2 | 口縁部は、上外方にのび、口縁部下方に段面V字形の凸唇と回輪が認る。口縁部は外傾 | | |
| 10-4 | | | 残 存 高 9.7 | する平面を成す。口縁部には施旗文と回輪を繰り返し施す。 | | |
| 30 | | 提 扱 | 口 径 6.2 | 口縁部は上外方にたちあがり、口縁部は、内寄気味に上方にのびる。口縁部中央に2条の | | |
| | | | 回輪を施す。底部以下は欠出している。 | | | |
| 31 | | 短瓶 壺 | 復元口径 9.3 | 口縁部は軽く内傾し、口縁部は上方に軽くのびる。 | | |
| | | | 脚部最大径12.1 | 脚部は下外方に下り、脚部は先細りし、内寄しながら下内方へ下る。 | | |
| | | | 残 存 高 3.4 | 脚土は、砂粒を若干含むが精良である。施旗はやや甘く、乳白色を呈する。 | | |
| 32 | | 壺 | 復元口径 14.5 | 口縁部は、外反しながらのびる。口縁部は、わずかに肥厚し、外傾する面を成す。 | | |
| | | | 脚 存 高 4.9 | 脚部は、下外方へ下る。脚土は細砂粒を多く含む。焼成不良で軟質のため、器表磨滅する。 | | |
| 33 | | 杯型 | 復元口径 16.0 | 口縁部は、下外方に下り、壺部は丸い。天井部は、やや高く、などらかである。天井部外側 | | |
| | | | 残 存 高 4.1 | は、2/3位左肩にへらケズリを行なう。施旗は回輪ナゲ調整を行なう。へら記刀の一帯が残る。 | | |
| 34 | | 杯型 | 復元口径 14.1 | 口縁部は、下外方に下った後、壺部へ開き気味に下る。天井部は、高く成形後、うすく粘土 | | |
| | | | 残 存 高 4.0 | を貼り軽く整形をしている。施旗は砂粒を多く含み粗い。 | | |
| 35 | | 杯型 | 復元口径 14.0 | 口縁部は下外方に下り、壺部に丸い。天井部は低く、中央は平坦に近い。天井部外面は、 | | |
| | | | 脚 存 高 3.0 | へら切り未調整である。焼成は堅硬で潔白色を呈する。 | | |
| 36 | | 杯型 | 復元口径 15.5 | 口縁部は、内寄気味に下外方に下る。天井部は低くなどらかである。天井部外側の2/3位 | | |
| | | | 脚 存 高 3.5 | 左肩にへらケズリを行なう。施旗は單な同様ナゲ調整を施す。 | | |
| 37 | | 杯身 | 復元口径 13.2 | うちあがりの器壁はうすく、内傾しながら上内方へのびる。 | | |
| | | | 受 部 径 15.5 | 受部は外上方にのびる。底部はやや浅く、中央部は平坦である。 | | |
| | | | 器 高 3.9 | 脚土は砂粒を含まず、精緻である。焼成は不良で軟質、乳白色を呈する。 | | |
| 38 | | 杯身 | 口 径 14.4 | うちあがりは、内傾しながらのびる。器壁は先細りである。 | | |
| | | | 受 部 径 16.5 | 受部は、外方にのびる。底部はやや深く、などらかに丸い。 | | |
| | | | 器 高 4.1 | 脚土は、砂粒を若干含む。焼成はやや甘く、淡灰色を呈する。 | | |
| 39 | | 杯身 | 復元口径 13.3 | うちあがりは、内傾しながら上内方へのびる。器壁は先細りで、壺部は丸い。 | | |
| | | | 受 部 径 15.5 | 受部は外方に張り出し、うちあがりとの境に施旗が認る。底部は、内寄しながら、下内方 | | |
| | | | 残 存 高 3.7 | に下る。底部のほぼ全面に左肩にへらケズリを行なう。 | | |
| 40 | | 杯身 | 復元口径 12.3 | うちあがりは、内傾した後、中程で上方にのびる。壺部は低い。 | | |
| | | | 受 部 径 14.2 | 受部は、外方に張り出す。底部は下内方に直線的に下る。 | | |
| | | | 残 存 高 3.2 | 脚土は砂粒をやや多く含む。焼成はやや甘く、乳白色を呈する。 | | |
| 41 | | 壺 | 復元口径 16.5 | 口縁部は上方にまっすぐたちあがり、口縁部は、外反し、外下方に折れ曲がる。底部は、 | | X |
| | | | 残 存 高 7.9 | 下外方に下る。外側は平行タタキの上からカキ目、内面に円弧タタキ調整を行なう。へら | | |
| | | | | 記号がある。 | | |

燃焼部

| 回数 | 番号 | 器種 | 法 異 (cm) | 所 見 | ハ ラ 記 分 |
|------|----|----|-----------------------------------|--|------------|
| 10-1 | | 杯型 | 復元口径 16.4 残存高 4.8 | 口縁部は、下外方に下った後、下方に下り端部は丸い。天井部は高く丸い。内面は、マキアゲの痕跡の凹凸を残す。砂粒を若干含む。焼成不善で灰質、黄褐色を呈する。 | |
| 2 | | 杯型 | 口 径 15.6 器 高 3.9 | 口縁部は、下方に下り、端部内面は先細りとなる。天井部は低く少々凹凸を有する平面に成る。天井部に重ね焼きの痕跡とヘラ記号の一跡があられる。 | + |
| 3 | | 杯型 | 復元口径 13.4 器 高 4.3 | 口縁部は内面凹凸に下方に下り、端部は外方に開く。天井部は、丸くなだらかである。天井部の3/5に左まわりのヘラケズリを行なう。底土は精良である。 | |
| 4 | | 杯型 | 復元口径 12.2 受部 徑 14.0 残存高 3.1 | たちあがりは、内傾しながら上内方にのびる。 受部は、上外方に張り出す。体部は下内方に下り、平たい底部は浅い。たちあがりと受部の凹痕はうすい。底土は、粗砂粒を多く含む。 | |
| 5 | | 杯型 | 復元口径 13.4 受部 徑 15.3 器 高 3.3 | たちあがりは内傾した後、中腹で上方にのびる。 受部は外上方に張り出す。体部は、内傾しながら下内方に下り、底部は焼け苦んでいる。 底土は黒褐色で、外面には墨緑色の粒がかかり、内面は黒灰色を呈する。 | |
| 6 | | 杯身 | 復元口径 11.8 受部 徑 13.9 器 高 3.4 | たちあがりは、内傾しながら上内方にのびた後、端部は上方に続くのびる。 受部は上方にのびる。たちあがりとの境には沈線が進る。底部は、整形後來開窓である。 底土は砂粒を多く含む。底土は堅壁で灰色を呈する。 | |
| 7 | | 甕 | 復元口径 13.0 残存高 5.2 | 口縁部は上外方にのび、口縁部は外方に丸く肥厚する。底土は下外方に下る。 外面は平行タタキの上から目、内面は円弧タタキの剥離を行なう。底土は精良である。 | |
| 8 | | 杯型 | 口 径 14.1 器 高 4.8 | 口縁部は、下外方に下る。天井部は丸く高い。天井部のほほ全面に左まわりのヘラケズリを行なう。内面は凹凸なしで、底部は強くナガ調整をしている。 | |
| 9-1 | | 杯型 | 口 径 12.0 器 高 4.0 | LII縁部は下方に下り、端部内面に沈線が進る。天井部は高く丸い。 | |
| 9 | | 杯型 | 口 径 13.7 受部 高 4.1 | 底土は砂粒を多く含む。焼成は良好で堅壁、淡灰色を呈する。 | |
| 10 | | 杯身 | 口 径 13.7 受部 徑 15.9 器 高 4.1 | たちあがりは内傾しながらのび、端部は先細りとなり、最も上方にのびる。 受部は外方にのびる。底部は深く丸い。底部の内壁は薄い、底部外側の2/3に左まわりのヘラケズリを行なう。底土は砂粒を含む。 | |
| 11 | | 甕 | 復元口径 11.3 受部 徑 15.4 器 高 3.6 | たちあがりは内傾しながらのび、端部は先細りとなり、最も上方にのびる。 受部は上外方にのびる。底土は浅く、中央部はわずかに陥る。外面にヘラ記分がある。 底土は、5mmの白色小石粒をはじめ、若干の砂粒を含む。 | |
| 9-7 | | 杯身 | 復元口径 11.8 受部 徑 13.4 器 高 3.6 | たちあがりは内傾気味に上方にのびる。器壁は先細り状態である。 受部は外方にのびる。底部は、やや深い。外面は砂粒がかかり、焼けたれしている。 底土は1mm前後の砂粒を含む。 | |
| 12 | | 甕 | 復元口径 11.8 受部 徑 13.4 器 高 5.5 | たちあがりは内傾気味に上方にのびる。器壁は先細り状態である。 受部は外方にのびる。底部は、やや深い。外面は砂粒がかかり、焼けたれしている。 | |
| 13 | | 甕 | 復元口径 28.1 残存高 5.5 | 口縁部は上外方にのびる。二輪脚はわずかに外反し、底部は、下外方に肥厚する。 | |
| 14 | | 甕 | 復元口径 16.4 残存高 4.1 | 器壁は一輪内傾した後、外反する。LII縫部は外下方に肥厚する。底部に管唇の剥離痕があり、底部は下外方に下り、外壁は平行タタキ、内面は円弧タタキを行なう。 | |
| 15 | | 杯型 | 復元口径 13.9 器 高 2.8 | LII縫部は、内傾しながら下方に下る。天井部は焼け進んでいる。天井部の2/3に左まわりのヘラケズリを行なう。底土は砂粒を多く含む。 | |
| 16 | | 杯身 | 口 徑 11.5 受部 徑 13.7 器 高 3.5 | たちあがりは、内傾しながら短かくのびる。 受部は上外方にのびる。底部はやや深いが、焼け苦みのため、中窪みとなっている。 | |
| 17 | | 甕 | 口 径 11.2 受部 徑 13.4 器 高 3.2 | たちあがりは、内傾しながら短かくのびる。 受部は上外方にのびる。底部はやや深いが、焼け苦みのため、中窪みとなっている。 | |
| 9-8 | | 杯型 | 復元口径 12.4 受部 徑 14.4 器 高 2.2 | 天井部の内面のヘラケズリは3/5に左まわりのへらけずりを行なう。底土は砂粒を多く含む。 | |
| 18 | | 杯身 | 復元口径 10.9 受部 徑 13.3 器 高 4.0 | たちあがりは、内傾しながらのびる。底部は太く、先細りとなり、端部は鋭い。 受部は外方に張り出す。底部は欠損のため不明である。 底土は砂粒を多く含む。焼成良好で堅壁である。 | |
| 20 | | 杯型 | 復元口径 14.7 器 高 3.6 | LII縫部は上外方にのび、LII縫部付近で外方に張り出す。口縁部は上外方にのび、口縁部は広く伸びている。底土は砂粒をやや多く含む。 | |
| 21 | | 杯身 | 復元口径 10.9 受部 徑 13.3 器 高 4.0 | たちあがりは内傾しながらのびる。底部は太く、先細りとなり、端部は鋭い。 受部は外方に張り出す。底部は欠損のため不明である。 底土は砂粒を多く含む。焼成良好で堅壁である。 | |
| 23 | | 甕 | 復元口径 14.7 残存高 3.2 | LII縫部は上外方にのび、LII縫部付近で外方に張り出す。口縁部は上外方にのび、口縁部は広く伸びていて、底土は砂粒をやや多く含む。 内面する面を作成。LII縫部には物突き又はその直下に1条の凹線を施す。 | |

| 表面番号 回数 | 器種 | 法量(cm) | 所見 | ヘラ 記号 |
|------------|-----|----------------------------------|--|----------|
| 10-19 | 杯身 | 復元口徑 13.2 受部径 15.0 残存高 2.9 | たちあがりは強く上方にのびた後、中程から内傾する。 受部は外方に張り出す。底部は浅くなるものと思われる。器壁は全体にうすい。 | |
| 25 | 口 罩 | 18.4 | 口輪部は上方方にのび、口輪部は外方に肥厚し、平面を成す。 | |
| 10-9 | 口 罩 | 7.0 | 口輪部は下方方に下る。外側は平行タキの上から弱いカキ目、内面は円錐タキを複す。 | |
| 26 | 杯身 | 復元口徑 11.8 受部径 14.0 残存高 3.6 | たちあがりに内傾しながら上方にのびる。器壁は底部が太く、先細りである。 受部は上方方にのびる。受部以下は底面に向って下方方に下る。 焼成は堅密で、外層の受部以下は、暗緑色の釉が厚くかかる。 | |
| 27 | 杯身 | 口 径 11.3 受部径 14.1 残存高 3.5 | たちあがりは大きく内傾する。受部との境に沈鉢が巡る。 | |
| 28 | 蓋 | つまみ棒 3.1 残存高 3.0 | 天井部は、なだらかに下方方に下る。外側は暗緑色の釉がなくかかり、測量は不規である。 内部はナチュラル調査を行なう。天井部中央に中僅みの低いつまみが付く。 | |
| 22 | 杯蓋 | 口 径 14.5 器 高 4.2 | 口輪部は、わずかに開き底部に下方方に下る。天井部は中央が天井で、なだらかに口輪部に接し、底部は細砂粒を多く含む。 | |
| 39 | ねり | 此 罩 6.9 残存高 3.4 | 底部は上方方にのびる。底部は外方へ張り出す。底面は平坦でハラケズリをしている。 | |
| 29 | 杯身 | 復元口徑 12.9 受部径 14.9 器 高 4.2 | たちあがりの器壁は太く上方にのびる。 受部は、外方に弱く張り出す。底部は内傾しながら下方方に下る。器壁は厚い。 | |
| 30 | 蓋 | 復元口徑 9.8 残存高 3.8 | 天井部は下方に下る。天井部は高く丸い。 | |
| 31 | 蓋 | つまみ棒 2.7 残存高 3.2 | 天井部は中央が平坦になった後、下方になだらかに下る。天井部中央に中僅みの低いつまみが付く。 | |
| 10-1 | 短脚 | 復元口徑 8.3 残存高 3.2 | 天井部外側に重ね焼きの痕跡が残る。 | |
| 32 | 短脚 | 復元口徑 36.0 残存高 11.7 | 口輪部は、内窓気味に上方にたちあがる。底部は丸い。内面は外方に張り出す。 | |
| 10-6 | 蓋 | 復元口徑 11.2 器 高 3.6 | 天井部は砂粒をほとんど含まず焼成である。 | |
| 34 | 杯蓋 | 口 径 12.0 器 高 3.1 | 天井部は下方方に下る。天井部は口輪部から弧曲して、上方方にのびる。 天井部中央部は平頂になる。底部は、細砂粒を多く含む。 | |
| 35 | 杯蓋 | 口 径 11.6 器 高 3.4 | 口輪部は、下方方に下り、底部は丸い。天井部は口輪部からなだらかに上方方にのび、中央は高く盛り上がる。底部は、0.1~6mmの砂粒を多く含む。 | |
| 36 | 杯蓋 | 復元口徑 11.2 器 高 3.6 | 天井部は下方方に下る。内面は丸顶となる。天井部は高く丸い。天井部には、ナチュラル調査をした後、小さな粘土の盛りを付している。 | |
| 37 | 杯身 | 口 径 9.6 受部径 11.5 器 高 2.9 | たちあがりは大きく内傾した後、底部は先細りとなり強くのびる。 受部は上方方に張り出す。底部は低い。内面には釉や施華等が接着している。 | |
| 38 | 杯身 | 復元口徑 8.9 受部径 10.1 器 高 2.6 | たちあがりは短く上方方にのびる。器壁は他面に比して非常にうすい。 | |
| 24 | 杯蓋 | 口 径 11.0 残存高 4.0 | 受部は上方方にのびる。底部は先細り、中央は平坦でハラケズリ調査をしている。 | |
| | | | 底部は0.1~0.3mmの砂粒を含む。焼成は良好で堅密である。 | |
| | | | 天井部は下方に下った後、わずかに外方に開く。内面は内傾する段を有する。 | |
| | | | 天井部は高く、丸い。天井部外側は未焼成である。底部は細砂粒を多く含む。 | |

焼成部

| 表面番号 回数 | 器種 | 法量(cm) | 所見 | ヘラ 記号 |
|------------|----|---------------------|---|----------|
| 11-1 | 杯蓋 | 口 径 14.7 器 高 3.7 | 口輪部は内窓気味に下る。底部は丸い。天井部は低く平坦である。天井部に1条の凹線があり、内窓を境に中央部は、ハラケズリ調査、他は山動ナメ、ナナ調査を行なう。 | |
| 2 | 杯蓋 | 口 径 13.6 器 高 4.1 | 口輪部は、内窓気味に下方方に下る。天井部は中央が高く、丸い。ハラケズリは天井部の約1/2に施されている。底部は砂粒を若干含む。 | |
| 9-2 | 杯蓋 | 口 径 16.1 器 高 4.6 | 口輪部は、内窓気味に下方方に下る。天井部は高い。天井部外側の3/5に左まわりのヘラケズリを行なう。他面は同軸ナメ調査を行なう。内面の調査は丁寧である。 | |

| 図面番号 | 器種 | 法寸 (cm) | 所見 | ヘア記号 |
|------|----------|---|---|------|
| 11-4 | 杯身 | 口 径 14.2 受 部 径 15.8 残 高 3.2 | たちあがりは、内傾しながら上内方にのびる。 受部は丸く軽く外方に張り出す。底部は浅く平たい。底部外面は触がかかり、淡褐色に変色している。5mm程度の砂粒を若干含む。 | |
| 5 | 杯身 | | たちあがりは、内傾しながらのびる。器壁は強度と比べてうすい。 受部は丸く外方にのびる。完形であるが、焼け盡みが著しく口形は橢円形を呈する。 絞じは、四砂粒をやや多く含む。 | |
| 6 | 有蓋 杯身 | 口 径 14.4 受 部 径 15.7 残 高 5.5 外周中央に、下外方に下る脚部がつく。 | 杯部たちあがりは、内傾した後、中程から上方にのびる。 受部は外方にのびる。底部はやや深い。内面中央に凹凸タキが残る。 | |
| 10-2 | 杯蓋 | 口 径 15.3 | 口縁部は内寄気味に下方に下る。口縁部は内面が肥厚する。大井部は高く丸い。 | |
| 7 | 杯蓋 | 口 径 15.3 高 4.8 | 天井部外表面の高い範囲に左まわりのヘラケズリを行なう。 | |
| 8 | 杯蓋 | 口 径 13.8 高 4.1 | 口縁部は、外側が窓凸を有しながら下外方に下る。天井部は低い瓶子で左まわりのヘラケズリを行なう。 | |
| 9-3 | 杯蓋 | 口 径 14.5 高 3.2 | 天井部外表面のほぼ全面に左まわりのヘラケズリを行なう。 | |
| 10 | 杯蓋 | 復元口径 15.0 残 高 4.0 | 口縁部は、下外方に下る。天井部は、口縁部から屈曲して、低く平坦である。 底部は、砂粒をほんと含まず、精良である。焼成不良で軟質、乳白色を呈する。 | |
| 11 | 杯蓋 | 口 径 14.5 高 3.8 | 口縁部は外方に開き気味に下る。天井部は低く、まだらかで、器壁は厚い。 天井部外表面の左半に左まわりのヘラケズリ調整を行なう。底部は砂粒を多く含む。 | |
| 12 | 杯蓋 | 復元口径 13.8 残 高 3.9 | 口縁部は、内寄気味に下外方に下る。天井部はやや高く、左まわりヘラケズリ調整を行なう。底面は凹凸ナメと天井部内面中央の凹凸調整を行なう。 | |
| 13 | 杯身 | 口 径 12.7 受 部 径 14.6 高 4.0 | たちあがりは、内傾しながら、上内方にのびる。受部との境に沈線が認める。 受部は外七方に張り出す。底部はやや浅い。底部のヘラケズリの範囲は約1/2強で、同部位とともに、外側の調整は薄である。 | |
| 9-9 | 裏 | 復元口径 9.0 残 高 3.1 | 口縁部は、下方に下った後、端部付近で外方に開く。天井部は高く、丸くなるものと思われる。 底部は、内外面とも凹凸ナメがありである。底部は細砂粒を多く含む。 | |
| 14 | 裏 | 復元口径 9.1 残 高 3.1 | 口縁部は、上方に開くのびる。脇部は丸い。脇部は、内寄気味に下外方に下る。 天井部は、内外面とも凹凸ナメがありである。底部は細砂粒を多く含む。 | |
| 15 | 端 | 口 径 9.2 残 高 3.3 | 口縁部は口縁部付近で外側に、縫を形成する。口縁部は上外方にのびる。 7本1条の備縫き式を採る。焼成良好で堅硬、黒色を呈する。 | |
| 16 | 烟嘴 | 復元口径 9.1 蓋 残 高 3.1 | 口縁部は、上方に開くのびる。脇部は、下外方にまだらかに下る。内外面ともに凹凸ナメ調整を行なう。底部は粗砂粒である。 | |
| 17 | 短頸 | 口 径 9.2 残 高 3.3 | 口縁部は、短く、上方にのびる。脇部は丸い。脇部は、内寄気味に下外方に下る。 | |
| 10-8 | 蓋 | 口 径 13.9 残 高 4.1 | 底部外表面下にカニ目調査が認められる。底面は同軸ナメを行なう。 | |
| 18 | 杯蓋 | 口 径 14.2 高 4.3 | 口縁部は下外方に下る。天井部はやや低く平たい。外表面に左まわりヘラケズリが認まる。 | |
| 9-4 | 杯身 | 口 径 16.2 高 4.3 | たちあがりは、内傾しながら上内方にややのびる。 | |
| 19 | 杯身 | 口 径 14.2 受 部 径 16.2 高 4.3 | 受部は外方に張り出す。底部ははだらかに中心に向うが、外表面は剥離が激しい。 内面には、粗颗粒えんがるる溝がとこどろく残る。 | |
| 20 | 杯蓋 | 口 径 12.6 高 3.9 | 口縁部は下外方にわずかに開きながら下る。内面に1条の沈線がある。大井部は口縁部から引出され、先端を有する中央に向かう。底部は細砂粒を多く含む。 | |
| 21 | 杯身 | 復元口径 12.2 受 部 径 14.4 残 高 4.0 | たちあがりは、内傾しながら、上内方にのびる。受部との境に沈線がある。 | |
| 22 | 杯蓋 | 口 径 13.9 高 3.7 | 受部は丸く、外方に張り出す。杯蓋の口縁部が滑行している。底部はやや浅く、器壁は厚い。外表面には、乳白色の粒が厚くかかる。 | |
| 23 | 杯身 | 復元口径 12.9 受 部 径 14.8 残 高 4.1 | たちあがりは短く、上内方にのびる。器壁は他面に比して非常にうすい。 | |
| 24 | 杯蓋 | 復元口径 11.8 残 高 3.1 | 受部は外方に張り出す。底部は砂粒を若干含む。 | |
| 25 | 杯蓋 | 口 径 15.5 高 4.5 | 口縁部は、下外方に内寄気味に下る。天井部は、中央が高く盛り上がる。天井部の外表面には左まわりヘラケズリを行なう。 | |
| 26 | 杯蓋 | 口 径 15.4 高 3.2 | 口縁部は、下外方に開きながら下り、端部で下方に下る。天井部は低く、中央は平坦になる。 | |

| 断面 | 番号 | 器種 | 法量(cm) | 所見 | ヘラ記号 | |
|-------|-----|-------|--------|---|---|--|
| 11-27 | | 口 仔 | 11.8 | たちあがりは短く、内傾しながら内方にのびる。端部は丸い。 | | |
| | | 杯身 | | 受部 径 13.3 残 存 高 3.7 | 受部は太く細く、外方にのびる。底部は中央が深くなる。底部外側は盛り上がり、内面は凹 直 | |
| 28 | | 復元口径 | 11.7 | たちあがりは内傾した後、中軸で上方にのびる。端部は鋭い。 | | |
| | | 杯身 | 13.8 | 受部は外方に鋭くのびる。受部以下は、下内方に直線的に下る。底部の凹凸へラケズリ | | |
| | | 残 存 高 | 3.9 | はなくなる。 | | |
| 29 | | 復元口径 | 11.6 | たちあがりは、内傾しながら内方にのびる。 | | |
| | | 杯身 | 13.8 | 受部は外方に鋭くのびる。底部は下内方に下り、中央は深い。底部外側の1/2にヘラケズリ | | |
| | | 残 存 高 | 4.0 | を行なう。胎土は、ほとんど砂粒を含まない。 | | |
| 30 | | 杯蓋 | 11.7 | 口 仔 14.0 受部 径 3.6 | II縁部は内窓しながら下外方に下り、端部付近で、下方に下り接する。天井部は、中央部が平 壁 | |
| | | 器 | | 底 3.6 | が平盤になる。外側には、左まわりのヘラケズリを4-5周巡らす。 | |
| 31 | | 杯蓋 | 11.7 | 口 仔 13.5 | II縁部は下外方に下った後、下方に下る。天井部はなだらかに口縁部に被り、中央部で平 壁 | |
| | | 器 | | 底 3.7 | 坦になる。胎土は幾砂粒を多く含む。 | |
| 32 | 16蓋 | 復元口径 | 13.5 | II縁部は、内窓同時に下外方に下る。天井部は、高く丸い。 | | |
| | | 残 存 高 | 4.1 | 胎土は、砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、乳白色を呈する。 | | |
| 33 | 杯蓋 | 復元口径 | 14.1 | II縁部は、下外方に下る。天井部は、口縁部から底面まで、やや低い天井部中央に向う。 | | |
| | | 器 | 高 4.0 | 胎土は砂粒をやや多く含む。焼成良好で堅緻、灰色を呈する。 | | |
| 34 | 杯蓋 | 口 仔 | 14.0 | II縁部は下外方に下る。II縁部の器壁はうすい。天井部はやや低く、口縁部から鋭く削曲 | | |
| | | 器 | 高 3.9 | する。外側の2/3強の方まわりのヘラケズリ調整を行なう。胎土は砂粒を多く含む。 | | |
| 35 | 杯蓋 | 復元口径 | 15.2 | II縁部は下外方に下る。天井部は口縁部から鋭く削曲した後、浅い凹溝が巡る。 | | |
| | | 残 存 高 | 3.4 | 器壁より上はヘラケズリ調整を行なう。焼成はやや古く、乳白色を呈する。 | | |
| 36 | 杯蓋 | 口 仔 | 12.0 | II縁部は下外方に下る。II縁部の器壁は天井部に比してうすい。天井部は高く盛り上がる。 | | |
| | | 器 | 高 3.9 | 天井部中央は、皮形後調整である。 | | |
| 37 | 杯蓋 | 口 仔 | 11.7 | II縁部は下方に下る。天井部は高く丸い。外側は、胎と窓床が縮着している。 | | |
| | | 器 | 高 3.7 | 内面は同軸ナサの後、中央部はナサ調整を行なう。 | | |
| 38 | 杯蓋 | 口 仔 | 12.3 | II縁部は下外方に下る。内面は、内傾する曲を有する。天井部外側の調整は無である。 | | |
| | | 器 | 高 3.3 | 胎土は渦巻状に凹凸が広がる。胎土は細砂粒を多く含む。 | | |
| 39 | 杯蓋 | 復元口径 | 11.4 | II縁部は肥厚し、下方に下る。端部は先細りである。天井部は、高く盛り上るもののと | | |
| | | 残 存 高 | 3.2 | 思われる。胎土は細砂粒を多く含む。 | | |
| 40 | | 復元口径 | 10.6 | たちあがりは短く、内傾した後、端部は鋭くのびる。 | | |
| | | 杯身 | 12.8 | 受部は外方に鋭くのびる。底部は浅い。 | | |
| | | 残 存 高 | 2.9 | 胎土は砂粒を若干含む。 | | |
| 41 | | 口 仔 | 10.2 | たちあがりは短く、内傾した後、II縁部の器壁はうすく、上方に鋭くのびる。 | | |
| | | 受部 | 11.7 | 受部は外方にのび、端部は非常に鋭い。底部は浅く或平坦、外側中央に胎土をうすく貼り | | |
| 9-10 | | 器 | 高 3.2 | 付けている。 | | |
| 42 | | 口 仔 | 9.9 | たちあがりは短く、内傾した後、端部は鋭くのびる。 | | |
| | | 杯身 | 12.0 | 受部は下外方にのびる。底部は浅い。 | | |
| | | 残 存 高 | 2.9 | 胎土は砂粒を多く含む。 | | |
| 43 | | 口 仔 | 10.6 | 焼け歪みのため、器形が著しく変化している。たちあがりは短く、内傾する。 | | |
| | | 受部 | 12.2 | 受部はたちあがりと同じ長さで張り出し、両者の間は、浅いU字状に窓が巡る。 | | |
| | | 器 | 高 3.1 | 天井部内面は、渦巻状に凹凸を繰り返す。 | | |
| 44 | | 復元口径 | 12.2 | II縁部は、上方方にたちあがり。II縁部は、先細りとなり、下外方にのびる。 | | |
| 10-5 | 蓋 | 残 存 高 | 6.2 | 器部は、丸味を失って下外方に下り、窓部は内側異味に下る。カキ目調整を施す。 | | |
| 45 | 蓋 | 復元口径 | 10.5 | II縁部は上方にたちあがり。II縁部は外反する。 | | |
| | | 残 存 高 | 4.4 | 器部は下外方に下り、細かいカキ目調整を行なう。窓部は回転ナサ調整である。 | | |

排水溝 2 次的堆積

| 断面 | 番号 | 器種 | 法量(cm) | 所見 | ヘラ記号 |
|------|----|----|----------------------|---|------|
| 12-1 | | 杯身 | 復元口径 15.8 器 高 4.0 | II縁部は内窓気味に下方に下る。天井部は、中央部がやや平削で、II縁部へなだらかに下る。胎土は、0.1-6mmの砂粒を含む。天井部へラ記号の一部がみられる。 | |
| 2 | | 杯身 | 復元口径 15.3 器 高 4.5 | II縁部は内窓しながら下外方に下った後、下方に下る。天井部は高く丸い。天井部外側の器壁へラケズリを始め内外面の調整は丁寧である。天井部外側にヘラ記号の一部がみられる。 | × |

| 測定 回数 | 切種 | 法量 (cm) | 所見 | ハラ 見易 |
|----------|----|--------------------------------------|---|----------|
| 12-3 | 杯蓋 | 復元口径 14.7 筋 高 4.2 | 口縁部は、内寄気味に下方に下る。天井部は、口縁部から高く盛り曲し、丸味をもつて中心に向かう。粘土は、砂粒をほとんど含まず粘性である。 | |
| 4 | 杯蓋 | 復元口径 14.0 筋 高 3.8 | 口縁部は、やや開き気味に下方に下る。天井部は低く、中央は平坦になる。 | |
| 5 | 杯蓋 | 復元口径 13.9 筋 存 高 3.3 | 口縁部は、内寄気味に下方に下る。天井部は、上方にのびる。 | |
| 6 | 杯蓋 | 復元口径 15.4 残 存 高 3.7 | 粘土は、砂粒を適度に含む。焼成は良好で堅密、灰黒色を呈する。 | |
| 7 | 杯蓋 | 復元口径 13.7 残 存 高 15.9 | 口縁部は、内寄気味に下方に下る。天井部は、丸くならかである。天井部には、しまわりのヘラケズリ、口縁部は油転調整の後、端部に削りの傷口を施す。 | |
| | 杯身 | 受 部 高 4.0 | 天井部は、太く、外方にのびる。底部にヘラ記号の一帯が残る。 | 入 |
| 8 | 杯蓋 | 復元口径 12.0 残 存 高 3.3 | たちあがりは、内傾しながらのびる。端部は丸く、上方にのびる。端部は丸い。天井部の一部が焼痕している。 | |
| 9 | 杯身 | 復元口径 11.7 受 部 高 3.0 | たちあがりは、やや内傾し、中程から上方にのびる。 受部は、外方にのびる。端部は丸い。天井部は油転調整の後、端部に削りの傷口を施す。 | |
| 10 | 杯蓋 | 復元口径 11.8 筋 高 3.5 | 天井部は中程が肥厚し、端部は先細りとなり、下方方に下る。天井部は高く、中央は平坦になる。 | |
| 11 | 杯蓋 | 口 縫 12.0 筋 高 3.1 | 口縁部は、下方に下った後、外方に下る。天井部は、中央が盛り上がり。口縁部外側と内側は金剛面に油転調整、天井部外面は未調査である。端土は砂粒を多く含む。 | |
| 12 | 杯蓋 | 口 縫 11.8 筋 高 3.6 | 天井部は下方に下る。天井部は高く、丸く盛り上がる。天井部内面は、渦巻状に凹凸を織り成す。 | |
| 9-5 | 杯蓋 | 復元口径 13.1 残 存 高 3.3 | 天井部は、中央にうすく粘土を貼付してあり、整形は難である。 | |
| 13 | 杯蓋 | 復元口径 11.8 残 存 高 3.3 | 天井部は、下方方に下る。端部は、内面でわざかに肥厚し丸い。天井部は低く、なだらかに口縁部に続く。端土は砂粒を多く含む。 | |
| 14 | 杯蓋 | 復元口径 11.8 筋 高 3.4 | 天井部は、下方方に下り、端部は丸い。天井部は、中央が盛り上がり。外面上部に整形接着部と開口部の粘土の小さき漏まりを数ヶ所貼り付けている。 | |
| 15 | 杯蓋 | 口 縫 11.8 筋 高 3.3 | 天井部は、外方に開き気味に下る。 | |
| 16 | 杯蓋 | 復元口径 12.8 器 深 3.3 | 天井部は、口縁部から底面に、高く盛り上がる。中央は平坦になる。天井部は、中央を源いた一部に油転ヘラケズリを行ない、他は金剛面油転ナゲを行なう。 | |
| 17 | 杯蓋 | 復元口径 10.9 残 存 高 3.5 | 天井部は下方に下り、端部は肥厚して丸い。天井部は、丸く盛り上がり、中央は平坦になる。 | |
| 18 | 杯蓋 | 復元口径 10.9 残 存 高 3.5 | 天井部は下方に下る。天井部は丸い。器壁は内面を擦り返す。天井部中央に粘土をうすく貼り付けける。 | |
| 19 | 杯蓋 | 復元口径 9.8 残 存 高 3.4 | 天井部は、肥厚した丸味をもつて下方に下る。天井部は、丸く盛り上がる。 | |
| 20 | 杯蓋 | 復元口径 11.5 器 深 3.0 | 天井部は、外方へ開き気味に下る。天井部中央に粘土を貼り付け、段が付いて平坦になる。 | |
| 21 | 杯蓋 | 口 縫 11.8 器 深 3.3 | 天井部は、丸味をもって外方に下る。天井部は高く盛り上がり、中央部は平坦になる。 | |
| 22 | 杯蓋 | 口 縫 11.8 器 深 2.8 | 天井部は、ハリ切り後粘土を貼付し、粉及び、ヘリ状のもので押さえている。 | |
| 23 | 杯蓋 | 復元口径 11.8 器 深 2.3 | 天井部は、外方に開き気味に下る。天井部は低く、中央は平坦になる。内外面ともに器表は丁寧に調査している。 | |
| 24 | 杯蓋 | 口 縫 12.7 器 深 2.9 | 天井部は、外方へ開き気味に下る。天井部は低く、中央は平坦になり、未調査である。 | |
| 25 | 杯蓋 | 口 縫 11.8 器 深 3.1 | 天井部は、内寄気味に下方に下る。天井部外側には、窓座が厚く付着している。 | |
| 26 | 杯身 | 復元口径 11.0 受 部 高 13.2 残 存 高 4.3 | たちあがりは、内傾しながら上方にのびる。 受部は、外方にのびる。底部は深く、受部から下内方に下る。 | |
| | | | 端土は、強砂粒を若干含む。底部外面にヘラ記号の一部が残る。 | |

| 回数 | 番号 | 部位 | 法 墓 (cm) | 所 見 | ハラ 記 分 |
|-------|------|----|------------------------------------|---|-----------|
| 12-27 | | 腰身 | 復元口径 9.5 受部 径 11.2 残存 高 3.8 | たらあがりは、内傾した後、上方に低くのびる。 受部は、外方に張り出す。底部は深く、受部から下内方に下る。筋膜は全体的にうすい。 | |
| 28 | | 腰身 | 復元口径 11.1 受部 径 12.7 残存 高 3.6 | たらあがりは、内傾した後、上方にのびる。端部は丸い。 | |
| 29 | | 腰身 | 口 径 10.4 受部 径 12.4 残存 高 3.6 | たらあがりは、内傾した後、上方にのびる。 受部は、外方にのびる。底部は、中央が深く丸い。外側中央は、ナゲがみられるが、ほとんど未調整である。 | |
| 30 | | 腰身 | 復元口径 9.5 受部 径 11.2 残存 高 3.8 | たらあがりは、内傾した後、上方にのびる。 受部は外方にのびる。底部は浅く、筋膜が厚くかかる。外側は筋膜を若干含む。 | |
| 31 | | 腰身 | 復元口径 9.8 受部 径 11.9 残存 高 3.6 | たらあがりは、内傾した後、上方にのびる。 受部は外方にのびる。底部は、中央が深く丸い。外側中央は未調整である。 | |
| 32 | | 腰身 | 口 径 9.7 受部 径 11.6 残存 高 3.1 | たらあがりは、腰と上内方にのびる。 受部は、外方にのびる。底部は中央が平頂になり、受部まで直線的にのびる。 | |
| 33 | 9-11 | 腰身 | 口 径 10.3 受部 径 12.2 残存 高 3.5 | たらあがりは、内傾した後、上方に低くのびる。受部との境に沈縫が進る。 | |
| 34 | | 腰身 | 復元口径 9.8 受部 径 11.3 残存 高 3.0 | たらあがりは、内傾して上内方にのびる。底部は先端で鋸歯状。 | |
| 35 | | 腰身 | 口 径 10.9 受部 径 11.9 残存 高 2.5 | 腰と上内方にのびる。底部は、外方に張り出す。受部は浅い。中央部は平坦な面をなす。 | |
| 36 | | 腰身 | 復元口径 10.1 受部 径 11.8 残存 高 3.3 | たらあがりは、内傾した後、端部は深くのびる。受部との境に沈縫が進る。 | |
| 37 | | 腰身 | 口 径 10.1 受部 径 12.0 残存 高 3.1 | たらあがりは、内傾して、上方にのびる。底部は、中央が平頂になる。底部外側中央は、ハラ切り未調整である。 | |
| 38 | | 腰身 | 口 径 10.1 受部 径 11.8 残存 高 3.5 | たらあがりは、内傾した後、上方にのびる。受部との境に沈縫が進る。 | |
| 39 | | 腰身 | 口 径 10.0 受部 径 11.9 残存 高 3.3 | たらあがりは、内傾した後、中程から上方にのびる。 | |
| 40 | | 腰身 | 口 径 9.1 受部 径 11.5 残存 高 3.1 | たらあがりは、内傾した後、半程から強く上内方にのびる。 | |
| 41 | | 腰身 | 復元口径 9.9 受部 径 11.8 残存 高 2.4 | たらあがりは、内傾した後、筋膜を有する。受部は、外方にのびる。底部は深く、中央付近で外側に肥厚する。0.1~4mmの筋膜を含む。 | |
| 42 | | 腰身 | 復元口径 10.6 受部 径 12.3 残存 高 2.3 | たらあがりは、内傾して上内方にのびる。 | |
| 43 | | 腰身 | 復元口径 10.0 受部 径 11.7 残存 高 3.8 | たらあがりは、内傾して上内方にのびる。底部は丸い。底部は、下内方に下る。中央は欠損している。 | |
| 44 | | 腰身 | 復元口径 10.1 受部 径 11.6 残存 高 3.1 | たらあがりは、内傾しながら上内方にのびる。 | |

| 前面 番号 回数 | 筋種 | 法 量(cm) | 所 | 見 | ヘ ラ 記 号 |
|----------------|---------|------------------------------------|---|---|------------------|
| 12-45 | 杯身 | 復元口径 9.4 受部 径 11.2 残存 高 2.8 | たちあがりは、上内方にのびる。受部との境に沈穂を切り込んでいる。 受部は、上外方に張くのびる。底部は、内寄しながら下内方に下る。外面はヘラケズリ、 内面は回転ナゲ、内面中央にナゲ調整を行なう。胎土は細砂粒を若干含むのみである。 | | |
| 46 | 口 粒 | 11.6 受部 径 13.3 残存 高 2.5 | たちあがりは短く、内寄気味に上内方にのびる。 受部は、たちあがりとはほぼ同じ長さで、上外方にのびる。底部は浅く、外面は未調整であ る。内面は、回転ナゲ調整後、中央部のみナゲ調整をしている。 | | |
| 47 | 杯身 | 復元口径 10.2 受部 径 12.1 残存 高 3.3 | たちあがりは短く、内寄気味に上内方にのびる。 受部は、たちあがりより大きく、上外方に張り出す。底部は、焼け重んでいる。 胎土は、細砂粒を多く含む。 | | |
| 48 | 杯身 | 復元口径 11.6 受部 径 13.0 残存 高 2.8 | たちあがりは短く、上内方にのびる。 受部は、受部以下、内寄気味に下内方に下り、中央は、中空みの平面 を成す。底部外周中央は未調整で、内面は胎土がかかる。 | | |
| 49 | 口 粒 | 10.6 受部 径 12.2 残存 高 3.1 | たちあがりは、短く内傾する。胎部は丸い。 受部は、上外方にのびる。底部は浅い。底部外周は、稜壁その他の物がほぼ全面に接着し ている。内面は、回転ナゲと中心部にナゲ調整を行なう。 | | |
| 50 | 杯身 | 復元口径 10.0 受部 径 11.8 残存 高 3.3 | たちあがりは、短く内傾した後、わずかに内張りを戻す。底部は、なだらかに下内方に下る。外面は、胎土が かる。内面は、回転ナゲと中心部にナゲ調整を行なう。 | | |
| 51 | 杯身 | 復元口径 10.3 受部 径 11.9 残存 高 2.8 | たちあがりは、短く内傾しながら、上方にのびる。 受部は、上外方にのびる。底部は浅く受部以下、下内方に下った後、底部中央は平たくな る。胎土は、細砂粒を多く含む。 | | |
| 52 | 杯身 | 復元口径 10.2 受部 径 11.7 残存 高 3.5 | たちあがりは、上内方にのびる。 受部は、上外方にのびる。底部は、下内方に下る。底部外周中央は、ヘラ切り未調整であ る。胎土は、砂粒を若干含む。施成貞好で鑑識である。 | | |
| 53 9-12 | 杯身 | 11 件 受部 径 12.1 残存 高 3.0 | たちあがりは、短く内傾しながらのびる。 受部は、上外方にのび、窪部は丸い。底部は、受部以下下内方に下り、半楕円状部中央に 凹部がある。底部外周の半楕円部に2mm前後の白色砂粒が点々と付いている。 | | |
| 54 | 口 粒 | 10.4 受部 径 12.0 残存 高 3.1 | たちあがりは、短く内傾する。底部がやや太く先細りとなり、窪部はやや深く。 受部は、上外方にのびる。底部は中央が平坦になり、なだらかに受部につづく。 底部端附近に2条の沈穂が這る。 | | |
| 55 | 杯身 | 復元口径 10.7 受部 径 12.4 残存 高 3.1 | たちあがりは、短く内傾し、上内方に張くのびる。 受部は、上外方に張り出す。底部は、なだらかに下る。底部中央は未調整で、外面は全面 凹部となる。底部外周は未調整である。胎土は細砂粒を多く含む。 | | |
| 56 | 口 粒 | 10.4 受部 径 11.8 残存 高 3.1 | たちあがりは、短く内傾する。 受部は、上外方に張り出す。底部は、受部以下、下内方に下り、中央がわずかに窪む 凹部となる。 | | |
| 57 | 口 粒 | 9.7 受部 径 11.4 残存 高 2.1 | たちあがりは、短く、受部よりわずかに高く、上内方にのびる。 受部は、たちあがりとはほぼ同じ長さで、上外方にのびる。底部は浅い。底部外周は、左ま わりのヘラケズリを行なう。 | | |
| 58 | 底 | 復元口径 22.6 残存 高 7.9 | 口部部は、上外方にのび、口部部は端部が外方に肥厚し、断面は四角形を呈する。 口部部には、底状文帶と2条の内側横帯が繰り返して施され。 | | |
| 59 | 対頭 蓋 | 復元口径 8.5 残存 高 3.7 | 口部部は、上方にたちあがり、口部部は、外反気味に焼く上方にのびる。 蓋部は、下外方になだらかに下り、細かいカキ目を残す。 | | |

前部

| 前面 番号 回数 | 筋種 | 法 量(cm) | 所 | 見 | ヘ ラ 記 号 |
|----------------|----|-----------------------|--|---|------------------|
| 13-1 | 杯盤 | 復元口径 15.1 残存 高 5.0 | 口部部は、内寄気味に下方に下る。天井部は高く丸く盛り上がる。天井部外周に広く、 なまわりのヘラケズリが入る。胎土は、0.1~3mmの砂粒をやや多く含む。 | | |
| 2 | 杯盤 | 復元口径 16.0 残存 高 5.5 | 口部部は、内寄気味に下方に下る。天井部は、高く丸く盛り上がる。天井部外周の3/5に なまわりのヘラケズリを、やや粗い刷子で行なう。内面の倒影は丁寧である。 | | |
| 3 | 杯盤 | 11 件 15.1 残存 高 4.8 | 口部部は、なだらかに下外方に下る。天井部は高く盛り上がり、中央は、半楕円が広が る。天井部外周のほぼ全面になまわりのヘラケズリを行なう。 | | |

| 固出 回転 | 番号 | 器種 | 法 盤 (cm) | 所 見 | ハラ 記号 |
|----------|-------|------|-----------------------|--|----------|
| 13-4 | | 杯盤 | 径 14.2 高 3.2 | 口縁部は、外方へ開き気味に下る。天井部は、低く広く平面を成す。ヘラケズリの範囲は、天井部外面の3/5程度である。0.1~4mmの砂粒を多く含む。底成鳥軸が灰色を呈する。 | |
| 5 | | 杯盤 | 口 径 15.2 高 2.4 | 口縁部は、近く下方に下る。天井部は、口縁部から無突出して、低く広い平面を成す。 | |
| 6 | | 杯盤 | 径 13.1 高 3.0 | 口縁部は、丸味をもって下方に下る。天井部は低く、内面は平面を成す。天井部外面の4/5に左まわりヘラケズリを行なう。口縁部外面にヘラ記号が入る。 | |
| 7 | | 復元口徑 | 径 15.4 | たちあがりは、内傾しながら長く上方にのびる。 | |
| | | 杯身 | 受 部 径 17.5 | 受部は、外方にのびる。底部は、深く広い。受部以下底部外側には、暗緑色の釉がかかる。底存 高 3.7 | |
| | | 杯身 | 受 部 径 13.5 | 受部は、外方にのびる。底部は、深く広い。受部以下底部外側には、暗緑色の釉がかかる。底存 高 3.7 | |
| 8 | | 復元口徑 | 径 11.3 | たちあがりは、内傾しながら長く上方にのびる。底部は丸い。 | |
| | | 杯身 | 受 部 径 13.5 | 受部は、近く外方にのびる。底部は、深く丸い。受部以下外側には、暗緑色の釉がかかる。底存 高 4.2 | |
| 9 | | 復元口徑 | 径 13.5 | たちあがりは、内傾気味に上方にのびる。基部は太く、中程から光細りとなる。 | |
| | | 杯身 | 受 部 径 15.6 | 受部は、上方方にのび、下面に底紋が巡る。底部は、受部以下下内方に下り、中央は丸味をもって平面を成す。胎土は、砂粒を若干含む。 | |
| 10 | | 復元口徑 | 径 11.7 | たちあがりは、内傾しながら長く上方にのびる。受部との境に底紋が巡る。 | |
| | | 杯身 | 受 部 径 14.1 | 受部は丸く、上外方に張り出す。受部以下は、内窓気味に下内方に下る。受部には、重ね底紋の痕跡が残る。胎土に、微砂粒を多く含む。 | |
| 11 | | 復元口徑 | 径 12.6 | たちあがりは、内傾気味に上方にのびる。基部は太く、端部は先細りとなる。 | |
| | | 杯身 | 受 部 径 15.1 | 受部は、上方方に長く張り出す。底部は浅い。受部以下、暗緑色の釉が厚くかかる。 | |
| | | 杯身 | 器 高 3.2 | たちあがりの内外面は同軸ナダ、底部内面は、回転ナダと不整方向ナダを行なう。 | |
| 12 | | 復元口徑 | 径 12.1 | たちあがりは、外反気味に上方にのびる。基部は太く瓶頸部は先細りで瓶くのびる。 | |
| | | 杯身 | 受 部 径 13.7 | 受部は、深く丸く、外方にのびる。受部以下は下内方に下る。 | |
| | | 杯身 | 底存 高 3.1 | 胎土は、砂粒をほとんど含まず釉膜である。 | |
| 13 | | 無蓋 | 復元口徑 13.2 | 口縁部は、外方にのびる。中程より、基盤の外周側が段をもってうすくなる。下方に波状文を施す。胎土は微砂粒を多く含む。 | |
| | | 高杯 | 底存 高 3.2 | | |
| 14 | | 高杯 | 復元脚踏足 10.3 | 脚踏足は、2条の脚踏足が巡り、円錐の上下に長方形透しが3方に開くと思われる。 | |
| | | 高杯 | 底存 高 7.0 | 脚踏足は下外方に下り、端部附近は外方に開く。端部前面に幅広い凹線が入る。 | |
| 15 | | 高杯 | 復元脚踏足 12.5 | 脚踏足は下外方に下り、端部は外方に開き、下端部は下方に下り接着する。 | |
| | | 高杯 | 底存 高 5.1 | 脚踏足の透しが入る。内面に暗緑色の釉が厚くかかる。 | |
| 16 | | 高杯 | 底存 高 5.2 | 脚踏足の基部は上方方にのび、外側にはヘラケズリを行なう。脚踏足の基部は太く、下外方に下り、円孔を有する。脚踏足は、段を有して下外方に下る。 | |
| 17 | | 復元口徑 | 径 9.3 | 口縁部は上方方にのび、端感は丸い。肩部は、瓶部からなだらかに下外方に下る。 | |
| 18 | 10-10 | 復元口徑 | 径 15.5 | 肩部外面に刷毛目調査、内面にはヘラケズリを行なう。 | |
| | | 復元口徑 | 径 9.1 | 口縁部は上方方にのび、口縁部は下外方に肥厚し、わずかに中央が窪み、外傾する面と、外傾する平面を成す。肩部外面は、平行タキとカキ目、内面は円弧タキを行なう。 | |
| 19 | | 把手 | | 基部は丸く、上面は中程で畳曲し、上方にのびる。 | |
| 20 | | 脚台 | 脚 収 径 6.0 底存 径 3.4 | 低い脚台で、接合部からは離れている。脚台部は近く、中程から下外方に下り、端部は、中央がわずかに窪む接地面を成す。胎土は精良である。 | |
| 21 | | 杯盤 | 復元口徑 13.8 器 高 4.6 | 口縁部は、内窓気味に近く下方に下る。天井部は高く、中央がわずかに窪む平面を成す。天井部外面のほぼ全面に左まわりのヘラケズリを行なう。胎土は砂粒を多く含む。 | |
| 22 | | 杯盤 | 復元口徑 16.8 底存 高 3.7 | 口縁部は、内窓気味に下方に下る。天井部は上方にのびる。 | |
| 23 | | 復元口徑 | 径 12.3 | 胎土は、0.1~3mmの砂粒を多く含む。底成鳥軸が灰軸で堅密、淡灰色を呈する。 | |
| | | 杯身 | 受 部 径 14.2 | たちあがりは、上方にのびる。底部は、受部以下、丸く卜内方に下る。底部外面のほぼ全面に左まわりヘラケズリを行なう。胎土は砂粒を多く含む。 | |
| 24 | | 杯盤 | 復元口徑 16.4 器 高 3.8 | 口縁部は、下外方に下る。天井部はやや低く、外側のヘラケズリは、広い範囲に行なわれる。内面は、調版ナダと中央にヒゲ彫刻を行なう。 | |
| 25 | | 杯盤 | 復元口徑 15.9 | 口縁部は、下外方に長く下る。天井部は、口縁部に比して基部が厚くなり、口縁部から純く畠曲した後、平行にのびる。胎土は砂粒を多く含む。 | |
| 26 | | 杯盤 | 復元口徑 14.0 器 高 4.1 | 口縁部は下外方に下った後、内窓気味に下方に下る。天井部は、左まわりの同軸ヘラケズリを行なった後、口縁部との境に凹線を巡らす。胎土は砂粒をやや多く含む。 | |

| 前面 背面 区版 | 番種 | 法 量 (cm) | 所 | 見 | ヘ リ ジ 号 |
|----------------|----|-----------------------------------|---|---|------------------|
| 13-27 | 杯蓋 | 復元口径 14.7 残存高 3.6 | 口縁部は、内寄気味に下外方に下る。天井部はやや低く、幅広いヘラケズリを這らす。 胎土は、薄砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻、灰色を呈する。 | | |
| 28 | 杯蓋 | 復元口径 15.0 残存高 3.6 | 口縁部は、下外方に下る。天井部はやや低く、左まわりヘラケズリを丁寧に行なう。内面の胎土も丁寧である。胎土は、少景の小石と微砂粒を多く含む。 | | |
| 29 | 杯蓋 | 復元口径 13.9 器 高 3.3 | 口縁部は下方に下った後、端部付近で内側が肥厚し、外方に開く。天井部は低い。 | | |
| 30 | 杯蓋 | 復元口径 15.5 残存高 3.0 | 大井部外側には、少景の小石と微砂粒を多く含む。 | | |
| 31 | 杯蓋 | 口 径 13.6 器 高 4.0 | 口縁部は下方に下った後、端部付近で内側が肥厚し、外方に開く。天井部は低い。 | | |
| 9-6 | 杯蓋 | 復元口径 15.2 器 高 3.8 | 大井部外側には、少景の小石と微砂粒を多く含む。 | | |
| 33 | 杯身 | 復元口径 13.8 受部 高 15.7 器 高 3.7 | 口縁部は、下外方に下る。天井部は、II縁部から強く屈曲して、上内方にのびる。 天井部外側には、左まわりヘラケズリを右側に下る。胎土は砂粒を多く含む。 | | |
| 34 | 杯身 | 復元口径 12.9 受部 高 14.6 器 高 3.9 | 胎土は、上外方に張り出す。底部はやや浅く、中央は平底になる。器形は、わずかに焼け歪んでいる。胎土は、薄砂粒を多く含む。 | | |
| 35 | 杯身 | II 縁 12.0 受部 高 13.7 器 高 3.6 | 胎土は、内傾しながら上内方にのびる。器壁は厚く、頸部は丸い。 | | |
| 36 | 杯身 | 復元口径 11.9 受部 高 14.0 残存高 4.1 | 受部は、上外方に張り出す。底部はやや浅く、丸く下内方に下る。器形は、やや焼け歪んでいた。胎土は、砂粒を多く含む。 | | |
| 37 | 杯身 | 復元口径 12.5 受部 高 14.6 残存高 4.1 | 胎土は、外方にのびる。底部は、下内方に下る。底部の器壁は、たちあがりと凹みが強くなる。 | | |
| 38 | 杯身 | 復元口径 12.3 受部 高 14.0 器 高 4.0 | 胎土は、内傾しながら上内方にのびる。受部との境に凹縮がある。 | | |
| 39 | 杯身 | 復元口径 11.5 受部 高 13.6 残存高 3.7 | 受部は、外方に張り出す。底部は、先端で丸く、受部の少し前で、外側の器壁が窪みながら肥厚し受部に至る。外面は左まわりのヘラケズリを行なう。 | | |
| 40 | 杯身 | 復元口径 13.1 受部 高 14.7 残存高 3.5 | 胎土は、内傾しながらのび、頸部は先端で強くのびる。 | | |
| 41 | 杯身 | 復元口径 11.6 受部 高 13.6 残存高 2.9 | 受部は、外方に張り出す。底部から下内方に下った後、丸味をもつた平底になる。 | | |
| 42 | 甕 | 復元口径 16.5 残存高 4.8 | 口縁部は上外方にのび、口縁部は外反し、外方へのびる。II縁部は下外方に下る。 | | |
| 43 | 甕 | 復元口径 15.7 残存高 4.2 | 口縁部は、底部から下内方に下る。外側は暗緑色の胎土が厚くかかる。内面は強く円弧タキを行なう。 | | |
| 44 | 甕 | 復元口径 10.5 残存高 3.9 | II縁部は、外方に開き気味に下る。底部には、内傾する半面を成す。天井部は、口縁部から鋭く張り上がる。底部外側はヘラケズリ、内面はナゲを行なう。 | | |

灰 壤

| 區面 背面 区版 | 透種 | 法 量 (cm) | 所 | 見 | ヘ リ ジ 号 |
|----------------|-----|----------------------|--|---|------------------|
| 16-1 | 杯蓋 | 復元口径 15.0 残存高 3.5 | 天井部と体部の境の透種はやや鋭く突出し、II縁部に外方へ開きながら下る。 胎土は1cm前後の砂粒を含み、焼成は良好である。マキアゲ、ミズビキ成型。 | | |
| 2 | 口 瓶 | 口 径 15.2 器 高 4.0 | 大井部と体部の境は透種に代って凹縮が進る。天井部の約3/4に左まわりのヘラケズリを行なう。底面は横ナガ開模で、天井部内面中央にナゲ削型を行なう。II縁部内面は、わずかに段を有する。 | | |

| 区分 | 番号 | 器種 | 法量 (ml) | 所見 | ヘラ配分 |
|-------|------|-----|-----------------------|--|------|
| 16-3 | | 杯蓋 | 復元口径 15.3 器 高 3.8 | 天井部と体部の境に凹縫が遡る。天井部には難なヘラケズリを行なう。 口縫部は外方に下り、内面に段を有する。 | |
| 4 | | 杯蓋 | II 怪 13.4 器 高 3.6 | 口縫部は外方に開き気味に下り、端部は内面で強く段をなす。 天井部にヘラケズリを左まわりに3周進らす。天井部の中央よりはずれたところにヘラ記号。 | X |
| 5 | | 杯蓋 | 復元口径 14.8 器 高 3.9 | 天井部から曲線を描きながら、口縫部に下りはじめたところに凹縫が遡る。 II縫部は焼け垂み、やや弯曲する。胎土はやや粗。 | 二 |
| 6 | | 杯蓋 | 口 怪 15.3 器 高 3.9 | 天井部は広く扁平で、体部との境に凹縫が遡り、段を形成している。 内面中央に円弧即ち月がスタンプされている。 | 一 |
| 7 | | 杯蓋 | 復元口径 17.2 現存 高 4.0 | 復元口径は大きく、天井部との境に凹縫が遡る。 胎土には2~5mmの砂粒を含む。 | |
| 8 | 11-1 | 杯蓋 | 口 怪 13.6 器 高 3.9 | 天井部と体部の境は浅く進む。天井部は丸く、比較的高い。 焼成は良好で灰褐色を呈する。 | |
| 9 | 11-2 | 杯蓋 | 口 怪 13.3 器 高 3.6 | II怪はやや小型化している。天井部の3/5以上に左まわりのヘラケズリを行なう。 口縫部は内面気味に下る。適度に砂粒を含み焼成良好。 | |
| 10 | | 杯蓋 | 復元口径 16.3 器 高 4.5 | 胎土には、大きな砂粒を含まず精緻で、調滑も丁寧に行なわれ、全面にヨコナデ・ナデ調整が施されている。焼成は良好であるが、赤味を湛げる。 | |
| 11 | 11-3 | 杯蓋 | 口 怪 14.5 器 高 4.1 | 天井部の接縫および底面、口縫部内面の段も消失する。 天井部は丸く盛り上がる。口縫部は短く、下方に下る。 | |
| 12 | 11-4 | 杯蓋 | 口 怪 14.2 器 高 4.7 | 天井部は丸く高い。II縫部は内面気味に下る。天井部にはヘラケズリを蒐く強いタッチで左まわりに偏広く行なう。内面はヨコナデ・ナデ調整を行なう。 | |
| 13 | 11-5 | 杯蓋 | 口 怪 15.3 器 高 4.1 | 天井部から体部はならかにカーブし、口縫部は下方に下る。 胎土は1~2mmの砂粒を多く含む。 | /\ |
| 14 | 11-6 | 杯蓋 | 口 怪 14.8 器 高 4.4 | 外面のほぼ全面に緑褐色の当然釉がかかる。口縫部は丸く仕上げている。 内面は丁寧にヨコナデ・ナデ調整。 | |
| 15 | | 杯蓋 | 復元口径 14.7 器 高 4.0 | 口縫部は内面気味に下り、端部は丸い。天井部はII縫部から段を持ち高くなる。 段より上の全面に左まわりヘラケズリを行なう。焼成良好で褐斑紫色を呈する。 | |
| 16 | | 杯蓋 | 口 怪 14.4 器 高 3.9 | 口縫部は内面気味に下る。天井部はほどほんに左まわりヘラケズリを行なう。天井部付近に深い凹縫がある。内面はマキアケが成形の凹凸を残す。 | |
| 17 | 11-7 | 杯蓋 | 口 怪 14.8 器 高 4.0 | 口縫部は開き気味に長く下り、端部は丸い。天井部は高く丸い。ヘラケズリの範囲は広いが難に行なう。胎土は粗。焼成良好で天井部の一部に自然釉がかかる。 | |
| 18 | | 杯蓋 | 口 怪 14.6 器 高 4.2 | 口縫部は、内面気味に下る。天井部にはなまわりヘラケズリ回転。胎土はやや密である。 内面は同前ナデ調整の上から中央部付近にやや強いたッチでナデ調整。焼成不良で灰褐色。 | |
| 19 | | 杯蓋 | 口 怪 14.0 器 高 4.4 | 口縫部は内面しながら下る。端部は外方につまり出す。天井部は丸く、内面で器壁がうすくなっている。胎土は砂粒をあまり含まず密。焼成はやや不良で灰質。外面は乳白色、内面は赤褐色を呈する。 | |
| 20 | 11-8 | 杯蓋 | II 怪 14.5 器 高 4.4 | 器形は19に類似。ヘラケズリは左まわりに偏広く行なう。 胎土はやや密、0.1~2mmの砂粒を含む。やや灰質で灰褐色を呈する。 | |
| 21 | | 杯蓋 | 復元口径 15.8 器 高 4.4 | 口縫部は外方へ下る。天井部中央にヘラケズリは見られない。 胎土は粗く、0.1~4mmの砂粒を含む。焼成良好。 | ++ |
| 22 | 11-9 | 杯蓋 | 口 怪 15.0 器 高 3.8 | 器形は19・20に類似。口縫部は一段落した後、端部で狭くなる。 胎土は、0.1~5mmの砂粒を含む。焼成良好で堅膜。灰褐色を呈する。 | |
| 23 | | 杯蓋 | II 怪 15.4 器 高 4.5 | II縫部はならかに外方に下る。天井部は左まわりヘラケズリを幅広く行なう。内面はマキアケ・ミズビキ整形が明顯である。胎土は幾砂粒を多く含む。焼成良好で灰色を呈す。 | + |
| 16-24 | | 口 瓶 | 復元口径 14.0 器 高 3.9 | II縫部は下方に下る。天井部は口縫部からゆるいカーブを描き、肩部のとれた形となる。 天井部は口縫部からゆるいカーブを描き、肩部のとれた形となる。 | |
| 11-10 | | 杯蓋 | 口 怪 14.4 器 高 3.9 | II怪はやや粗大で、マキアケ・ミズビキ整形で天井部は左まわりヘラケズリで中心部分のみナデ調整。 | |
| 25 | | 杯蓋 | 口 怪 14.1 器 高 3.9 | 口縫部は短く下方に下る。天井部中央は平沢である。 胎土は0.1~2mmの砂粒を多く含む。焼成不良で灰質。赤黄色を呈す。 | |
| 26 | | 杯蓋 | 口 怪 14.4 器 高 4.1 | 口縫部は内面気味に下る。天井部のヘラケズリの範囲はやや狭くなる。内面中央はナデで施面に回転ナデを行なう。焼成良好、灰色を呈する。 | |
| 27 | | 杯蓋 | 復元口径 16.0 器 高 3.8 | 口縫部は外方に開き気味に下る。天井部の器形は瓶で、ヘラケズリも深い。内面は全面調整をしている。胎土は密で施成も良好である。 | |

| 回数 回板 | 番号 | 器種 | 法 量 (cm) | 所 見 | ハ ラ 記 号 |
|-------------|----|-----------|-----------------------|---|------------------|
| 16-28 | | 杯蓋 | II 径 15.9 高 4.8 | II縁部は外方に聞き氣味に長く下る。器高が高く、天井部にはラケゼリを左まわりにまんべんなく行なう。船上は0.1~2mmの砂粒をやや多く含む。焼成はやや不均で赤褐色を呈する。 | |
| 29 11-11 | | 杯蓋 器 | II 径 14.0 高 4.3 | II縁部は下方に下る。天井部は丸い。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻である。 外面は胎がかかり、部分的に黒く光る。 | II |
| 30 | | 杯蓋 器 | 復元口徑 高 15.4 3.7 | II縁部は内寄氣味に下る。天井部は中ほどから平坦になる。 胎土に砂粒のみを含み精良である。焼成良好で灰褐色を呈する。 | |
| 31 | | 杯蓋 器 | 復元口徑 高 15.0 3.9 | II縁部は外方に聞き氣味に下り、中段はナギによりわざかにくぼむ。天井部は左まわりに強いラッタでヘラケゼリを行なう。 | |
| 32 | | 杯蓋 器 | 口 径 14.6 高 3.6 | II縁部は聞き氣味に下る。天井部は丸くカーブを形成する。 胎土は砂粒を多く含む。焼成良好で灰褐色を呈する。 | |
| 33 | | 杯蓋 器 | 口 径 14.6 高 3.7 | II縁部は外方に下り、端部付近で内寄氣味に肥厚する。天井部は中央が高く、平坦である。 胎土は0.1~5mmの砂粒を含む。ヘラケゼリは天井部の高く盛り上がったところのみ施されている。 | X |
| 34 | | 杯蓋 器 | 復元口徑 高 16.9 3.9 | II縁部から天井部まで丸くカーブを描く。口縁部附近に回転ナデ調整の上から弱めに刷毛目を施す。天井部の端にヘラ記号の一部がみられる。 | / |
| 35 | | 杯蓋 器 | 復元口徑 高 13.7 3.3 | 器形は少し焼け歪み、II縁内部に杯身のたちあがりが付着している。 胎土は砂粒をあまり含まず緻密である。天井部にヘラ記号の一部がみられる。 | ++ |
| 36 | | 杯蓋 器 | 復元口徑 高 13.5 3.5 | II縁部は下方に下り、天井部は中央付近でくぼむ。口縁部は少々焼け戻している。 胎土は0.1~5mmの砂粒を含むが、全体的には密である。 | |
| 37 | | 杯蓋 器 | II 径 14.0 高 4.3 | II縁部は器壁が薄く、天井部の内面はマキアゲの凹みが残る。焼成は良好で一部難がかかる黒色に光る。 | |
| 38 11-12 | | 杯蓋 器 | 口 径 14.1 高 4.2 | 天井部から口縁部にかけて曲線を描きながら下る。歪みはなく均整のとれた器形をしている。内面中央はマキアゲ痕による凸凹が残る。 | |
| 39 12-1 | | 杯蓋 器 | 口 径 13.7 高 3.8 | 焼成時によるものかII縁部が歪んでいる。ヘラケゼリは天井部の約1/2に左まわりに行なう。胎土は0.1~5mmの砂粒を含む。焼成良好で堅緻。 | |
| 40 | | 杯蓋 器 | II 径 13.2 高 3.8 | 天井部のヘラケゼリは難で、未調整の部分が残る。内面の調整は他のものと同様回転ナデを行なった後、中央部にナゲを施す。 | + |
| 41 | | 杯蓋 器 | II 径 14.1 高 3.8 | II縁部は比較的低く、天井部に行くにつれて丸く盛り上がる。天井部からII縁部にかけてヘラ記号がみられる。胎土は細密で、焼成はやや軟質である。 | / |
| 42 | | 杯蓋 器 | 口 径 13.4 高 5.0 | II縁部は長く外方気味に下り、端部をつまみ出す。天井部は高く、丸い。器壁は全体的に厚く、口縁部はやや薄くなっている。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好。 | |
| 43 | | 杯蓋 器 | II 径 13.4 高 3.7 | II縁部は下方に下る。天井部は強いタッカでヘラケゼリを行なう。内面中央は、マキアゲ痕が明瞭に残している。天井部中央にヘラ記号がみられる。 | + |
| 44 12-2 | | 杯蓋 器 | II 径 12.0 高 4.6 | II縁部は下方に下る。天井部は丸く高い。調節は全面に丁寧に行なう。 胎土は微砂粒を多く含む。焼成良好で堅緻。外面赤褐色、内面灰褐色を呈する。 | |
| 17-1 | | 復元口徑 器 | II 径 11.4 高 3.4 | II口徑・器高とも小さくなる。II縁部は外方に聞きながら下る。内面は端部付近で肥厚するが、端部で狭小となる。天井部には回転ヘラケゼリはみられない。 | |
| 2 | | 杯蓋 器 | 復元口徑 高 3.4 | II縁部はだらかに外方に下り、端部付近で肥厚する。天井部はヘラケゼリを難に施す。 | |
| 3 | | 杯蓋 器 | II 径 12.2 高 3.3 | 胎土は砂粒を多く含む。焼成良好。 | |
| 4 12-3 | | 杯蓋 器 | II 径 11.7 高 4.0 | II縁部はまっすぐ下方に下る。天井部は中央が平坦になる。内面の調整に変化はみられないが、天井部はヘラ切り未調査である。 | |
| 5 | | 杯蓋 器 | II 径 10.8 高 3.9 | II縁部の器壁はうすく、下方に下る。天井部の回転ヘラケゼリは比較的広い範囲に付なわれている。整形は、マキアゲ・ミズビキである。 | |
| 6 | | 杯蓋 器 | 口 径 11.6 高 3.6 | II縁部は外方に聞き気味に下り、端部は低い。天井部はヘラ切り未調査である。焼成は良好で堅緻。灰褐色を呈する。 | |
| 7 | | 杯蓋 器 | 口 径 10.3 高 3.2 | II口徑・器高とも少し小ぶりである。II縁部は内寄氣味に下り、端部はうすい。 | |
| 8 12-4 | | 杯蓋 器 | II 径 10.9 高 3.3 | 天井部は全面に回転ヘラケゼリを行なう。 胎土は緻密で、焼成も良好である。 | |

| 器皿番号 | 器種 | 法盤(cm) | 所見 | 備考記号 |
|-------|----|------------------------------------|---|------|
| 17-9 | 杯身 | 口 径 13.7 受部 径 13.7 器 高 4.1 | たちあがりは内傾した後、端部は上方に伸びる。受部は外方に伸びる。底部に幅広く左まわりラッケズリを行なう。内面は同軸ナゲ調整で、中央部を強く指ナゲする。焼成不良で灰白色を呈する。 | |
| 10 | 杯身 | 復元口径 12.4 復元受部径 14.0 残存高 4.1 | たちあがりは上方にのび、受部とともに端部は戻い(筋盤はほぼ均等の厚さに整えられている)。胎上にはあまり砂粒を含まず(粘土である)。焼成は良好で堅致である。青灰色を呈する。 | |
| 11 | 杯身 | 口 径 13.5 受部 径 16.0 器 高 4.4 | たちあがりは内傾した後、わずかに角度を変え上方にのびる。 受部は外方にのび、端部は丸い。 | |
| 12-5 | 杯身 | 口 径 13.0 受部 径 13.1 器 高 4.8 | 胎上は少しの鉛錆を含む。焼成はやや青く、青灰色を呈する。 | |
| 12 | 杯身 | 口 径 13.0 受部 径 13.1 器 高 4.8 | たちあがりは内傾した後、直立気味にのび端部はやや鋭い。 受部は外方にのび、端部は鋭い。底部は比較的深く丸い。 | |
| 12-6 | 杯身 | 口 径 12.8 受部 径 14.1 器 高 4.8 | 胎土は緻密で、焼成は良好。青灰色を呈する。 | |
| 13 | 杯身 | 口 径 12.8 受部 径 14.1 器 高 4.4 | たちあがりは内傾した後、中位で上方にのびる。受部は上外方にのび、一部に杯底の破片が付着している。底部中央にヘラ記念がある。 | |
| 12-7 | 杯身 | 口 径 13.2 受部 径 15.4 器 高 4.5 | 胎土は砂粒が多く含む。焼成は良好で、外面に暗緑色の斑がかかる。 | |
| 14 | 杯身 | 口 径 13.2 受部 径 15.4 器 高 4.5 | たちあがりは、内傾した後、上方に直立する。端部は鋭い。 受部は外方にのびる。底部は深く丸い。 | + |
| 15 | 杯身 | 口 径 11.8 受部 径 14.1 器 高 4.3 | たちあがりは短く、内傾した後、端部で上方に鋭くのびる。 受部は外方にのびる。底部は中央が平たい。ヘラケズリの範囲は広く、底部の1/2弱である。焼成は堅致であるが、少々焼けむ。 | |
| 16 | 杯身 | 口 径 10.8 受部 径 13.1 器 高 3.8 | たちあがりは短く、内傾した後、端部付近で直立してのびる。 受部は外方にのびる。底部はヘラケズリは幅広く左まわりに行なう。 胎土は微砂粒を含む。焼成は良好で青灰色を呈する。 | |
| 12-8 | 杯身 | 口 径 13.2 受部 径 15.3 器 高 4.4 | たちあがりは、内傾した後、上方にのびる。底部は中央で平らになる。全体的に調整は丁寧である。 | |
| 17 | 杯身 | 口 径 13.2 受部 径 15.3 器 高 4.4 | たちあがりは、内傾して直立し、外側面は端部にいくにつれ器壁がうすくなる。 受部は外方に鋭くのびる。底部は中央で平らになる。全体的に調整は丁寧である。 | |
| 12-9 | 杯身 | 口 径 11.0 受部 径 14.9 器 高 4.5 | 胎土は緻密で、焼成は良好。底色を呈する。 | |
| 18 | 杯身 | 口 径 13.0 受部 径 14.9 器 高 4.5 | たちあがりは、内傾した後、中位で上方にのびる。端部は鋭い。 受部は外方にのび、端部は丸い。器壁に凹凸を有する。 | + |
| 12-10 | 杯身 | 口 径 12.5 復元受部径 14.6 器 高 4.3 | 胎土は砂粒を適度に含む。焼成時に一部割れ、歪んでいる。 | |
| 19 | 杯身 | 口 径 12.5 復元受部径 14.6 器 高 4.3 | たちあがりは、わずかに内傾する。端部は鋭い。 受部は外方にのび、端部は鋭い。底部は欠損しているが、丸みを有すると思われる。 胎土は緻密で、焼成は良好である。 | + |
| 20 | 杯身 | 口 径 12.3 受部 径 14.5 器 高 4.4 | たちあがりは、内傾しながらのび、端部は丸い。 受部は丸く、外方にのびる。底部は丸く、外側は釉やその他の物がほぼ全面に付着している。 | |
| 12-11 | 杯身 | 口 径 13.6 受部 径 15.1 器 高 4.4 | 胎土はやや粗い。 | |
| 21 | 杯身 | 口 径 13.6 受部 径 15.1 器 高 4.4 | たちあがりは、やや内傾気味にのび、端部で外方につまみあげている。 受部は短く外方にのびる。底部はゆるい曲線を描く。ヘラケズリの範囲は広く、外面の調整は「丁寧」である。 | |
| 12-12 | 杯身 | 口 径 12.4 受部 径 14.3 器 高 3.7 | たちあがりは短く、上方にのび、端部は鋭い。 受部は丸く焼かい。底部は浅く、内面は平らである。 胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で堅致。青灰色を呈する。 | |
| 23 | 杯身 | 口 径 13.1 受部 径 15.0 器 高 4.0 | たちあがりは、内傾しながらのびる。 受部は上外方にのび、中位がふくらむ。底部中央付近のみヘラケズリを行なう。 焼成は堅致であるが、口縁の一部が重み底部はひびわれている。 | |
| 13-1 | 杯身 | 口 径 13.8 受部 径 16.2 器 高 4.1 | 器高に比して、口径が大きい。たちあがりは内傾しながらのびる。 | |
| 24 | 杯身 | 口 径 12.0 受部 径 14.8 器 高 4.5 | 受部は外上方にのびる。 | |
| 25 | 杯身 | 口 径 12.0 受部 径 15.0 器 高 4.8 | 胎土は砂粒を含み青緑色である。焼成良好で、黄褐色を呈する。 | |
| 26 | 杯身 | 口 径 12.9 受部 径 15.0 器 高 4.8 | たちあがりは、内傾しながらのびる。端部は丸い。 受部は、上外方へのびる。底部は深く丸い。 | |
| 13-2 | 杯身 | 口 径 12.9 受部 径 15.0 器 高 4.8 | 胎土は、微砂粒を多く含む。焼成は良好で灰白色を呈する。 | |

| 表面 内面 | 番号 | 器種 | 法量 (cm) | 所見 | ヘラ 記号 |
|----------|----|----|-----------------------------------|---|----------|
| 17-27 | | 杯身 | 口 径 13.8 受 部 径 14.7 高 度 4.0 | 内側に、内傾し、環部は丸い。 受部は、短く外上方にのびる。底部は浅く、肉質は厚い。 底は、焼成は堅緻で、底部は砂が全面に厚くかかる。 | |
| 28 | | 杯身 | 口 径 12.4 受 部 径 14.5 高 度 3.7 | 内側に、内傾した後、腹部付近で直立する。 受部は上外方にのびる。 底は、砂粒を多く含み粗い。焼成は良好で、深灰色を呈する。 | |
| 29 | | 杯身 | 口 径 12.6 受 部 径 14.7 高 度 4.1 | 内側に、内傾しながらのびる。 受部は上外方にのびる。環部は細い。底部は丸みをもち、暗褐色の縁が厚くかかる。 | |
| 13-3 | | 杯身 | 口 径 12.6 受 部 径 14.7 高 度 4.3 | 内側に、内傾した後、中位で上方にのびる。 受部は、厚く、外方にのびる。底部は丸い。 | |
| 30 | | 杯身 | 口 径 12.6 受 部 径 14.6 高 度 4.3 | 内側に、内傾しながらのびる。 受部は、厚く、外方にのびる。底部は丸い。 底は、胎土は砂粒を含むが密である。焼成は良好で堅緻。黒灰色を呈する。 | |
| 31 | | 杯身 | 口 径 12.9 受 部 径 14.8 高 度 4.6 | 内側に、内傾しながらのびる。 受部は上外方にのびる。底部はマキアゲの模様が残り、縁が厚くかかる。 底は、砂粒をあまり含まず緻密である。焼成は良好で堅緻である。 | |
| 13-4 | | 杯身 | 口 径 12.6 受 部 径 14.5 高 度 4.4 | 内側に、内傾しながらのびる。 受部は、厚く太い。底部は丸味をもつ。外側は経褐色の縁がかかる。 底は、砂粒を多く含むが密である。焼成は良好で堅緻である。 | |
| 32 | | 杯身 | 口 径 12.6 受 部 径 14.5 高 度 4.4 | 内側に、内傾しながらのびる。 受部は、厚く太い。底部は丸味をもつ。外側は経褐色の縁がかかる。 底は、砂粒を多く含むが密である。焼成は良好で堅緻である。 | |
| 33 | | 杯身 | 口 径 12.7 受 部 径 14.8 高 度 3.7 | 内側に、内傾しながらのびる。 受部は外上方にのび、難部は細い。底部の環部が付合している。底部は浅く平たい。 | + |
| 13-5 | | 杯身 | 口 径 12.1 受 部 径 14.7 高 度 4.1 | 内側に、内傾した後、上方にのびる。 受部は、厚く外方にのびる。底部は丸味をもつ。外側は経褐色の縁がかかる。 | |
| 34 | | 杯身 | 口 径 12.7 受 部 径 14.7 高 度 4.1 | 内側に、内傾した後、上方にのびる。 受部は、厚く外方にのびる。底部は全体にうすく、一部焼け歪む。 | |
| 13-6 | | 杯身 | 口 径 11.8 受 部 径 13.9 高 度 3.7 | 内側に、内傾した後、上方にのびる。 受部は、厚く外方にのびる。底部は丸味をもつ。外側は経褐色の縁がかかる。 | |
| 35 | | 杯身 | 口 径 12.8 受 部 径 13.9 高 度 3.7 | 内側に、内傾した後、上方にのびる。底部は丸味をもつ。外側は経褐色の縁がかかる。 | |
| 13-7 | | 杯身 | 口 径 13.5 受 部 径 15.6 高 度 3.4 | 内側に、内傾した後、上方にのびる。底部は丸味をもつ。外側は経褐色の縁がかかる。 | |
| 36 | | 杯身 | 口 径 13.5 受 部 径 15.6 高 度 3.4 | 内側に、内傾した後、上方にのびる。底部は丸味をもつ。外側は経褐色の縁がかかる。 | |
| 37 | | 杯身 | 口 径 4.3 高 度 4.3 | 内側に、内傾した後、腹部付近で細くなり、上方にのびる。 受部は、短く、外上方にのびる。底部のヘラケズリは幅広く、内外面とも副型は丁寧に行なっている。胎土は砂粒を含む。焼成は良好で堅緻。灰白色を呈する。 | |
| 38 | | 杯身 | 口 径 12.8 受 部 径 14.7 高 度 3.9 | 内側に、内傾した後、外反気味に上方にのびる。 受部は、短く、外上方にのびる。底部のヘラケズリは幅広く行なわれている。 | |
| 13-8 | | 杯身 | 口 径 13.1 受 部 径 15.2 高 度 3.6 | 内側に、内傾した後、上方にのびる。底部は丸味をもつ。外側は丸い。 | |
| 39 | | 杯身 | 口 径 13.1 受 部 径 15.2 高 度 3.6 | 内側に、内傾した後、上方にのびる。底部は丸味をもつ。外側は丸い。 | + |
| 40 | | 杯身 | 口 径 12.6 受 部 径 15.0 高 度 3.2 | 内側に、内傾した後、中位で上方にのびる。 受部は、短く、外方にのびる。底部は丸味をもつ。外側は丸い。 | |
| 41 | | 杯身 | 口 径 12.6 受 部 径 14.8 高 度 3.7 | 内側に、内傾した後、中位で上方にのびる。 受部は、大きく、外方にのびる。底部は浅く、中央部は平たい。ヘラケズリの範囲は狭い。 | + |
| 13-9 | | 杯身 | 口 径 12.6 受 部 径 15.0 高 度 3.8 | 内側に、内傾した後、中位で上方にのびる。 受部は、短く、外方にのびる。底部は丸味をもつ。外側は丸い。 | |
| 42 | | 杯身 | 口 径 12.9 受 部 径 15.0 高 度 3.8 | 内側に、内傾した後、中位で上方にのびる。 受部は、短く、外方にのびる。底部の窓部はうすい。ヘラケズリの範囲は広い。 | |
| 43 | | 杯身 | 口 径 12.5 受 部 径 15.0 高 度 3.4 | 内側に、内傾した後、中位で上方にのびる。 受部は、短く、外方にのびる。底部は丸味をもつ。外側は丸い。 | |
| 13-10 | | 杯身 | 口 径 12.3 受 部 径 14.0 高 度 2.9 | 内側に、内傾した後、中位で上方にのびる。 受部は、短く、外方にのびる。底部は丸味をもつ。外側は丸い。 | |
| 18-1 | | 杯身 | 口 径 12.3 受 部 径 14.0 高 度 2.9 | 内側に、内傾した後、中位で上方にのびる。 受部は、短く、外方にのびる。底部は丸味をもつ。外側は丸い。 | |

| 回面 固版 | 番号 | 器種 | 法 直 (cm) | 所 見 | ハラ 記 号 | |
|----------|----|------------|--|---|--|--|
| 18 - 2 | | 口 筒 | 11 径 12.0 | たちあがりは、内傾した後、上方に覗くつまみ上げている。 | | |
| | | 杯身 | 受 部 径 14.2 | 受部は、やや長く、上外方にのびる。底部は丸い。 | | |
| 13-11 | | 器 高 | 3.8 | 胎七は0.1~4mmの砂粒を含む。焼成は堅挺で灰紫色を呈する。 | | |
| 3 | | 口 筒 | 11.0 | たちあがりの基部が太く、内傾した後、中位で覗く上方にのびる。 | | |
| | | 杯身 | 受 部 径 13.4 | 受部は、短かく、上外方にのびる。底部は中央で盛む。ヘラケズリの範囲は広く他の調整もすべて丁寧である。胎土は緻密で焼成も良好である。 | | |
| 4 | | 復元口径 | 12.1 | たちあがりは、短く、内傾氣味に上方にこまみあげている。端部は鋭い。 | | |
| | | 杯身 | 復元受部径 14.2 | 受部は体側から段を有し、上外方にのびる。底部は平らで、ヘラケズリ、内面の調整とも器 高 3.0 難である。胎土は砂粒を多く含み粗い。 | | |
| 5 | | 口 筒 | 10.6 | たちあがりは、短かく、内傾した後、上方に覗くのがいる。 | | |
| | | 受 部 径 12.6 | 受部は上外方にのび、端部は鋭い。窓部の内縁が摺合している。底部は中央が薄み気味の器 高 2.9 面を有する。外面に輪がかかり強く焼ける。 | | | |
| 6 | | 口 筒 | 10.2 | たちあがりは、わずかに内傾した後、外側が段をして、さらに内傾する。端部は鋭い。 | | |
| | | 杯身 | 受 部 径 12.3 | 受部は、鋭く、上外方にのびる。底部は浅く平たいが、中央が少し盛り上る。 | | |
| | | 器 高 | 3.2 | 胎七は砂粒を多く含み粗い。焼成は堅挺である。外面は輪がかった後、はがれる。 | | |
| 7 | | 口 筒 | 9.8 | たちあがりの基部はうすく、内傾した後、上方に覗くのがいる。 | | |
| | | 杯身 | 受 部 径 11.9 | 受部は上外方にのびる。端部は丸い。底部の駆動は凹凸を有する。 | | |
| | | 器 高 | 3.0 | 胎土は緻密である。焼成は良好で堅挺。外面は全面被がかかる。 | | |
| 8 | | 復元口径 | 9.9 | たちあがりは、短かく内傾した後、覗く上方にこまみ上げられている。 | | |
| | | 杯身 | 復元受部径 12.1 | 受部は、上外方に短く厚くのび、端部は丸い。口縁部と受部の境に、1条の沈線を有する。 | | |
| | | 器 高 | 2.7 | 胎土は2mm程度の砂粒をやや多く含む。外面には輪がかかる。 | | |
| 9 | | 口 筒 | 9.6 | たちあがりは短く内傾し、端部は鋭い。 | | |
| | | 受 部 径 11.6 | 受部は、上外方にのびる。口縁部と受部の境に1条の沈線を有する。 | | | |
| 13-12 | | 器 高 | 2.5 | 底部は浅く、ヘア切り後は未調整である。 | | |
| 10 | | 復元口径 | 10.0 | たちあがりは、内傾した後、中位で窓部がうすくなり、端部は鋭い。 | | |
| | | 杯身 | 復元受部径 12.2 | 受部は、上外方に短く厚くのび、端部は丸い。口縁部と受部の境に、1条の沈線を有する。 | | |
| | | 器 高 | 3.4 | 胎土は適度に砂粒を含む。焼成は良好。堅挺で灰色を呈する。 | | |
| 11 | | 口 筒 | 10.4 | たちあがりは、短かく内傾し、端部は鋭くのびる。 | | |
| | | 受 部 径 12.3 | 受部は大く、外方にのびる。端部は丸い。口縁部の窓部が開着している。 | | | |
| | | 器 高 | 3.2 | 底部はヘア切り未調整。その他コロナゲ、ナデ調整は丁寧である。 | | |
| 12 | | 復元口径 | 10.2 | たちあがりは、短かく、内傾した後、端部は鋭くのびる。 | | |
| | | 杯身 | 復元受部径 12.6 | 受部は、鋭く強く外方にのびる。底部は深く、中央部外縁に粘土を織ぎ足し平坦にする。 | | |
| | | 器 高 | 3.7 | 胎土は適度に砂粒を含む。焼成良好で堅挺。黒褐色を呈する。 | | |
| 13 | | 復元口径 | 12.0 | 杯部のみ、平底に近い底部から少し上外方にのびたところに再び窓が張り出す。窓から上は外方にのび、中位で再び窓が短く張り出す。口縁部は窓部がうすくなり、端部は鋭く外縁部高さ 4.5 反する。 | | |
| 14 | | 無蓋 | 復元口径 | 11.6 | 杯部のみ、13と同様の器形を有する。 | |
| | | 高杯 | 杯 部 高 | 4.5 | 内外面とも口縁部ナデ調整を行なう。胎土は緻密で焼成は良好。灰色を呈する。 | |
| 15 | | 無蓋 | 復元口径 | 12.0 | 杯部のみ、13-14と類似しているが、全体に光沢を有する。 | |
| | | 高杯 | 杯 部 高 | 4.1 | 胎土は緻密である。焼成は良好で黄褐色を呈する。 | |
| 16 | | 無蓋 | 復元口径 | 13.2 | 杯部のみ、平底に近い底部窓の後から上外方にのびたところに再び窓が張り出す。窓から上は、窓部がうすくなり、角度を変えてやや上向きにのび、口縁部に平ら。内外面とも窓部高さ 4.4 暗緑色の釉がかかる。 | |
| 17 | | 無蓋 | 復元口径 | 12.3 | 杯部のみ、平底から底部端の窓から、ゆるい曲線を描きたちあがり再び窓が張り出す。窓部高さ 4.1 から上は長くのびる。胎土は4mm程度の砂粒を少量含む他は緻密である。 | |
| 18 | | 無蓋 | 復元口径 | 12.5 | 杯部のみ、底部はゆるく上外方にのび、窓部に窓が張り出す。窓から上は角度を上向きに窓部高さ 4.7 変え、再び窓が張り出し口縁部に至る。口縁部は丸い。 | |
| 19 | | 無蓋 | 復元口径 | 12.2 | 杯部のみ、口縁部下と底部端の窓は窓が張り出す。 | |
| | | 高杯 | 窓 部 高 | 4.3 | 胎七は微妙砂を多く含む。焼成は良好で灰色を呈する。 | |
| 20 | | 無蓋 | 復元口径 | 15.0 | 杯部のみ、底部は、内円軌跡に外方にのび、口縁部に至る。口縁部は大きく外反し、窓部高さ 4.6 部は丸い。外面ともナデによる調整は稚である。 | |
| | | 高杯 | 窓 部 高 | 4.0 | 窓部は、3方に長方形の窓が入る。窓部窓と窓部下に小さく窓が張り出す。窓部は、3方に長方形の窓が入る。窓部窓と窓部下に小さく窓が張り出す。 | |
| 21 | | 無蓋 | 復元口径 | 14.2 | 杯部は平底を窓から、口縁部は上方方にのび、窓部は丸い。底部窓と口縁部下に小さく窓が張り出す。 | |
| | | 高杯 | 窓 部 高 | 7.5 | 窓部は、3方に長方形の窓が入る。窓部窓と窓部下に小さく窓が張り出す。 | |
| 22 | | 無蓋 | 復元口径 | 12.4 | 杯部は平底を窓から、口縁部は上方方にのびる。底部窓と更にその上に窓が張り出す。 | |
| | | 高杯 | 窓 部 高 | 8.1 | 窓柱部は、2条の沈線を挟んで上下に長方形の3方透しが入る。 | |

| 図版 番号 | 形種 | 法 量 (cm) | 所 見 | ヘラ 記 号 |
|----------|-----------|----------------------------------|--|-----------|
| 18-23 | 無蓋 高杯 | 復元口径 12.9 残存高 8.6 | 移部の底部端には鈍い棱があり、口縁部に内側下にも棱が巡る。 脚部の長方形の3方透しは、軸底部まで深く切り込む。 | |
| 24 | 無蓋 高杯 | 復元口径 13.1 残存高 3.9 | 口縁部は内寄気味にたちあがり、口縁端部まで外上方にのげる。口縁端部は内面がうすくなり細い。2条の棱縫の間に列点文からなる文様帶が入る。 | |
| 25 | 無蓋 高杯 | 復元口径 11.8 残存高 5.0 | 長く上方にのびた口縁部の2条の棱の間に細かい列点文が施される。 胎土は緻密である。焼成は良好で堅緻。黒褐色を呈する。 | |
| 26 | 無蓋 高杯 | 復元口径 12.4 残存高 4.8 | 底部端に2本の棱縫に挟まれて棱が張り出す。口縁部下にも小さく棱が巡る。 棱縫に文様帶が入る。口縁端部はわずかに外反する。 | |
| 27 | 無蓋 高杯 | 復元口径 14.1 残存高 4.9 | 底面部の棱から、外上方にたちあがったところに斜に列点文の文様帶が入る。 | |
| 23-6 | 高杯 杯 高 | 4.9 | 文様帶の底上に鋭く棱が張り出し、口縁部は長く上方にのびる。 | |
| 28 | 無蓋 高杯 | 復元口径 12.1 杯 高 5.0 | 25・26・27と同様の基形を有する。胎土は砂粒を多く含む。 焼成は良好で堅緻であるが、底面部内面に砂や引物が燃着する。 | |
| 29 | 無蓋 高杯 | 11 透 13.0 | 底部から内寄気味にたちあがり、文様帶を挟む棱の上から上方にまっすぐのびる。 | |
| 14-1 | 高杯 杯 高 | 5.3 | 胎土は砂粒を多く含む。脚部は3方透しと思われる。 | |
| 30 | 無蓋 高杯 | 口 透 12.1 残存高 5.3 | 丸味をもった底部から口縁部は内寄気味に上方にのびる。脚部は3方透しである。 焼け過ぎで表面は剥離している。 | |
| 31 | 無蓋 高杯 | 口 透 12.0 残存高 11.9 | 軸部の凹形は28と類似している。脚部の透しは3方開きで網長い。 | |
| 32 | 無蓋 高杯 | 口 透 12.5 残存高 5.5 | 底面部の建内から内寄気味にたちあがったところに、列点文が施される。文様帶の底上に再び棱が高り、口縁部は外上方にのげる。内外面とともに墨褐色の胎がかかる。 | |
| 33 | 無蓋 高杯 | 11 透 11.5 | 平たい底部の端に底く棱が張り出す。2条の棱縫は狭く、縱方向の縫合が入る。 | |
| 34 | 無蓋 高杯 | 復元口径 10.6 残存高 4.2 | 口縁部の谷縫はうすく、輪部は外反気味にのげる。内外面ともに墨褐色の胎がかかる。 少々焼けこんでいるが、口径は小さく、器壁は全体的にうすい。2条の棱縫は鋭く張り出す。胎土は緻密である。 | |
| 19-1 | 口 透 蓋 | 16.8 5.1 | 口縁部は、外方に開きながら下る。天井部はやや高く、中央部は平たい。 つまみは大きく、透窓形で中央が深く窪む。窑壁は全体にうすい。 | |
| 2 | 高杯 蓋 | 復元口径 16.3 器 高 4.1 つまみ透 3.7 | 11脚部は、内寄気味に外下方に下る。大井部は浅く、回転ナタ調整を行なう。 つまみは平たい宝珠形で、中央がくぼむ。 胎土は緻密で堅緻。焼成良好で堅緻。灰褐色を呈する。 | |
| 3 | 高杯 蓋 | 口 透 16.5 器 高 4.7 つまみ透 2.9 | 口縁部は内寄気味に下る。天井部は浅くない。口縁部と大井部の境に沙継が1条進る。 つまみは小さく高い。調整は丁寧である。 | |
| 4 | 高杯 蓋 | 口 透 15.4 器 高 4.9 つまみ透 2.5 | 口縁部は、内寄気味に下る。口縁部と天井部の境に棱が鋭く張り出す。 天井部外側に、小よりで扁平なつまみがつく。 焼成は良好で堅緻。大井部端部附近から口縁部かけて黑色を呈する。 | |
| 5 | 高杯 蓋 | 口 透 15.3 器 高 5.3 つまみ透 2.6 | 11脚部は、下方に下るほど器壁がうすくなる。大井部との境に稜縫が巡る。 天井部は、一貫早く張り上った後、中央部は平坦になる。 | |
| 14-4 | 高杯 蓋 | 口 透 16.0 器 高 4.3 つまみ透 3.0 | 天井部中央に小よりのつまみがつく。 | |
| 6 | 高杯 蓋 | 口 透 16.0 器 高 4.3 つまみ透 3.0 | 口縁部は、内寄気味に下方に下る。槽部内面は、段を有し細くなる。 口縁部と天井部の境に稜縫が巡る。内外面とも「掌」回転ナタ調整を行なう。 | |
| 7 | 高杯 蓋 | 口 透 16.0 器 高 5.8 つまみ透 3.1 | 口縁部は、内寄気味に下る。天井部との境に棱が鋭く張り出す。 大井部中央に扁平なつまみがつく。 | |
| 14-3 | 高杯 蓋 | 口 透 15.5 器 高 6.1 つまみ透 3.2 | 天井部は高く丸い。天井部中央に扁平なつまみがつく。 胎土は過度の砂粒を含む。焼成良好で堅緻。灰褐色を呈する。 | |
| 8 | 高杯 蓋 | 口 透 15.5 器 高 5.0 つまみ透 3.0 | 11脚部は、内寄気味に外方へ下る。天井部との境に棱がわざかに張り出す。 天井部は高く丸い。中央につまみがつく。天井部外側にカキ目。他面は回転ナタ調整を行なう。 | |
| 9 | 高杯 蓋 | 口 透 14.7 器 高 5.0 つまみ透 3.0 | 天井部に幅広く、左よりのヘラケズリを行なう。天井部中央に中程度のつまみがつく。 焼成は良好で堅緻である。外面は暗灰色、内面は淡灰色を呈する。 | |

| 回数 | 番号 | 因種 | 法 直 (cm) | 所 見 | ヘラ記 |
|-------|------|----------|-------------------------------------|--|-----|
| 19-10 | | 有茎 高杯 | 口 径 13.4 受 部 径 15.6 残 存 高 5.0 | たちあがりは、内傾しながらのびる。端部は端部にいくにつれうすくなる。 受部は外方にのびる。脚部は3方造しと見われる。脚底部に深く切り込む。 粘土は砂粒をあまり含まない。焼成はやや甘く、青灰色を呈する。 | |
| 11 | | 有茎 高杯 | 口 径 12.9 受 部 径 15.1 残 存 高 6.9 | たちあがりは、内傾した後、上方につまみ上げている。端部は鋭い。 受部は外方にのびる。底部の受部側に「トコヘア記」有り。 脚部は外方に開く。焼成は苦く、灰白色を呈する。 | X |
| 12 | | 有茎 高杯 | 口 径 14.7 受 部 径 17.0 残 存 高 4.4 | たちあがりは、内傾しながらのびる。端部は鋭い。 受部は外方にのびる。底部は鋭い。全體に器壁はうすい。底部の因縫ヘラケズリは幅広く行なわれ、調整はすべて丁寧である。 | |
| 13 | | 有茎 高杯 | 口 径 12.9 受 部 径 15.6 脚 部 高 4.6 | たちあがりは、内傾した後上方にのびる。受部は外方にのびる。端部は鋭い。 底部の器壁は厚い。脚部との接合痕が残る。 | |
| 14 | | 有茎 高杯 | 口 径 14.2 海 滩 径 16.4 残 存 高 4.8 | たちあがりは、内傾した後、上方にのびる。受部は外方にのびる。 底部は浅く平たい。左辺よりヘラケズリは幅広く行なう。 粘土は砂粒を適度に含む。焼成は良好で堅穢。底部端から受部にかけて黒色を呈する。 | |
| 15 | | 有茎 高杯 | 口 径 12.9 受 部 径 15.0 残 存 高 4.3 | たちあがりは、内傾した後、中段から上方にのびる。端部は鋭い。 受部に蓋の口様の一種が留着している。脚部は3方造しである。 内面の因縫は「トコヘア」である。外面は全面に釉がかかる。 | |
| 16 | | 高杯 | 脚 烟 径 15.0 残 存 高 12.0 | 脚柱部に2条の沈縫が通る。沈縫の上下に3方開きの長方形造しが入ると思われる。 | |
| 17 | 14-6 | 高杯 | 脚 烟 径 15.9 残 存 高 13.3 | 長脚2段造りである。脚柱部は大きく外方に開く。端部は外方に面をもつ。 | |
| 4-18 | | 脚 烟 | 脚 烟 径 13.2 脚 部 高 12.5 | 粘土は適度に砂粒を含む。焼成は良好で堅穢。灰黑色を呈する。 | |
| 14-5 | | 高杯 | 脚 烟 径 11.8 脚 部 高 8.9 | 脚柱部に2条の因縫が入る。脚柱部の沈縫の上下に長方形の造しが3方に開く。 粘土は砂粒を適度に含む。焼成は良好で灰褐色を呈する。 | |
| 19 | | 高杯 | 脚 烟 径 12.8 残 存 高 8.9 | 脚柱部は、脚柱部から大きく外方に開く。端部は下方に下る。 | |
| 20 | | 高杯 | 脚 烟 径 11.8 脚 部 高 8.8 | 脚柱部は、脚柱部からなだらかに下方に下る。端部は丸い。脚柱部と脚柱部に各々2条の因縫が通る。通じは長方形で2段3方開きである。脚柱部にヘラ記があり。 | X |
| 21 | | 高杯 | 脚 烟 径 15.0 脚 部 高 16.3 | 長い脚柱部には、2条の沈縫と3方開きの造しが2段入る。脚柱部は、外方に下り、端部は上方にのびる。 | |
| 22 | | 高杯 | 脚 烟 径 16.6 脚 部 高 17.1 | 長い脚柱部の中央よりやや上に2条の因縫が通る。通じは長方形で因縫を挟んで上下に入り組む。下方の通じは、並く切り込んでいる。脚柱部は下方にのび、外側に面をもつ。 | |
| 23 | | 高杯 | 脚 烟 径 15.9 残 存 高 9.8 | 脚柱部から脚柱部までなだらかに下る。脚柱部は面をもつ。 | |
| 20-1 | 14-7 | 高杯 | 脚 烟 径 12.8 残 存 高 13.8 | 細かい脚柱部中央に2条の因縫が入る。因縫の上下に長方形造しが3方に通じる。下方に1条の因縫が入る。脚柱部は上方に張り出す。 | |
| 2 | | 高杯 | 脚 烟 径 12.2 残 存 高 13.1 | 脚柱部中央よりやや上に2条の因縫が通る。通じは沈縫の上下に長方形に入る。下方の通じは長い。脚柱部は外上方にのび、端部は丸い。 | |
| 3 | | 高杯 | 脚 烟 径 12.5 脚 部 高 13.6 | 脚柱部中央に2条。下方に2条さらに下方に1条の因縫が通る。脚柱部は上方に肥厚する。 | |
| 4 | | 無茎 高杯 | 口 径 13.1 残 存 高 4.7 | 粘土は砂粒をあまり含まない。焼成は良好で堅穢。黒褐色を呈する。 | |
| 5 | | 無茎 高杯 | 口 径 12.3 残 存 高 6.5 | 脚柱部は中央が平坦で内側気味にたちあがる。口縫部は上方にのび、端部は丸い。 | |
| 15-1 | | 無茎 高杯 | 脚 烟 径 8.2 脚 部 高 5.6 | 脚柱部は下方方に下り、端部は上方にのびる。脚柱部内面に異物が留着している。 | |
| 6 | | 無茎 高杯 | 脚 烟 径 8.0 残 存 高 5.6 | 粘土は純白である。焼成は良好で堅穢。黒褐色を呈する。 | I |
| 7 | | 無茎 高杯 | 脚 烟 径 7.5 残 存 高 4.5 | 杯底部から口縫部は内側気味に上方方にのびる。脚柱部は外側下方に下る。端部付近で下外方に下る。焼成はやや甘く、黄褐色を呈する。 | |
| 8 | | 無茎 高杯 | 脚 烟 径 9.4 残 存 高 4.1 | 脚柱部は外方にのびる。脚柱部は脚柱部から外方に開いた後、下外方に下る。 | |
| 9 | | 無茎 高杯 | 脚 烟 径 8.7 残 存 高 4.2 | 脚柱部は脚柱部から外方に開いた後、下外方に下る。端部は面を成し鋭い。 | |
| | | | | 粘土は微細粒を多く含む。 | |

| 箇番 | 品名 | 器種 | 法量(cm) | 所見 | ヘラ記号 |
|-------|-------|-------|---------------------------------------|--|------|
| 20-10 | 無蓋 | 脚 壁 係 | 6.9 | 杯底部は、内弯気味に外方にたちあがる。脚部は短く、脚柱部はほとんどなく、脚部は外下方に下る。端部はわずかに上外方ににつまみ出されている。 | |
| | 高杯 | 残 存 高 | 4.1 | | |
| 11 | 脚 壁 係 | 10.5 | | 脚部は外反しながら下る。端部の直上に縫が巡る。 | |
| 15-2 | 高杯 | 脚 部 高 | 4.8 | 胎土は砂粒をあまり多く含まない。焼成は良好で淡灰色を呈する。 | |
| 12 | 高杯 | 脚 壁 係 | 9.2 | 杯底部は、内弯気味に外方にたちあがる。外面はカキ貝風にヘラケズリを行なう。 | |
| | 残 存 高 | 5.7 | 脚部は外下方に下り、中空で内弯気味になり、端部で再び外方へ下る。 | | |
| 13 | 高杯 | 脚 壁 係 | 12.2 | 脚部は外反しながら下り、端部は上方に張り出す。長方形の透しを2方以上に入れる。 | |
| | 脚 部 高 | 5.4 | 胎土に粗砂粒を多く含む。焼成良好で堅緻。黄灰色を呈する。 | | |
| 14 | 高杯 | 脚 壁 係 | 9.5 | 杯底部は、外方にたちあがる。脚部は外下方に下り、端部で凹壁が厚くなり、外反する。 | |
| 15-3 | 高杯 | 残 存 高 | 6.5 | 杯底部外側はヘラケズリ、内面は同軸ナードナード調である。 | |
| 15 | 高杯 | 脚 壁 係 | 10.4 | 杯底部は、内弯気味に外方にたちあがる。脚部は外下方に下り、端部は上外方に張り出 | |
| 15-5 | 高杯 | 残 存 高 | 7.5 | 粗砂粒を多く含む。焼成良好で堅緻。黒褐色の胎土がよくかかる。 | |
| 16 | 高杯 | 脚 壁 係 | 10.6 | 杯底部は外上方にのびる。脚部は外下方に下り、端部でさきに外方に下る。 | |
| 15-4 | | 残 存 高 | 6.6 | 脚部は内外面とも丁寧な回転ナード調整を行なう。焼成良好で堅緻。 | |
| 17 | 高杯 | 脚 壁 係 | 12.1 | 杯底部は外上方にのびる。脚部は外下方に下り、端部で大きく外反する。頂上面に円孔を | |
| 15-6 | 高杯 | 残 存 高 | 8.2 | 8方に穿つ。胎土は良好で堅緻。黒褐色の胎土が浮遊している。 | |
| 18 | 高杯 | 脚 壁 係 | 13.1 | 脚部は外下方に下り、端部で内弯気味に曲った後下方に下る。端部は外方にわずかに肥厚 | |
| | 脚 部 高 | 7.0 | する。上下2段に円孔と突起に穿たれています。 | | |
| 19 | 高杯 | 脚 壁 係 | 14.0 | 脚部は外下方に下り、端部は内弯気味に下方に下る。脚柱部と端部の境に縫が巡る。長方 | |
| | 脚 部 高 | 7.9 | 形の透しが入る。3方開きと思われる。 | | |
| 20 | 高杯 | 脚 壁 係 | 13.1 | 脚部は外反しながら下る。端部で角度を変え外下方に下る。脚柱部と端部の境に縫が巡る。 | |
| | 脚 部 高 | 6.9 | 長方形の透しが入る。胎土は精緻である。 | | |
| 21 | 高杯 | 脚 壁 係 | 13.4 | 脚部は外反しながら下る。端部は外下方に下り、端部は平坦な接地面をもつ。 | |
| | 残 存 高 | 7.2 | 脚柱部に2条の凹溝とその上に長方形透しが入る。端部との境に深い縫隙が巡る。 | | |
| 22 | 高杯 | 脚 壁 係 | 13.9 | 脚部は外反しながら下る。縫隙から下の端部は外下方に下る。端部の器壁はうすく、接 | |
| | 脚 部 高 | 9.2 | 縫は細い。長方形の透しが入る。胎土は精緻である。 | | |
| 23 | 高杯 | 脚 壁 係 | 15.0 | 脚部は外反しながら下り。脚部で角度を変え下方に下る。脚柱部下方に、わずかに縫が張 | |
| | 脚 部 高 | 8.9 | り出す。焼成は良好で堅緻。外面にうすく釉がかかる。 | | |
| 24 | 高杯 | 脚 壁 係 | 14.2 | 脚部は外反しながら下る。脚部は接縫を横に長く外方に下る。長方形透しの切り込みは長 | |
| | 残 存 高 | 10.2 | く、縫隙に通する。胎土は精緻である。 | | |
| 25 | 高杯 | 脚 壁 係 | 13.6 | 杯底部は上外方にのびる。脚部は外下方に下り、端部が巡る。端部は、脚柱部より一旦外 | |
| 15-7 | | 残 存 高 | 10.6 | 方に張り出した後外下方に下る。長方形透しが3方に入る。 | |
| 26 | 高杯 | 脚 壁 係 | 9.8 | 脚部は外下方に下り。一旦外方に張り出した後、下方に下る。内外面とも回転ナード調整。 | |
| 15-8 | | 脚 部 高 | 7.5 | 胎土は粗砂粒を速度に含む。 | |
| 27 | 高杯 | 脚 壁 係 | 13.7 | 脚部は長方形の透しが入る。脚柱部と端部の縫に凸縫が巡る。端部は、外反気味に外下方 | |
| 23-5 | | 残 存 高 | 8.5 | に下る。細かい傷擦き残文を施す。 | |
| 21-1 | 泡 | 復元口径 | 15.0 | 上外方にのびる口縫部近くで水平に外反し、凸縫を巡らす。口縫部は、外上方にのびる。 | |
| | 残 存 高 | 4.7 | 縫は丸い。口縫部に縫方向の脚縫き文を充て施す。 | | |
| 2 | 瓶 | 復元口径 | 13.7 | 口縫部と口縫部の縫に凸縫が巡る。口縫部は外上方にのび、端部はわずかに外反する。口縫部と口縫部に、細かく密に脚縫き文を施す。 | |
| 3 | 瓶 | 復元口径 | 17.0 | 口縫部は上外方にのび、口縫部近くで水平に外反し、凸縫が巡る。口縫部は外上方にたち | |
| | 残 存 高 | 5.5 | あがり、中空から内弯気味に外上方にのびる。 | | |
| 4 | 瓶 | 復元口径 | 13.9 | 上外方にのびる口縫部は、口縫部近くで水平に外反し、凸縫が巡る。口縫部は外上方にの | |
| | 残 存 高 | 4.0 | びる。脚縫き文は左へ斜に8~10本単位で行なう。 | | |
| 5 | 瓶 | 復元口径 | 12.8 | 口縫部から外上方にたちあがる口縫部は、端部付近でさらに外反する。 | |
| | 残 存 高 | 3.3 | 細かい脚縫き文は8~7本単位で入る。 | | |
| 6 | 瓶 | 復元口径 | 14.8 | 口縫部は、口縫部から内弯気味に上方にたちあがり、長く外上方にのびる。 | |
| | 残 存 高 | 5.3 | 脚縫き文は、やや脚縫をあけて施す。内外面とも黒褐色の釉がかかる。 | | |
| 7 | 瓶 | 復元口径 | 12.5 | 口縫部は外上方にのび、口縫部附近で外反し、凸縫を有する。口縫部は外上方にのび、端 | |
| | 残 存 高 | 6.4 | 部は丸い。口縫部・口縫部とともにヘラ縫き文を縫方向に基開隙に施す。 | | |

| 遺伝子 | 番号 | 部類 | 法 線 (cm) | 所 | 見 | ハラ 記号 |
|------|----|-------|------------|---|---|----------|
| 21-8 | | 感 | 復元口径 13.8 | 口頭部は外反丸味にのび、口輪部付近に凸部を送らす。口輪部は外上方にのびる。 | | |
| | | | 残存高 5.0 | 脛部は瘤形に近づくにつれすくなる。細かい櫻皮文がある。 | | |
| 9 | | 感 | 復元口径 14.6 | 口頭部には、開閉を開けたヘラ書き文を極力刺し入れる。口輪部には、端部付近に櫻皮文を刺す。 | | |
| 10 | | 感 | 残存高 9.6 | 口頭部は外反丸味に外上方にのび、II腰部付近に凸部がある。口頭部の上部2/3に細かい櫻皮文を縱方に密に施した後、1条と2条の回線を送らす。 | | |
| 11 | | 感 | 頭部径 9.3 | 口頭部の残存部上半に頬かい櫻書きを入れた後、文様帶の武下に一条の回線を送らす。 | | |
| | | | 残存高 7.6 | 脣部と頭部の境に回線が通り、その下に櫻皮文列点文を施す。 | | |
| 12 | | 脣 | 副部径 8.9 | 脣部は内寄気味に外下方に下る。頭部は下方に下り、底部に丸く続く。頭部中央の櫻皮文 | | |
| | | | 残存高 6.2 | の文様帶に円孔を穿つ。 | | |
| 13 | | 頭 部 径 | 7.7 | 頭部は、12に比較して、張りが少ない。2条の沈線に挟まれた列点文の文様帶に円孔を穿つ。脣壁は全体に厚い。 | | |
| | | | 残存高 5.7 | | | |
| 14 | | 頭 部 径 | 8.0 | 頭部は、下外方に下る。頭部最大径は中央よりやや上に位置する。底部は丸く、中央がやや平坦。脣部上に一条の回線を送らし、回線上に円孔を穿つ。 | | |
| | | | 残存高 5.4 | | | |
| 15 | | 頭 部 径 | 9.2 | 頭部は内寄気味に下り、脣部付近に深い凹部が送る。頭部から底部は丸く球形を成す。円孔 | | |
| | | | 残存高 6.9 | は脣部にかけてだつ。 | | |
| 16 | | 頭 部 径 | 9.2 | 頭部は下外方に下り、脣部付近に回線が送る。頭部最大径は沈線下に位置する。頭部から | | |
| 16-3 | | | 残存高 7.6 | 底部は球形を成す。脣部の穿孔は、上方から斜に入れる。 | | |
| 17 | | 頭 部 径 | 8.1 | 頭部は下外方に下り、頭部は内寄気味に下方に下る。底部の脣壁は厚く、中央は平机である。 | | |
| 16-4 | | | 残存高 6.7 | 沈線は穿られない。穿孔は大きめで丸く穿たれている。 | | |
| 18 | | 頭 部 径 | 10.5 | 頭部は下外方に下り、頭部が送る。頭部は球形を成す。脣部には、脣台の接合側が残る。 | | |
| 16-2 | | | 残存高 7.8 | 脣部の1/4が欠損している。残存部に3ヶ所へラズボンを有する。 | | |
| 19 | | 頭 | 頭部径 10.5 | 頭部は下外方に下り、凹部が送る。頭部は球形を成す。脣部には、脣台の接合側が残る。 | | |
| 16-1 | | | 残存高 7.8 | 脣部の1/4が欠損している。残存部に3ヶ所へラズボンを有する。 | | XXX |
| 20 | | 立派 | 11 残 10.6 | I腰部は、外下方に下り、頭部は外反し、下方に面を成す。天井部は低い。外側は、回転 | | |
| | | | 器 高 2.8 | 器はナデ調整後、犬糞部に手持ち静止ハラケリを行なう。 | | |
| 21 | | 立派 | 11 残 8.0 | II腰部は下方に下る。頭部は場所によって蝶形が異なる。II腰部から天井部にかけて丸 | | |
| | | | 器 高 2.9 | くたちあがる。犬糞部中央は平机になり、脣壁は厚く、調整は窓。 | | |
| 22 | | 豪華 | 復元口径 8.7 | II腰部は下方に下り、頭部は外反する。天井部は、内寄しながら上方にのびる。 | | |
| | | | 残存高 3.7 | | | |
| 23 | | 豪華 | 復元口径 11.9 | II腰部は微妙を多く含む。焼成はふつて灰色を呈する。 | | |
| | | | 残存高 3.5 | | | |
| 24 | | 豪華 | 復元口径 11.0 | II腰部は下方に下る。頭部は内傾するに回線が送る。天井部は高い。 | | |
| | | | 残存高 3.9 | 焼成は砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻。黒灰色を呈する。 | | |
| 25 | | 豪華 | 復元口径 10.8 | II腰部は下方に下る。頭部は回線がうすく、わずかに外反する。天井部は高く、中央部 | | |
| | | | 脣 高 3.8 | は半たい。脣部は砂粒を多く含む。 | | |
| 26 | | 豪華 | 復元口径 10.8 | II腰部は外下方に下る。頭部は凹部がうすくなり、わずかに外反する。天井部は高く、中 | | |
| | | | 脣 高 3.8 | 央部は平たん。脣部は砂粒を多く含む。 | | |
| 27 | | 豪華 | 復元口径 9.2 | II腰部は外下方に下る。頭部は丸い。天井部は高く丸い。天井部中央のみハラケリで他 | | |
| | | | 脣 高 3.5 | は全底出回転アーチナデ調整を丁寧に行なう。脣土は構造である。 | | |
| 28 | | 複雑 | 復元口径 7.1 | II腰部は、基部より上方に回転立する。頭部は丸い。 | | |
| | | | 頭部最大径 13.8 | 頭部は外下方に下り、一条の回線を境に回転して内寄しながら下る。 | | |
| | | | 残存高 6.7 | 焼成は良好で堅緻。外面全周と内底の回線部と底部付近に焼がかかる。 | | |
| 29 | | 細麗 | 復元口径 6.3 | II腰部は、基部より上方に回転立する。 | | |
| | | | 頭部最大径 12.5 | 頭部は基部より下方に下り。頭部は屈曲して下方に下る。底部にいくにつけ厚くなる。 | | |
| | | | 残存高 7.1 | 脣土は砂粒をほとんど含まず精良である。焼成良好で灰色を呈する。 | | |
| 30 | | 細麗 | 復元口径 9.4 | II腰部は短く、基部より上方に立する。頭部は丸い。 | | |
| | | | 頭部最大径 15.6 | 頭部は短く、頭部は内寄して下方に下る。回線して内寄気味に下る。 | | |
| | | | 残存高 6.8 | 脣土は微妙と2mm前後の砂粒を少々含む。底端部の外側に暗緑色の釉がかかる。 | | |
| 31 | | 短版 | 復元口径 7.2 | II腰部は、基部より細く、上方に瘦する。頭部はやや鋭い。 | | |
| | | | 頭部最大径 14.1 | 頭部はやや球形をもち、外下方に下り、屈曲して内寄しながら底部に重なる。 | | |
| | | | 残存高 7.3 | 脣土は焼成も焼成も良好である。頭部に重ね焼きによる色調の変化がみられる。 | | |

| 回面 回数 | 番号 | 器種 | 法 直 (cm) | 所 見 | ハ ラ 記 号 | |
|----------|---------|------------------------------------|--|--|------------|--|
| 21-32 | 短頭 甕 | 復元口径 8.3 側部最大径15.6 残存 高 7.3 | U縫部は、短く上方につまみあげられている。 肩部は張り、内寄した後、下内方に下る。肩部に重ね焼きの痕跡が残る。 | | | |
| 33 | 短頭 甕 | 復元口径 7.5 側部最大径14.2 残存 高 5.9 | U縫部は、基部より直立し、腹部は内寄する。 肩部は、長く外方に下り、屈曲して内寄しながら下る。 胎土は精良で焼成も良好である。 | | | |
| 22-1 | 短頭 甕 | 復元口径 8.4 側部最大径14.3 器 高 9.0 | U縫部は、短く直立する。 肩部は外下方に下り、側部は内寄しながら底部に至る。底部は丸い。側部から底部にかけ て細かいカキ目調整を行なう。内寄側部以下は、不定方向ナガ調整を行なう。 | | | |
| 16-6 | 2 | 短頭 甕 | 復元口径 8.6 側部最大径14.1 残存 高 5.9 | U縫部は、内傾気味にたちあがる。 肩部は外下方に下り、側部で屈曲し内寄しながら下る。 焼成は灰軽で堅緻、内寄焼きのため、肩部と側部の色調が異なる。 | | |
| 3 | 短頭 甕 | 復元口径 9.3 側部最大径10.6 残存 高 6.6 | U縫部の厚さは一樣ではなく、器形も少し並んでいる。 側部は外下方に外反する。底部から側部は内寄しながら下る。側部以下にヘラケ ズリ調整を行なう。口縫部の一部と底部には暗緑色の釉がかかる。 | | | |
| 4 | 短頭 甕 | 復元口径 9.2 側部最大径12.3 残存 高 6.2 | U縫部は、外反気味にたちあがる。 側部は外下方に下り、側部は内寄しながら下る。底部中央に最大径が位置する。 | | | |
| 5 | 短頭 甕 | 口 径 10.2 側部最大径12.1 器 高 7.7 | U縫部は基部より外反し、端部は外傾する面を成す。 側部は外下方に下り、側部は内寄しながら底部に至る。底部から側部上半までカキ目調整 を行なう。底部内面は練なナガ調整。他端は回転ナガ調整である。 | | | |
| 16-7 | 6 | 短頭 甕 | 口 径 7.9 側部最大径11.2 器 高 7.0 | U縫部は、基部より上方に下り、端部は外方に対する外反する。底部中央にヘラケズリ調整を行なう。 底部は外下方に下り、内寄しながら底部に下る。底部と側部最大径付近までカキ目調整を行 なう。底部は回転ヘラケズリ後、中央にヘラ記符を入れる。 | + | |
| 7 | 短頭 甕 | 復元口径 9.2 側部最大径12.1 器 高 8.5 | U縫部は上方にのびる。端部はわずかに外傾する面を成す。 肩部は外下方に下り、側部から底部まで内寄しながら下る。底部にカキ目調整を行なう。 | | | |
| 8 | 短頭 甕 | 復元口径 9.2 側部最大径11.8 器 高 7.3 | U縫部は外反気味に上方にのび、端部は外方に張り出し、上縫は面を成す。 側部は内寄燒成がみられる。側部から底部は、カキ目調整がみられる。内寄しながら下る。底部と側部最大径付近までカキ目調整を行なう。 | | | |
| 9 | 短頭 甕 | 脇 部 径 7.0 側部最大径11.1 残存 高 7.6 | U縫部は上方にのびる。端部は張り出している。 側部は外下方に張り出し、側部は屈曲して内方に下る。底部から側部にかけて、ヘラ記符 の部が残る。側部から底部にかけて、異物が埋着している。 | | J | |
| 10 | 短頭 甕 | 口 径 9.2 側部最大径12.0 器 高 6.0 | U縫部は直立した後、中位から外反する。 | | | |
| 16-5 | 11 | 短頭 甕 | 側部最大径12.3 残存 高 5.3 | U縫部は、内傾気味に外下方に張り出す。側部は、屈曲して下内方に下る。側部紙に比して 器高が低い。焼成は良好で堅緻であるが、肩部に釉と異物が埋着している。 | | |
| 17-1 | 12 | 短頭 甕 | 復元口径 7.6 側部最大径11.3 残存 高 6.5 | U縫部は、基部より欠損する。肩部は外方へ強引に張り出す。底部は平坦である。 | | |
| 12 | 13 | 短頭 甕 | 復元口径 8.8 側部最大径12.1 残存 高 7.3 | U縫部は外反し、端部は丸みをもって外傾する。 肩部は外下方に下り、側部で屈曲し、内寄しながら底部に至る。 | | |
| 14 | 14 | 短頭 甕 | 復元口径 7.7 側部最大径10.5 残存 高 6.8 | U縫部は、短く外反し、端部は外傾する面を成す。 側部は、なだらかに側部につづく。側部は内傾気味に下方に下る。 | | |
| 15 | 15 | 短頭 甕 | 復元口径 8.4 側部最大径12.1 残存 高 6.4 | U縫部は直立した後、中位から外反する。側部は外傾する丸味をもった面を成す。 側部は外下方に下り、側部で屈曲し、下内方に下る。 | | |
| 16 | 16 | 短頭 甕 | 復元口径 9.8 側部最大径11.1 残存 高 7.7 | U縫部は、外上方にたちあがり、中位から外反する。側部は外傾する面を成す。 側部は外下方に下り、側部で屈曲し、内寄しながら底部に至る。側部にヘラ記符がみられ る。U縫部から底部にかけて、暗緑色の釉が厚くかかるところがある。 | U | |

| 回数 | 番号 | 岩種 | 法 直 (cm) | 所 見 | ヘラ 振 方 |
|--------|------|------------|--|-----------------------|--------|
| 22-17 | | 口 住 | 7.0 | 口縫部は、外上方にたちあがり、端部は丸い。 | |
| 17- 2 | 短頭 壁 | 脚部最大径 9.2 | 肩部は外下方に下り、胸部で屈曲し、内寄気味に下り、丸い底部につながる。底部から脚 部全面に回転ヘラケズリ調整を行なう。底部内面に指痕跡が残る。 | | |
| 18 | 短頭 壁 | 復元口径 9.4 | 口縫部は基部から直立し、端部は外方に張り出し、上端は面を成す。 | | |
| 17- 3 | | 脚部最大径 11.7 | 肩部は、丸味を有し、外下方に下る。胸部は内寄しながら下る。底部は広く、外面は回転 部 前 6.5 ヘラケズリ、内面は強いタッチでナガ調整を行なう。胎土は細砂粒と1.2mmの小石を含む。 | | |
| 19 | 短頭 壁 | 復元口径 8.0 | II縫部は、上方にたちあがり、端部はわざりで外反する。 | | |
| | | 脚部最大径 11.2 | 肩部は、丸味を有し、外下方に下る。胸部は屈曲し、下内方に下る。底部外表面はヘラケズ リ調整後、うすく粘土を貼付し、再びヘラケズリを行なう。 | | |
| 20 | 短頭 壁 | 復元口径 6.9 | 口縫部は、やや長く上方にたちあがる。端部はうすくなり丸い。 | | |
| | | 脚部最大径 11.5 | 肩部は外下方に張り出し、胸部で屈曲し、内寄しながら下る。 | | |
| | | 残 存 高 6.9 | 焼成は良好で堅緻。外面に黒緑色、内面には黄褐色の釉がかかる。 | | |
| 21 | 短頭 壁 | 復元口径 7.8 | II縫部は、上方にたちあがり、端部で外反する。 | | |
| | | 脚部最大径 12.9 | 肩部は、丸味を有し、外下方に下る。胸部は、内寄しながら下り、厚味を増す底部につづく。胎土は細砂粒を若干含む。焼成は良好で灰色を呈する。 | | |
| 22 | 短頭 壁 | 復元口径 7.8 | II縫部は、外上方にのびる。 | | |
| | | 脚部最大径 12.0 | 肩部は外下方に下り、内面に浅い窪を有して、胸部につづく。胸部は内寄しながら下る。 | | |
| | | 残 存 高 7.3 | 外内面ともに調整は丁寧で器面は平滑であるが、外面に燒土や小石が附着している。 | | |
| 23 | 短頭 壁 | 復元口径 6.8 | 口縫部は、短く、上方にたちあがり、端部は外傾する面を成す。 | | |
| | | 脚部最大径 8.2 | 肩部はなだらかに脚部へつづく。 | | |
| | | 残 存 高 4.6 | 焼成は良好で堅緻。灰色を呈する。 | | |
| 24 | 短頭 壁 | 復元口径 5.0 | I縫部は、上方にたちあがり、端部に近づくにつれ器壁がうすくなる。 | | |
| | | 脚部最大径 5.8 | 肩部は、丸く外下方に下り、胸部は下内方に下る。 | | |
| | | 残 存 高 3.5 | 胎土は微砂粒を含む。焼成は良好で灰色を呈する。 | | |
| 25 | 短頭 壁 | 復元口径 8.2 | II縫部は外上方にたちあがる。器壁は中位で内外面に肥厚し、端部で再びうすくなる。 | | |
| | | 脚部最大径 8.8 | 肩部は外下方に下り、脚部で屈曲し、下内方に下る。 | | |
| | | 残 存 高 5.4 | 胎土は砂粒を少量含むが緻密である。焼成は堅緻で黑色を呈する。 | | |
| 26 | 短頭 壁 | II 住 | I縫部は、長く直立する。器壁は、上方にいくにつれ厚くなり、端部は丸い。 | | |
| 17- 4 | | 脚部最大径 13.0 | 肩部は、外下方に張り出し、胸部で屈曲し、内寄しながら下る。底部は丸く、強いタッチ 期 高 9.4 でヘラケズリを行なう。内面は全周回転ナガ調整である。焼成良好で堅緻。黒褐色を呈する。 | | |
| 7-27 | 壺 | 復元口径 9.4 | II縫部は、上方にたちあがる。器壁は脚部附近がよく、中程より徐々に厚くなり、端部 | | |
| | | 脚部最大径 13.8 | は丸い。肩部は外下方に下り、胸部で屈曲し、内寄気味に下る。 | | |
| | | 残 存 高 7.9 | 焼成は細砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻。外面は黑色。内面は黄褐色を呈する。 | | |
| 28 | 壺 | 復元口径 10.1 | II縫部は上方にたちあがり、中程からわざりに外方に傾く。端部は丸い。 | | |
| | | 脚部最大径 14.2 | 肩部は外下方に張り出る。肩部から脚部は屈曲して下内方へ下る。 | | |
| | | 残 存 高 6.9 | 焼成は良好で堅緻。II縫部内面と外面全面に暗緑色の釉がかかる。 | | |
| 29 | 壺 | 口 住 | I縫部は、上方にのびる。 | | |
| 17- 5 | | 脚部最大径 13.4 | 肩部は外下方に下り、胸部は内寄気味に下り、底部につづく。丸い底部の中央には脚台の 痕 存 高 12.2 合成部が残る。外内面全面に回転ナガ調整を丁寧に行なう。 | | |
| 30 | 壺 | 口 住 | II縫部は、外反気味にたちあがり、端部付近では器壁がうすくなり直立する。 | | |
| 17- 6 | | 脚部最大径 13.7 | 肩部は、丸味をもって下外方に下る。胸部は下内方に下り、手荒く回転ヘラケズリを行な 痕 存 高 11.1 う。脚部以下部器壁の厚さは一様ではない。焼成は良好で堅緻。 | | |
| 31 | 壺 | 復元口径 10.0 | I縫部は、上方にたちあがる。器壁は厚く、端部は丸い。 | | |
| | | 脚部最大径 17.3 | 肩部はなだらかに下外方に下り、胸部は内寄気味に下外方に下る。器壁の厚さは、ほぼ一様である。胎土は微砂粒を多く含む。焼成良好で堅緻。外面に暗緑色の釉がかかる。 | | |
| 23- 1 | 提瓶 | II 住 | I縫部は、外反気味にたちあがり、中程に強い稜線と一条の凹線が残る。II縫部は、わざ 18-A・B 脚部最大径 19.2 かに外方に傾きながら上方にのびる。肩・胸・底部は、正面ではやや長い球形を呈し、側 面では、背中中央が平坦な折円形を呈する。底部に下方へ屈曲した1対の把手が付く。 | | |
| 2 | 壺 | 口 住 | I縫部は直立し、II縫部は内寄気味にのびる。 | | |
| 18-C・D | | 脚部最大径 17.7 | 肩・胸・底部は、正面ではほぼ球形を呈する。側面では背面が平坦で、正面は、中ふくら 器 高 21.7 みの器形を呈する。肩部に上方へ屈曲した左右一対の把手が付く。底部はカキ目調整。 | | |
| 3 | 提瓶 | 口 住 | II縫部は外反気味にたちあがり。II縫部は上方にのび、端部に向って器壁はうすくなる。 | | |
| | | 脚 存 高 10.9 | 肩・胸部は下外方に内寄して下り、以下欠損。肩部に折れの把手が左右に付く。 | | |
| 4 | 提瓶 | 口 住 | II縫部は外反してのび、II縫部は上・下・外方に軽く張り出す。肩部はなだらかに下外方 17.3 に下り、把手がつく。体部に細かいカキ目調整を行なう。焼成良好で黑色を呈する。 | | |

| 回数 | 番号 | 筋種 | 法量(cm) | 所見 | ハラ記号 |
|------|----|------|---|--|------|
| 23 | 5 | 提板 | 口 徒 8.6 残存高 7.0 | 口頭部は外反しながらあがり、口縫端部は外方にのび、曲を成す。肩部は、内寄しながら下外方に下り、把手が付く。口頭部の接合部は丁寧にチグ正在进行。 | |
| 6 | | 提板 | 復元口徑 8.9 残存高 5.5 | 口頭部は、盛りした後上外方にのびる。口縫端部下に山形を造らす。口縫端部は外側する面を波す。肩部は下外方に下る。把手は微砂粒を含むが粗朶である。 | |
| 7 | | 提板 | 口 徒 4.0 残存高 6.3 | 口頭部は外上方にたまがり、口縫部は内寄気味に上方にのびる。 肩部は内寄しながら下外方に下り、縫合部が付く。面形に比べて口縫部は厚い。 | |
| 8 | | 提板 | 復元口径 3.1 残存高 4.6 | 口頭部は、上方にたまがり。口縫部はわずかに外傾し、端部は上方にのびる。 肩部は外下方に下り、先端が削くなる把手が付く。 | |
| 9 | | 提板 | 口 徒 4.6 残存高 4.1 | 口縫部は基部が厚く、口縫端部まで上外方にのびる。 口頭部の接合後の調整は稚である。把手は精良。 | |
| 10 | | 提板 | 口 徒 5.9 残存点 11.6 | 口頭部は、外反しながら、上方にたまがり。口縫部は上方にのびる。 肩部はなだらかに下外方に下る。焼成は良好で、ところどころ暗緑色の釉が厚くかかる。 | |
| 11 | | 提板 | 口 徒 5.5 残存高 9.8-つづき | 口頭部は、丸い口縫端部まで上外方にのびる。肩部は、内寄しながら下外方に下り割れ部に 割れ部は、丸味をもって下外方に下る。肩部はカキ目調整後、縮方向にハケ目を入れる。 | |
| 12 | | 提板 | 口 徒 7.0 残存高 10.4 | 口縫部は、外方にたまがり、口縫部は内寄気味に上方にのびる。 割れ部は、丸味をもって下外方に下る。肩部はカキ目調整後、縮方向にハケ目を入れる。 | |
| 13 | | 提板 | 口 徒 10.5 肩部最大径 22.8 残存高 17.1 | 口縫部は、上外方にたまがり。口縫部はさらには外反しながらのびる。口縫部は焼成重ん でいる。肩部は、内寄気味に下外方に下り、把手が付く。体部は正面・背面とも、細かい カキ目調整を行なう。別個体の破片が搭載している。 | |
| 14 | | 提板 | 肩部最大径 18.4 残存高 18.2 | 口頭部は上方にたまがり。口縫部は欠損している。 把手口徑 11.4 | |
| 24-1 | | 横板 | 口 徒 5.3 | 把手部は基部より直立し、口縫部は外反し、端部は丸く肥厚する。 | |
| 2 | | 横板 | 口 徒 12.7 | 口縫部は、上外方にたまがり。口縫部は外反しながらのび、端部は外下方に折れ曲り、 玉縫状を呈する。肩部の外面は子状タッキ、内面は円弧タッキ調整を行なう。 | |
| 19-2 | | 横板 | 口 徒 6.8 | 口縫部は、内縮した後、上外方に長くのびる。端部は上方にのびる。 | |
| 3 | | 横板 | 復元口径 9.7 残存高 7.6 | 口縫部は、内縮した後、上外方に長くのびる。端部は上方にのびる。 | |
| 4 | | 表 | 口 徒 12.0 残存高 14.3 | 口縫部は、外反しながらのびる。口縫端部は外下方に折れ曲り、玉縫状を呈する。肩部か ら肩部は、内寄しながら下る。外面は平行タッキの上からカキ目、内面は円弧タッキ調整。 | |
| 19-1 | | 横板 | 復元口径 8.4 残存高 12.5 | 口縫部は上方にたまがり、口縫部は上外方にのび、唯部は平疊状に肥厚する。肩部は、 内寄しながら下外方に下る。外面はタッキの上からカキ目、内面は円弧タッキ調整を行なう。 | |
| 6 | | ねり 鋸 | 9.0 | 体部は、上外方へのびる。底部は、外方へ強引にし出足である。器壁は厚く、体部約2 cm | |
| 19-3 | | ねり 鋸 | 残存高 7.0 | 体部は、中央に1孔を穿つ。体部外側はやわらか目調整を行なう。 | |
| 7 | | ねり 鋸 | 7.1 | 体部は上外方にのびる。底部は欠損している。外面はカキ目、内面はヨコナタッキ調整を行な う。把手は、粗砂粒を含み密。焼成良好で堅緻。 | |
| 8 | | ねり 鋸 | 底 徒 11.0 | 体部は、直立気味に上外方にのびる。底部は外方へ張り出す。底部と体部の接合部内面は 厚い。底部中央に1孔を穿つ。暗緑色の釉が厚くかかる。 | |
| 19-5 | | ねり 鋸 | 残存高 11.2 | 体部は上外方にのびる。底部は体部との接合部で割離しておらず、指頭痕が残る。 | |
| 9 | | ねり 鋸 | 5.8 | 底部は上外方にのびる。底部内面は、筋膜が厚くなり、先端部になっている。外側はカキ目調整を行なう。 | |
| 10 | | ねり 鋸 | 9.3 | 体部は上外方にのび、外側はナチュラル、内面は凹凸ナタッキ調整を行なう。底部内面は丸底窓を呈 する。 | |
| 19-4 | | ねり 鋸 | 6.0 | ナタッキ調整。底部の土板は、侧面と底面をヘラケツリ調整している。 | |
| 11 | | 器台 | 復元口径 21.4 残存高 7.7 | 体部下半は、粗いヘラケツリ調整を行なう。底部は網砂粒を多く含む。以下欠損。 | |
| 12 | | 器台 | 復元口径 22.8 残存高 8.2 | 体部は、内寄しながら上外方にのび、口縫部でわざかに外反し、端部を下方に折り曲げる。 把手口徑 24.6 | |
| 13 | | 器台 | 丸い底部から体部は、外方にのびる。口縫部はわざかに外反し、端部は上方に肥厚し、 外側に開窓がある。外面を出しに細かいカキ目、内面は円弧タッキをナダですり消している。 | | |
| 14 | | 器台 | 復元口径 25.5 残存高 6.1 | 体部は内寄しながら上外方にのび、口縫部は外方へのび、外側に1条の開窓がある。 | |
| 15 | | 器台 | 復元口径 25.1 残存高 7.0 | 底部付近の外側に平行タッキ、内面に円弧タッキを行なう。 | |

| 部品 区分 | 番号 | 部種 | 法 量 (cm) | 所 見 | ハ ラ 記 号 |
|----------|----|-----------|-------------------------------------|---|------------|
| 24 | 16 | 器台 | 残 存 高 9.0 | 脚部破片。上に2条の沈線が通り、その間にハラ描き列点文と長方形透しを入れる。下方の沈線帯の下には、三角形の透しがある。端部は厚く、砂粒を適度に含む。 | |
| 17 | | 器台 | 底 付 20.8 | 脚部は、下外方に下り、底部でやや内側する。端部は内傾し、内側で擦地する。 | |
| 18 | | 蓋 | 残 存 高 11.3 | 脚部の内外面に1条の回線が通る。焼成は良好で黒色を呈する。 | |
| 19 | | 復元口径 | 11.7 | 口部は、基部より内傾到時における、口縁端部に内傾する面を成す。 | |
| | | 残 存 高 4.1 | 底部は、外下方に下る。内面は、円錐タキを行なう。外面は釉が厚くかかる。 | | |
| 25 | 1 | 復元 | 口径 20.8 | 口部は、上外方にたちあがり、口縁部は外反しておらず、端部は上下に肥厚する。 | ++ |
| 20 | 1 | 復元 | 残 存 高 6.4 | 底部は、外下方に張り出しが、抜け歪んでいる。頭部にヘラ記号がみられる。 | ++ |
| 2 | | 復元口径 | 16.0 | 口部は上方にのり、口縁部は外反する。端部は外方に丸く肥厚し、上端に浅く沈線が透り、内面にも回線がある。肩部外面はタキ目後のカキ目、内面は円弧タキを行なう。 | ++ |
| 3 | | 復元 | 残 存 高 6.1 | 口部から口縁部まで、外反気味に上外方にのびる。口縁端部は、外反しながら上に丸く肥厚する。底部は外下方に下る。頭部にヘラ記号がみられる。 | ++ |
| 4 | | 復元口径 | 17.2 | 口部は直立した後、口縁部は外反する。端部は下方にやや肥厚する。肩部は丸味をもつて下外方に下る。外面はタキ目後にカキ目、内面は強いチックで円弧タキ。 | ++ |
| 5 | | 復元 | 残 存 高 9.6 | 口部は上方にたちあがり、口縁部は外反し、端部は外上方に丸い面を成す。内面に凹凸がある。 | ++ |
| 6 | | 復元口径 | 18.3 | 口部は上方にたちあがり、口縁部はやや外反する。端部は外方に丸く肥厚する。肩部は外反する。カキ目調整を行なう。さらにヘラ描き文が入る。 | |
| 7 | | 復元口径 | 15.9 | 口部は上方にたちあがり、口縁部は外反気味に上外方にのびる。端部は下方に肥厚する。底部は丸味である。焼成不良で灰質。頭部にヘラ記号がある。 | |
| 8 | | 口 管 | 15.9 | 口部は内傾気味にたちあがり、口縁部は外反しながら上外方にのびる。端部は、外方に肥厚する。肩部の内外面に強いチックでタキを行ない、外面はさらにカキ目を施す。 | |
| 9 | | 復元口径 | 19.7 | 口部は、くの字状に外反し、口縁端部は外方に丸く肥厚する。肩部は、だらかに外下方に下り、肩部には内側気味に下る。外面はタキの上から細かいカキ目、内面は円弧タキ調整を行なう。 | ＼ |
| 10 | | 復元口径 | 24.9 | 口部は上方にたちあがり、口縁部はから外反する。口縁端部は外下方に肥厚する。 | |
| 11 | | 復元 | 残 存 高 5.7 | 底部は外下方に下る。口縁部外端と口縁部に釉がかかる。頭部にヘラ記号がみられる。 | |
| 12 | | 復元口径 | 22.1 | 口部は、一旦丸く直立した後、外反しながらのびる。口縁端部は、外方に肥厚し上端に凹凸を呈する。底部は外下方に下る。外面は暗緑色の釉が厚くかかる。端部にヘラ記号がある。 | X |
| 13 | | 復元 | 残 存 高 8.8 | 口部は上方にのびる。口縁部は外反し、端部は、外下方に張り出す。肩部は丸味をもって外下方に下る。底部は精緻である。焼成は不良で灰質。内底色を呈する。頭部にヘラ記号がある。 | |
| 14 | | 復元口径 | 20.5 | 口部は、上方にのびる。口縁部は外反し、端部は外下方に下る。外面は丸味を呈する。 | |
| 15 | | 復元 | 残 存 高 8.5 | 口部は上方にのびる。口縁部は外傾する面を成し、底下に断面三角形の縫がある。口部内面に円弧タキを重ねて行なう。 | |
| 16 | | 復元口径 | 17.4 | 口部は、上方にたちあがり、口縁部との間に沈線が通る。口縁部は外反し、端部は丸い。 | |
| 17 | | 横版 | 残 存 高 5.7 | 焼成は不良で灰質。乳白色を呈する。 | |
| 26 | 1 | 復元口径 | 13.6 | 口部は上方にたちあがり、口縁部は外反し下方に肥厚する。肩部の口縁部付近は、接合後、ヘラケズリ調整を行なう。口縁部の内面にヘラ記号がある。 | |
| 2 | | 復元 | 残 存 高 9.4 | 口部は上方にたちあがり。口縁部は外反する。端部は外傾する面を成し、底下に断面三角形の縫がある。肩部は下方に下り、外面は平行タキの上からカキ目調整を行なう。 | |
| 3 | | 復元口径 | 16.9 | 口部から口縁部は、上方にのび、端部は外方に丸く肥厚する。肩部は、だらかに外下方に下る。外面はカキ目調整を行なう。内面はタキをヨコナメで消している。 | |
| 4 | | 復元口径 | 20.9 | 口部は上方にたちあがり、口縁部は外反し、端部は丸い。肩部外面は平行タキ、内面は円弧タキを行なう。底上は、砂粒を多く含む。焼成良好で堅密である。 | |
| | | 復元 | 残 存 高 7.0 | 円弧タキを行なう。底上は、砂粒を多く含む。焼成良好で堅密である。 | |
| | | 復元口径 | 17.3 | 口部は上方にのび、口縁部は外反する。端部は上下に肥厚する。肩部は、丸味をもって外下方に下る。外面タキの上に細かいカキ目、内面はやや大きい円弧タキを行なう。 | |

| 回面 調版 | 番号 | 器種 | 法量(cm) | 所見 | ヘラ ス |
|----------|------|----|-----------------------------------|---|---------|
| 26-5 | | 甕 | 復元口径 22.2 残存高 8.0 | 口縁部は、一旦内傾した後、上方にのびる。口縁部は、強く外反する。端部は上方にのびる。肩部は、外下方に下る。部分的に焼成不良のところがある。 | |
| 6 | 20-2 | 甕 | 復元口径 24.7 残存高 7.8 | 口縁部は、上方に立ちあがり、口縁部は「外方にのびる」。端部直上に、断面三角形の棱線がある。胎土は比較的精良である。焼成はやや甘く、灰白色を呈する。 | |
| 7 | | 甕 | 復元口径 22.6 残存高 7.9 | 口縁部は、短かく直立した後、上方にのびる。口縁部は、強く外反し、端部付近から外方に肥厚する。肩部は上方にのびる。肩部の頭部との接合部付近の器壁は厚い。 | |
| 8 | 20-4 | 甕 | 復元口径 25.7 残存高 8.6 | 口縁部は、上方にのびる。口縁部は、外反し、端部付近で外方に肥厚する。焼成は良好で緻密。外面と口縁部内部に黒褐色の釉が厚くかかる。 | |
| 9 | | 甕 | 口径 21.4 残存高 10.8 | 口縁部は上方に立ちあがり、口縁部は上方にのびる。端部は、外反し、下方に肥厚する。肩部は、内寄気味に下方方に下る。外面に平行タキ、内面に円弧タキを密に強く施す。 | |
| 10 | 20-5 | 甕 | 口径 14.1 底部最大径 23.5 残存高 26.7 | 口縁部は、一旦短く内傾した後、上方にのびる。口縁部は、外反気味に上方にのびる。底部は下方丸く肥厚する。肩部は内寄しながら下り端部に直立する。底部は内寄しながら下り端部に直立する。肩部以下、外側は平行タキの上にカキ目調査。内面は円弧タキを強く南北に行なう。 | |
| 11 | | 甕 | 復元口径 19.5 残存高 6.0 | 口縁部は外反しながら上方にのび、口縁部は端部付近で外方に肥厚し、上方と外方に面を成す。肩部外側は平行タキの上に細かいカキ目調査、内面は円弧タキを行なう。 | |
| 12 | | 甕 | 復元口径 17.5 残存高 6.7 | 口縁部は上方にのび、口縁部は外反する。端部は上方に肥厚し、1条の沈線が底る外側は平行タキの上にカキ目、内面は円弧タキを行なう。 | |
| 13 | | 甕 | 復元口径 14.8 残存高 5.5 | 口縁部は上方にのび、口縁部は短かく外反し、下方に肥厚し下方の端部は丸い。胎土は精良である。焼成不良で軟質。灰白色を呈する。 | |
| 14 | | 甕 | 復元口径 14.5 残存高 5.9 | 底部から口縁部は上方にのび、端部は外傾する面を成す。端部直下に断面三角形の棱線がある。胎部外側は格子状タキ、内面は円弧タキを行なう。 | |
| 15 | | 甕 | 復元口径 16.3 残存高 5.8 | 口縁部は、内寄気味に立ちあがった後、上方にのびる。口縁部は、外反する。肩部は、外側に格子状タキ、内面は円弧タキを行なう。 | |
| 27-1 | | 甕 | 復元口径 11.3 残存高 6.0 | 口縁部は上方にのび、口縁部は外反する。端部付近は、外下方に肥厚し面を成す。肩部は、などらかに外下方に下る。外側は細かいカキ目調査を行なう。焼成はやや甘く、淡茶色を呈する。 | |
| 2 | | 甕 | 復元口径 13.0 残存高 6.2 | 口縁部は上方にのび、口縁部は外反する。端部は外方に肥厚し、先細りとなる。肩部は下外方に下る。肩部内面を強くコナダしている。 | |
| 3 | | 甕 | 口径 13.6 残存高 8.5 | 口縁部は上方にのび、口縁部は外反する。端部付近は外下方に肥厚し面を成す。肩部はなだらかに外下方に下る。外側は細かいカキ目調査を行なう。焼成はやや甘く淡茶色を呈する。 | |
| 4 | | 甕 | 復元口径 13.4 残存高 10.2 | 口縁部は上方に立ちあがり、口縁部は外反する。端部は下方に丸く肥厚し、下方に折り曲げる。肩部は丸味をもって外下方に下り、端部は内寄気味に下る。 | |
| 5 | | 甕 | 口径 13.0 残存高 9.4 | 口縁部は上方に立ちあがり、口縁部は上方にのびる。端部は外方に肥厚し、丸味をもった面を成す。肩部は下外方に下り、端部は屈曲し、内寄気味に下る。 | |
| 6 | | 甕 | 復元口径 15.2 残存高 3.9 | 口縁部は上方に立ちあがり、口縁部は上方にのびる。端部は、強く外反する。肩部は、丸味をもって外下方に下る。外側はカキ目。内面は円弧タキを行なう。 | |
| 7 | | 甕 | 復元口径 15.4 残存高 8.0 | 口縁部は、上方にのびる。口縁部は上方・下外方に短く肥厚する。肩部は、下外方に下り、肩部はわずかに内寄する。胎部は、砂粒を多少含む。 | |
| 8 | | 甕 | 復元口径 13.4 残存高 10.5 | 口縁部は上方に立ちあがり、口縁部は外反する。端部付近は上方に肥厚する。肩部は、丸味をもって外下方に下る。胎部は下方に下る。胎部は、砂粒を多く含む。 | |
| 9 | 20-6 | 甕 | 復元口径 16.0 残存高 11.0 | 口縁部は、上方にのびる。口縁部は、強く外反する。端部は、下外方に肥厚する。肩・頭部は、丸味をもって外下方に下る。外側はタキの上にカキ目。内面はタキの上にヨコナダ。 | |
| 10 | | 甕 | 復元口径 18.7 残存高 8.7 | 口縁部は外反しながら上方にのび、口縁部は端部付近で外下方に肥厚する。肩部は内寄ながら下外方に下る。外側はタキの上にカキ目。内面はタキの上にヨコナダ調整。 | |
| 11 | 20-7 | 甕 | 復元口径 17.7 残存高 9.8 | 口縁部は、くの字状に外反する。口縁部は強く外反し、外傾する端部の上下端に沈線が進む。肩部は内寄しながら下外方に下る。肩部の頭部付近に段がつく。 | |
| 12 | | 甕 | 復元口径 15.2 残存高 6.0 | 口縁部は上方にのび、口縁部は外張り、端部を下方へ折り曲げる。胎部は、下外方へ下る。胎部は砂粒を含まず、緻密である。焼成不良で軟質、乳白色を呈する。 | |
| 13 | | 甕 | 復元口径 17.6 残存高 7.0 | 口縁部は短かく上方にのび、口縁部は外反し、端部は上方にのび、外傾する面を成す。肩部は、外側に平行タキの上からカキ目。内面は円弧タキを密に行なう。 | |
| 14 | | 甕 | 復元口径 14.7 残存高 8.2 | 口縁部は、くの字状に外反し、端部付近は外方に肥厚し、外方に丸い面を成す。肩部は、丸味をもって下外方に下る。内面は円弧タキの上からヨコナダ調整を丁寧に施す。 | |

| 回頭 回版 | 番号 | 若種 | 法量 (cm) | 所見 | ヘラ 記号 |
|----------|----|----|-----------------------|--|----------|
| 27-15 | | 裏 | 復元口径 20.9 残存高 8.3 | 口縫部は一寸短く内傾した後、山縫部は外反し、端部付近で外方にのび、端部は上方に向かう。船は砂粒を多く含む。鱗成は魚好而堅硬である。 | |
| 16 | | 裏 | 復元口径 17.7 残存高 9.4 | 口縫部の脊髄は厚く、この状態に外反する。山縫部は、内面側の骨壁がうすくなり、外張りし、端部は下外方に折れ曲がる。口縫部外面と肝部内面は黒色で、他面は茶色を呈する。 | |
| 17 | | 裏 | 復元口径 16.7 残存高 7.1 | 口縫部は上外方にのび、11縫部は外反し、外下方に肥厚し、端部は上方に鋸くのびる。脣部は下外方に下る。外面上は半円タクキの上にカキ目。内面は円弧タクキの上にココナチ網眼。 | |
| 28-1 | | 裏 | 復元口径 23.7 | 口縫部は、外反しながらのびる。口縫部は、さらに強く外反し、外方にのびる。端部は丸い。脣・脚部は、内寄しながら外方に下る。肩部下に2条の沈縫が走り、沈縫上に上向 | |
| 20-8 | | 裏 | 残存高 13.3 | 他の肥厚が付く。 | |
| 2 | | 裏 | 復元口径 12.8 残存高 7.3 | 口縫部は、外側味丸に上方にのびる。口縫部は、中央がわずかに膨らむ平面を成す。脣部は丸味をもって下外方に下る。口縫部から肝部まで、脣部はタクキの上から糸を引なう。 | |
| 3 | | 裏 | 復元口径 16.3 残存高 8.2 | 口縫部は、内傾気味に下方にのびる。口縫部は、外端附近に沈縫が走る平面を成す。脣部は下外方に下り、脚部はわずかに屈曲して、下外方に下る。 | |
| 4 | | 裏 | 復元口径 14.0 残存高 5.3 | 口縫部は内傾しながら上方にのびる。口縫部は、中央がわずかに内寄する。脣部は内傾する平面を成す。脣部は下外方に下る。外面上に闇緑色の筋がある。 | |
| 5 | | 裏 | 復元口径 31.0 残存高 8.1 | 口縫部は、外反しながら外方にのび、2条の沈縫が走る。口縫部は大きく外反し、脣部は下方に折り曲げ、下端間に沈縫を入れる。 | |
| 6 | | 裏 | 復元口径 42.7 | 口縫部は外反しながら上方にのび、11縫部は上下に鋸くのびる。11縫部中央に1条、口縫部下に2条、さらにその中間に2条の凹輪が走り、凹輪帶間に細かい鰐状文様が施されている。 | |
| 21-1 | | 裏 | 模存高 18.0 | | |
| 7 | | 裏 | 復元口径 51.2 残存高 12.7 | 口縫部は外反しながら上方にのび、口縫部は外方に短くのびる。脣部は上方に鋸く肥厚し、下端に凸縫を貼付している。11縫部下に1条、脣部に2条の凹輪帶を2本と鰐状き點文様を2段施す。 | |
| 8 | | 裏 | 復元口径 54.8 残存高 9.4 | 口縫部は外反しながら上方にのび、11縫部は角度を変え上方にのびる。上端は、両端が丸い平底を成す。口縫部に1条、脣部に2条の凹輪帶を2段と短かい鰐状き點文様を2段施す。 | |
| 29-1 | | 裏 | 復元口径 47.7 残存高 17.2 | 口縫部は基部附近は厚く、外反しながら上外方にのび、口縫部は薄部付近で強く外反する。脣部は上方に鋸くのび、下端に凸縫を貼付している。口縫部には、3段の凹輪帶とその間にヘラ描きの文様等がある。 | |
| 21-3 | | 裏 | 復元口径 48.1 残存高 17.8 | 口縫部は外反しながら上方にのび、口縫部はさらに外反し、脣部は上方にのび、下端に沈縫と凸縫が走る。頭部には、3条の凹輪帶を3段と、ヘラ描きの文様等を2段施す。 | |
| 3 | | 裏 | 復元口径 58.0 残存高 17.6 | 口縫部は外反しながら上方にのび、11縫部付近でさらに強く外反する。脣部は上方にのび、外方に肥厚し、外端する平面を成す。文様等の配分は2と同じである。 | |
| 4 | | 裏 | 復元口径 59.3 残存高 13.6 | 口縫部は、強く外反しながら上方にのびる。口縫部はさらに外反し、脣部は下外方に肥厚させ、下端に凸縫を貼付する。口縫部下に1条の凹輪と脣部に2条の凹輪帶とヘラ描き文を2段づつ施す。 | |
| 30-1 | | 裏 | 復元口径 41.9 残存高 8.7 | 口縫部は上外方にのび、11縫部は外方に肥厚し、上端中央と外端に凹輪を造らす。口縫部下に2条の凹輪と、脣部に鰐状き文を施す。船は砂粒を多く含む。 | |
| 2 | | 裏 | 復元口径 56.0 残存高 16.1 | 口縫部は、大きく上方にのびる。口縫部は、外方に肥厚し、1と11縫上・外端部に凹輪が走る。2条の凹輪帶を3段、鰐状き文を2段施す。 | |
| 3 | | 裏 | 復元口径 55.1 残存高 18.0 | 口縫部は上方にのびた後外反し、11縫部は外方に肥厚し凹輪が走る。口縫部下の1条の凹輪の下から頭部中央まで3本1半位の筋肉を削除した後、凹輪帶を2段施す。 | |
| 21-4 | | 裏 | 復元口径 51.6 残存高 6.4 | 口縫部は上方にのびる。口縫部は外縫は外縫とする。凹輪部は上に肥厚し、外方に面を成す。残存高 6.4 | |
| 4 | | 裏 | 復元口径 44.2 残存高 7.1 | 口縫部は、外反しながらのびる。11縫部は、角度を変え直立気味に上方にのびる。脣部は下外方に肥厚し、外縫する面と凹輪の走る面を成す。口縫部下には波状文を施す。 | |
| 23-7 | | 裏 | 復元口径 40.9 残存高 6.2 | 脣は肥厚し、わずかに外縫する面を成す。口縫部は角度を変えて上外方にのび、上端は肥厚し、わずかに外縫する面を成す。口縫部に凹輪帶と波状文・列点文を施す。 | |
| 6 | | 裏 | 復元口径 28.8 残存高 6.9 | 口縫部は、外反しながら上方にのび、凹輪を境に口縫部は上方にたどりあがる。脣部は肥厚し、内傾する面を成す。口縫部に、凹輪帶に供給されて波状文と列点文を施す。 | |
| 7 | | 裏 | 復元口径 12.8 残存高 16.9 | 体部は上方にのびる。頭部中央に一寸の凹輪が走る。凹輪上に把手がつくものと思われる。底縫部の内外面をヘラケズリで整形している。船上は海砂粒を多く含む。 | |
| 2 | | 裏 | 残存高 4.9 残存幅 4 | 底縫部にのびる体部の一端と中縫から上方に曲がる把手である。把手は、細砂粒を多く含む灰白色を呈する。 | |
| 3 | | 把手 | 長さ 4.4 | 基部は太く、中強みの後、上方にのびる。船上は野村をあまり含まず精良である。 | |
| 4 | | 把手 | 長さ 3.4 | 基部は太く、中程でやや細曲し細引となる。焼成食好で堅硬、黒灰色を呈する。 | |

| 表面 | 番号 | 器種 | 法量 (cm) | 所見 | 備考 |
|------|----|-------|---|--|----|
| 31-5 | 種 | 残存 横 | 6.4 | 蟲の盗部である。大きな円孔の一部と、直径7mmの小孔が穿ってある。 胎土は砂粒を含むのみで、比較的粗良である。 | |
| 6 | 把手 | 長さ | 6.9 | 肉瘤が曲がり、背部等に接合する把手である。把手は砂粒を若干含むのみで粗糲。 | |
| 7 | 軸子 | 残存 高 | 8.9 | 口唇部は、外方にのびる。口唇部は欠損している。背部と口唇部との接合部付近はぼく、 脇部にかけて内面気味に下るにつれてうすくなる。側部外面にカキ目調査を行なう。 | |
| 22-1 | | | | | |
| 8 | 軸子 | 残存 高 | 11.9 | 底部上端以上は欠損している。質部は、丸味をもって外方に下り、側部は彎曲して下方に下る。底部は凹みをもった平底である。 | |
| 9 | 瓶子 | 腹部最大径 | 12.1 | 口頭部は、脇部との接合部から脇壁がうすくなり、上方へたちあがる。脇部は内面しながら下る。 残存 高 | X |
| 10 | 瓶 | 口 径 | 16.3 | 口頭部は、内面気味にたちあがった後、上方外方にのびる。口頭部は強く外反し、端部は下方に前面三角形を呈して肥厚する。脇部外面にカキ目調査を行なう。 | |
| 22-2 | | 残存 高 | 8.7 | | |
| 11 | 壺 | 口 径 | 10.0 | 口頭部は上方に立ちあがり、口頭部は強く外反するが、部分的に幾ヶ所で折れ曲がっている。 残存 高 | |
| 12 | 壺 | 残存 高 | 13.5 | 口頭部は上方にのびる。口頭部は欠損している。質部・底部は、ほぼ球形を呈する。側部下 半から底部にかけて同様にヘタケズリ、頭部上半以上は同様ナダと部分的にナダ調整を行なう。 | |
| 22-3 | | | | | |
| 13 | 壺 | 腹部最大径 | 16.5 | 口頭部は、直立する茎部のみで上方は欠損している。底部から脇部に、ほぼ球形を呈する。 残存 高 | |
| 14 | 壺 | 復元口径 | 9.3 | 口頭部は内面気味に立ちあがり、端部は内傾する面を成す。体部は、内面しながら下る。 | |
| | | 残存 高 | 6.7 | 体部中央に2条の凹部がある。 | |
| 15 | 壺 | 復元口径 | 10.6 | 口頭部に内傾しながら上方にのびる。端部は丸い。体部は下方へ下り、底部は欠損して いる。口頭部に1条、その下に2条の深い洗線と中段で下方に折れ曲がる把手を有する。 | |
| | | 残存 高 | 8.8 | | |
| 16 | 肉瘤 | 残存 横 | 7.5 | 陶器の身の側面の一部とされる。横方向に断面四角形の凸部を貼付している。腹方向の 残存 高 | |
| 22-7 | | | 10.8 | 凸部は、はざれている。胎土は砂粒を多く含み粗い。 | |
| 17 | 陶柱 | 残存 横 | 10.3 | 16と同様く、陶柱の身の側面の一部と思われる。縦・横に凸部を貼り付けている。外面に 残存 高 | |
| 22-6 | | | 8.0 | 平行なタキ。内面に円弧タキがみられる。胎土は砂粒を多く含む。 | |
| 18 | 壺 | 復元1号 | 12.3 | 口頭部は、上方外方にのびる。体部は、内面しながら下り、2条の深い凹部が2条ある。 | |
| | | 残存 高 | 4.6 | 4.2 平底状を呈する。口頭部は少し浮き立ち。 | |
| 19 | 壺 | 口 径 | 10.7 | 口頭部の上方にのび、端部は強く外方にのびる。口頭部と体部の境は深い段がつき、体部 器 器 | |
| | | 高 | 4.2 | は下方向に下る。底部はほぼ平底でカキ目調査を行なう。 | |
| 20 | 壺 | 口 径 | 11.1 | 口頭部は、直立にのびるがうすい。体部は、内面しながら底部に下る。底部は平底である。 | |
| | | 器 | 高 | 4.6 口頭部下に洗線を施すことにより縦に張り出す。さらに下に深い凹部が1条ある。 | |
| 21 | 壺 | 口 径 | 12.5 | 11口頭部の上方に凹部を有して上方にのび、端部は丸い。体部は、下方向に下る。底部は、 器 器 | |
| | | 高 | 5.3 | 縦の不整な面ナダを施した断底である。胎土は砂粒を多く含む。 | |
| 22 | 壺 | 口 径 | 7.6 | 犬弁部はなだらかに下る。器表はヘタケズリを丁寧に行ない平滑である。壺部からかえり | |
| | | 器 | 高 | 2.8 にかけて器壁は厚く、かえりの端部は強く上方にのびる。 | |
| 23 | 蓋 | 口 径 | 8.9 | 犬弁部は、なだらかに下り、器表は平滑である。内側するかえりとの間に洗線が通る。 | |
| | | 残存 高 | 2.8 | かえりの端部は、下方に下り接続する。胎土は、砂粒をほとんど含まず精良である。 | |
| 24 | 蓋 | 口 径 | 7.9 | 犬弁部はなだらかに下り、端部は丸い。内面の器表はマキアゲの凹凸があり、端部付近に 器 器 | |
| | | 高 | 3.4 | 内側するかえりを有する。かえりで接続する。器表は全體的に丸い。天井部中央に上面中 つまみ縫 | |
| 22-4 | | | 2.5 | 央がわざかに埋めつまみが付く。 | |
| 25 | 蓋 | 口 径 | 8.3 | 犬弁部はなだらかに下り、内面にかえりを有するあたりから、外方へ長くのびる。かえり | |
| | | 器 | 高 | 3.9 は内傾し、端部は鋭い。天井部中央に上面中のつまみが付く。 | |
| 22-5 | | | 2.7 | 胎土は砂粒を含みやや粗い。焼成は良好で種がかかる。 | |
| 26 | 蓋 | 口 径 | 8.0 | 天井部はなだらかに下り、内面にかえりを有するあたりから、外方へのびる。かえりは内 器 | |
| | | 高 | 3.1 | 傾し、端部はうすく鋭い。犬弁部中央に、扁平なつまみが付く。かえりの外側に別個体の つまみ縫 | |
| 27 | 蓋 | 口 径 | 9.4 | 口頭部の一部が接着している。 | |
| | | 器 | 高 | 4.0 天井部はなだらかに下り、端部は外方に鋭くのびる。内側するかえりの基部は広く、端部 つまみ縫 | |
| | | 2.1 | は鋭い。犬弁部中央に上面がやや僅わ少よりのつまみが付く。外側には、縫と深縫が接続 している。 | | |
| 28 | 蓋 | 口 径 | 4.9 | 天井部はなだらかに下り、内面に円弧タキの後、器表を平滑で大きなつまみが付く。 | |
| | | 残存 高 | 3.7 | 胎土が粗く、「面が平坦で大きなつまみが付く」。 | |
| 29 | 土鉢 | 残存 高 | 4.7 | 球形の体部の底に長方形のスカシと小さな円孔を穿つ。 | |

第V章 まとめ

今回の調査で検出した窯は残存状態が悪く、窯体の規模、構築法など詳細にできなかった点もあるが、若干考えられることを述べ、まとめにかえたいと思う。

まず窯体の規模であるが、検出した状態で焼成部の大半が削平され、また北側側壁も崩壊しており正確な数値はだせない。ただ現状より、長さ3~4m、高さ2~3mは追加され、全長10m前後、最大幅2.5mはあったものと推定される。

立地に関しては、検出した状態が現地形の頂点にあたり、前述したように著しく地形が損われている。しかし、何れにせよ頂上変換点斜面を利用して頂上に煙道部が出るように設定していることは確かである。設定場所は凸状に延びた丘陵の先端斜面上部に地形に沿って、東西に中心軸を置き、灰原を中心とした扇形に整形している。設定場所として凸状の地形を選ぶのは、2-2、2-10、2-18、2-19、2-23、2-24窯など、桜井谷古窯跡群中一般的にみられる傾向であるが、頂上部に立地するのは島熊山窯跡、2-27窯跡、合計3例しかなく、なぜ頂上付近斜面に設定したのか疑問がもたれる。生産に伴う諸作業、例えば水、薪、製品の搬出入など、理解に苦しむ点もあるが、それ以上に利点となるべきものがあったはずである。その1要因として製品の焼き上がりを重要視したとみたならば、火通りを良くするため、吹き上げる風を利用し、焼成温度を上げる意図が配慮されていたと考えられるなど、諸要素があるものと思われる。

構築法は、残存状態から半地下式の構造をもつものと推定される。桜井谷古窯跡群中、多くがこの構造と思われるが、2-18、2-23など地下式構造をもつものも報告されている。^{註3} ^{註4}

この窯の構造で特徴的なのは、第1次窯の前庭部である。焚口前面を長さ2m、幅4.6m、深さ0.3mの楕円形に掘り、掘った土を盛り上げ、灰原斜面と区画している。また南肩部分には斜め方向に杭状の痕跡が検出された。想像を逞しくすれば、覆い屋根状のものがあったことを推定させる。雨露を凌ぎ、また火を焚きやすいように、灰を掘り出しやすいように工夫されていたものであろうか。この時期の窯には燃焼部から焚口にかけて舟底状ピットと呼ばれるものがあるが、それとは別の性格のようである。この落ち込みも第2次窯の最終操業期では使用されていない。

第1次窯と第2次窯の関係であるが、灰原層位と出土遺物の検討から時間差はほとんど認められない。灰原斜面では第2次窯の灰層の下部に第1次窯の窯体混りの層が堆積し、層位を明確に区別できるにもかかわらず、遺物に型式差が認められないことより、第1次窯は短期間の使用でなんらかの理由により、操業できなくなり、第2次窯は中軸を北寄りに移し、構築しながらしている。以後、継続的に使用されたようである。同じような例は2-24窯でも確認されている。^{註5} また反面、断続的に使用され、空白期間を置く窯が2-18窯と上野青池南畔窯跡にある

ことが知られている。

このような結果を踏まえ、桜井谷古窯跡群内での操業移動がどのようにされていたのか明らかにしていかなくてはならないが、大部分の窯が消滅してしまった現在、そのいかなる道も閉ざされている。

本窯での出土遺物の統計をみると、杯や甕について、提瓶の多いのが目につく。他の窯で灰原を全掘している例がないので明確にはできないが、この窯跡群では個々の窯において特徴を現わす器種がみい出せそうである。また器種や調整手法においても、甕や静止ヘラケズリの採用など、陶邑と趣きを異にするものも存在するなど興味を引く点もある。

以上、今回の調査から考えられることを述べてみたのであるが、基本的な問題として、生産者集団の居住地、產品の搬出経路など明らかにしなければならない問題が山積されている。このような基本的な問題を一つ一つ解明して、総合的判断を下す上において、本報告では現在までの資料から編年作業の試案を、また胎土分析の報告を合わせて載せさせていただいた。このように桜井谷古窯跡群の研究は緒に付いたばかりであり、以後進めていかなければならないが、大部分の窯跡が消滅してしまった今、遅き觀がしないでもない。

(柳本)

註1 島田義明「桜井谷窯跡群2—19窯跡・2—24窯跡」桜井谷窯跡群発掘調査会 1977

2 豊中市緑ヶ丘5丁目で共同住宅建設工事に伴う調査で検出。昭和58年1月～2月調査

3 島田義明「下村町池窯跡」豊中市教育委員会 1974

4 註1と同じ

5 註1と同じ

摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年

木下 真

I 序

千里古窯跡群は、大阪府豊中市・吹田市・箕面市・茨木市を中心に広がる千里丘陵に営まれた須恵器窯跡群である。窯跡は、主に豊中市側と吹田市側に二分して分布しており、各々、桜井谷古窯跡群・吹田古窯跡群と呼称されている。また、これらの総数は、百基に近いものと考えられる。ここで述べる桜井谷古窯跡群は、吹田古窯跡群よりも、時期的に操業開始が遅るもので、主に豊中市域の北部、千里川水系沿の段丘上に立地している。

当該地域に対する調査研究は、比較的早く明治時代中頃、ウィリアム・ゴーランドによって^{註1}開始されたといえる。以後、大正年間には笠井新也・桜井義彰氏等により、窯跡の分布調査、遺物の収集などが精力的になされている。しかし窯跡に対しての積極的な発掘調査までは、この段階ではなされていない。その後暫くの間、当窯跡群に対する研究は途絶えることになる。再び調査が活発化するのは、戦後になり千里丘陵内部にまで開発が及ぶようになってからである。

農中市域では、現在までに11基の窯跡について部分的なものをも含めて何らかの形で発掘調査が行なわれ、資料の蓄積がなされている。それによって、やや大雑把ながらも当窯跡群における生産開始期より終焉までの器種の変遷を知ることができ、当窯跡群の特徴も次第に明確になりつつある。

中でも須恵器の編年については、大阪府下ではすでに陶邑古窯跡群において詳細な研究がなされており、当地域に関しても從来陶邑古窯跡群での成果に準拠した編年研究がなされてきた。しかるに從来蓄積されて来た資料を分析した結果、当地域においては陶邑編年が必ずしもそのまま当て嵌まらない部分が存在することが明らかとなった。

したがって本稿では、從来の調査成果を踏まえた上で、当地における須恵器の編年を示すとともに、たとえ近接地における編年とはいえ陶邑との相違点を取り上げ、今後の研究に資したい。

なお須恵器編年を行なうにあたって、出土遺物の大半を占める灰原は、層位的にも不安定で、編年作業を行なう上では明確な基準とは認め難い。それに対して、窯体内から出土する須恵器は、焼成中に天井部が崩壊した例など極一部を除いてはあまり多いとはいえない。しかし窯体内では焼成毎の床面補修などにより、その間層に残された遺物が編年の上で極めて有効な指標となり得ることが指摘されている。よって本稿においても、出来得るかぎり窯体内出土のものを基準としたが、窯体内部までの徹底した調査の少ない現在、窯体内出土のものを指標として、灰原出土遺物も検討の対象とすることにした。よって今後の調査の進展によつては、若干の修正が必要となる点も出て来ると思われるが、大局的には問題ないと考えている。

本稿で取り扱った資料の出土窯跡は、以下の通りである。

- 1 2-2 (下地蔵ヶ岡) 窯跡 豊中市宮山町4丁目
- 2 2-16 (羽鹿池東畔) 窯跡 同上野坂2丁目
- 3 2-18 (下村町池) 窯跡 同桜の町6丁目
- 4 2-23 (永楽荘) 窯跡 同永楽荘4丁目
- 5 2-26 窯跡 同北緑丘1丁目
- 6 2-10 (新池北畔西) 窯跡 同西緑丘3丁目
- 7 2-27 (島熊山) 窯跡 同新千里南町1丁目
- 8 2-17 (坊主山) 窯跡 同少路2丁目
- 9 2-25 窯跡 同西緑丘3丁目
- 10 2-24 窯跡 同北緑丘2丁目
- 11 2-19 窯跡 同北緑丘2丁目
- 12 2-19-2 窯跡 同北緑丘2丁目

II 各型式の特徴

本項では、当窯跡群における土器の変遷について、その特徴を記していく。そのさい基^{註6}本的な型式区分については、陶邑古窯跡群でなされている型式、段階という概念を導入し分類を行なった。そのために当窯跡群出土遺物を大きくI・II・III・IVの4型式に区分し、それらを更にI型式を3段階、II型式を5段階に細分した。なおIII・IV型式については資料的な制約があり、その細分は保留せざるを得なかった。

まず当窯跡群における型式区分となる遺物の変化について述べると、

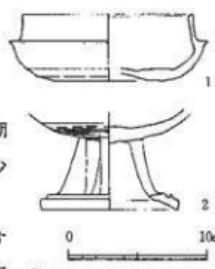
I型式 当窯跡群の生産開始期より、蓋杯が大型化するまで

II型式 蓋杯の大型化より、これに宝珠つまみが出現する前段階まで

III型式 宝珠つまみの出現から、杯蓋内面のかえりが消失するまで

IV型式 杯蓋内面のかえりが消失した以降

以上の様に各型式を設定したが、これらは陶邑古窯跡群でなされた区分と基本的に違うものではない。



I型式I段階の須恵器（第1図）

すでに述べたようにこの段階の土器は、当窯跡群における操業開始期に相当する。2-2号窯跡の窯体内と灰原より出土しているが、量は少なく図示できた器種はわずかに杯身と高杯だけである。

杯身は立ちあがりが高く2cm近いものが多い。口縁端部はやや内傾するが平坦面を形成しており、端部の作りは鋭い。受部は薄手でほぼ水平

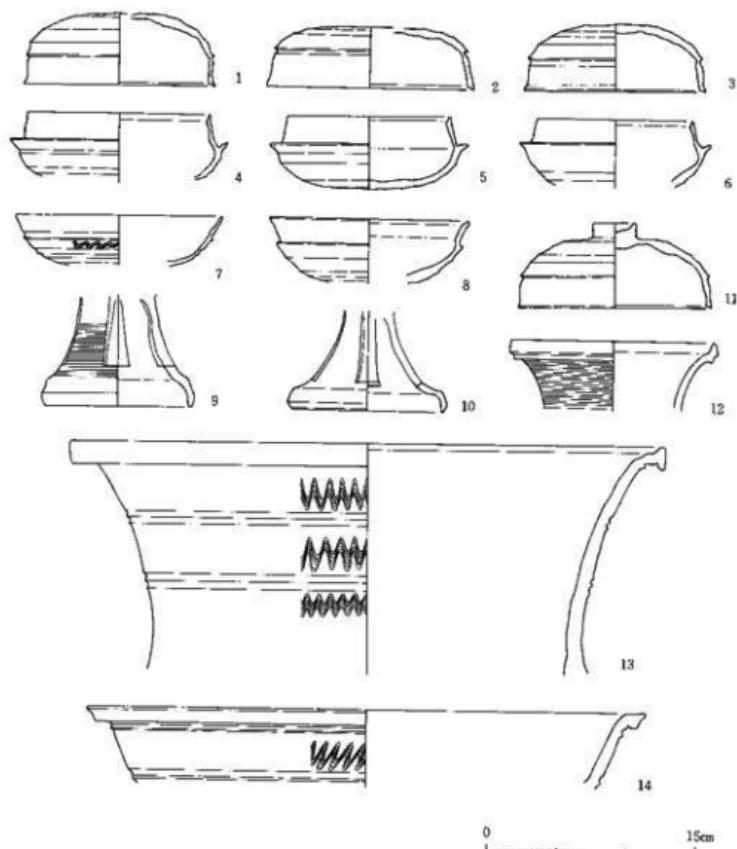
第1図 I型式I段階

になるか、またはやや上方に伸びる。体部は腰が張り一見平底に見える。底部には回転ヘラ削りが底部の約以上に施される。また削りの幅は狭く1cm位である。底部内面は、ナデにより仕上げられる。

高杯は、短脚のものが知れるだけであり全体は不明である。図示したものは、短脚高杯の脚部で、透し窓を三方向に均等に穿つ。透し窓の形状は、長方形を呈する。脚根部は稜を持ち段をなす。杯部底面は回転ヘラ削りの後、カキ目調整を加えている。

この段階の土器は一般に検出数が少なかったため、その他の器種については不明な点が多い。

I型式2段階の須恵器（第2図）



第2図 I型式2段階

桜井谷における生産が拡大しつつある時期で、窓の数も増加してくる。前段階に比べて形態に鋭さを欠く所が見られるが、ヘラ削りなどはまだ入念になされるものが多い。

蓋杯（1～6） 杯蓋は、口縁端部が凹状をなしかつ内傾するものが多い。天井部と口縁部を界する稜線は鋭く突出している。天井部の回転ヘラ削りは全体の $\frac{1}{3}$ ほどに施される。天井部は全体的に丸味を有する。内面は中央を一方向にのみナデ調整を行なう。

杯身はその立ちあがりが高く、2cm前後を維持する。口縁端部は内傾し、凹面を形成し、明瞭な段となっている。受部は前段階の場合と同様に器壁が薄く、やや上方に伸びる。手法上からみても、底部外面の回転ヘラ削りは、底部の $\frac{1}{3}$ 前後に施されており、きほど粗雑な感は受けない。内面はその底面を一方向に向かってナデ調整を行なう。全体に受部より下半の腰が張ったものが多く、底部の平坦なものから丸味をもったものへと過渡的な様相を呈している。

高杯（7～10） 有蓋・無蓋の区別があるが、有蓋のものの資料にはあまり恵まれていない。

無蓋高杯は、杯部が浅く口縁部が広く外反するもので、作りがやや粗雑である。体部には文様帶を有するものと、有しないものとがある。文様帶は鈍い稜線によって区切られ、その中に波形の整った波状文を施す。おそらくこの種の土器には文様帶上に、把手を貼付するものであると考えられる。製作手法では有文・無文の両者ともに底部は回転ヘラ削りにより、内面はナデにより仕上げられている。脚部は裾部が段をなして屈曲し、全体はラッパ状に開く。透し窓は三方または四方に穿けられるが、一般に四方のものが多い。透し窓の形状は長方形のものが多く、一部三角形のものも認められる。外面はカキ目調整を行なうものが多い。透し窓の数に四方のものが多い点は、同時期の陶器でのあり方に対して古い要素を残しているといえる。

有蓋高杯は断片的な資料しか得られていないが、杯部は蓋杯の杯身ときほど形状に差異は認められない。脚部は裾部を内側に折り曲げる短脚のものが知られている。透し窓は円形で、外面にはカキ目調整が施される。これに伴うと考えられる蓋(11)は、蓋杯につまみを付したものである。つまみの形状にはやや特異なものが認められ、円柱状を呈し中央のくぼんだものが存在する。

甕（12・13） 杯蓋と同様、出土量の多い器種であるが、その大きさから大小に二分することができる。

小型甕は口頭部がハの字状に外反し、端部で段をもち屈曲する。頭部にはカキ目調整が施されるものが多い。

大型甕は口頭部が緩やかに外反し、口縁端部は段をなし、断面三角形を呈する。頭部には二条一対の凹線を二ヶ所に巡らし、文様帶を3段に区分している。しかもそれぞれの文様帶の中に櫛描波状文を施している。それ以降の甕における櫛描波状文が、二条施されるのが通例であるのに対し、かなり装飾的であるといえる。

器台（14） 断面的な資料しか得られていないが、鉢部はやや浅くなるようである。口縁は上方へ屈曲し、段をなしており、端部は丸味をもって収められている。口縁下には凹線によっ

て文様帯を画し、その中央に櫛描波状文を施している。櫛描波状文は一条のみで、二条施した例はない。

I型式3段階の須恵器（第3図）

1段階から2段階までの土器は比較的鋭い作りであったが、3段階になると器形の在り方に乱れが見られ、粗雑化してくる。特に前段階では杯蓋の口径13~15cm、杯身の口径12~13cm前後を維持していたものが、この時期になると一概に縮小化の傾向を辿る点が注目される。

蓋杯（1~6）杯蓋は口径12~13cm前後のものが一番多く見られる。器形には口縁端部が凹面をなす段を持ったものから、凹面をなすが全体的に丸味を持つ口縁端部へと変化しつつある。天井部と口縁部を界する綫線は鈍く、その突出が弱くなってしまって形態化が進んでいるといえよう。また天井部の作りは全体に丸味を有し高さを増す。手法から見ると、天井部の回転ヘラ削りは、全体の弓までは及ばなくなる。内外面共に回転ナデ手法によって仕上げられ、内面の中央部のみ一方向にナデを施している。

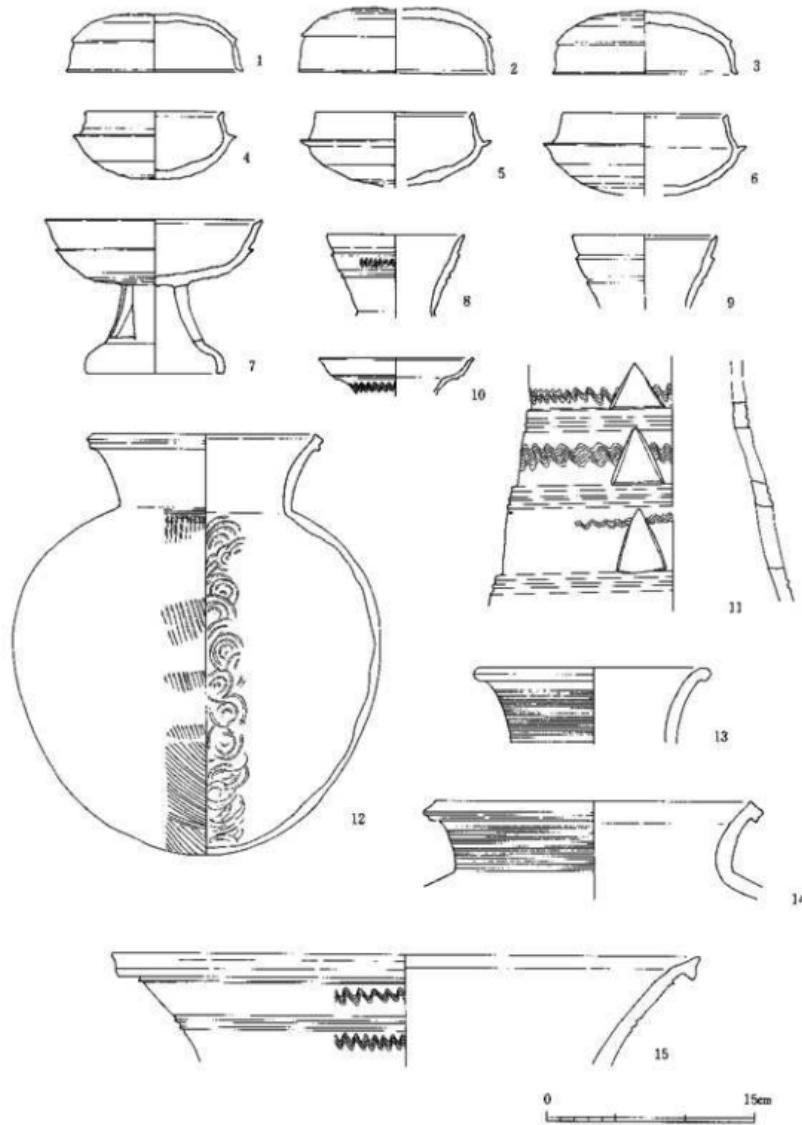
杯身は口縁部の立ちあがりが全て内傾するようになり、その高さも2cmを割るものが大半である。口縁端部は内傾し段をなすが、鋭さに欠け丸味が出てきている。受部はやや上方に伸び、厚みを増してくる。底部は丸味を有し器高も高くなる。手法上からみると、底部に施される回転ヘラ削りの範囲が杯蓋と同様に底部の弓を削っている。また内外面ともに回転ナデ手法によって仕上げられている。杯蓋・杯身とともに、内面中央部に青海波文の叩き痕を残すものが若干認められる。内面中央部にのみ一方向に走るナデが見られる。

高杯（7）短脚と長脚の二種があるが後者については良好な資料を得ていない。また有蓋のものも現在では明瞭でない。7は短脚の無蓋高杯で、杯部は杯蓋を反転した形状を呈するが、口縁部は外反する。口縁端部は若干凹面をなしながら内傾し、杯部は浅い。杯部外面には一条の綫線を巡らすが、丸味をもった鈍いものである。製作手法上からみると底面の約半分を回転ヘラ削りによって仕上げ、内面は回転ナデによって仕上げる。

脚部は緩やかに外反し、脚裾部は段状に屈曲する。しかしその段も稜線をなすほど強いものではなく、緩やかな丸味を有す。脚端部も杯部と同様に丸味をもっており、鋭さは全くない。透し窓は三方向に穿たれるものが大部分で、四方向のものは極少量である。またそれらの配置は均等性を欠き、透し窓の形態も長方形のものが多い。

甌（10）10は口縁部のみの破片で、おそらく小型甌であろう。外反する頸部から段をなし、さらに外反する口縁部へとつながり、口縁端部は面を成している。頸部には櫛描波状文が施される。また内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

直口壺（8・9）外反する口縁部を有し、口縁端部は内傾し僅かな段をもつものと、単に丸く仕上げるものとがある。頸部外面は、二条の沈線による文様帯を構成し、中に櫛描波状文を施すものと、無文のものがある。手法上からみると、内外面ともに回転ナデによって仕上げら



第3図 I型式3段階

れている。頸部以下の形状については復原すべき根拠を欠くが、おそらくほぼ球形の胸部を呈するものと思われる。陶邑古窯跡群では、直口壺はTK47型式までは続くもののその中心はTK23型式にあるとされる点、若干、古相を残しているといえる。

器台 (11) 検出数が少なく、器形全体のわかるものがなく、脚部は裾部に向かって緩やかに開くが、その反りは鈍く裾部の口径も小さいものである。透し窓は三角形で縦一列に配されるが、段によって透し窓の高さが異なり統一を欠く。しかも透し列は三方向にあけられ、前段階の土器に比べると減少する傾向にある。文様帶は段をなす部分に二~三条の沈線を巡らし区画し、その中に各々一条ずつの櫛描波状文を施す。その波状文も波形は比較的整っているが、一部で全周しきらない部分が生じ、つくりの粗雑さは認められない。製作手法から見ると、内外面ともに回転ナデにより調整されている。

甕 (12~15) 器形に大小の二種がある。頸部に文様帶のない小型甕は、口縁部が外反し、口縁端部が段状の稜線をなすものと、段をなしながらやや肥厚し、丸味をもって收めるものなどが認められ、細部については必ずしも一様ではない。胴部は緩やかなカーブをもってほぼ球形につくられ、その最大径は器高の約半分にある。頸部は施文されることはなく、回転ナデのみのものと、その後にカキ目調整を行なうものとがある。これら二者の中では、後者の例が多い。胴部および底部は、外面に平行叩きがみられ、内面は青海波文の痕跡を残す。底部外面は各方面から平行叩きがなされている。また叩きの後にカキ目調整を施したものも多い。

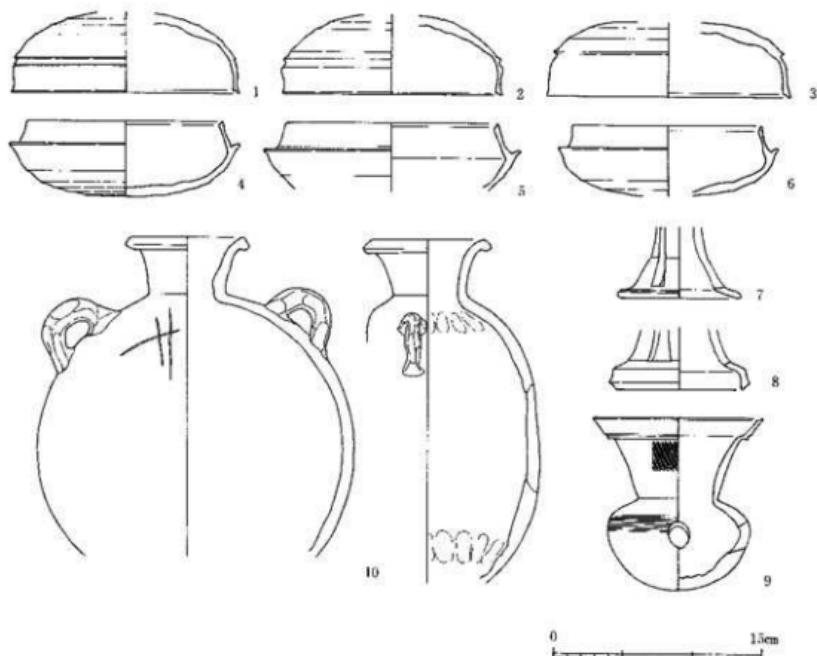
大型甕は口径部が外反し、口縁端部は上下に屈曲させた段をなしている。口縁端部の内面は凹線が巡る。頸部外面は二条一対の沈線で、上下に分け文様帶を構成する。その中央に波形の整った櫛描波状文を各々配す。胴部については破片が多く、全体の形状は不明な点が多い。手法上からみると外面は平行叩き、内面は青海波文を残す点において小型甕と何ら変わるものではない。

Ⅱ型式1段階の須恵器 (第4図)

前段階までは一般に口径が縮小した蓋杯が主体をなしていたが、この時期になると一挙に大型化する。これに伴って他の器種も大型化する傾向がみられる。

蓋杯についていうと前段階以来の退化傾向は一層進み、口縁部立ちあがり、口縁端部、稜線などに粗雑さが見られる。

蓋杯 (1~6) 杯蓋は口径平均16cm程度になり、一般に大型である。口縁端部は凹面をなし明瞭な段を有するが、丸味をおび鋭さはない。天井部と口縁部を分ける稜線は、その突出が弱くなると共にその先端が丸味を持っている。口縁部は緩やかに外反するものと、屈曲し外反するものなどが認められる。天井部は高く丸味を有し、5cm以上の器高をもつものが大部分である。製作手法は、天井部に施される回転ヘラ削りの範囲が天井部の半分ほどになっており、調整の省略化が著しい。内外面ともに回転ナデにより調整され、内面中央部のみ軽く一方向にナデを



第4図 II型式1段階

行なう。

杯身は口縁部立ちあがりが更に強く内傾するが、その高さは前段階程度を維持する。口縁端部は内傾し段をもつが、杯蓋同様丸味をもっている。受部は外上方に伸びるが、器壁は厚く丸味を有する。底部は全体の半分程度を回転ヘラ削りする点、杯蓋の製作手法と変わるものではない。

高杯（7・8）良好な資料に恵まれないが、脚部の資料がいくつか得られている。何れも短脚高杯で、脚擦部に向かい外反するもの、擦部で屈曲し段をなすもの、擦部を肥厚させ丸く仕上げるものなどがある。透し窓は長方形で三方向に配するものが多い。手法上からみると回転ナデによるが、杯部との接合部附近では内面にしばしばしづらの痕跡を残すものが見られる。

有蓋高杯は小型のものが知られる。脚部は擦部を内側に肥厚させ段をなす。脚部外面はカキ目調整を行なう。また透し窓は円形で三方向に配されるものが多い。

甌（9）頸部は外反し口縁部で段をもち更に外反する。口縁端部は内傾し凹面を成すが、先端は丸く仕上げる。頸基部は太さを増し、頸部上半には細かく密な櫛描波状文が施される。そのタッチは波形の先端が尖り鋭い。また口縁部、頸部、脚部共、全く施文しないものも存在する。脚部は扁平化の傾向を示し、その最大径は半分より上にある。脚部中央の穿孔は不整な円

形で粗雑である。

提瓶 (10) この段階より出現する器種で、円形の胴部に頸部を接合させている。頸部は緩やかに外反し口縁端部は肥厚させ先端は丸く仕上げる。胴部は緩やかなカーブを描く面と、肩部より屈曲し平坦となる面がある。肩部には環状の把手が充分把手として機能するものである。胴部の成形は、中央部を粘土円板で塞ぎ仕上げるもので、その内面には成形時の指頭痕、接合板を明瞭に残す。胴部外面は粘土円板の接合部を中心にカキ目調整が施される。

甕 前段階と差異は認められない。小型甕は頸部にカキ目調整を行なうものが多い点も同様である。

大型甕については口頸部の資料が少なく充分な観察ができない。

Ⅱ型式2段階の須恵器 (第5図・第6図)

桜井谷における須恵器生産がピークに達した段階であり、窯跡数も次段階とともに一番多い。窯は同一斜面に並列して築かれ、千里川水系沿に広く分布する。窯体はその全長・幅などが増大し、操業の大規模化を窺うことができる。またその製品は以前にも増して量産される結果、一撃に製品の粗雑化が進展する。それは胎土に砂粒を多く混入し、粘土の選別にも注意が払われない点などからも推察される。装飾の面では櫛描波状文に加え、櫛描列点文、ヘラ描文などが多くなる点が注意される。

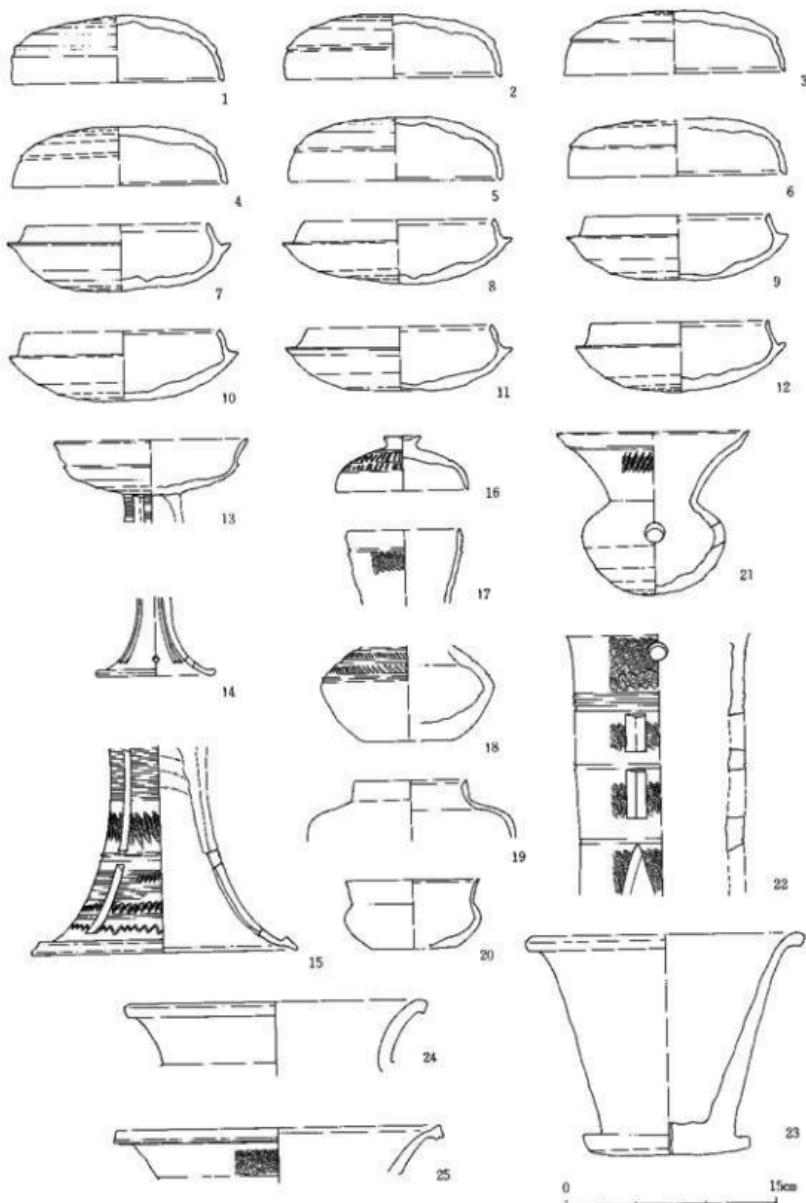
蓋杯 (1~12) 大型である点は前段階と変わらない。杯蓋は口縁端部が内傾し段をなすが内傾度が強い。口縁部と天井部を分ける接線は、鈍く僅かに突出する。天井部は扁平化が進み前段階のように高く、丸い天井部をなさない。手法上から見ると天井部に施される回転ヘラ削りは、天井部全体の半分前後となり、削りも荒い。それとともに器壁の厚さも増加し、全体に鈍い感をひえる。

杯身は口縁部立ちあがりの内傾化が更に進み、その高さも1.5cm前後となる。口縁端部は内傾し段をなすが、先端は丸味を有す。受部は底部と明瞭に区分できず、底部の延長として受部が作出されている。手法上では底部の回転ヘラ削りは底部全体の半分前後に施される。器壁が厚く鈍い点、器高が扁平となる点などは杯蓋と同様である。

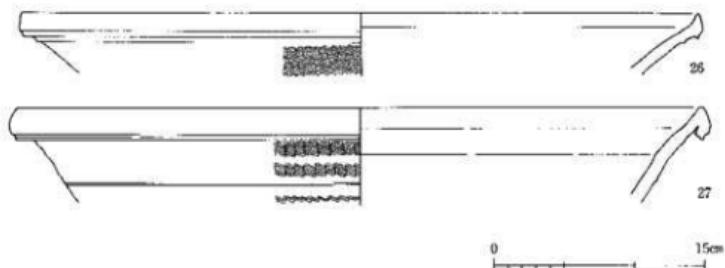
高杯 (13~15) 高杯にも大型化が進み、長脚一段透しのものは減少する。大型・小型の区別があるが、大きさにはバラつきがある。透し窓の形態や配置また文様などもバラエティーに富む。

有蓋のものは資料が不足しており判然としないが、引き続いで生産されていることは疑いない。

大型高杯の杯部は杯蓋を小型化した形状を呈す。口縁端部は丸く仕上げられ段をなさない。底部と口縁部を界する接線は、杯蓋に比べ鋭いものが多い。底部は回転ヘラ削りにより調整される。大型高杯の脚部は、基部が太く安定感があり、脚部中央より広く外反し裾部で肥厚させ



第5図 II型式2段階



第6図 II型式2段階

段をなし、先端は丸く仕上げる。脚部中央に一条ないし二条一对の沈線を巡らし、これにより透し窓を二段に分割する。透し窓は長方形で三方向に配置される。中には上段と下段でそれを更に交互に配置するものもある。透し窓は切り込み面を丁寧に面取り調整するものが目立つ。手法上では回転ナデの後カキ目調整が特に杯部との接合部付近に施される例が多い。各段に施される櫛描波状文は、一条から数条に及ぶものまで見られ装飾的である。

小型高杯の脚部は緩やかに外反し、裾部をやや上方につまみ上げ丸く收めるもの、段をなし下方へのびるものなどがある。何れも脚端部は丸く仕上げる。透し窓は長方形で基本的に三方向に配置されるが、中にはその間に円形透しを入れるもの、また三角形透しのみのものなどがある。小型高杯の脚部に関しては文様は施されない。

有蓋高杯の蓋は杯蓋に中央のくぼんだつまみを付したもので、つまみの周囲に櫛描列点文を施す例も見られる。

題 (21) 頸部は大きく外反し口縁部で屈曲外反する。口縁端部は若干段をなす。胴部は扁平化の傾向を示し、最大径は中央に位置する。底部は粗雑な回転ヘラ削りが施される。頸部上半には波形の整わない櫛描波状文が施される。胴部は施文されることはない。円孔は胴部中央に上方から穿孔される。

壹 (17~20) 短頸と長頸、有蓋と無蓋の区別がある。

短頸壺は頸部が直立するもの、外反するものなどがある。何れも肩が張り一見平底風である。肩部にはヘラ描による文様帯をもつものがある。

長頸壺は口縁下に沈線を巡らし、その直下に櫛描波状文を施すものがある。

有蓋壺の蓋は数少ないが、大井部は稜線をもたず丸味をもち、中くぼみのつまみを付したものである。つまみの周囲に二段に櫛描列点文を施すものもある。

器台 (22) 鉢部は浅く外面は平行叩き、内面は青海波文を残す。脚部は鉢部との接合部分から外反するものではなく、直線的にのびた後裾部で内寄ぎみに外反し脚端部に至るものが多い。脚部は一条から三条ほどの沈線により界され文様帯をつくる。透し窓は三方向で、長方形・三角形・円形などを取りあわせ、直線的に配置する。各段ともに櫛描波状文が施される。他の器種と同様に装飾的である。櫛描波状文は波形が整わず、流れる部分も見られ粗雑な部分が多い。

鉢 (23) 他の器種の大型化に呼応し鉢も以後のものに比べ一般に大型である。

すり鉢は口縁部が外反し口縁端部は肥厚させ丸く仕上げる。底部は器壁が厚く内板状を呈す。底部の中央部には小さい円孔を貫通させる。胴部に文様は全く施されない。

甌 (24~27) 蓋杯と共に多量に出土する点は以前と変わりない。口縁部の形態が一番バリエーションに富む時期である。器形の大小から二種に分けられる。

小型甌は外反する頸部を口縁端部で肥厚させ丸く仕上げるもの、肥厚させ凹凸をなすものなど様々である。頸部は櫛描波状文を施すものと無文のもの二種類がある。

大型甌は外反する頸部を口縁端部で肥厚させながら直立させ、先端を丸く仕上げるもの、垂下させ、凹凸をつくるものなどがある。頸部は一条ないし二条一対の沈線により文様帯を界してその上下に櫛描波状文を施す。櫛描波状文を文様帯上に二条ずつ施し、合計四条の櫛描波状文で飾るものも少なくない。胴部は外面平行叩き、内面青海波文を残しスリ消し調整などは全く認められない。外面はカキ目調整がなされるものもある。

その他の器種 上述の器種以外にはあまりないが、当段階で出現する器種の一つに瓶があげられる。

瓶は断片的で全体の形態は不明な点が多いが、底部から口縁部に向かって外反し、胴部中央には左右に角状の把手を付している。把手は各々切り込みを入れられており、陶邑古窯跡群で見られる初期の瓶に類似する。

I 型式3段階の須恵器 (第7図・第8図)

前段階に比べ蓋杯の口径が縮小傾向にある。杯蓋にみられた稜線が消失し、かろうじて凹線としてその痕跡を留めるもの、その姿を全く消したもののが混在する。一般的に天井部は丸味を有する。その生産は前段階同様、当窯跡群の盛行期にあたっており、窯の分布は広くその数も多い。

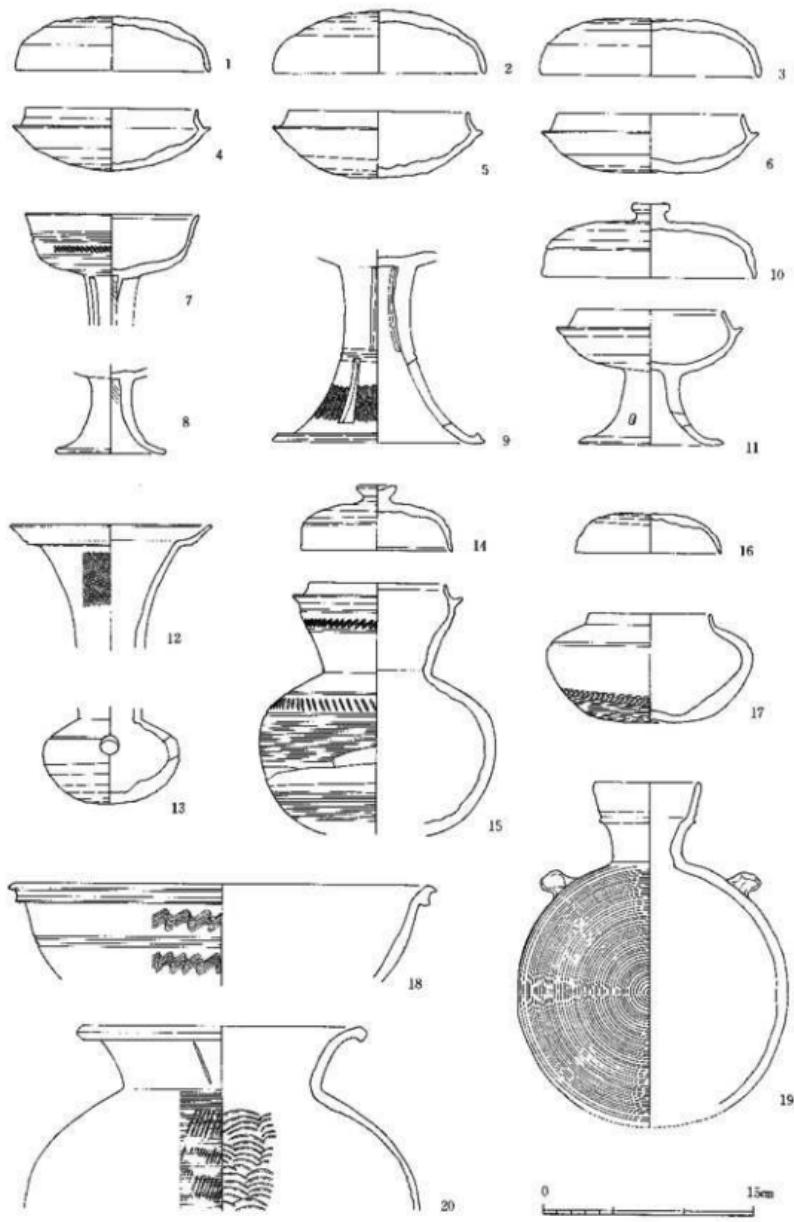
蓋杯 (1~6) 杯蓋・杯身共に口径が縮小する。

杯蓋は口縁部と天井部を分ける稜線が僅かに凹線として残存するもの、それさえも消失したものなどがみられる。天井部は緩やかなカーブを描き口縁端部に至る。口縁端部は丸く仕上げられ段はなさない。天井部に施される回転ヘラ削りは、その範囲が狭くなる。

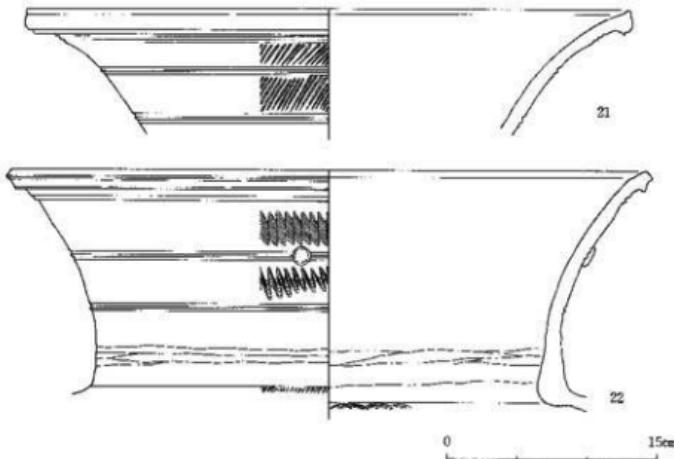
杯身は口縁部立ちあがりが内傾し、高さも低くなる。口縁端部は丸く仕上げられ、段はなさない。底部に施される回転ヘラ削りは、底部の約半分ほどになる。

高杯 (7~11) 器形の大小及び蓋の有無により区別される。

無蓋高杯の杯部は、緩やかに外反し口縁端部に至るもので、口縁端部は丸く仕上げられる。杯部外面には二条の沈線を巡らし、その中に櫛描波状文、乃至は櫛描列点文を施す。底部は回転ヘラ削りにより、他は回転ナデにより調整される。脚部は杯部との接合部分が細く、比較的長く緩やかに外反する。裾部では更に大きく外反する。透し窓は三方向に配置され長方形を呈



第7図 II型式3段階



第8図 II型式3段階

す。脚部中央に一条ないして二条の沈線が巡り、脚部を上下に分割する。これにより透し窓は上下に分けられる。その配置は上下に直線的に配されるもの、上下で交互に配されるものの二種がある。文様は前段階のように上下各段に施されることはなく、下段に櫛描波状文が一条施されるのが一般的である。

有蓋高杯の透し窓は、ほぼ円形のものに限られる。これに伴う蓋は天井部中央に中心が平坦、或は若干凹面をなすつまみを付したもので、その形態は杯蓋と同じである。しかし一般的に口縁部と天井部を分ける稜線が残存する傾向が強い。天井部は回転ヘラ削りにより調整されるが、その後カキ目調整を行なう例も多い。

鼈 (12~13) 頭部は長くかつ大きく外反し、口縁部で段をなし更に外反して口縁端部に至る。口縁端部は、段をなすものと丸く仕上げるものがある。頭部上半には幅の狭い櫛描波状文を密に施すものと、頭部中央に凹線を巡らし、その上下に櫛描列点文を施すものとが存在する。胴部は若干扁平で、肩部に一条の沈線を巡らすもの、二条の沈線を巡らし、その中に櫛描列点文を施すものなどが出現する。胴部中央の文様带上には、円孔が穿孔される。手法上では底部に回転ヘラ削りを施し、他は回転ナデにより仕上げる。

壺 (14~17) 短頸と長頸の二種がある。

短頸壺は前段階と大差ないが、肩部に一条の沈線を巡らすものが多い。底部は回転ヘラ削りにより調整し、後にカキ目調整を加えたものも多い。蓋の形状は杯蓋を縮小したもので、手法上からも差異はない。また天井部はカキ目調整で仕上げるもののが存在する。

長頸壺は有蓋のものが知られる。頭部は外反し、口縁部立ちあがりは内傾する。口縁端部は凹面をなす。受部は水平にのび器張が厚い。頭部は二条の沈線により文様帶を構成し、その中

に櫛描波状文を施す。肩部はほぼ球形を呈し、肩部に二条の沈線により文様帯を作る。その中には櫛描列点文が施される。肩部以下はカキ目調整と手持ちヘラ削りにより仕上げられる。このような有蓋壺は陶邑古窯跡群ではKM 233分窯にみられる。時期的には丁型式中頃のものであり当窯跡群出土例とはかなり時間的な差がある。

器台 (18) 鉢部が浅くなる傾向にある点は変わりない。

口縁部は段をなし稜線を作り出すものが多い。鉢部中央は二条一对の沈線により界され、その上下に櫛描波状文を施すものと、全く無文のものが存在する。脚部との接合部付近は外面平行叩き、内面青海波文の痕跡を残す。脚部に関しては前段階と大差ないが、文様に櫛描列点文が新たに加わる点が注意される。

提瓶 (19) 頸部は以前に比べ長く上方にのび、頸部中央で稜線をもって屈曲し口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げ段をなさない。丁形の胴部は側面よりみると、一方が丸味をもったカーブを描き、他方は扁平もしくは若干凹面をなす。丸味をもつて内面には細かいカキ目調整が施される。肩部に付される把手は環状を呈するものが減少しカギ状または突起状のものが多くなる。

甕 (20~22) 器形の大小から大型、小型の区別がある。

小型甕は外反する頸部を有し、口縁端部で肥厚させ丸く仕上げるもの、肥厚させながら段をなし、丁縁端部内面にかえり状の稜線をもつものなどが知られる。肩部は一般的に肩が張らずなどらかなカーブを描く。胴部外面は平行叩きの後カキ目調整を加える。この段階の小型甕は胴部外面のカキ目調整が、かなりの比率で認められる。また内面は青海波文をそのまま残す。小型甕ではこの段階で新たに直立する短い頸部を有し、口縁端部を内傾させ段をなすものが出現在する。

大型甕は緩やかに外反する頸部を有し、口縁端部は肥厚させ断面三角形の凸帯を巡らせたものの、丸味をもって肥厚させるものなどが存在する。外面は二条一对の沈線を二段に巡らし文様帯を構成する。文様はその上部二段に櫛描波状文や櫛描列点文を施すのが一般的であるが、上下で両者を使いわける例もある。また中央の沈線上に円形浮文を貼付する例も少数ながら認められる。頸部に浮文を貼付する例は陶邑古窯跡群においても例が少ないと、丁型式に属する土器の中に若干見られる。手法上からは口頸部は回転ナデによるが、肩部との接合部分外面をヘラ状工具によりナデを行なうものがしばしば見られる。肩部はあまり張らず、外面平行叩き、内面青海波文を残す。また胴部内面では、粘土紐の接合部分のみをカキ目調整する例も知られる。

その他の器種 上述以外の器種に瓶・横瓶などが見られるが、遺物全体に占める割合は少ない。

瓶はこの段階では少数ながら必ず出土する器種である。口縁端部に向かい緩やかに開く胴部をもち、底部は平底である。胴部外面は平行叩きの後カキ目調整が入念に加えられ、一部叩き目が完全に消される部分も見られる。胴部内面は青海波文を残すが、中央部では青海波が重複せずに一列に並び残っている。底部附近は手持ちヘラ削りにより荒く削られる。底部の孔はいわゆる多孔式のもので、おそらくは五個程度の孔を有していたと推量できる。なお、その穿

孔面は非常に鋭利で、例えば刀子などの鉄製利器の使用が考えられる。

横瓶は、口頭部については小型壺のそれを縮小させた形状を呈す。胴部は体型を呈するものと、肩部で段をもち屈曲するものが知られる。手法上から見ると、胴部外向は平行叩きの後中央部のみカキ目調整するものと、全面にわたりカキ目調整で仕上げるものとが存在する。胴部内面は全て青海波文をそのまま残している。

その他に亀甲型陶棺の身の部分が出土している。細片のため全体の形狀は判明しないが、外面は荒い刷毛目調整を加えた上に凸帶を巡らしたもので、内面は青海波文を残す。

I 型式 4 段階の須恵器 (第9図・第10図)

蓋杯に見られる退化傾向は、さらに進展し、器形の扁平化も著しい。

蓋杯（1～6）杯蓋は前段階と大差は認められない。天井部は緩やかなカーブを描き、口縁端部は丸く仕上げる。凹線として辛うじて残存していた稜線は、全く姿を消している。天井部は頂部のみを浅い回転ヘラ削りにより調整し、他は回転ナデ仕上げである。

杯身は口縁部立ちあがり部分の器壁が厚く、高さも1cmを割るものが大部分である。口縁端部は丸く仕上げられ、段は成さない。底部は扁平になり、その約半分を回転ヘラ削りにより仕上げる。

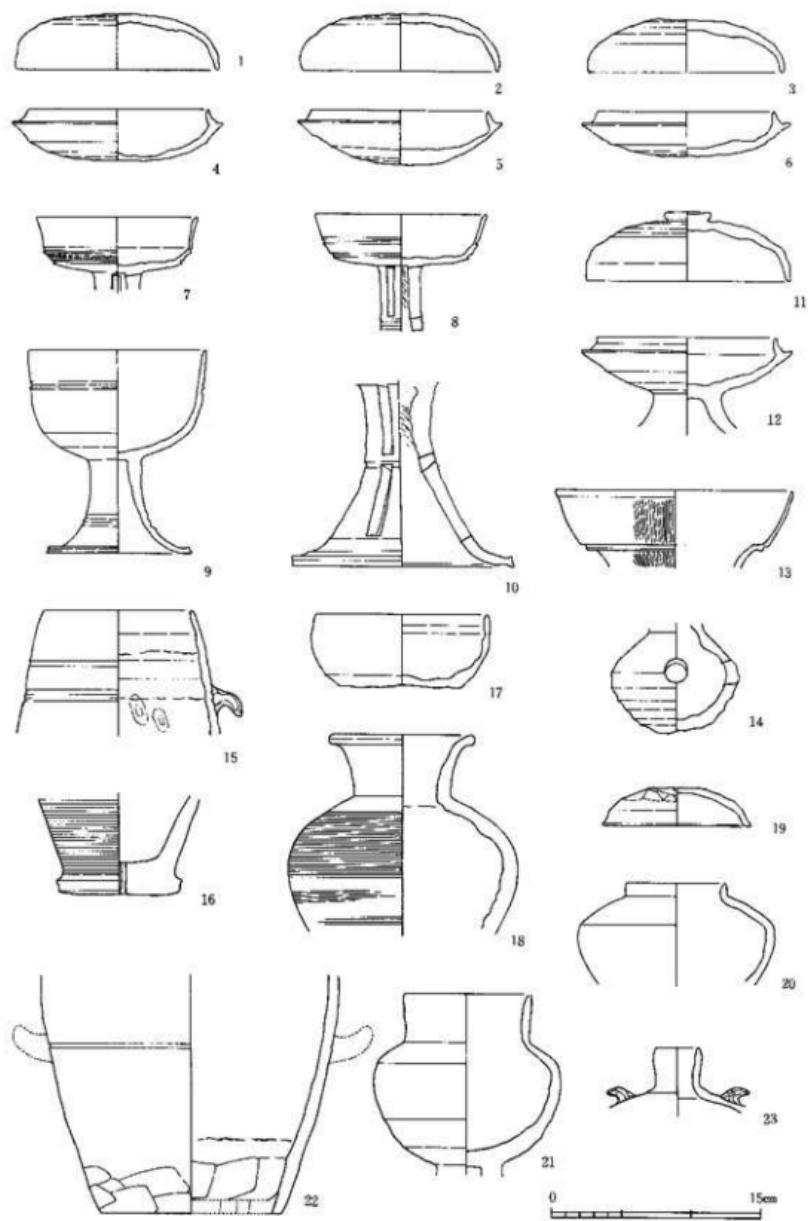
高杯（7～12）器形の大小、および蓋の有無によって大別される。

小型の無蓋高杯は、扁平な杯底部より一気に口縁部を立ちあがらせたもので、中央に沈線によって界される文様帶をもつ。文様では櫛描波状文は全く見られず、櫛描直線文、櫛描列点文が主流である。また沈線は施すが、無文のものも存在する。脚部の形態は、中央部まで直線的に下がり、裾部で外反して広がる。裾端部は、内面にカエリ状に段をもつものと、外側にはねあがるものとが存在する。脚部はその中央部を二条・一对からなる沈線により、上下に分かれ、透し窓をそれぞれに配する。前段階まで一般的に見られた三方透しは減少傾向にあり、二方透しが多く見られるようになる。また脚部外向に見られた櫛描波状文などの文様は、全く施されなくなる。

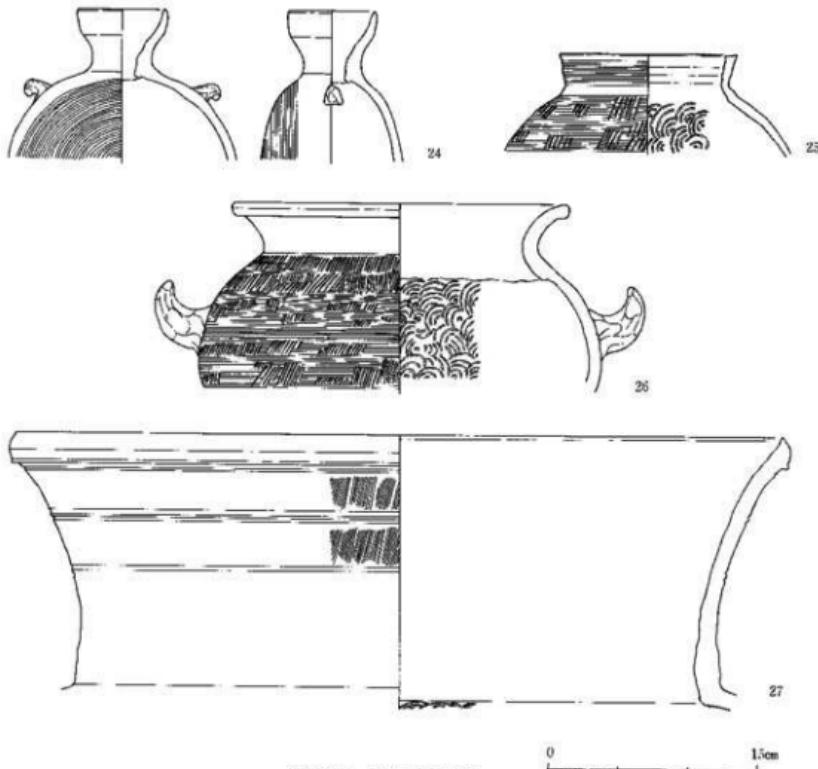
大型の高杯もほぼ同様であるが、脚部の透し窓はまだ三方に配されるものが多い。また高杯というよりは、脚付椀とでもいうべき器種も認められている。

有蓋高杯では、大型のものは知られていない。杯部は杯身の形態と全く差がない。脚部は接合部より大きく外反し、透し窓は配されない。蓋の形狀は杯蓋と大差ないが、口縁部と天井部を分ける稜線をまだ若干意識しているように思われる。天井部中央には、扁平で中央が凹面を成すつまみを付す。天井部は回転ヘラ削りによるが、その後カキ目調整を加えたものも多い。

龜（13・14）頭部は細く、口縁部に向かい大きく外反する。口縁部は前段階に比較して非常に発達しており、頭部から段または稜線を成して、さらに大きく外反し口縁端部に至る。頭部にはヘラ描直線文、櫛描直線文が施され、口縁部にも同様の文様が施される。口縁端部は丸く収



第9図 I型式4段階



第10図 II型式4段階

め、全体的に器壁は薄く仕上げられる。肩部は球形を呈し、最大径はその中央に位置する。肩部に一条の沈線を巡らすものもあるが、大半は何の手も加えない。また肩部には文様は施されない。肩部中央には比較的大きな凹孔が上方より穿孔される。底部は回転ヘラ削りを行ない、他は回転ナデにより調整される。

壺 (18~21) 蓋の有無、脚の有無により細分しうる。

短頸壺は蓋を伴うものと、伴わないものがある。前段階の肩が張り、角を持って屈曲するものや、沈線を巡らすものなどは減少し、角をなさず、緩やかな肩部を有するものが多くなる。

これに伴う蓋は、前段階と形態上は変化ないが、手法上では、天井部を持ちヘラ削りによって仕上げるものが見られるようになる。また回転ヘラ削りの後、カキ目調整を加えるものも引き続いている。

蓋を伴わないものは、肩部から頸部への屈曲度が強い。肩部は扁平なもの、球形を成すものなど、種類が多い。肩部、底部にカキ目調整を行なうものが存在する。

長頸壺は小型壺の口縁部と同じ形態をもつもの、長く直立した口縁部をもつものなどがあ

り、三方向に透し窓を配した脚を伴うものが存在する。またこの段階で、肩部に人形、動物などの装飾を伴う脚付の広口子持壺が數少ないながら、生産が開始されている点が注意される。

提瓶 (23・24) 全体に小型のものが目立つようになり、Ⅱ型式初頭に見られた大型のものは見られない。胴部は円形を呈し、両側面ともにふくらみを持っており、一側面を扁平に仕上げるものは希である。片面はカキ目調整、その裏面は回転ヘラ削りがなされる。口縁部は直立するように立ちあがり、外反するものは見られない。また頸部途中で段を成したり、稜線を持つものは見られなくなる。把手はカギ状または突起状のものが大半で、環状を呈するものは見られない。

鉢・碗 (15~17) すり鉢は従来のものとほとんど変化を見出せない。平底の底部には一個、或は數個の穴を穿孔させ、胴部には荒いカキ目調整を行なう。胴部には一条から二条の沈線を巡らす鉢も若干見られる。手法上では、底部周辺のみヘラ削りし、底部はナデによって仕上げる。

胴部から口縁にかけて直線的に内傾する把手付椀も、少數ながら認められる。把手はカギ状を呈し、その先端は下に向く。

甕 (25~27) 器形の大小により、大型・小型の区別がある。小型のものは、外反する頸部を有し、口縁端部で丸く肥厚させる。胴部は外面平行叩き、内面青海波文をそのまま残す。なお外面は叩きの後カキ目調整するものが、あいかわらず多く生産されている。また直立する短い頸部を有する甕も、前段階より引き続いて生産されている。なお胴部やや上位に、二個のカギ状の把手を付したもののが見られる。把手の部分には、二条の沈線が巡っており、当段階における甕のあり方と共に見出せる。

大型甕は直立ぎみの頸部が口縁部で外反し、口縁端部で段を成して稜線を作る。さらに肥厚させながら、先端はやや尖りぎみに仕上げる。頸部外面には二条ないし三条一対の沈線を二段または三段に配し、文様帶を構成する。上二段に施文されるが、文様は櫛描直線文が最も多く、ヘラ描直線文、櫛描列点文がこれに次ぐ。なお上段に櫛描波状文、下段に櫛描列点文というような折衷のものも少數混じえている。胴部は外面平行叩き、内面青海波文を残しており、外面にカキ目調整が見られる例があるが、小型甕のように多くはない。

その他の器種 前段階と同様、少數ながら瓶が存在している。生産数が少ないためか、個体間の差があるが、基本的には直線的に外反する胴部をもち、平底多孔式である。

把手の部分に一条の沈線が巡っている。底部外面は、手持ちヘラ削りにより調整している。他に陶棺の破片が少なからず見出される。大部分は四柱式陶棺であると考えられ、当塙址群と位置的に重複し、内部主体に陶棺を多く収めている太鼓塚古墳群との関係で注目される遺物である。

陶棺の外面は、荒い平行叩きのち刷毛目調整がなされ、内面は青海波文が多く残存している。蓋、身、脚とともに細片が多く、全体の形状が知れるものはない。

また特殊なものとして鉢が出土している。球形をなす鉢の部分に棒状の柄をつけたもので、

中に小石を入れている。

II型式5段階の須恵器 (第11図・第12図)

桜井谷における須恵器生産が衰退する時期である。この段階以後、窯の数は激減し、その操業は單発的で、小規模なものになる現状がうかがわれる。

また器形も、蓋杯を始めとして著しく小型化し、今まででは最小となる。

蓋杯 (1~32) 杯蓋、杯身ともに口径が10cm前後となる。杯蓋は口径10~12cmの間で、天井部は丸味を持ち、口縁端部は丸く仕上げる。天井部はヘラ削りなどの調整を行なうものが少なく、大半が未調整で粗雑な仕上げである。杯身は口径10cmを割るものが多く、形態は前段階と基本的に変わらない。短く弯曲する口縁部立ち上がりは、その端部が鋭いものが多い。また受部は上方へ比較的長く突出しており、口縁部立ち上がりが結果的に受部に隠れてしまう例も見られ、立ちあがりの消失を感じさせる。底部は杯蓋ほどの丸味は持つておらず、また手法上からも大半が未調整のままである。

高杯 (33~35) 蓋の有無により大別されるが、有蓋のものは出土数が少ない。無蓋のものは脚の長短で分類しうるが、以前のように大型のものは存在しない。短脚のものは浅い杯部に大きく外反する脚部を接合したもので、脚部は内側にかえり状に稜線をもつものが多い。

長脚高杯の杯部は、外面中央に沈線を一条巡らすが、文様は全く施されない。また脚部はその中央部或はやや上部を一条ないし二条の沈線によって区切り、それぞれ透し窓を配している。しかし、その透し窓も前段階のように長方形に切り取るものではなく、単にヘラで切り込みを入れたにすぎず簡略なものである。

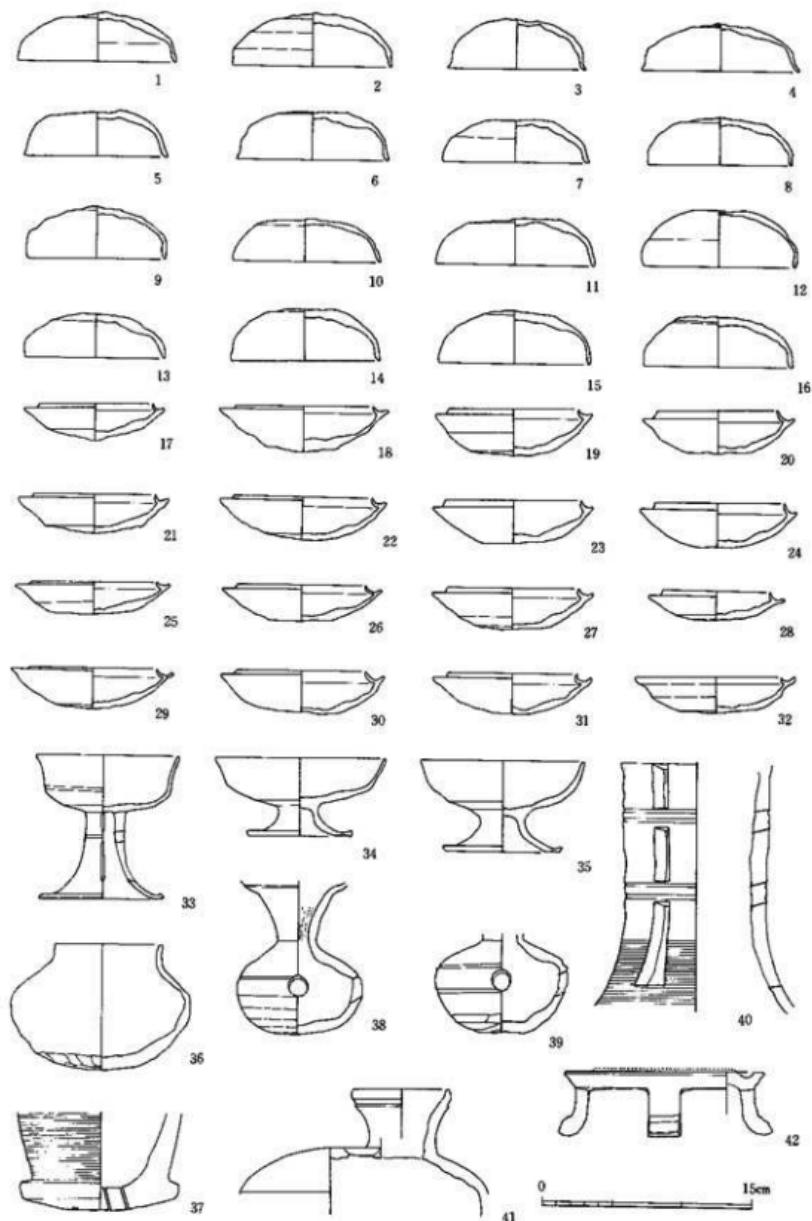
壺 (38~39) 小型であることには変わりはない。頸部は緩やかに外反し口縁部に至るが基部が細い。前段階に見られた如き、長く大きく外反する頸部は見られない。また口縁部、頸部に見られた文様は全く認められなくなる。肩部はほぼ球形を呈し、肩部に一条の沈線を巡らすもの胴部中央に二条の沈線を巡らすものなどがある。しかし、その中に文様が施されることはない。胴部中央には、上方より円孔が穿孔される。底部は浅い回転ヘラ削りが見られる他に、手持ちヘラ削りが見られる。

壺 (36) 全体的に生産量は少ないが短頸・長頸の二種がある。

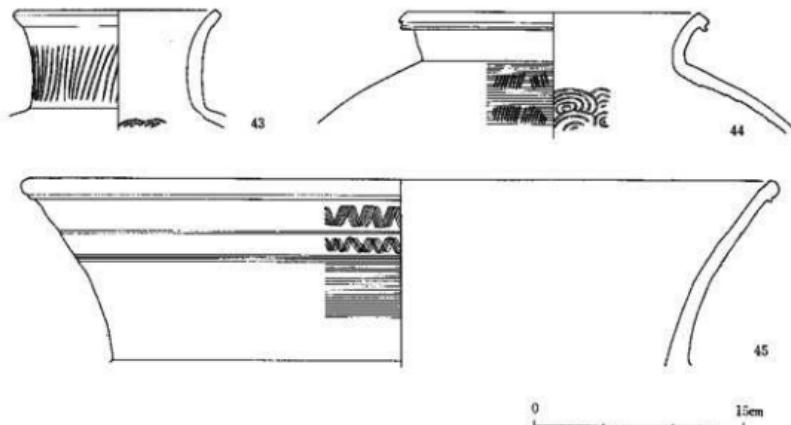
短頸壺は従来のものと大差ない。肩部はなだらかで段をなさない。また沈線を巡らすものも全く存在しない。手法上では、底部を鼈と同様に手持ちヘラ削りにより仕上げるものが認められる点が注目される。

長頸壺に関しては資料が不足しており判然としない。

提瓶・平瓶 (41) 提瓶は出土量が非常に少なく判然としないが、他器種と同様に小型化が進んでいる。肩部に付されていた把手はボタン状の粘土を張りつけただけのもの、更には全く付かないものへと変化する。



第11図 II型式5段階



第12図 II型式5段階

平瓶も同様に出土量が少ない。胴部は丸味をもっており、肩部は段を成さない。手法上では、胴部を粘土円板でふさぎ、口縁を接合する点など提瓶と変わるものではない。

鉢（37）すり鉢はその形態、手法ともに以前と何ら変わるものではなく、底部に見られる穿孔も、一個から數個のものまで認められる。

器台（40）出土量が少なく判然としないが、筒長の脚部を二条一对の沈線によって数段に界し、各段に透し窓を三方向に配したものである。文様などは何ら施されない。また裾部にのみカキ目調整がなされるものもある。

甕（43~45）器形の大小により大別される。

小型甕は前段階と大差はない。直立ぎみに外反する頸部に、ヘラ描直線文が見られる例もある。大型甕は口縁部および文様に変化が認められる。頸部は大きく外反し、口縁部で段、或は一条の稜線を成し、肥厚ぎみに丸く收めるが、若干、稜線より先端まで長くなりつつある。

頸部は一条或は二条一对の沈線によって、二段に界され文様帯を作る。

文様は従来見られていた櫛描直線文、櫛描列点文などが減少し、櫛描波状文が復活してくる。しかし、その波状文は櫛の単位が荒く、以前とはタッチがかなり異なるものである。

その他の器種 その他の器種として、硯、陶棺、壇などがあげられる。硯は全て円面硯である。透し窓を施さない簡単な作りのものと、入念にヘラ削りされた脚を四個つけたものとがある。

陶棺は全て四柱式陶棺と考えられ、蓋、身、脚など各部分が出土している。外面は荒い刷毛目調整が成されている。

壇は法量がやや異なるものも含まれるが、凡そ幅13cmほどである。全てレンガ状の長方形の壇で、方形壇は含まない。表裏ともに不定方向の平行印き、或は青海波文を残しており、側面

はヘラにより、面をととのえた痕跡をもつものも存在する。

Ⅲ型式の須恵器

桜井谷における操業が途絶える時期である。Ⅲ型式の中で新たに操業が開始される窯はほとんどなく、Ⅱ型式からの延長として少量の焼成が行なわれているのみである。

よって遺物の量も少なく、出土層位なども不安定で、器種のセットなどうまくとらえられない部分が多い。よって前型式のように、各段階に細分することは不可能なため、Ⅲ型式を凡そ前半部と後半部に分けて記述していくこととする。

杯蓋と杯身の形態が全く逆転する時期にあたる。

Ⅲ型式前半の須恵器（第13図）

蓋杯（1～11）前段階の杯蓋を逆転させ、天井部に宝珠つまみを付したものである。内面のかえりは、受部端よりも下方にのびている。天井部は、その半分弱を回転ヘラ削りにより仕上げるもののが大半である。つまみは貼りつけによっており、後にナデにより仕上げられている。

杯身は、平底で緩やかに外反する口縁部を有するもの、やや丸味をもった底部を有するものの二者が知られている。両者ともに底部は回転ヘラ削りにより仕上げる。杯身では平底を成すものが、やや後出であると考えられる。

高杯（12～14）小型のものが若干得られているだけである。全て低脚の高杯である。杯部は杯身と同様であるが、底部に回転ヘラ削りを施すものと、施さないものとが存在する。脚部は短く、裾部で外反するもので、脚端部は丸く收めるものと、段を成すものとが認められる。

甌（15）口頸部については、良好な資料を得ていないが、胴部は扁平で、肩部から胴部中央にかけて一条ないし二条の沈線を施し、文様帶を作り出している。文様帶内には櫛描列点文が施される。底部は回転ヘラ削りにより仕上げられる。またその後に、脚台がつけられるのは、従来の甌には見られなかった点である。脚台は脚端部の形状が明確でないが、大きく外反し、短く終わるものと考えられ、透し窓などを伴うものではない。胴部中央の文様帶上に、外面や上方より穿孔がなされる。

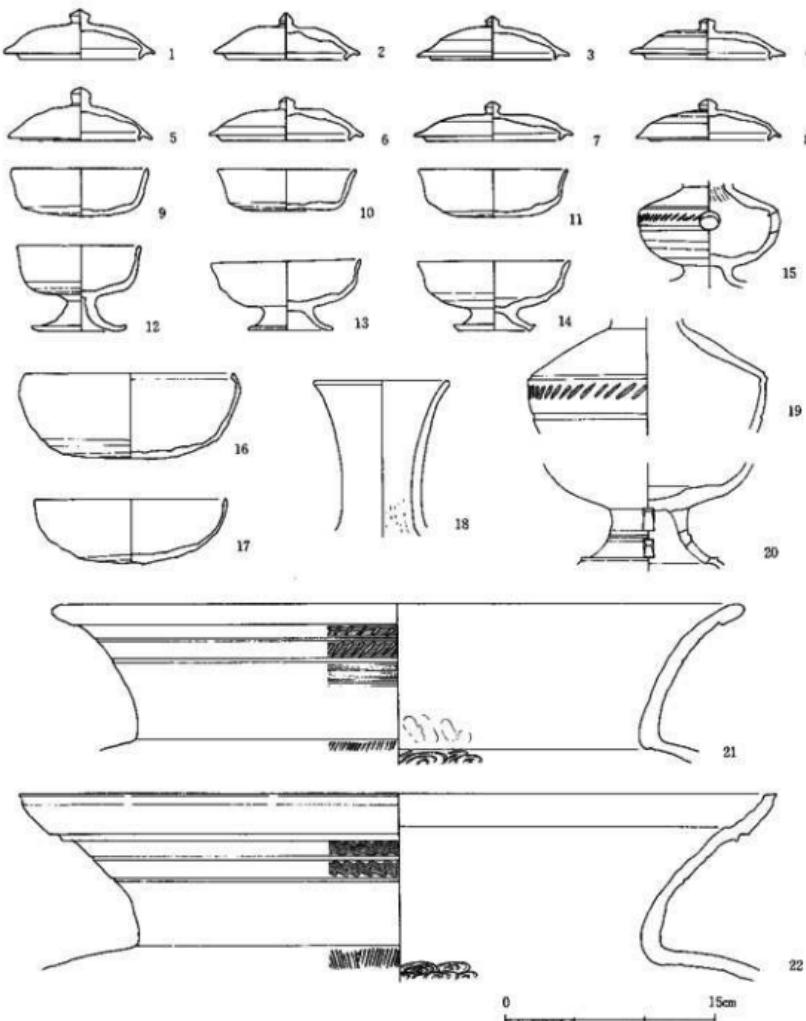
壺（18～20）長頸の脚付壺が知られている。口頸部、胴部、脚部とも断片で、全体の形態は確定できないが、凡そ以下のような形態を復原できる。

口縁部は長く直立し、端部で緩やかに外反する。頸基部の太さに大小がある。肩が張らず中央で屈曲し段を成す。胴部中央は二条の沈線で界され、文様帶が作り出される。文様は櫛描列点文を若干荒く施す。脚部は緩やかに外反し脚蹴部で段を成し屈曲する。脚部中央には一条ないし二条の沈線を巡らし、その上下に二方向に長方形の透し窓を配す。

鉢（16・17）あまり多い器種ではない。内寄気味に立ちあがる口縁部を有し口縁端部が内傾し稜線をもつもの、単に丸く仕上げるものなど存在する。底部は丸味をもち、回転ヘラ削りが

施される。底部内面は一方向にナデ調整を行なう。この種の鉢は、後に出現する鉄鉢型土器の素型ともいえる形態を呈している。

甕 (21・22) 器形の大小により大別される。小型甕は従来と大差ない。それに対して、大型



第13図 Ⅲ型式(前半)

脛は口縁部に大きな特徴をもっている。

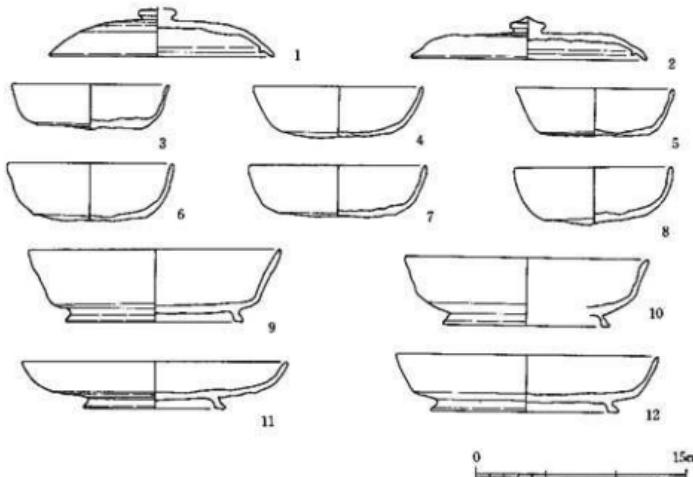
頸基部より緩やかに外反し、口縁部で段を成している。この段より口縁端部までがかなり幅をもっており、一見すると幅広の縁を巡らしたように見える。またこの部分が文様帯となって波状文などが施される場合も認められる。頸基部から口縁端部までの高さが従来のように高くなく、低い点も注意される。頸部上半は沈線により二つの文様帯を構成し、中に荒い櫛描波状文、或はヘラ描列点文などを施す。文様帯は頸部の高さが短い点に呼応して、幅が狭くなっている。また口縁部の縁状部分にも施文されることが多い。胴部には外面平行叩き、内面青海波文が残っている点は従来通りである。

Ⅲ型式後半の須恵器（第14図）

蓋杯、盤などが小量知られるだけである。

蓋杯（1～10）杯蓋は口縁部内面のかえりが、受部の中に認れる。天井部は丸味をもつものと、扁平なものの両者が存在する。これが時間的推移としてどちらかは、当窯跡群内で検証することは出来なかった。天井部中央には、中心が突出する擬宝珠様つまみが付される。つまみと天井部の接合部は、比較的深く入り込んでいる。つまみは接合の後、その周円をナデによって仕上げている。天井部はその半分を回転ヘラ削りによって仕上げられる。

杯身は高台の有無で二種に分類される。高台の無いものは、緩やかに外反する口縁部を有し、口縁端部は丸く收めている。底部から口縁部にかけても、角をもつものはなく、丸味をもっている。また底部は全て未調整である。



第14図 Ⅲ型式(後半)

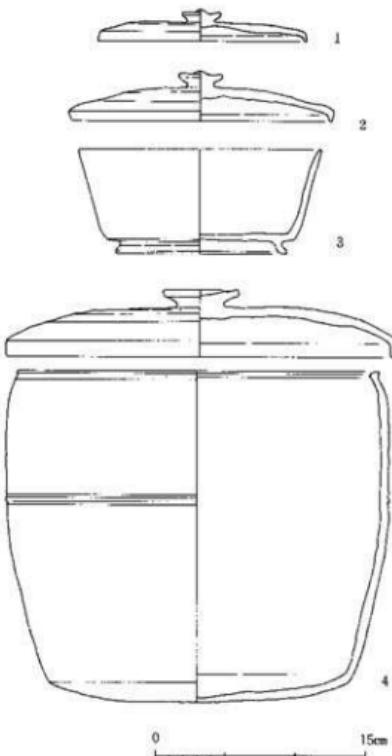
高台を伴うものは、高台部分からやや上方に外反し、さらにそこで丸味をもってカーブし、口縁部へ直線的にのびる。高台は八の字形にふんばり、底部は回転ヘラ削りが施される。

盤（11～12）杯身に比較して総体的に口縁部の立ちあがりが、低いものを盤として一括した。中には高台付の皿の方が良いと思われるものもある。口縁部の立ち上がりが低い他は、杯身と形態、手法で差異はない。

M型式の須恵器（第15図）

杯蓋内面のかえりが消失する段階であり、この時期をもって当窯跡群は終末を迎える。現在IV型式に属する須恵器を出土する窯は、一基のみしか確認されていない。またIV型式になって新たに操業される窯は見あたりず、III型式より続いて焼成されたものである。何にしても、この時期ではII型式各段階に見られたような活発な生産はなされず、その操業は単発的でその経営も小規模なものであったと推察される。

遺物としては蓋杯と火消壺形土器が知られるのみで、それらを細分することは、不可能である。1・2は杯蓋で、かえりが消失しており、天井部は丸味を有するものと、やや扁平なものの二者が存在する。天井中央部に擬宝珠様つまみが付されるが、その接合部が深くくり込む点などから、IV型式の中でも古い様相を持つものと考えられる。手法上では、天井部を回転ヘラ削りし、他は回転ナデによって仕上げている。3は杯身であるが、やや深目のものである。八の字形にふんばる高台から水平にのび、角を持って屈曲し直線的に口縁部に至る。この点はやや新しい要素をもっているといえる。4は火消壺形土器で、蔵骨器としての可能性も持っている。蓋は天井部が丸く、中央が凹面を成す大形のつまみを付したものである。天井部は回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデによって仕上げられている。身は胴部中央に二条一対の凹線を巡らしている。底部は若干丸味をもっており、回転ヘラ削りにより仕上げている。



第15図 M型式

III 結語

以上、桜井谷古窯跡群出土須恵器の各型式を更に小段階に分けて、その変遷を述べてきた。ここでは、本稿で明らかとなった当窯跡群の特徴を整理してまとめにかえたい。

まず初めに、当窯跡群とは距離的にも近く、また中板窯的な位置を占めている大阪府陶邑古窯跡群でなされた編年との対比の問題がある。当窯跡群における最古型式が、陶邑古窯跡群のどの型式・段階に対応するのかは操業開始時期を考える上でも重要な問題である。

当窯跡群I型式1段階の須恵器の特徴は前述の通りであるが、再度簡単に述べておくと、杯身は「口縁部立ちあがりが高く、「口縁端部はやや内傾するものの平坦に仕上げられている。受部は薄手で水平に伸びる。また手法上から見ると、底部に施される回転ヘラ削りは、その削り幅が狭く入念に施されている。これらの形態・調整手法などの諸特徴を、陶邑古窯跡群のものと対比すると、最も定型化、或は統一化が進展した時期としてとらえることができる。よって田辺昭三氏の言うTK208型式、中村浩氏のI型式3段階に相当するものといえよう。したがって当窯跡群操業開始時期は、従来考えられていたTK23型式（I型式4段階）並行よりも若干遅ることとなつた。またII型式1段階は蓋杯の大型化よりMT15型式（II型式1段階）に、III型式前半は宝珠つまみの出現によりTK217型式（III型式1段階）に、IV型式初頭は蓋杯内面のかえりの消失によりMT21型式（IV型式1段階）にそれぞれ対比しうると考えられる。^{註7}

しかしながらIII型式・IV型式については、窯跡自体が僅少な点に加えて、遺物の出土状況・出土量などにも資料的な制約があるため、全体的な把握がなしえないので現状である。

それでは次に器種組成などの面から、当窯跡群に特徴的な点を抽出したい。

まず器種についてであるが、I型式各段階は資料が少ないこともあり、その特徴はつかみにくい。しかし短脚高杯の透し窓にかなりの比率で四方透しが見られる点は注意すべきである。陶邑古窯跡群においては、TK23型式（I型式4段階）以後四方透しはほとんど見られないとする点からすれば、形態に古い様相を残しているといえる。さらにI型式では直口壺が注目される。直口壺は当窯跡群の編年ではI型式3段階に出現する器種である。陶邑古窯跡群ではI型式を通じて直口壺は見られるが、その生産の中心はTK208型式からTK23型式にある。その点、当窯跡群出土の直口壺は、型的には後出するものである。

II型式になると、爆発的に窯跡の数が増加しており、遺物の特徴をつかみやすい。II型式では、この時期に特徴的に出現する器種がいくつか認められる。その一つに瓶が上げられる。瓶は当窯跡群の編年では、II型式3段階～4段階にかけて集中的に見られる器種で、その前後段階には全く出土を見ないものである。出土量こそは蓋杯・甕などに比べれば極少量でしかないが、この時期の窯跡には必ず認められる器種である。瓶の特徴としては、平底で多孔式である点と、胴部中央に相対称に付けられる把手部分に一条の沈線が必ず巡らされる点である。このような特徴を具備した瓶は、陶邑古窯跡群ではTK73号窯を初めとしてTK85号窯・TK87号窯^{註8}等極初期の窯にのみ見られるものである。ただし陶邑産の瓶が口径30cm、器高40cmほどを各

々はかるのに対し、当窯跡群出土壺は一般的に小ぶりである。何れにしても当窯跡群出土壺に関しては、形態上はかなり初源期のものの特徴を残していると考えられ、何故この時期に古相を留めた形で出現するのか、周辺の集落などでのあり方も含めて今後の検討課題としたい。

このように、当窯跡群Ⅰ型式～Ⅱ型式においては各器種とも形態に古い様相を残していることが判明した。特に蓋杯・高杯などは、同時期の陶邑古窯跡群のものと対比した場合それが顯著である。すなわち杯蓋はⅡ型式2段階までは、口縁端部に段をもち、棱線の残存が認められ、また短脚高杯では四方透しがⅡ型式初頭まで残る点などが指摘できる。

さらに調整手法の面から検討してみると、当窯跡群Ⅱ型式後半からⅢ型式にかけて短頸壺蓋・壺・鉢などの天井部、或は底部に手持ちヘラ削りが復活してくる点が注目される。手持ちヘラ削りは、初期須恵器に多く用いられる調整手法であり、特に陶邑古窯跡群においては、TK73型式からTK216型式の古段階にかけて、蓋杯を中心に認められる。蓋杯以外の壺・鉢などの底部には、この手法は若干後のⅠ型式後半、TK23型式まで残存するとされる。しかしながら当窯跡群においては、Ⅱ型式後半以前の各段階には、この調整手法は全く見られない。この手法をもつ確実な遺物は、数量こそ少ないものの、この型式以降Ⅲ型式に属する窯跡において現われる。この点からすれば、当窯跡群においては器種によりかなり後まで、古い調整手法が残存しているといえる。

最後に、当窯跡群の性格を考える上で注目すべき埴輪・陶棺・博などの出土遺物について触れておきたい。この内、前二者は墓制の一環を担うものである。埴輪は上野青池南畔窯跡が埴輪^{註10}を後に須恵器窯に転用した例として注目される他に、桜塚下原窯跡でも埴輪の焼成が見られるとされる。何れにしても埴輪生産に関しては、恒常的なものではなく、臨時の生産が主であったと考えられる。

陶棺は当窯跡群と分布地域を同じくする太鼓塚古墳群に多く見られるもので、從来より須恵器工人との関連が強く説かれている。

陶棺の中でも古く位置づけられる亀甲型陶棺は、中井山3号墳より検出されている。窯跡では2-17号窯より残片が検出され、時期はほぼⅡ型式3段階に対応すると考えられる。Ⅱ型式4-5段階に比定される2-25号窯では、多量の四柱式陶棺が出土しており、それぞれの製作時期を知ることが出来る。陶棺については、これらの段階で生産が終了しており、Ⅲ型式以降へは継続しないと考えられる。陶棺に関しては、陶邑古窯跡群で見られるより、はるかに多く焼成されているといえる。

博は2-25・2-24・2-19の各窯跡から出土している。窯跡により個体のばらつきが見られ一貫していない。供給先としては、寺院関係の可能性が考えられるが、至近距離にある金寺^{註11}山庵寺では、現在までその出土を見ていません。

以上、当窯跡群Ⅰ型式～Ⅳ型式まで陶邑古窯跡群における編年観と対比するとともに、形態・調整手法の面や特殊な遺物について比較してみた。この点、当窯跡群出土須恵器は、形態に

古い特徴を残すものが多く、器種ではⅠ型式後半からⅡ型式初頭にかけて直口壺が、Ⅱ型式後半で壺というように古い器種の出現が見られる。さらに調整手法の面でも、Ⅱ型式後半の壺・瓶などを中心に手持ちヘラ削りの残存が知られ、形態・調整手法ともに古い要素を残す部分が少なくない。また特殊な遺物として陶棺が多量に焼成されている点も注意する必要がある。

このように、桜井谷古窯跡群は六世紀代において、須恵器生産の面では陶邑古窯跡群と共に中堅的な位置を占め、かつ地理的に最も最も陶邑古窯跡群と近接した地方窯でありながら生産される須恵器は同時期の陶邑古窯跡群のあり方とは異なっている。このことは出土須恵器の器種・形態・調整手法などに見られる技術の停滞性・保守性から窺われる。

本稿では、桜井谷古窯跡群の編年を行なうにあたって基本的な編年観は、陶邑古窯跡群でなされたものを参考とした。しかしながら器種組成は技術面からみると、両地域は同じ生産圏にあるといえども、地域差が認められる。よって陶邑編年をそのまま当地域に当て嵌めることには無理のあることが判明した。

同じ大阪府内という近接した地域でありながら、その編年にかなりの差が認められる以上、さらに離れた地域における須恵器編年を全面的に陶邑編年に依拠することには問題があろう。

今回は千里古窯跡群として包括される地域の内、特に豊中市桜井谷古窯跡群出土須恵器を中心編年を行なった。よって吹出地区の窯跡に関しては触れることが出来なかった。

今後はさらに隣接する両地区的出土遺物の対比を通じて、遺物の特徴の検証を進め千里古窯跡群の実態を検討していきたい。

最後に、本稿をまとめるにあたり下記の方々から様々な御指導・御教示を賜わった。記して深く感謝申し上げます。

伊藤潔・乙益重隆・小野田正樹・邊見端・吉田恵二 (敬称略・五十音順)

註1 William Gowland 「The Dolmen and Burial Mound in Japan」『Archaeologia』vol. L V Westminster 1897

2 笠井新也「攝津國櫻井谷村に於ける古代製陶所の遺跡及びその遺物に就て」『考古学雑誌』第5卷第11号 1915 「攝津國櫻井谷村に於ける古代製陶所の遺跡及びその遺物に就て(補遺)」『考古学雑誌』第6卷第1号 1915

3 桜井義彰「攝津櫻井谷村古代窯址に就て」『考古学雑誌』第7卷第3号 1916

4 平安学園考古学クラブ「陶邑古窯址群I」1966

中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』大阪府文化財調査報告書第30輯 1978

5 中村浩 前掲書 註4

6 中村浩 前掲書 註4

7 田辺昭三「須恵器生産の諸動向」『日本美術工芸』392 日本美術工芸社 1971

8 平安学園考古学クラブ 前掲書 註4

9 大阪府教育委員会『陶邑』大阪府文化財調査報告書第30輯 1978

10 小林行雄・藤沢・大「埴輪と祝部の窯跡」『考古学』第5卷10号 1934

11 藤沢一夫「古墳文化とその遺跡」『豊中市史』第1卷第1章第3節 豊中郷土文化研究会 1961

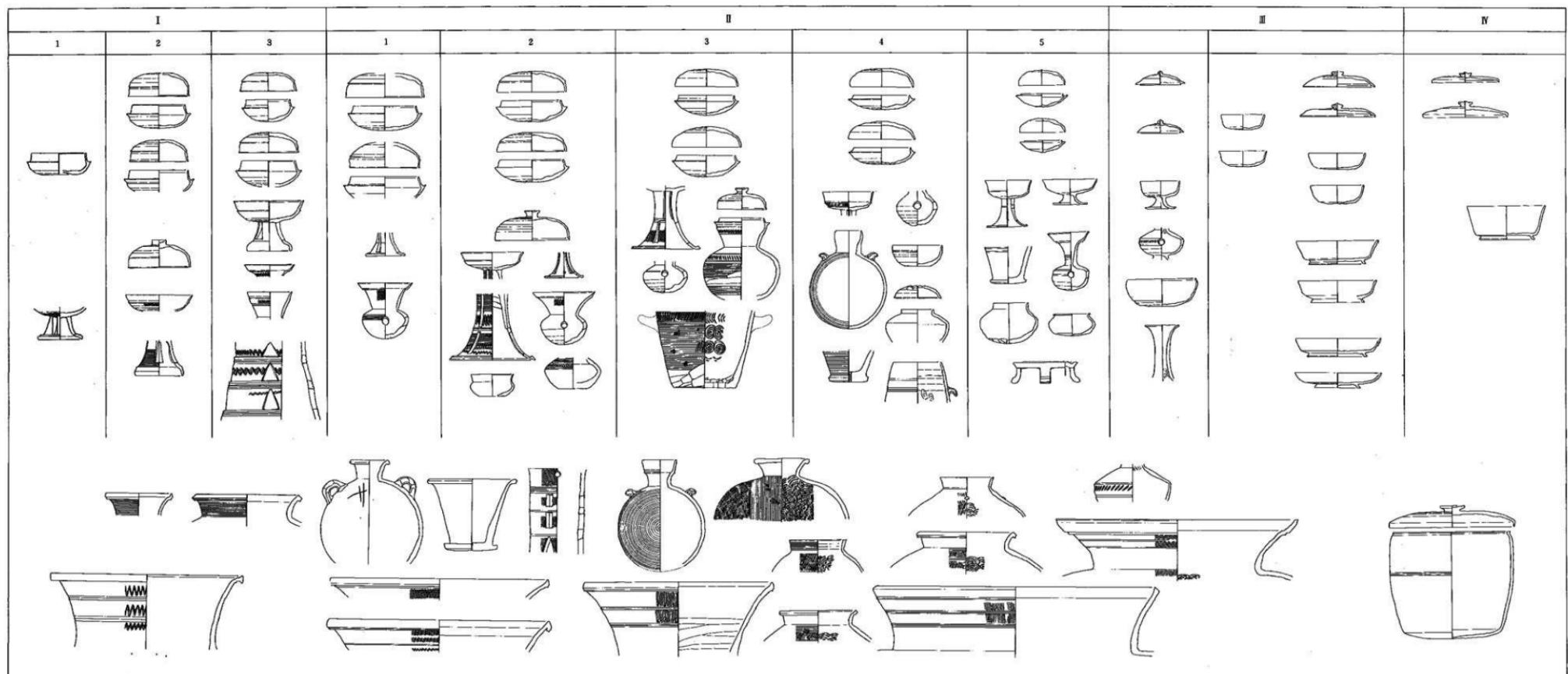
- 12 昭和40年 豊中市教育委員会発掘調査
- 13 藤沢一夫「古墳と氏寺－宮山古墳群と金寺山廐寺－」『豊中市史』第1巻第1章第3節7 豊中郷土文化研究会 1961

付記

昭和58年1月より実施された、府荷千里・緑ヶ丘団地建設に伴う発掘調査に於いて、新たに呪型式に属する墓跡が検出された。

当該期の墓跡は、従来1基のみしか知られておらず、桜井谷古墓跡群の終末を考える上で極めて重要な資料を呈示することとなった。

本稿に於いても、不充分であった呪型式を埋める資料として有効であると考えるが、校了後の為、その成果を生かすことが出来なかった。今後更に検討を重ねていきたいと考える。



桜井谷窯跡群編年

桜井谷窯跡群出土須恵器の胎土分析

奈良教育大学教授 三辻 利一

1 はじめに

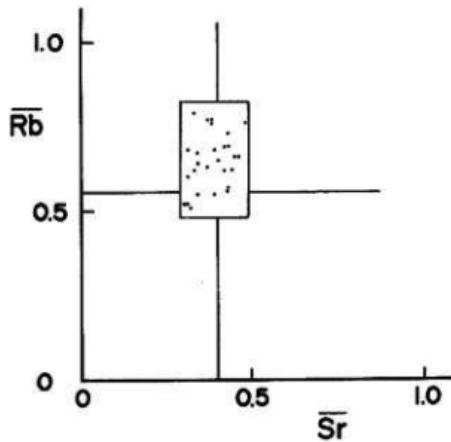
胎土分析により須恵器の産地を推定するためには、前以って、窯跡出土の須恵器片を多数分析しておき、その化学特性の相違からいくつかの窯跡群グループに整理しておく。次いで、遺跡から出土した須恵器を分析し、その化学特性からどの窯跡群グループに対応するかを調べる。その結果、全ての化学特性が対応する窯跡群グループが産地であると推定される。このような訳で須恵器の産地を知るために、窯跡出土須恵器の分析データを蓄積しておくことは必要である。本報告では豊中市桜井谷窯跡群、および下村町池窯出土須恵器の胎土分析のデータを報告するとともに、利倉西遺跡出土須恵器の産地推定を試みた。

2 実験法

試料片はすべて、その表面を超硬質の研磨機で研磨し、付着汚物を除去したのち、超硬質乳鉢で100~200メッシュ程度に粉碎した。粉末試料は圧縮機でコイン状にプレス成形して蛍光X線分析用試料とした。蛍光X線スペクトルの測定にはエネルギー分散型蛍光X線分析装置が用いられた。上器中のSi(けい素)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Fe(鉄)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)の6元素が定量された。定量分析には標準試料として岩石標準試料JG-1が使用された。データは岩石標準試料JG-1で規格化した値で表示された。Rb、Srなどは規格化値であることを示す。

3 分析結果

図1には、桜井谷2-17窯、2-23窯、2-25窯出土須恵器のRb-Sr分布図を示してある。Rb-Sr分布図を用いて各地の須恵器の特性を示すのは、全国の窯跡出土須恵器を約5000資料分析した結果、この分布図が地域特性をもつともよく表示することが分かったからである。^{1・2}分布図中、中央に引かれた新座標軸は各々、全国の須恵器のRb、Srの平均値である。図1から、桜井谷窯跡群の須恵器はRb量が少し多くSr量は全国平均並みであり、まとまって分布することが分かる。しかし、2-17



第1図 豊中市桜井谷窯跡群

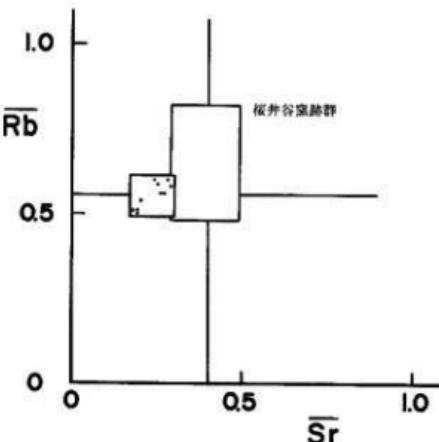
窯、2-23窯、2-25窯の相互識別はできなかった。一方、図2には下村町池窯須恵器のRb-Sr分布図を示してある。下村町池窯の須恵器もよくまとまって分布する。しかし桜井谷窯跡群の須恵器に比較してSr量が少なくその結果、それらの間の相互識別が十分可能であることが分かった。このように桜井谷窯跡群と下村町池窯とは比較的近距離にありながら、Sr量が異なり相互識別できることが分かった。Sr量は近距離の窯間で異なることは、これまでにもしばしば観測されてきた。

次に利倉西遺跡出土須恵器の産地をRb-Sr分布図上で推定してみよう。

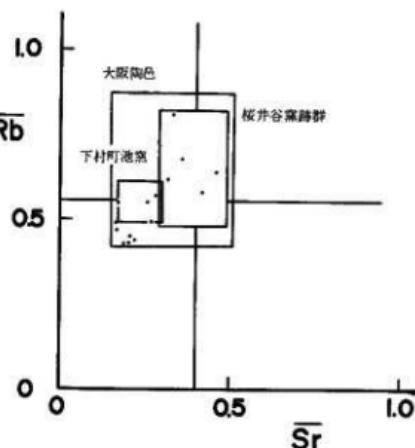
図3には、利倉西遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図を示してある。5点は桜井谷窯跡領域に入るが残りは入らない。したがって、5点は桜井谷窯跡群産の可能性がある。しかし残りの10点は桜井谷窯跡群産の可能性はない。また図3には、大阪陶邑の20基の窯から出土した約200点の分布データより大阪陶邑領域を定めてある。そうすると、利倉西遺跡の15点の須恵器はすべて大阪陶邑領域に入り、大阪陶邑産である可能性があることも示す。したがって、桜井谷窯産か、大阪陶邑産であるかは胎土分析では決定できず、他の方法によらなければならないことが分かった。

図4には、K-Rb相関図を示してある。全国の窯の須恵器について、KとRbは正の相関があることが知られている。^{註1・2} 桜井谷窯跡群、および下村町池窯の須恵器にも、ほぼ正の相関関係があることが分かる。しかし両グループの相互識別には余り有効ではないので、利倉西遺跡の須恵器のK-Rb相関図は示していない。

図5にはCa-Sr相関図を示してある。CaとSrの間に、全国の窯について正の相関があるこ



第2図 豊中市下村町池窯



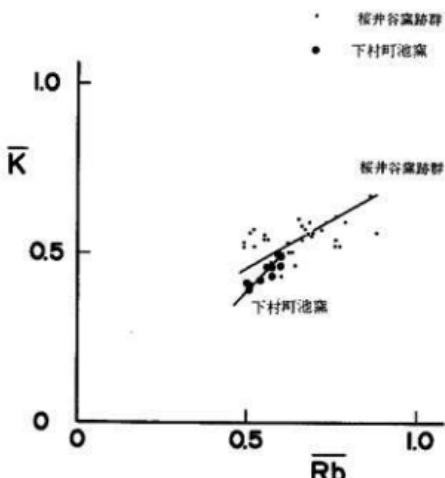
第3図 利倉西遺跡出土須恵器

とが知られている。図5より、桜井谷窯跡群と下村町池窯の須恵器には各々CaとSrの間に正の相間が成立することが分かった。この図では両グループが少し離れて分布するので、利倉西遺跡の須恵器の产地推定に使用してみた。図6には利倉西遺跡出土須恵器のCa—Sr相間を示す。そうすると、Rb—Sr分布図同様、5点が桜井谷ライン近傍に分布し、残りは下村町池窯ライン近傍に分布する。このことは大部分の利倉西遺跡出土須恵器の胎土は下村町池窯の須恵器胎土と類似していることを示す。しかし利倉西遺跡と下村町池窯とは時期的にずれるため、下村町池窯の近くに利倉西遺跡と同時期の未発掘の窯があるのかもしれない。

なおSi(けい素)とFe(鉄)の分析値からは桜井谷グループと下村町池窯との相互識別はできなかったので、分析データは割愛した。

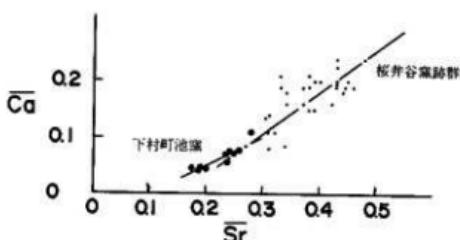
引用文献

- 註1 三辻利一; 古学研究第28卷第2号
96—108 (1981)
註2 三辻利一; 自然 第36卷第6号
52—61 (1981)

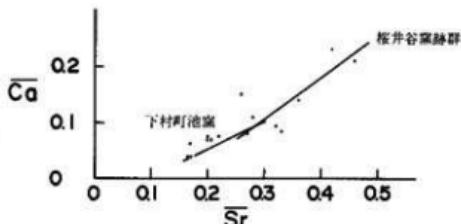


第4図 桜井谷窯跡群出土須恵器のK—Rb相間

○ 坊主山
● 下村町池



第5図 桜井谷窯跡群出土須恵器のCa—Sr相間



第6図 利倉西遺跡出土須恵器

図 版



(1) 調査地遠景



(2) 厳原斜面



(1) 灰原遺物出土狀態



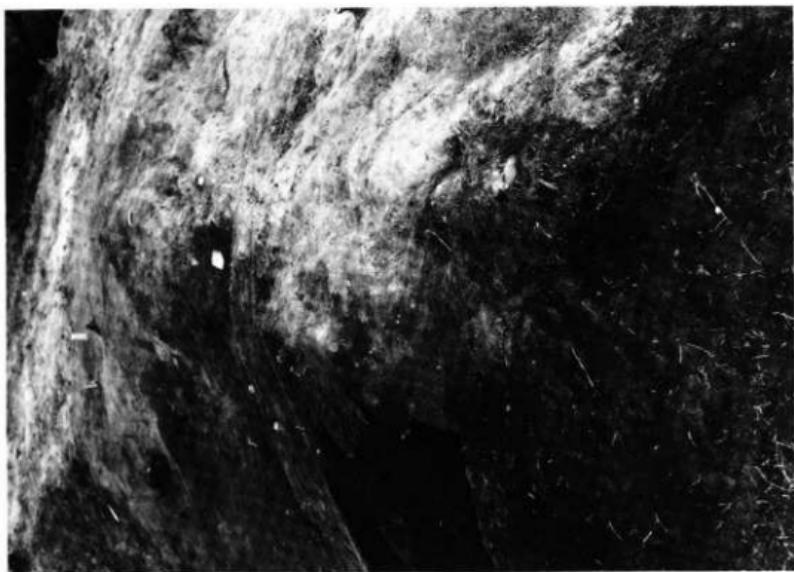
(2) 灰原遺物出土狀態



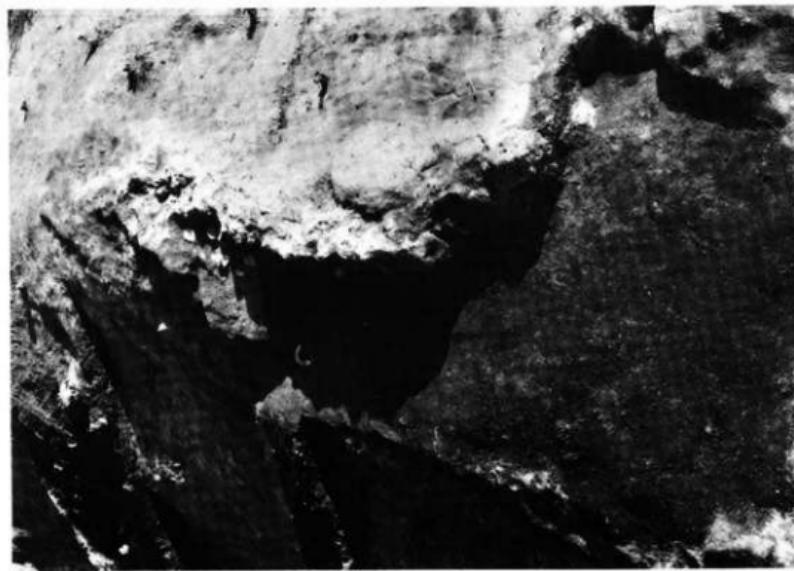
(1) 灰原断面



(2) 灰原断面



(1) 離路橋出產兒



(2) 豐前時期標



(1) 最終時期遺物残存状態



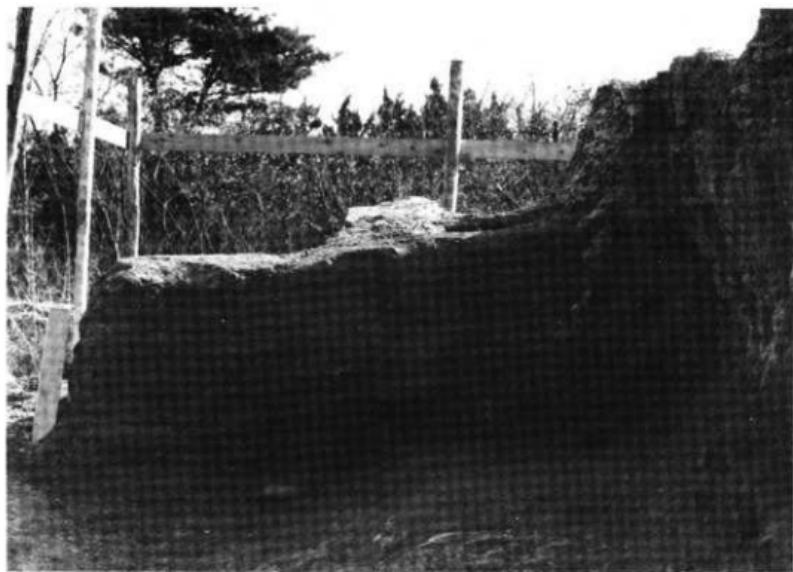
(2) 前庭部断面



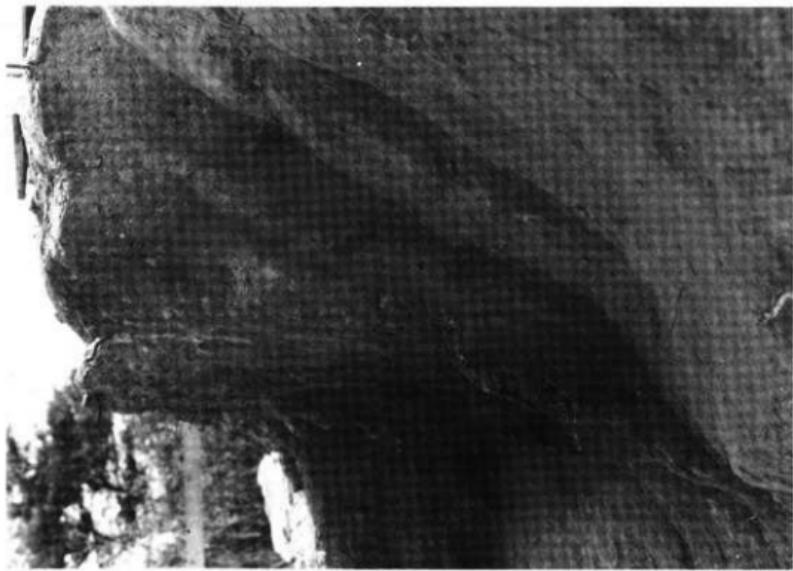
(1) 焼成部断面(ヨコ)



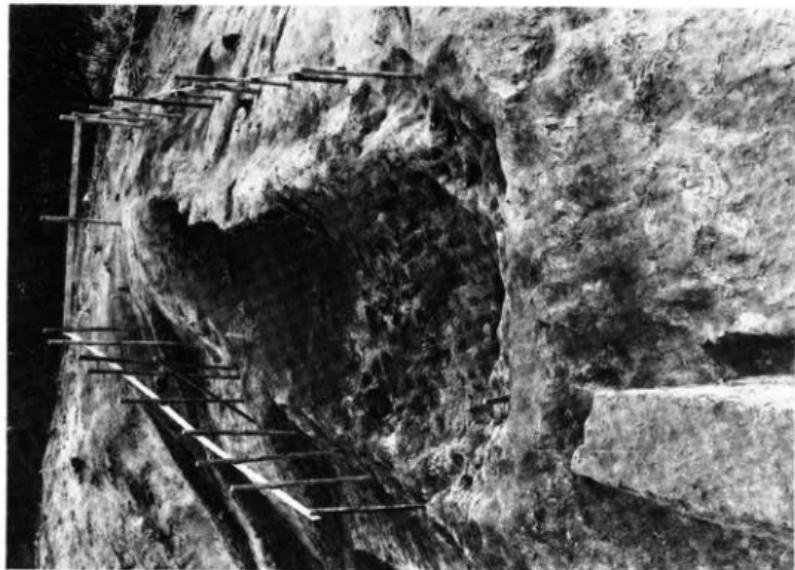
(2) 焼成部断面(タテ)



(1) 燃成部断面(ヨコ)



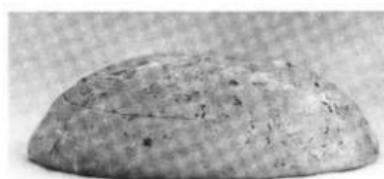
(2) 燃成部断面(ヨコ)



(1) 一次鉱物全貌



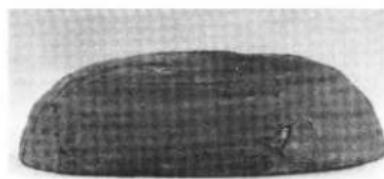
(2) 一次鉱物(たちわり姿)



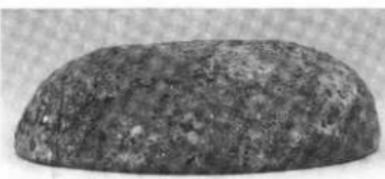
1



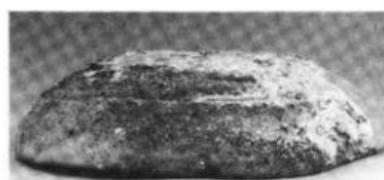
2



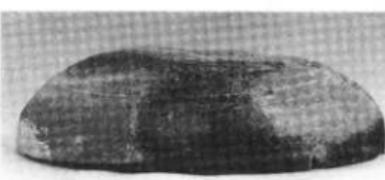
3



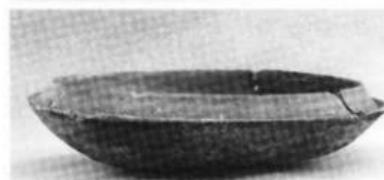
4



5



6



7



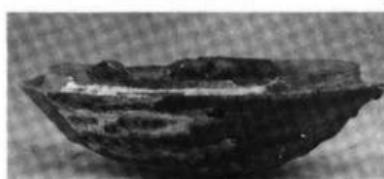
8



9



10

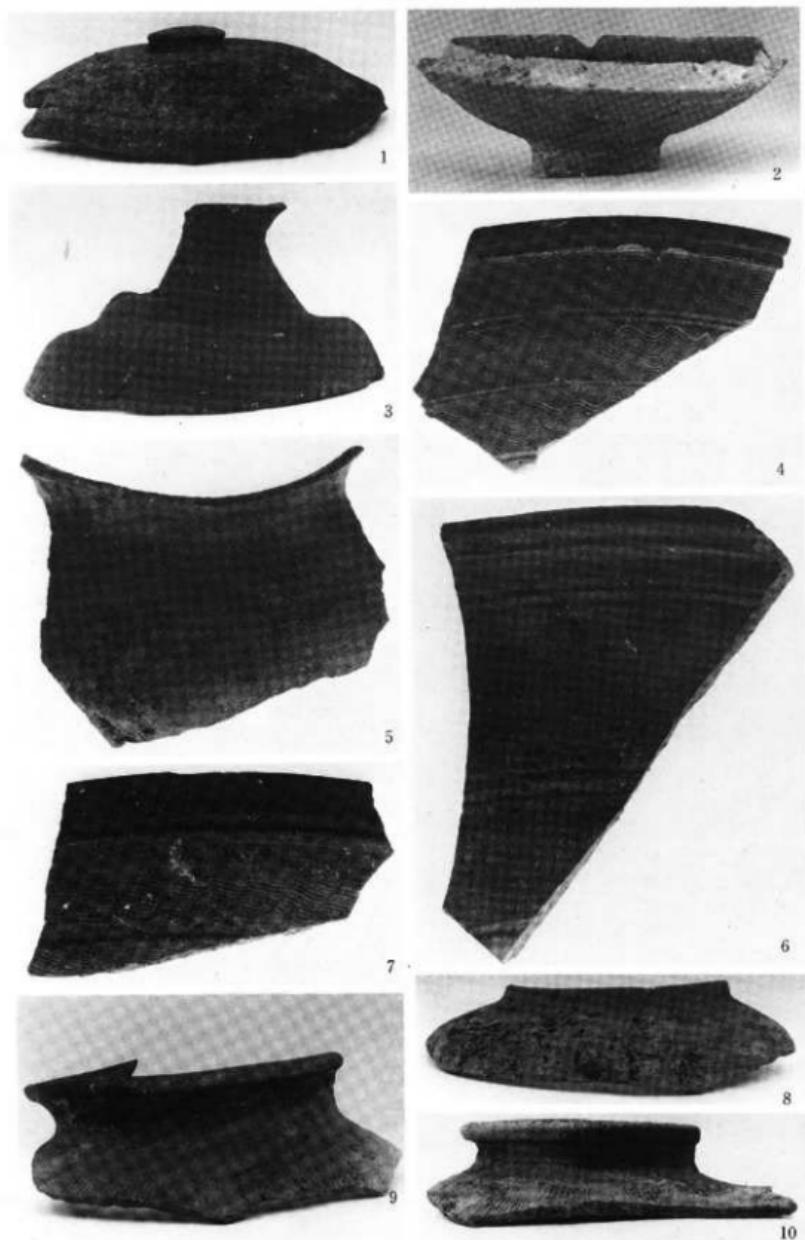


11

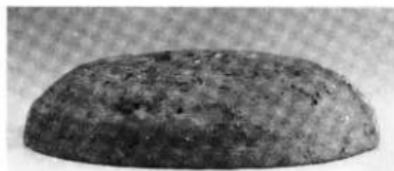


12

1~6 环蓋・7~12 环身



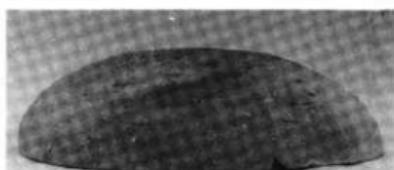
1 有蓋高環蓋 · 2 有蓋高環身 · 3 腳台 · 4 ~ 7 瓢 · 8 ~ 10 盖



1



2



3



4



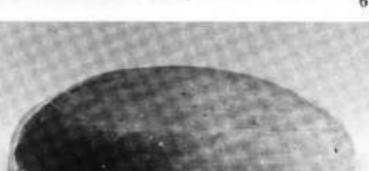
5



6



7



8



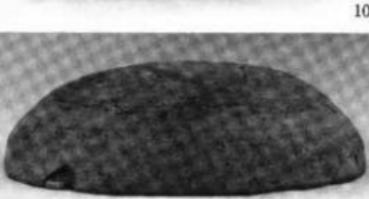
9



10

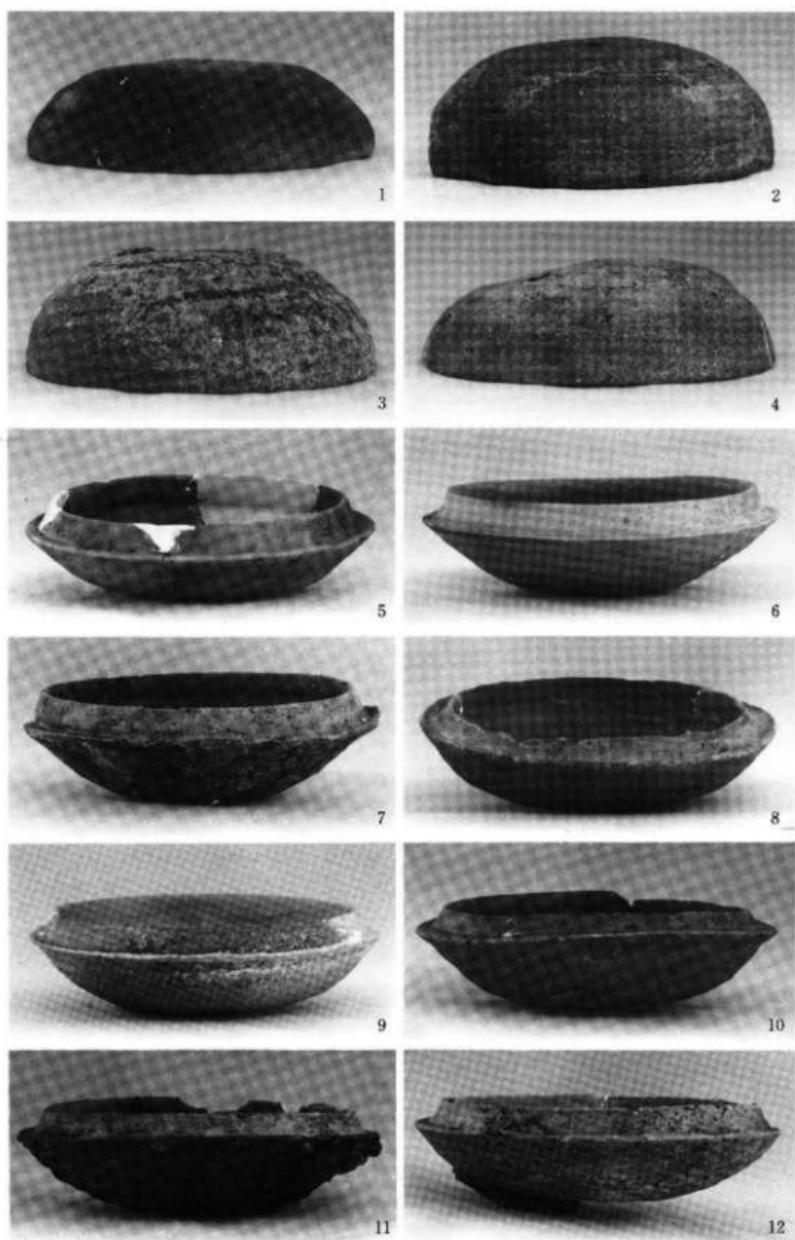


11



12

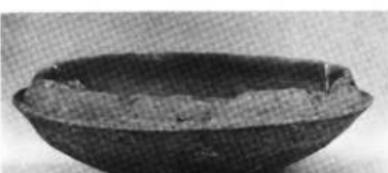
1~12環蓋



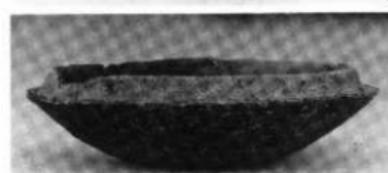
1~4 环蓋・5~12 环身



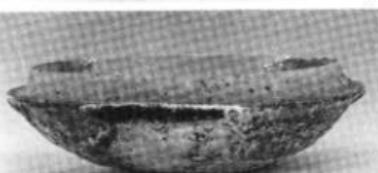
1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

1~12環身



1



2



3



4



5



6



7



8

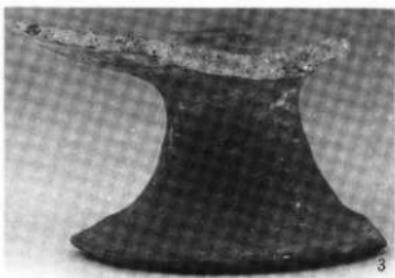
1、2無蓋高環，3、4有蓋高環，5～8高環腳部



1



2



3



4



5



6



7

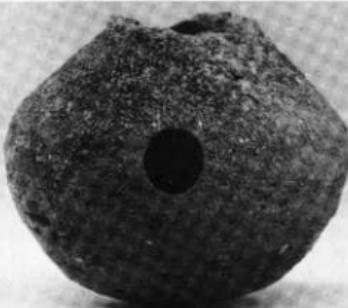


8

1~6 高環脚部・7、8脚台



1



2



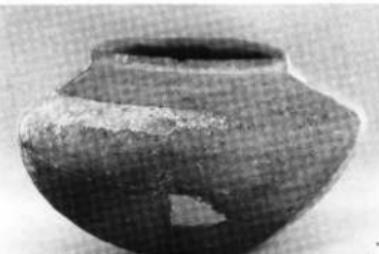
3



4



5



6



7



8

1.脚台付壺 2~4.壺 5~8.短頸壺



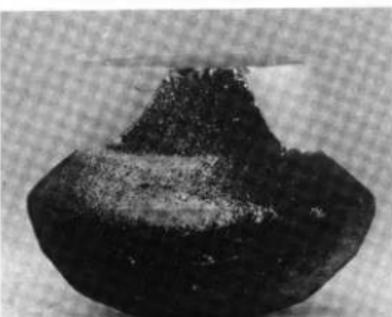
1



2



3



4



5



6

1~3 短腹壺・4、6 壺・5 台付壺

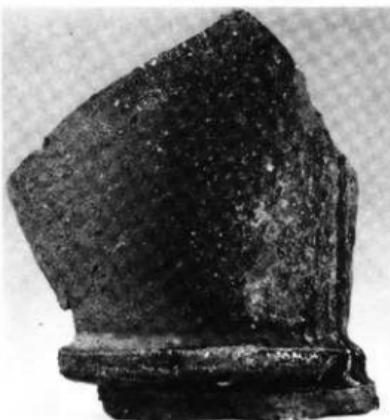


1

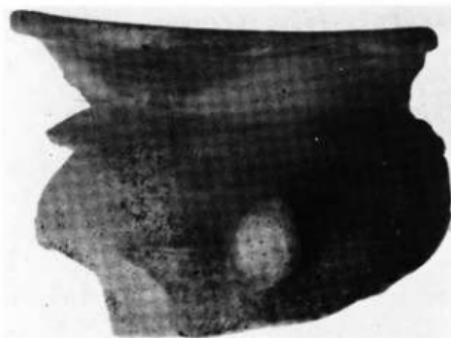
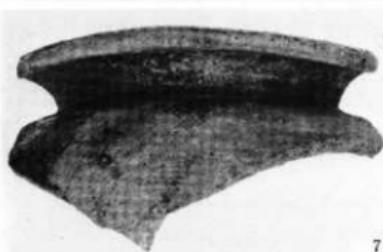
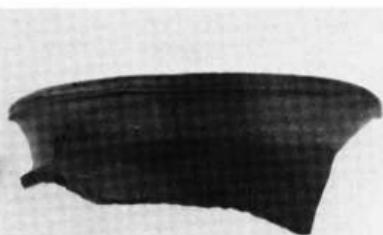
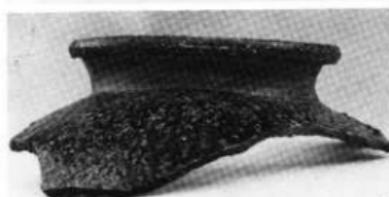
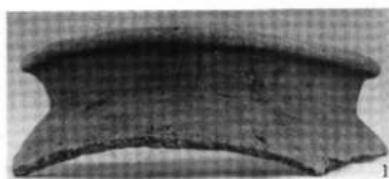


2

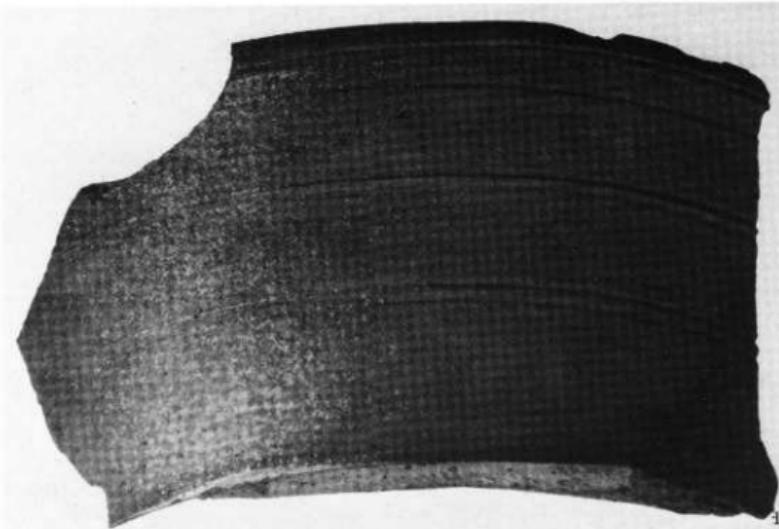
1、2 提瓶



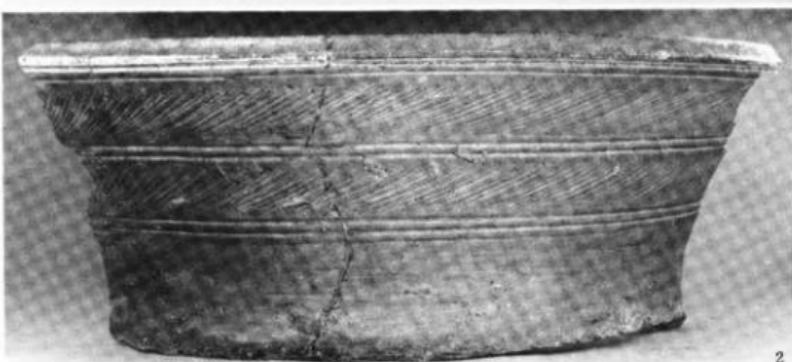
1、2 横瓶・3～5 ねり鉢



1~7 壺・8 把手付き壺



1



2



3

1—4 大甕



1



2



3



6



4

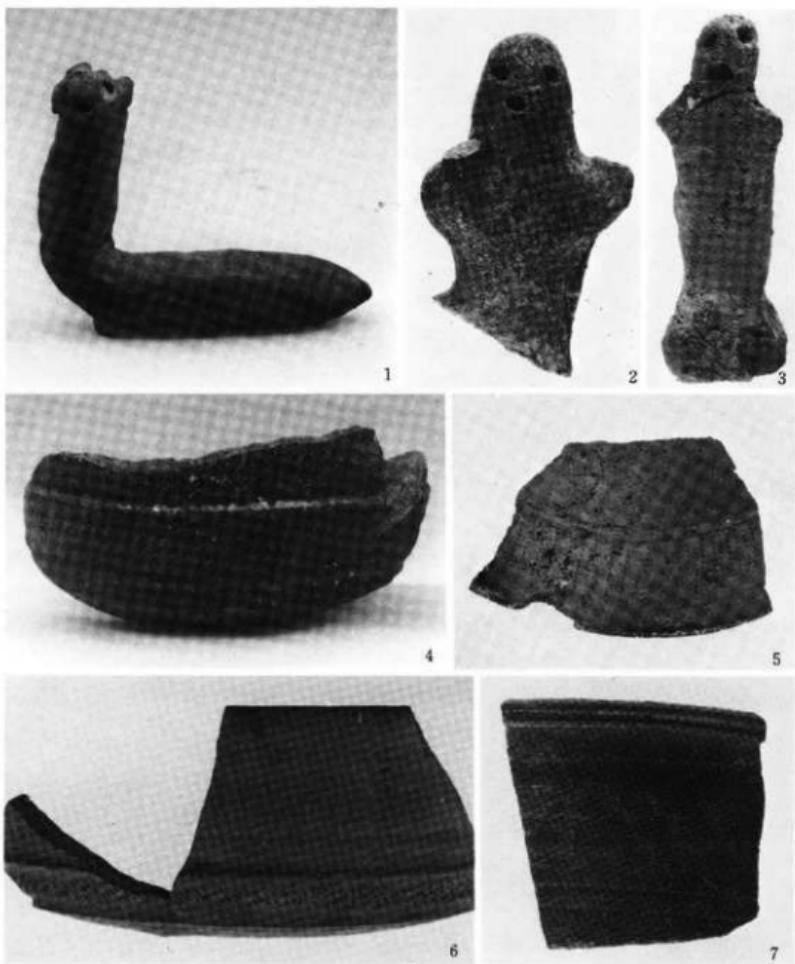


5



7

1 長頸壺 · 2 壺 · 3 短頸壺 · 4、5 蓋 · 6、7 陶棺



1 裝飾動物・2、3 裝飾人形・4~7 裝飾文様

豊中市文化財調査報告 第9集
桜井谷窯跡群 2-17 窯
1983年3月
発行 少路窯跡追跡調査団
編集 少路
印刷 豊中島弘文堂印刷所